

岩手県埋文センター文化財調査報告書第70集

江刺家遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(監) 岩手県埋蔵文化財センター

日本道路公団

江刺家遺跡報告書 正誤表

ページ	行	誤	正
34	20	平盤	平盤
85	9	煎炭	煎炭
97	12	著 <u>じ</u> るしい	著 <u>し</u> い
108	14	13個 <u>念</u> 検出	13個 <u>念</u> り検出
108	32	土器 <u>類</u>	土器
113	1	土器 <u>類</u>	土器
113	5	土器 <u>類</u>	土器
113	24	(新)H <u>I</u> —	(新)H <u>II</u> —
133	8	著 <u>じ</u> るしく	著 <u>し</u> く
176	6	<u>5. \ 94尺 + 6. \ 93尺</u>	<u>5.94尺 + 6.93尺</u>
267	表16のNo.9	中期 <u>末</u>	中期 <u>末</u>
270	26	<u>検出されて</u>	削除
278	13	2 <u>種</u> が	2 <u>種類</u> が
281	21	煎	煎

江刺家遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

昭和 59 年 1 月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和57年10月末における遺跡台帳によれば約6,000ヶ所が登録されています。

一方、四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重要施策となっております。

貴重な文化財の保護、保存と、現代生活を豊かにする開発指向とのバランスのとれた行政施策は今日的課題であります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって破壊され消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和56年度に発掘調査した九戸村江刺家遺跡の結果をまとめたものであります。

当遺跡は、縄文時代、平安時代、中世、近世に及ぶ複合集落遺跡であり、出土遺物においても土器、石器はもとより、鉄製品、木製品、琥珀、石帯の一部、炭化穀類などたくさん出土しており、特に県北地方における平安時代以降の歴史解明にとって重要な意味をもつ調査結果となっております。

この報告書が、研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜りました県教育委員会、九戸村教育委員会、日本道路公団仙台建設局八戸工事事務所をはじめ各研究機関や地元関係各位に感謝すると共に、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和59年1月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター
理事長 金子彰吉

例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡九戸村大字江刺家の東北縦貫自動車道建設予定地内に所在する江刺家遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 発掘調査は、日本道路公園の委託により、岩手県教育委員会文化課の指導を得て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は1981年4月13日～11月17日の期間内に行われた。
4. 調査面積は、10,060㎡である。
5. 発掘調査は、田鎖寿夫、高橋義介が担当した。
6. 発掘調査にあたって、次の方々からご教示をいただいた。
板橋 源氏（県立博物館長）、草間俊一氏（県立盛岡短大校長）、相原康二氏（県教育委員会文化課）
7. 発掘調査においては、次の諸機関のご協力をいただいた。
日本道路公園仙台建設局八戸工事事務所、九戸村教育委員会、二戸市教育委員会
8. 本報告書の執筆にあたり、石質鑑定は佐藤二郎氏（岩手県立大船渡農業高校教諭）、樹種鑑定は早坂松次郎氏（社団法人岩手県木炭協会）、炭化穀類鑑定および考察は佐藤敏也氏（国分寺市文化財専門委員）、小形炭化種子同定および考察は松谷暁子氏（城西歯科大学講師）、鉄器鑑定および考察は新沼鐵夫氏（刀剣材料研究所所長）に依頼した。
9. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。
Ⅰ……………嶋 千秋
Ⅵの1……………佐藤敏也、Ⅵの2……………松谷暁子、Ⅵの3・4……………新沼鐵夫
Ⅲの1・2、Ⅳの1・3・4・5・6・8・9、Ⅴの1、Ⅶの1(1)・(3)・(4)・(6)・(8)・(9)2(1)……………田鎖寿夫
Ⅱの1・2、Ⅳの2・5・6・7・9、Ⅴの2・3、Ⅷの1(2)・(5)・(7)2(2)・(3)・(4)……………高橋義介
10. 検出された遺構は、次のとおりである。

縄文時代竪穴住居址……………13棟	平安時代竪穴住居址……………32棟
中世竪穴住居址……………3棟	住居址状遺構……………2棟
掘立柱建物跡……………3棟	土坑……………64基
陥し穴状遺構……………4基	溝遺構……………3条
焼土遺構……………4基	
11. 遺物実測、トレース、図版等の作成にあたって、次の方々のご協力をいただいた。
家子珠枝、阿部静子、高橋サキ、斎藤静子、菅原キシ子、川崎清子、月館美智子、浅沼朋子、佐藤カツ子
12. 今回の調査の諸記録と遺物は、当センターにすべて保管されている。

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	金子彰吉	(県教育長)
副理事長	柴内 眞	(県教育次長)
常務理事	熊谷正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田良和	(県農政部次長)
◇	高橋健之	(県林業水産部次長)
◇	穂積昭憲	(県土木部次長)
◇	板橋源一	(県立博物館長)
◇	草間俊夫	(県立盛岡短期大学長)
◇	小形信公	(元常務理事)
監事	佐藤公志	(県教委総務課長)
◇	小原吉雄	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷正男			
副所長	鈴木信吉			
[総務課]			専門調査員	棚田 満郎
総務課長	菊池 勉		◇	岩村 久一
庶務係長	阿部 韶夫		◇	田 文行
主事	阿佐藤 久四郎		◇	岩井 喜喜
◇	戸草内 幸男		◇	光川 英長
◇	立花多加志		◇	玉石 利幸
技能員	佐藤 春男		◇	工藤 重紀
[調査課]			◇	中川 橋与右門
調査課長	鳴近 千秋		◇	高橋 義介
主任専門調査員	藤生 孝利		◇	高木 清宗
◇	国野 孝利		◇	佐々木 井
専門調査員	朝野 池木		◇	酒 信吉
◇	菊池 木		[資料課]	鈴木 信吉
◇	菊池 渡		資料課長(兼)	鈴野 吉晴
◇	渡大 原		主任専門調査員	晃井 靖進
◇	大田 鎖		専門調査員	平鈴 英一
◇	佐々木 嘉直		◇	三浦 陸謙

本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	1
II. 調査方法と室内整理の方法	4
1. 調査方法	4
2. 室内整理の方法	4
III. 遺跡の立地と基本層序	6
1. 遺跡の立地と環境	6
2. 基本層序	8
IV. 検出遺構と遺構内出土遺物	11
1. 縄文時代竪穴住居址	11
2. 平安時代竪穴住居址	69
3. 中世竪穴住居址	164
4. 住居址状遺構	170
5. 掘立柱建物跡	173
6. 土坑	181
7. 陥し穴状遺構	212
8. 溝遺構	213
9. 焼土遺構	217
V. 遺構外出土遺物	219
1. 縄文時代	219
2. 平安時代	233
3. その他	233
VI. 鑑定および分析結果	236
1. 江刺家遺跡FII-1住居址出土の穀類	236
2. 江刺家遺跡出土小形炭化種子の同定	258
3. 江刺家遺跡出土鉄関係資料について	259
4. 顕微鏡写真による金属組織の考察	261
5. C-14年代測定結果	263
VII. まとめ	264
1. 遺構	264
(1) 縄文時代竪穴住居址	264
(2) 平安時代竪穴住居址	268
(3) 中世時代竪穴住居址	271
(4) 住居址状遺構	271
(5) 掘立柱建物跡	271
(6) 土坑	271
(7) 陥し穴状遺構	272
(8) 溝遺構	272
(9) 焼土遺構	272
2. 遺物	275
(1) 縄文時代	275
(2) 平安時代	275
(3) 中世～近世	281
(4) その他	281

図版目次

第1図 岩手県全体図	2	第6図 遺構配置図	9
第2図 遺跡の位置図と周辺遺跡	3	第7図 BII-2住居址	12
第3図 地形断面図A-B	6	第8図 BII-2住居址出土遺物1)	13
第4図 江刺家遺跡周辺地形図	7	第9図 BII-2住居址出土遺物2)	14
第5図 土層柱状図	8	第10図 BII-4住居址	16

第11図	B II - 4 住居址出土遺物	17	第43図	J I - 1 住居址	64
第12図	C I - 2・C II - 3 住居址	19	第44図	J I - 1 住居址出土遺物	65
第13図	D I - 2・D I - 3 住居址	21	第45図	J I - 1・J I - 2 住居址出土遺物	66
第14図	D I - 2・3 住居址出土遺物	22	第46図	J I - 2 住居址	68
第15図	D II - 1 住居址	26	第47図	C I - 1 住居址	69
第16図	D II - 1・F I - 1 住居址	27	第48図	C I - 1 住居址出土遺物	70
第17図	D II - 1・F I - 1 住居址出土遺物	28	第49図	C II - 1 住居址・出土遺物	70
第18図	D II - 1 住居址出土遺物(1)	29	第50図	C II - 4 住居址	72
第19図	D II - 1 住居址出土遺物(2)	30	第51図	C II - 4 住居址出土遺物	73
第20図	G I - 1a 住居址(1)	32	第52図	C II - 5 住居址	75
第21図	G I - 1a 住居址(2)	33	第53図	C II - 5 住居址出土遺物	76
第22図	G I - 1b 住居址	35	第54図	D I - 1 住居址	78
第23図	G I - 1 住居址出土遺物(1)	37	第55図	D I - 1 住居址出土遺物(1)	79
第24図	G I - 1 住居址出土遺物(2)	38	第56図	D I - 1 住居址出土遺物(2)	80
第25図	G I - 1 住居址出土遺物(3)	39	第57図	D I - 1 住居址出土遺物(3)	81
第26図	G I - 1 住居址出土遺物(4)	40	第58図	D II - 2 住居址	83
第27図	G I - 1 住居址出土遺物(5)	41	第59図	D II - 2 住居址出土遺物(1)	84
第28図	I I - 1 住居址(1)	43	第60図	D II - 2 住居址出土遺物(2)	85
第29図	I I - 1 住居址(2)	44	第61図	D II - 3 住居址	86
第30図	I I - 1 住居址出土遺物(1)	47	第62図	D II - 3 住居址カマド・出土遺物	87
第31図	I I - 1 住居址出土遺物(2)	48	第63図	D II - 4 住居址	89
第32図	I I - 1 住居址出土遺物(3)	49	第64図	D II - 5 住居址	90
第33図	I I - 1 住居址出土遺物(4)	50	第65図	D II - 5 住居址カマド	91
第34図	I I - 1 住居址出土遺物(5)	51	第66図	D II - 5 住居址出土遺物(1)	92
第35図	I I - 1 住居址出土遺物(6)	52	第67図	D II - 5 住居址出土遺物(2)	93
第36図	I I - 1 住居址出土遺物(7)	53	第68図	D II - 5 住居址出土遺物(3)	94
第37図	I I - 1 住居址出土遺物(8)	54	第69図	E I - 1 住居址	95
第38図	I I - 1 住居址出土遺物(9)	55	第70図	E I - 1 住居址カマド・出土遺物	96
第39図	I I - 1 住居址出土遺物(10)	56	第71図	F II - 1 住居址	99
第40図	I I - 1 住居址出土遺物(11)	57	第72図	F II - 1 住居址出土遺物(1)	100
第41図	I II - 5 住居址	61	第73図	F II - 1 住居址出土遺物(2)	101
第42図	I II - 5 住居址出土遺物	62	第74図	F II - 2 住居址	103

第75図	F II - 2 住居址出土遺物	104	第107図	K II - 2 住居址出土遺物	141
第76図	H II - 1 住居址(1)	105	第108図	K II - 3 住居址	142
第77図	H II - 1 住居址(2)	106	第109図	K II - 3 住居址出土遺物	143
第78図	H II - 1 住居址(3)	107	第110図	K II - 4 住居址・出土遺物	145
第79図	H II - 1 住居址出土遺物(1)	109	第111図	K II - 5 住居址	146
第80図	H II - 1 住居址出土遺物(2)	110	第112図	K II - 5 住居址カマド	147
第81図	H II - 1 住居址出土遺物(3)	111	第113図	K II - 5 住居址出土遺物(1)	148
第82図	H II - 1 住居址出土遺物(4)	112	第114図	K II - 5 住居址出土遺物(2)	149
第83図	H II - 3 住居址	113	第115図	K II - 5 住居址出土遺物(3)	150
第84図	H II - 4 住居址	115	第116図	K II - 6 住居址	151
第85図	H II - 4 住居址出土遺物(1)	116	第117図	K II - 6 住居址カマド	152
第86図	H II - 4 住居址出土遺物(2)	117	第118図	K II - 6 住居址出土遺物	153
第87図	H II - 1 住居址	118	第119図	K III - 1 住居址	154
第88図	I II - 1 住居址出土遺物	119	第120図	K III - 1 住居址出土遺物	155
第89図	I II - 2 住居址	121	第121図	K III - 2 住居址	156
第90図	I II - 2 住居址カマド	122	第122図	K III - 2 住居址カマド	157
第91図	I II - 2 住居址出土遺物(1)	123	第123図	K III - 2 住居址出土遺物	158
第92図	I II - 2 住居址出土遺物(2)	124	第124図	K III - 3 住居址	160
第93図	I II - 3 住居址	125	第125図	K III - 3 住居址出土遺物(1)	161
第94図	I II - 3 住居址出土遺物	126	第126図	K III - 3 住居址出土遺物(2)	162
第95図	I II - 4 住居址	127	第127図	K III - 3 住居址出土遺物(3)	163
第96図	I II - 4 住居址カマド	128	第128図	B II - 1 住居址	165
第97図	I II - 4 住居址出土遺物	129	第129図	B II - 3 住居址(1)	167
第98図	I II - 6 住居址	131	第130図	B II - 3 住居址(2)	168
第99図	I II - 6 住居址カマド	132	第131図	B II - 3 住居址出土遺物	169
第100図	I II - 6 住居址出土遺物	133	第132図	C II - 2 住居址	171
第101図	I III - 1・2 住居址	135	第133図	C II - 21・H I - 21 住居址状遺構	172
第102図	J II - 1 住居址	136	第134図	C II - 6 掘立柱建物跡	174
第103図	K II - 1 住居址	137	第135図	E II - 1 掘立柱建物跡	175
第104図	K II - 1 住居址カマド	138	第136図	H II - 2 掘立柱建物跡(1)	177
第105図	K II - 1 住居址出土遺物	139	第137図	H II - 2 掘立柱建物跡(2)	178
第106図	K II - 2 住居址	140	第138図	H II - 2 掘立柱建物跡出土遺物(1)	179

第139図	H II—2掘立柱建物跡出土遺物(1)	180	第159図	陥し穴状遺構	214
第140図	H II—2掘立柱建物跡出土遺物(2)	181	第160図	C II—151・C II—152溝遺構	215
第141図	土坑(1)	182	第161図	F I—151溝遺構	216
第142図	土坑(2)	184	第162図	焼土遺構	218
第143図	土坑(3)	187	第163図	遺構外出土遺物(1)	221
第144図	土坑(4)	188	第164図	遺構外出土遺物(2)	222
第145図	土坑(5)	191	第165図	遺構外出土遺物(3)	223
第146図	土坑(6)	192	第166図	遺構外出土遺物(4)	225
第147図	C II—70土坑出土遺物	193	第167図	遺構外出土遺物(5)	227
第148図	土坑(7)	195	第168図	遺構外出土遺物(6)	228
第149図	土坑(8)	197	第169図	遺構外出土遺物(7)	229
第150図	土坑(9)	199	第170図	遺構外出土遺物(8)	230
第151図	土坑(10)	201	第171図	遺構外出土遺物(9)	231
第152図	土坑(11)	202	第172図	遺構外出土遺物(10)	232
第153図	土坑(12)	204	第173図	遺構外出土遺物(11)	234
第154図	I II—52土坑出土遺物	205	第174図	遺構外出土遺物(12)	235
第155図	土坑(13)	207	第175図	粒形(粒長/粒幅)の変異	240
第156図	土坑(14)	209	第176図	粒長/粒幅比平均値比較	241
第157図	土坑(15)	210	第177図	時期別住居址立地状況	265, 266
第158図	土坑(16)	212	第178図	土器分類図(平安時代)	279, 280

写真図版目次

写真図版 1	空中写真	299	写真図版10	I I—1住居址	308
写真図版 2	空中写真	300	写真図版11	I II—5・J I—1住居址	309
写真図版 3	B II—2・4住居址	301	写真図版12	J I—2住居址	310
写真図版 4	C I—2住居址	302	写真図版13	C I—1・C II—1住居址	311
写真図版 5	C II—3・D I—2・3住居址	303	写真図版14	C II—4・D I—1住居址	312
写真図版 6	D II—1住居址	304	写真図版15	D II—2住居址	313
写真図版 7	F I—1住居址	305	写真図版16	D II—3住居址	314
写真図版 8	G I—1a住居址	306	写真図版17	D II—4・5住居址	315
写真図版 9	G I—1b住居址	307	写真図版18	E I—1住居址	316

写真図版19	F II - 1 住居址	317	写真図版48	陥し穴状遺構	346
写真図版20	F II - 2 住居址	318	写真図版49	焼土遺構	347
写真図版21	H II - 1 住居址	319	写真図版50	B II - 2 住居址出土遺物	348
写真図版22	H II - 4 · I II - 1 住居址	320	写真図版51	B II - 2 · 4 住居址出土遺物	349
写真図版23	I II - 2 住居址	321	写真図版52	D I - 2 · 3 住居址出土遺物	350
写真図版24	I II - 3 · 4 住居址	322	写真図版53	D II - 1 住居址出土遺物	351
写真図版25	I II - 6 住居址	323	写真図版54	D II - 1 · F I - 1 住居址 出土遺物	352
写真図版26	I III - 1 · 2 · J II - 1 住居址	324	写真図版55	G I - 1 住居址出土遺物(1)	353
写真図版27	K II - 1 住居址	325	写真図版56	G I - 1 住居址出土遺物(2)	354
写真図版28	K II - 2 住居址	326	写真図版57	G I - 1 住居址出土遺物(3)	355
写真図版29	K II - 3 · 4 · 5 住居址	327	写真図版58	I I - 1 住居址出土遺物(1)	356
写真図版30	K II - 6 住居址	328	写真図版59	I I - 1 住居址出土遺物(2)	357
写真図版31	K III - 1 · 2 住居址	329	写真図版60	I I - 1 住居址出土遺物(3)	358
写真図版32	K III - 3 住居址	330	写真図版61	I I - 1 住居址出土遺物(4)	359
写真図版33	B II - 1 · 3 · C II - 2 住居址(中世)	331	写真図版62	I I - 1 住居址出土遺物(5)	360
写真図版34	C II - 21 · H I - 21 住居 址状遺構	332	写真図版63	I I - 1 住居址出土遺物(6)	361
写真図版35	H II - 2 掘立柱建物跡	333	写真図版64	I I - 1 住居址出土遺物(7)	362
写真図版36	E II - 1 掘立柱建物跡 F I - 151 溝	334	写真図版65	I I - 1 住居址出土遺物(8)	363
写真図版37	土坑(1)	335	写真図版66	I II - 5 住居址出土遺物	364
写真図版38	土坑(2)	336	写真図版67	J I - 1 住居址出土遺物	365
写真図版39	土坑(3)	337	写真図版68	J I - 1 · 2 住居址出土遺物	366
写真図版40	土坑(4)	338	写真図版69	C I - 1 · C II - 1 · 4 住居址出土遺物	367
写真図版41	土坑(5)	339	写真図版70	C II - 5 住居址出土遺物	368
写真図版42	土坑(6)	340	写真図版71	D I - 1 住居址出土遺物(1)	369
写真図版43	土坑(7)	341	写真図版72	D I - 1 住居址出土遺物(2)	370
写真図版44	土坑(8)	342	写真図版73	D II - 2 住居址出土遺物	371
写真図版45	土坑(9)	343	写真図版74	D II - 3 · 5 住居址出土遺物	372
写真図版46	土坑(10)	344	写真図版75	D II - 5 住居址出土遺物	373
写真図版47	土坑(11)	345	写真図版76	E I - 1 · F II - 1 住居址 出土遺物	374

写真図版77	F II-1・2住居址出土遺物…375	写真図版94	遺構外出土遺物(3) ……392
写真図版78	H II-1住居址出土遺物1)…376	写真図版95	遺構外出土遺物(4) ……393
写真図版79	H II-1住居址出土遺物2)…377	写真図版96	遺構外出土遺物(5) ……394
写真図版80	H II-4住居址出土遺物…378	写真図版97	遺構外出土遺物(6) ……395
写真図版81	I II-1・2住居址出土遺物…379	写真図版98	遺構外出土遺物(7) ……396
写真図版82	I II-3・4住居址出土遺物…380	写真図版99	遺構外出土遺物(8) ……397
写真図版83	I II-6住居址出土遺物…381	写真図版100	遺構外出土遺物(9)……398
写真図版84	K II-1・2・4住居址 出土遺物…382	写真図版101	遺構外出土遺物(10)……399
写真図版85	K II-3・5住居址出土遺物…383	写真図版102	F II-1住居址出土 炭化穀類(1)……400
写真図版86	K II-5住居址出土遺物…384	写真図版103	F II-1住居址出土 炭化穀類(2)……401
写真図版87	K II-6・K III-1・2住居址 出土遺物…385	写真図版104	F II-1住居址出土 炭化穀類(3)……402
写真図版88	K III-3住居址出土遺物1)…386	写真図版105	F II-1住居址出土 炭化穀類(4)……403
写真図版89	K III-3住居址出土遺物2)…387	写真図版106	F II-1住居址出土炭化穀類 実体顕微鏡写真……404
写真図版90	B II-3・4・H II-2住居址 出土遺物…388	写真図版107	F II-1住居址出土炭化穀類 走査型電子顕微鏡写真……405
写真図版91	H II-2掘立柱建物跡 C II-70・I II-2土坑…389	写真図版108	金属組織の顕微鏡写真……286
写真図版92	遺構外出土遺物(1)……390		
写真図版93	遺構外出土遺物(2)……391		

表 目 次

表1	F II-1住居址No.1地点米粒(1)……243	表9	F II-1住居址No.3地点出土穎糠 米粒……251
表2	F II-1住居址No.1地点米粒(2)……244	表10	F II-1住居址No.4地点出土米粒……252
表3	F II-1住居址No.1地点米粒(3)……245	表11	F II-1住居址大麦50粒中の10粒 ・No.5地点……253
表4	F II-1住居址No.1地点米粒(4)……246	表12	F II-1住居址No.5地点小豆(1)……254
表5	F II-1住居址No.2地点米粒(1)……247	表13	F II-1住居址No.5地点小豆(2)……255
表6	F II-1住居址No.2地点米粒(2)……248	表14	F II-1住居址No.5地点小豆(3)……256
表7	F II-1住居址No.2地点大麦(1)……249		
表8	F II-1住居址No.2地点犬麦(2)……250		

表15	FⅡ-1住居址№5地点小豆(4)·····	257
表16	縄文時代住居址一覽表·····	267
表17	平安時代住居址一覽表·····	269
表18	土坑一覽表(1)·····	273
表19	土坑一覽表(2)·····	274
表20	遺構内出土石器一覽表·····	283, 284
表21	遺構外出土石器一覽表·····	285, 286
表22	遺構内出土土師器・須惠器 一覽表1(平安時代)·····	287, 288
表23	遺構内出土土師器・須惠器 一覽表2(平安時代)·····	289, 290

表24	遺構内出土土師器・須惠器 一覽表3(平安時代)·····	291, 292
表25	土坑・遺構外出土土師器 一覽表·····	291, 292
表26	遺構出土鉄器・銅製品 一覽表·····	293, 294
表27	遺構外出土鉄器一覽表·····	293, 294
表28	遺構出土古銭一覽表·····	295, 296
表29	遺構外出土古銭一覽表·····	295, 296

目 次

第一章	緒言	1
第二章	調査の経緯	1
第三章	調査地	1
第四章	調査の経緯	1
第五章	調査の経緯	1
第六章	調査の経緯	1
第七章	調査の経緯	1
第八章	調査の経緯	1
第九章	調査の経緯	1
第十章	調査の経緯	1
第十一章	調査の経緯	1
第十二章	調査の経緯	1
第十三章	調査の経緯	1
第十四章	調査の経緯	1
第十五章	調査の経緯	1
第十六章	調査の経緯	1
第十七章	調査の経緯	1
第十八章	調査の経緯	1
第十九章	調査の経緯	1
第二十章	調査の経緯	1
第二十一章	調査の経緯	1
第二十二章	調査の経緯	1
第二十三章	調査の経緯	1
第二十四章	調査の経緯	1
第二十五章	調査の経緯	1
第二十六章	調査の経緯	1
第二十七章	調査の経緯	1
第二十八章	調査の経緯	1
第二十九章	調査の経緯	1
第三十章	調査の経緯	1
第三十一章	調査の経緯	1
第三十二章	調査の経緯	1
第三十三章	調査の経緯	1
第三十四章	調査の経緯	1
第三十五章	調査の経緯	1
第三十六章	調査の経緯	1
第三十七章	調査の経緯	1
第三十八章	調査の経緯	1
第三十九章	調査の経緯	1
第四十章	調査の経緯	1
第四十一章	調査の経緯	1
第四十二章	調査の経緯	1
第四十三章	調査の経緯	1
第四十四章	調査の経緯	1
第四十五章	調査の経緯	1
第四十六章	調査の経緯	1
第四十七章	調査の経緯	1
第四十八章	調査の経緯	1
第四十九章	調査の経緯	1
第五十章	調査の経緯	1

第一章	緒言	1
第二章	調査の経緯	1
第三章	調査地	1
第四章	調査の経緯	1
第五章	調査の経緯	1
第六章	調査の経緯	1
第七章	調査の経緯	1
第八章	調査の経緯	1
第九章	調査の経緯	1
第十章	調査の経緯	1
第十一章	調査の経緯	1
第十二章	調査の経緯	1
第十三章	調査の経緯	1
第十四章	調査の経緯	1
第十五章	調査の経緯	1
第十六章	調査の経緯	1
第十七章	調査の経緯	1
第十八章	調査の経緯	1
第十九章	調査の経緯	1
第二十章	調査の経緯	1
第二十一章	調査の経緯	1
第二十二章	調査の経緯	1
第二十三章	調査の経緯	1
第二十四章	調査の経緯	1
第二十五章	調査の経緯	1
第二十六章	調査の経緯	1
第二十七章	調査の経緯	1
第二十八章	調査の経緯	1
第二十九章	調査の経緯	1
第三十章	調査の経緯	1
第三十一章	調査の経緯	1
第三十二章	調査の経緯	1
第三十三章	調査の経緯	1
第三十四章	調査の経緯	1
第三十五章	調査の経緯	1
第三十六章	調査の経緯	1
第三十七章	調査の経緯	1
第三十八章	調査の経緯	1
第三十九章	調査の経緯	1
第四十章	調査の経緯	1
第四十一章	調査の経緯	1
第四十二章	調査の経緯	1
第四十三章	調査の経緯	1
第四十四章	調査の経緯	1
第四十五章	調査の経緯	1
第四十六章	調査の経緯	1
第四十七章	調査の経緯	1
第四十八章	調査の経緯	1
第四十九章	調査の経緯	1
第五十章	調査の経緯	1

I. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、東北縦貫自動車道青森線と二戸郡安代町で分岐し、一戸町を經由し、青森県八戸市に至る約68kmの高速道路である。このうち本県にかかわる第7次施行命令区間は延長27.6kmであり二戸郡一戸町で国道4号線と接続する一戸インターチェンジを起点として折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村軽米町を通過し、青森県南郷村へと続いている。

昭和48年10月に第7次施行命令が出され、それ以後、埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議が重ねられた。

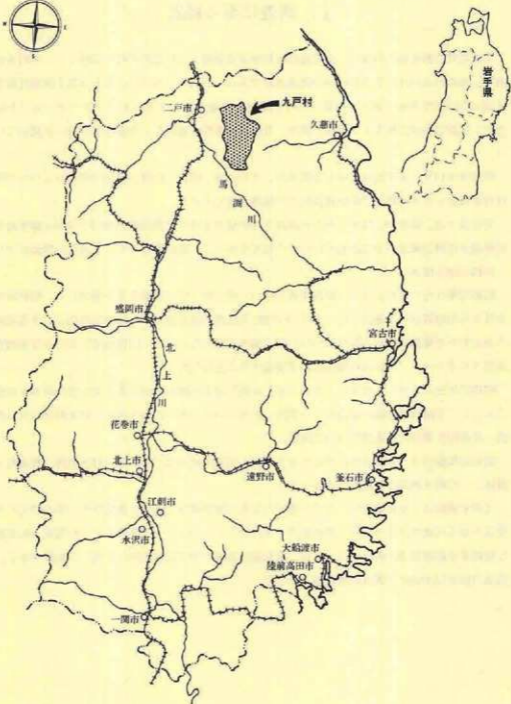
文化課では、昭和50、51年にわたり道路公団の協力を得て実施計画路線沿い400m幅を対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行いその結果をもとに、遺跡保存とルート設定の関係について道路公団と協議した。

昭和52年9月に道路公団では路線発表を行い、中心杭、巾杭設置作業を開始した。昭和54年9月から用地買収へと進展していった。その間、文化課では発表された路線敷地内における遺跡のかかわりや発掘調査対象範囲について確認調査を行った。しかし山林地帯における分布調査は思うにまかせず、山林伐採後に改めて実施することにした。

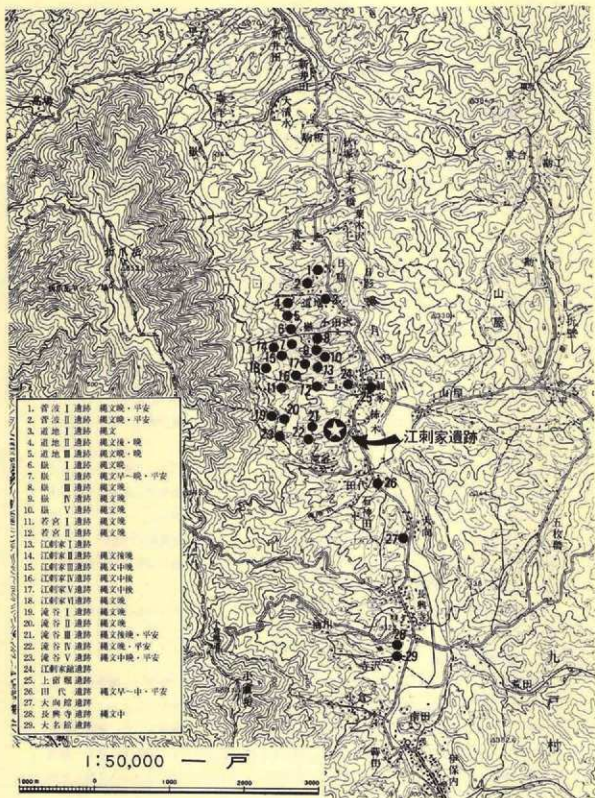
昭和55年度に入り、当埋文センターが第7次施行命令区間の発掘調査を文化課の指導と調整のもとに日本道路公団仙台建設局との契約にもとづいて、九戸村田代遺跡、軽米町吹屋敷1a遺跡、君成田IV遺跡の3遺跡について開始した。

昭和56年度には、本報告書にかかわる九戸村江刺家遺跡をはじめ、九戸村8遺跡、軽米町6遺跡、一戸町2遺跡の発掘調査となった。

江刺家遺跡は、分布調査時における遺物の散布状態や遺跡立地から縄文時代、平安時代の大型集落となる可能性が高かった。調査範囲は九戸インターチェンジに関連して一般国道340号線に接続する路線敷8,080㎡であったが、調査進行過程の中で調査範囲の見直しの必要が生じ、協議の結果10,060㎡が調査対象面積となった。



第1図 岩手県全体図



- | | | | |
|-----|---------|----|-----------|
| 1. | 菅沼 I | 遺跡 | 縄文晩・平安 |
| 2. | 菅沼 II | 遺跡 | 縄文晩・平安 |
| 3. | 道地 I | 遺跡 | 縄文 |
| 4. | 道地 II | 遺跡 | 縄文後・晩 |
| 5. | 道地 III | 遺跡 | 縄文晩・晩 |
| 6. | 旗 I | 遺跡 | 縄文晩 |
| 7. | 旗 II | 遺跡 | 縄文早・晩・平安 |
| 8. | 旗 III | 遺跡 | 縄文晩 |
| 9. | 旗 IV | 遺跡 | 縄文晩 |
| 10. | 旗 V | 遺跡 | 縄文晩 |
| 11. | 若宮 I | 遺跡 | 縄文晩 |
| 12. | 若宮 II | 遺跡 | 縄文晩 |
| 13. | 江刺家 I | 遺跡 | |
| 14. | 江刺家 II | 遺跡 | 縄文後晩 |
| 15. | 江刺家 III | 遺跡 | 縄文中晩 |
| 16. | 江刺家 IV | 遺跡 | 縄文中後 |
| 17. | 江刺家 V | 遺跡 | 縄文中後 |
| 18. | 江刺家 VI | 遺跡 | 縄文晩 |
| 19. | 滝谷 I | 遺跡 | 縄文晩 |
| 20. | 滝谷 II | 遺跡 | 縄文晩 |
| 21. | 滝谷 III | 遺跡 | 縄文後晩・平安 |
| 22. | 滝谷 IV | 遺跡 | 縄文晩・平安 |
| 23. | 滝谷 V | 遺跡 | 縄文中晩・平安 |
| 24. | 江刺家跡遺跡 | | |
| 25. | 上野 | 遺跡 | |
| 26. | 田代 | 遺跡 | 縄文早一・中・平安 |
| 27. | 大向 | 遺跡 | |
| 28. | 長興寺 | 遺跡 | 縄文中 |
| 29. | 大長館 | 遺跡 | |

第2図 遺跡の位置図と周辺遺跡

II 調査方法と室内整理方法

1. 調査方法

調査範囲は九戸インターチェンジの進入路にかかる部分で、総面積は10,060㎡である。調査区内にある道路公団の基準測量杭No 4 + 00 (基準1) とNo 3 + 00 (基準2) を基準点として、2点間を見通す直線を基軸線とした。基軸線は約56度40分西偏している。基準点の平面直角座標第Ⅹ系による成果は下記のとおりである。

基準点1 (X=+27,447.64m、Y=+49,256.86m)

基準点2 (X=+27,489.46m、Y=+49,166.97m)

東西の基軸線をもとに、30m×30mの大区画を調査範囲全体に設定し、東西方向は西からA・B・Cのアルファベットを、南北方向は南からⅠ・Ⅱ・Ⅲのローマ数字を付した。区画名は組み合わせによってAⅠ・AⅡ・AⅢというように表した。

遺構の命名は原則として、各区画ごとに住居址は1から、住居址状遺構は21から、土坑は51から、陥し穴状遺構は101から、溝は151から、焼土遺構は201から一連の分類番号を与え、その前に区画名を付して呼称した。(AⅠ-1住、AⅡ-51土坑、AⅢ-151溝など)

掘りは初めに作業員が、各区画ごと幅2mのトレンチ掘りをし、遺構検出面までの深さを把握したのちに、重機(バックホー)を使用して表土除去を行った。

精査にあたっては住居址4分法、土坑2分法としたが、遺構の状況に応じて使いわけをしている。遺構内出土遺物は埋土と床上とに分け、埋土出土のものは層位を確認して一括で取り上げ、床上からのものは出土地点とレベルを図面に記録したのち取り上げた。

実測は作業員の中より、2名1組の実測班を数組編成した。実測班は調査員の指示に従って、遺構の断面と平面実測を行い、実測した図面は調査員が点検した。実測図は縮尺1/20を原則としたが、状況に応じて縮尺1/10も作成した。

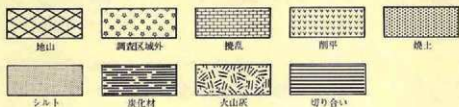
写真撮影は調査員が行い、35mm版2台(モノクロ・カラースライド)と6×7cm版1台(モノクロ)を使用した。

2. 室内整理方法

遺物は現地において水洗とラベル記入まで済ませ、室内では種類別の仕分け・接合復元・実測・拓本・トレースの順に室内作業員が、調査員の指示のもとに整理を行った。

図面は第一原因の点検・修正後、縮小・トレース・図版作成の順に整理をした。遺構図面の縮尺は、住居址1/60、カマドと炉断面1/30、土坑1/40、溝不定等である。図面中の地山・調査区域外・攪乱、削平、焼土、シルト、炭化材、火山灰、切り合い等は次のようなスクリーン

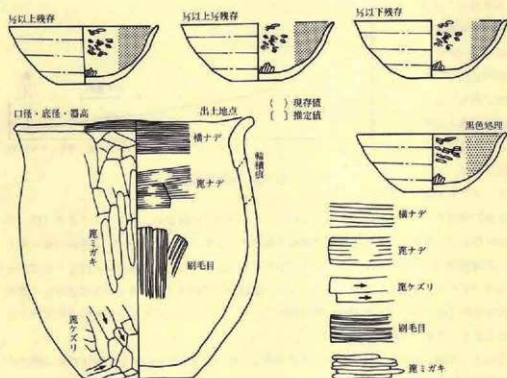
ンを使用している。土坑と柱穴はP₁・P₂、土器はP₀、石はSのアルファベットで図示した。



凡例1 使用スクリーントーン

遺物図面の縮尺は、大型土器1/3、小型土器1/2、柘木1/3、石器1/2・1/3、鉄器1/2、土製品1/2で掲載し、それぞれにスケールを付した。

平安時代の土器は、左上に口径・底径・器高の順に計測値と右上に出土地点を付した。残存の割合は、中軸右側の線をあけることにより区別し、2分の1以上残存は全部書き、3分の1以上から2分の1残存のものは半分あけ、3分の1以下残存のものは3分の2あけている。土師器と須恵器を区別するために、須恵器の断面を黒で塗り潰した。土器の調整技法は下記の



凡例2 法量・出土地点・調整技法など

ように表わした。

遺物写真は、埋文センターの写真技師が撮影し、縮尺はそれぞれに掲載した。

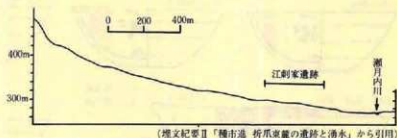
Ⅲ 遺跡の立地と基本層序

1. 遺跡の立地

江刺家遺跡は、九戸郡九戸村役場から国道 340号線沿いに約 5 km北上した国道西側、九戸郡九戸村大字江刺家地内に位置する。

この地域の地形を概観すると、北西方向に折爪岳（852.2m）がそびえ、この東側に約37度の急傾斜を呈する山脚部が、ほぼ直線的に南北に延びる。東方には瀬月内川が折爪岳山脚部と平行するように北流する。瀬月内川地溝帯上には山麓坐錐扇状地が発達し、この扇面上には折爪岳を源とする沢及び面上に端を発する沢が多くあり、平行して東流する。

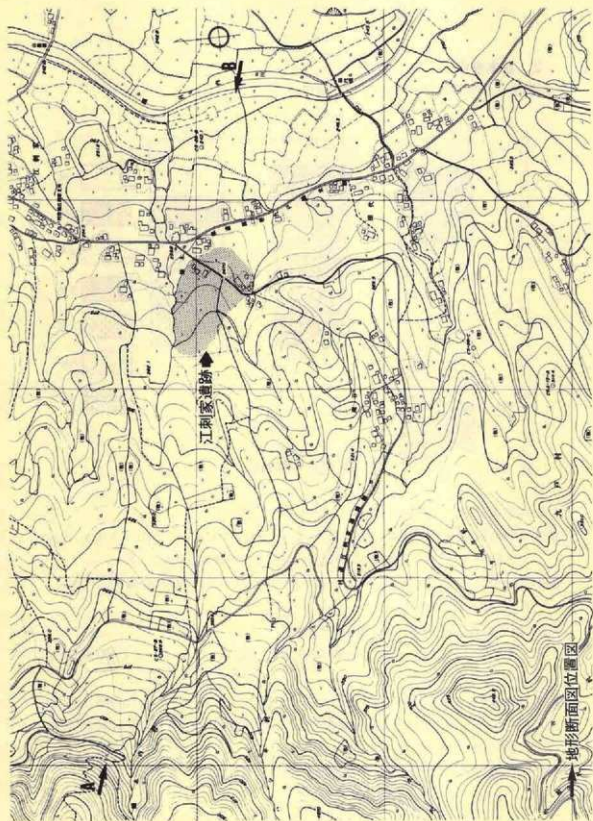
当遺跡はこの扇状地南側扇端部の標高260～280mの低位段丘相当の緩斜面に載る。ここは北側扇面と比較するに、起伏及び傾斜に差異がみられる。すなわち北



第3図 地形断面図A—B

側は面の傾斜と沢の傾斜の度合が標高を低くするにつれて開折され、順次大きくなる。従って沢と尾根との高低差がみられ、起伏に富んだ地形を呈している。これに対し当遺跡の載る面上は、丘陵地状の起伏は小さく、沢と面上の高低差もほとんどなく、標高 375m 付近から 255m 付近までなだらかな斜面となっている。又この緩斜面には標高 525m 付近に谷頭部をもつ間木内沢が遺跡北側に接しながら流れ、瀬月内川に注ぐ。この沢は扇面を東流する多くの沢のうちで最も水量が豊富である。

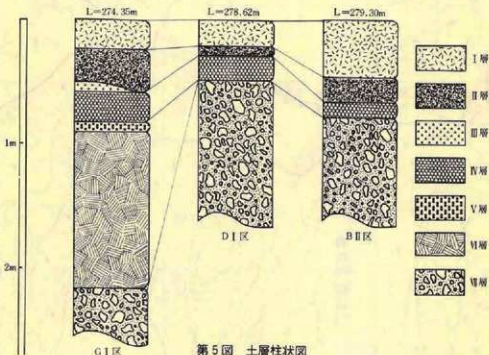
このような地形環境は、検出された遺構が縄文時代・平安時代・中世及び近世の長い時代にわたる複合遺跡であることでも明らかのように、古代から生活条件に適した場所であったことを物語っている。



第4図 江刺家遺跡周辺地形図(岩手県作成「北上山系開発調査図九戸村17-3」より)S=1:10,000

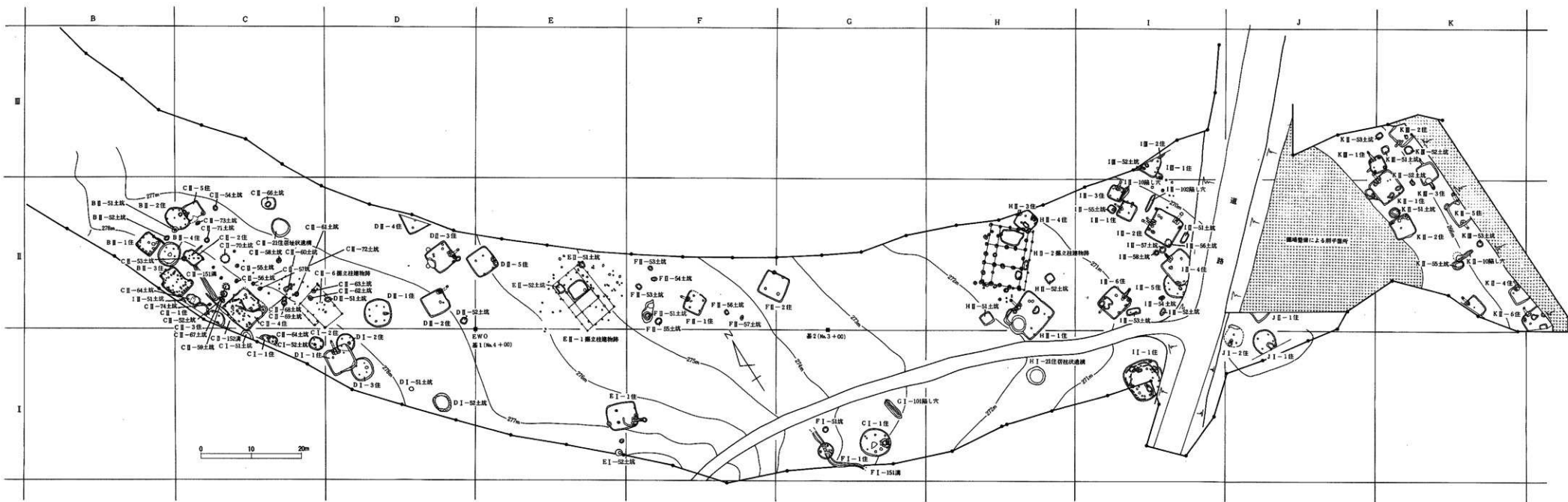
2. 基本層序

調査区の土層堆積状況は、次のとおりである。



第5図 土層柱状図

- I層 (10Y R2/1~2/2 黒色土~黒褐色土層) 新作土である。
- II層 (10Y R2/3 黒褐色土層) 下位に南部浮石を、中位に十和田 a 降下火山灰をブロック状に包含する。ほとんどの遺構はこの層からV層上位まで掘り込まれている。
- III層 (10Y R3/3~3/4 暗褐色土層) 中樫火山灰に相当するが、I層との区別が付けにくく、C区・B区は消滅する。
- IV層 (10Y R4/6 褐色土層) 南部浮石層である。
- V層 (10Y R3/4 暗褐色土層) 南部浮石を包含し、堅くしまっている。この層はB区に近づくにつれて消滅する。
- VI層 (10Y R5/6 黄褐色土層) 八戸火山灰層である。この層はF区からJ区は明確に識別できるが、K区及びE区からB区は砂礫混じりの黒褐色土~褐灰色土層 (10Y R3/1~4/1) となり、識別が困難となる。
- VII層 (10Y R4/1~6/2 褐灰色土~灰黄褐色土層) 砂礫層である。



第6図 江利家遺跡遺構配置圖

IV 検出遺構と遺構内出土遺物

1. 縄文時代竪穴住居址

BⅡ-2住居址

遺構 (第7図、写真図版3)

この遺構は、調査区最北西端沢寄りに位置する。幾度となく流水によって洗われている模様で、北側床面1/3は小礫混じりの褐色土で覆われていた。

形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈し、東西に約4m、南北に約5mの規模をもつ。

埋土は褐色土をブロック状に包含する黒色土の単層である。壁は床面から外傾どみに立ち上がる。壁高は南壁で約5cm、西壁で約20cmである。

床面はやわらかく、北側床面約1/3は礫層となり、凹凸が激しく非常に堅い。

炉は中央部から東寄りに位置し、石囲い炉の形態を示す。規模は径約90cmであり、大小計17個の垂角礫を床面下約7cm~13cmの深度に、円形状に埋置している。部内中央には炭化物が微量ながら認められ、その周囲は僅かながら焼成をおびている。火熱による赤色変化の層厚は約10cmである。

床面北側半分には多くの礫が検出されているが、この遺構に伴うものかどうか不明である。

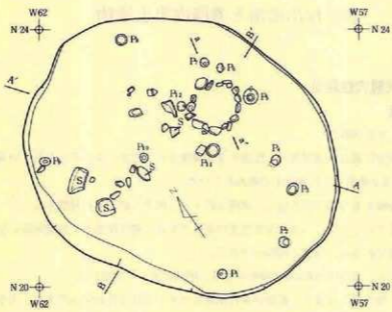
柱穴状ピットは計12個検出されているが、柱穴配置は不明である。

柱穴No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	
規模	径	15	15	20	15	23	14	14	17	18	14	20	14
cm	深さ	25	38	8	25	25	23	28	13	39	35	19	23

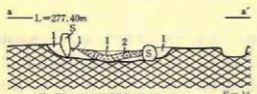
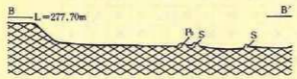
遺物 (第8・9図、写真図版50・51)

出土遺物は土器片が1・2・6~17の14片、石器類は石鏃1点(3)、磨石1点(4)、スクレイパー1点(5)の3点が出土している。これらのうち1・2・6・7・8は床面から、その他は埋土から得られたものである。

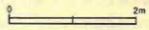
1は大型粗製深鉢の口縁部から体部の破片である。口唇は平縁で、地文には単節斜縄文が施され、口縁部周辺にはススの付着が認められる。2は口縁部が欠損した台付鉢である。地文は羽状縄文である。底面はナデにより調整が施されている。6・7・8・14・16・17は粗製深鉢の口縁部破片であり、6・8・16は単節斜縄文が、7・14・17は羽状縄文が施されているものである。10・11・15は口縁が山形突起を、12は波状を呈し、いずれにも帯縄文が施されている。13は口縁が波状を呈し、地文に細かい羽状縄文が施されている。9は隆線文を横位及び斜



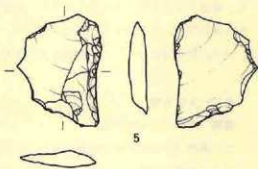
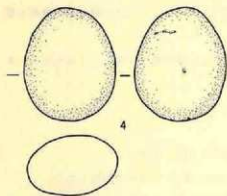
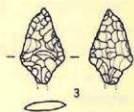
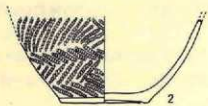
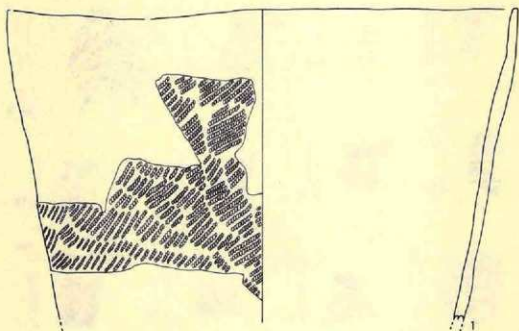
1層 褐色(10YR 5/3) 焼土粒を含む



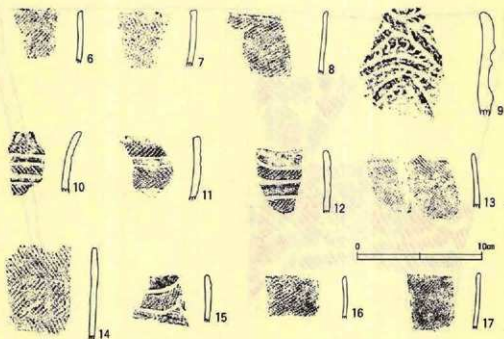
1層 褐色(10YR 5/3) 炭化物と焼土粒を含む
2層 赤褐色(5YR 5/3) 焼土 S=1/2



第7图 B II-2住居址



第8圖 BⅡ-2住居址出土遺物(1)



第9図 B II-2住居址出土遺物(2)

位に施した口縁部破片であり、隆線文上には縄文圧痕が、又隆線に沿って爪形の縄文圧痕が施されているものである。

3の石鏝は基部が突出し、断面は肉薄で、両面とも入念な剥離調整が加えられているものである。4は長軸5cm、短軸4・5cmの比較的小さな磨石である。5のスクレイパーは一辺片面に荒い剥離調整が加えられているものである。

これらの出土遺物のうち、埋土から得られた9は円筒上層b式に比定されるものと思われる。又、床面から得られた1・2・6・7・8及び9～17の土器片は、いずれも縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけられるものである。

以上の出土遺物から、この遺構は縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけられるものである。

B II-4住居址

遺構(第10図、写真図版3)

この遺構は、調査区最北西端沢寄り、B II-2住居址の西側に位置する。

形状は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、東西に約4.8m、南北に4.2mの規模をもつ。

埋土は上位が焼土粒を包含する黒色土、下位が焼土粒を包含する黒褐色土で構成される。壁

は床面から外傾し立ち上がる。壁高は南壁で約24cm、北壁で約16cmである。

床面はやわらかく凹凸が認められる。

炉は中央部に位置し、焼土を挟み込む形に2個の礎が「ハ」の字に置かれているところから石囲いがの形態を示すものと思われる。焼土は径約60cm×80cmの不整長方形の範囲に分布し、床面より約6cmの盛り上がりをもつ。火熱による赤色変化の層厚は約6cm～8cmである。

南西壁際には、開口部径約55cm、底部径約40cm、深さ約40cmのピットを伴う。このピットの埋土は上位から暗褐色土、黒色土、暗褐色土、褐色土で構成される。

柱穴状ピットは計22個検出されているが、これらは埋土から見て、新旧に分けられる。まずP₁～P₄の埋土は黒褐色土である。P₇～P₂₂の埋土は黒色土であり、前者に比較してやわらかい。以上のことから、P₁～P₄はP₇～P₂₂より古いものと思われ、これらのいずれかが支柱穴を構成するものと思われるが、柱穴配置は不明である。

柱穴No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	
規模	径	25	28	25	20	15	17	30	41	25	15	17	20	15	17	20	30	25	30	27	35	33	34
cm	深さ	55	33	45	47	50	31	56	13	18	13	14	5	10	11	44	43	32	39	41	37	38	19

遺物 (第11図、写真図版51)

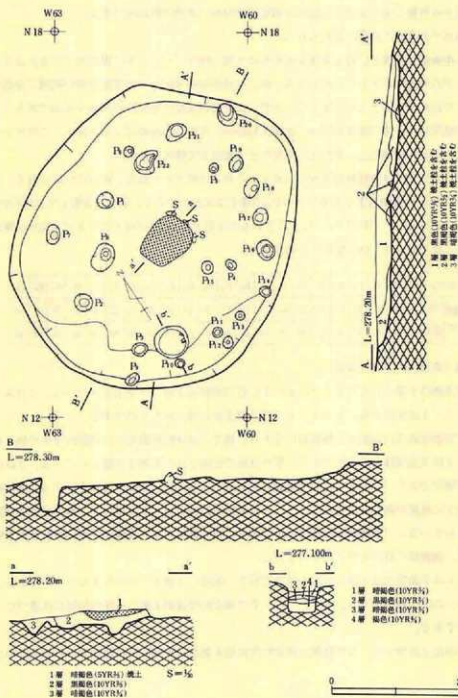
出土遺物は土器が6点(1・2・4～7)、石器が凹石1点(3)が出土している。これらのうち1・3・4は床面から、2・5・6・7は埋土から得られたものである。

1は粗製深鉢の口縁部から体部破片である。地文には単節斜縄文が口縁部直下まで施されている。4は大型深鉢の体部片であり、平行沈線で区画された帯縄文が施されている。2は深鉢の底部破片であり、器内外にはナデ調整が施されている。5は口縁が波状を呈する口縁部破片で、地文に単節斜縄文が施されている。6は深鉢の口縁部から体部破片で、地文には羽状縄文が施されている。7は深鉢の口縁部破片であり、や、外反する。文様は2本の平行沈線を粗紐に引き、沈線間に磨消を施したものである。

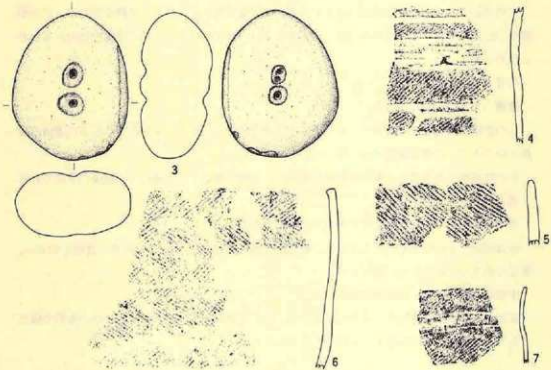
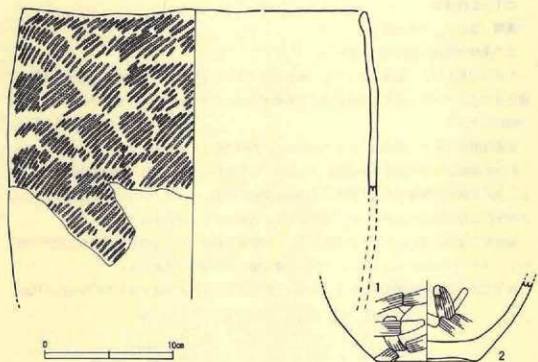
石器3は平面形がほぼ楕円形状を呈す凹石で、両面に2個ずつの凹みをもつものである。

これらの出土遺物のうち、4・5・6・7は縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけられるものである。

以上の出土遺物から、この遺構は縄文時代後期末葉から晩期初頭に位置づけられるものである。



第10图 B II-4 住居址



第11圖 B II—4 住居址出土遺物

C I - 2 住居址

遺構 (第12図、写真図版4)

この遺構は調査区北西側に位置する。

形状は円形を呈し、東西に約 2.7m、南北に約 2.8mの規模をもつ小規模の住居址である。埋土は黒色土で占められる。壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は東壁で約 3cm、西壁で約 10cmである。

床面は凹凸があり、東側約半分はやわらかく、西側は堅くしまっている。

炉は中央部からやや西寄りに位置し、石囲い炉の形態を示す。規模は一辺約 45cm の方形を呈し、大小 8 個の直角礫を床面下約 4cm~10cm の深度に埋置している。炉内には炭化物が分布し、その下位は幾分焼成をおびている。火熱による赤色変化の層厚は約 4cm である。

西壁際には壁に接する形で 2 個の礫が「ハ」の字形に埋置され、この周辺の床面は凹凸が激しく、ガリガリに堅いところから、これらの礫は出入口状施設と思われる。

柱状穴ピットは計 11 個検出されているが、これらのうち柱穴を構成するものは P₃-P₄-P₈ の

柱穴No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
規模	径 15	10	12	17	15	17	17	20	15	23	15
cm	深さ 25	10	27	21	29	24	7	25	29	20	30

三角形状ないし、P₁を含む菱形の配置になると思われる。

この遺構からの出土遺物は得られておらず、明確な時期決定に足りる資料を欠くが、炉の形態及び位置、周囲にある遺構の時期から推定するに、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。

C II - 3 住居址

遺構 (第12図、写真図版5)

この遺構は調査区北西端寄り、B II - 4 住居址の南側に位置する。検出されたのは遺構の東側半分であり、西側は調査区外にはいる。

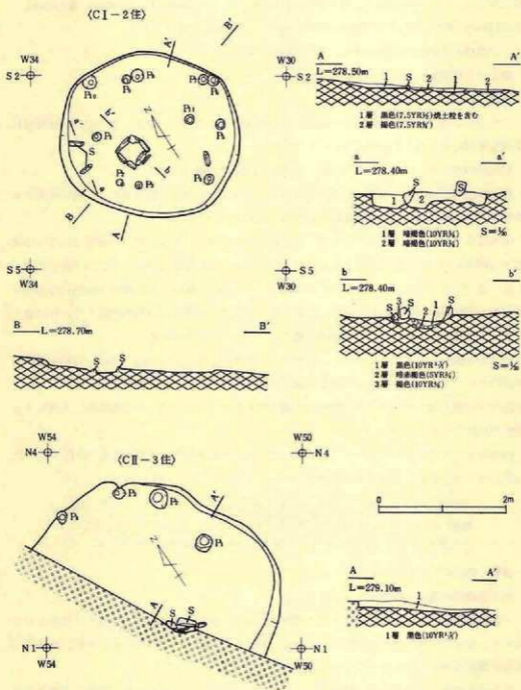
形状は検出された部分を見る限り円形を呈し、規模は推定するに径約 4m 前後の遺構であると思われる。

埋土は焼土粒を微量に包含する黒色土の単層である。

壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。検出面は既に剝削を受けており、壁高も北壁で約 6cm、東壁で約 2cm を検出したに過ぎない。

床面は堅くしまり、凹凸が認められる。

床面中央部と見られるところから南寄りに、大小 6 個の直角礫が調査区外にはいる形で検出されたが、炉になり得るかどうか確認できなかった。



第12図 CI-2・CII-3住居址

柱穴状ピットは P₁ (径27cm、深さ66cm)、P₂ (径30cm、深さ56cm)、P₃ (径20cm、深さ63cm)、P₄ (径15cm、深さ65cm) の4個検出されているが、柱穴配置は不明である。

この遺構からの出土遺物は得られず、時期は不明である。

D I - 2 住居址

遺構 (第13図、写真図版5)

この遺構は調査区北西側、C I - 2 住居址の南東寄りに位置し、D I - 1 平安時代住居址に南西壁を切られているものである。

形状は円形を呈し、南北に約 3.7m、東西約 3.6m の規模をもつ。

埋土は上位が焼土粒を微量に包含する黒色土、下位が黒褐色土で構成される。壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は北壁で約25cm、南壁で29cmである。

床面は中央部に凹凸が認められるが、壁際周囲はほぼ平坦であり、堅くしまっている。中央部から西側床面には炭化物が検出されていることから、この住居址は焼失住居址であると思われる。東壁下床面には、壁に接する形で幅10cm、長さ35cmの礫が、また南壁下床面には30cm×30cmの半円状の礫が検出されている。この2個に挟まれる壁際床面は凹凸が激しく、特に堅くしまっているところから、これらの礫は出入口状施設であると思われる。

炉は中央部から南東寄りに位置し、石囲い炉の形態を示す。この石囲い炉は一辺約30cmの方形状のもので、大小計8個の垂角礫を床面下約6cm~18cmの深度に埋置している。

炉内は炭化物を包含する黒色土で覆われ、焼土粒が微量ながら認められるものの、火熱による赤色変化は認められない。

柱穴状ピットは計16個検出されているが、これらのうち主柱穴を構成するものはP₁-P₂-P₃-P₄の4本と思われ、四角形状の配置を示す。

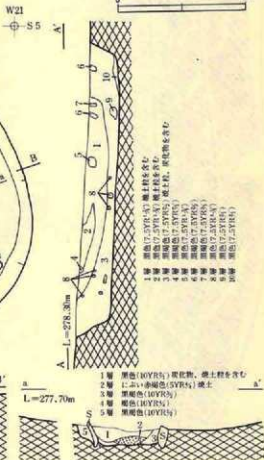
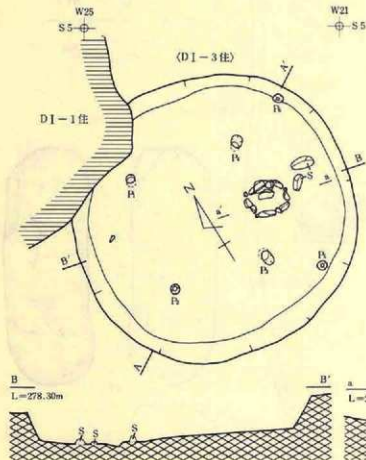
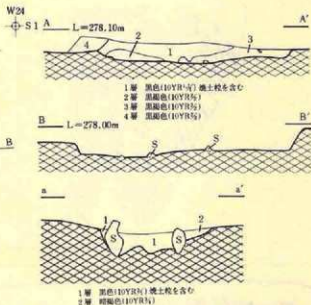
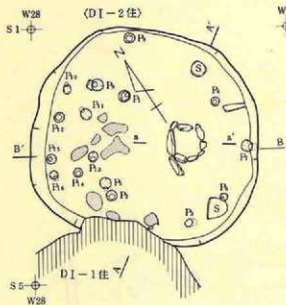
柱穴No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	
規模	径	18	17	15	14	18	14	17	17	18	14	18	15	16	14	15	12
cm	深さ	38	50	39	43	50	15	48	51	51	50	54	60	49	47	45	50

遺物 (第14図、写真図版52)

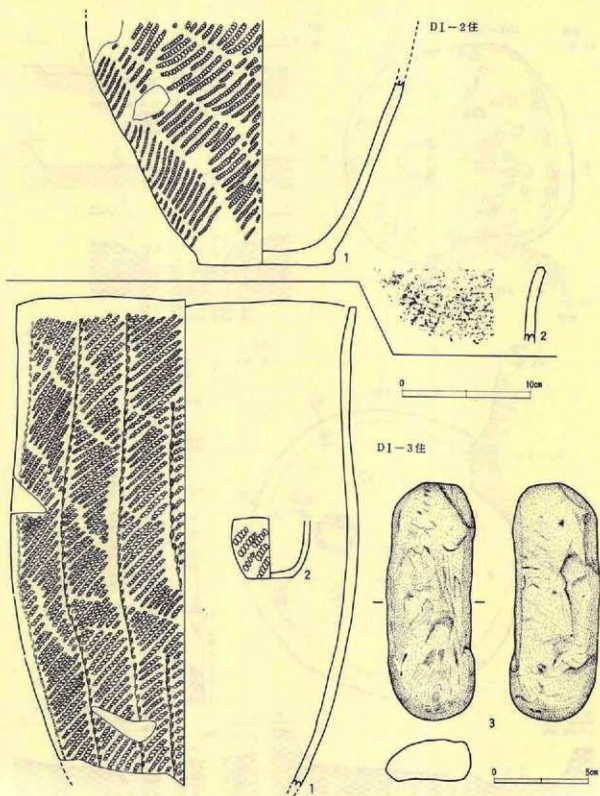
出土遺物は床面から出土した土器2点(1・2)のみである。

1は粗製深鉢の体部から底部である。器形は底部から体部にかけては外傾する立ち上がりを示す。地文には単節斜縄文が施されている。2は粗製深鉢の口縁部破片と思われ、地文には単節斜縄文が施されているものである。

以上2点の出土遺物からは、時期決定に足る資料に欠けるが、炉の形態・位置から考え合わせ、この遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。



第13図 DI-2・DI-3住居址



第14圖 DI-2・3住居址出土遺物

D I - 3 住居址

遺構 (第13図、写真図版5)

この遺構は調査区北西側、D I - 2 住居址の南側に隣接し、D I - 1 平安時代住居址に北西壁を切られているものである。

形状は円形を呈し、東西に約 4.6m、南北に約 4.3mの規模をもつ。

埋土は上位が黒色土、下位が焼土粒、炭化物を包含する黒褐色土である。特に床面上約 5cm ~ 10cmの埋土からは多くの炭化物が検出され、同様に床面からも検出されていることから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は東壁、西壁共約 50cmである。

床面には凹凸があり、炉周辺及び西側の半分は堅くしまっている。

炉は中央部から東寄りに位置し、石囲い炉の形態を示す。この石囲い炉は径約 55cm × 65cmの隅丸長方形形状のもので、大小計 12個の亜角礫を床面下約 7cm ~ 21cmの深度に埋置している。

炉内は幾分炭化物が検出されたものの、火熱による赤色変化はみられない。炉の東側には 2 個の礫が検出されているが、用途不明である。

柱穴は計 6 個検出されており、これらのうち主柱穴を構成するものは P₁-P₂-P₃-P₄ の 4 本で、四角形状の配置を示す。P₁-P₄ は出入口施設に伴う柱穴であると思われる。いずれの柱穴にも掘り方が認められた。

柱穴 No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	
規模cm	径	15	13	17	20	16	15
	深さ	44	52	78	65	14	19

遺物 (第14図、写真図版52)

出土遺物は 2 個体の土器 (1・2) と、敲石 (3) 及びアスファルト (4) が出土している。1 は床面から、2・3 は埋土から、4 は柱穴 P₄ の埋土から得られたものである。

1 は底部が欠損した粗製深鉢である。口唇はほゞ平縁であり、体部がやゝ脹る。地文は原体 R L に綾絡を伴うものである。口縁部にはミガキが施されている。口縁部から体部下半にはススの付着が認められる。

2 は器高 4.6cm のミニチュア土器で、地文に単節斜縄文が施されているものである。

3 は平面形が不整長方形を呈し、長軸方向の一周縁に敲打痕が認められるものである。

4 は柱穴埋土、床面から約 15cm 下位に得られたものであり、拳大の大きさである。(写真図版 52 の 4 参照)

これらの出土遺物のうち 1 は器形及び地文から縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。以上の出土遺物から、この遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。

DⅡ-1住居址

遺構 (第15・16図、写真図版6)

この遺構は調査区北西側、DⅠ-2住居址のほゞ東側に位置する。

形状は円形を呈し、南北及び東西に約5.6mの規模をもつ。

埋土は上位が微量に炭化物を包含する黒色土、下位が黒褐色で構成される。

壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は北壁で約31cm、南壁で約39cmである。

床面は堅くしまり、平坦である。柱穴の内側にあたる、半径約2cmの範囲は、にぶい黄褐色シルト(7.5YR4/3~5/3)で貼り床されている。貼り床の層厚は約7cmである。

炉は中央部から南東寄りに位置し、複式炉の形態を示す。石囲い部は径約60cmの円形状を呈し、北西側に長さ約50cm、幅7cmの角礫を埋置し、床面と区画している。部内は床面下約15cmの深度に掘り込まれている。炉床部は堅くしまっているが、火熱による赤色変化は認められない。前底部は長さ約50cm、幅約25cmの規模をもち、石囲い部から「U」字状に張り出す。部内は堅くしまっており、凹凸は認められない。この複式炉は堅くしまった黒色土及び黒褐色土によって覆われていた。

柱穴は計6個検出されており、六角形状の配置を示す。

柱穴 No		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
	規模cm	径	25	25	25	45	35
	深さ	75	70	64	63	70	60

遺物 (第17・18・19図、写真図版53・54)

出土遺物は土器3点(1・2・3)、石器類はスクレイパー2点(4・6)、フレーク8点(5・7・8・9・10・11・12・13)、砥石1点(16)、石刀1点(15)、石皿1点(14)が出土している。これらのうち、2・3・14・15・16は床面から、その他は埋土から得られたものである。

1は大型深鉢の口縁部から体部である。器形は体部に脹りをもち、口縁部が外反する。口縁部には3個の突起を有す。口縁部突起のほゞ直下の体部上半残存部にも1個の突起を有しているところから、体部上半にも3個の突起を有しているものと思われる。文様は単節斜縄文を施した後、横位に長軸をもつ楕円及び長方形に沈線と区画し、楕円及び長方形外の沈線間には磨消を施しているものである。

2は粗製深鉢の口縁部から体部である。器形は残存部からみて体部に脹りをもち、口縁部が僅かに外反する。口唇は丸みをもつ。地文には単節斜縄文が施されている。

3は小型深鉢の体部下半から底部であり、地文に無節斜縄文が施されているものである。

石器4・6はいずれも不整形を呈するスクレイパーで、弧状を成す部分のみに入急な剥離調整が認められるものである。

フレーク 8 点はいずれも不整形を呈するもので、加工痕の認められないものである。

16の砥石は長軸 9.2cm、短軸 3.3cmの長方形形状を呈し、平坦に研磨され、長軸方向両端側が僅かではあるが磨滅しているものである。

15の石刀は長さ25.1cm、幅 6.2cmの破片で、刃部は両面から研磨されているものである。

14の石皿は長軸23cm、短軸20cm、厚さ 2.2cmの楕円形状のもので、中央部は径約15cm×11cmの範囲に凹みをもつものである。

これらの出土遺物のうち、1は縄文時代中期末葉大木10式に比定されるものであり、2も器形から同時期に相当するものである。

以上の出土遺物から、この遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものである。

F I - 1 住居址

遺構 (第16図、写真図版7)

この遺構は調査区のほぼ中央部に位置し、遺構のほぼ中央部は南北に横断するF I - 151 溝によって切られている。

形状は円形を呈し、規模は東西及び南北共約3mを測る。

埋土は焼土粒を包含する黒褐色土で大半を占める。

壁は床面より外傾ぎみに立ち上がる。壁高は北壁で約31cm、南壁で11cmである。

床面は残存部をみる限りほぼ平坦で堅くしまっている。

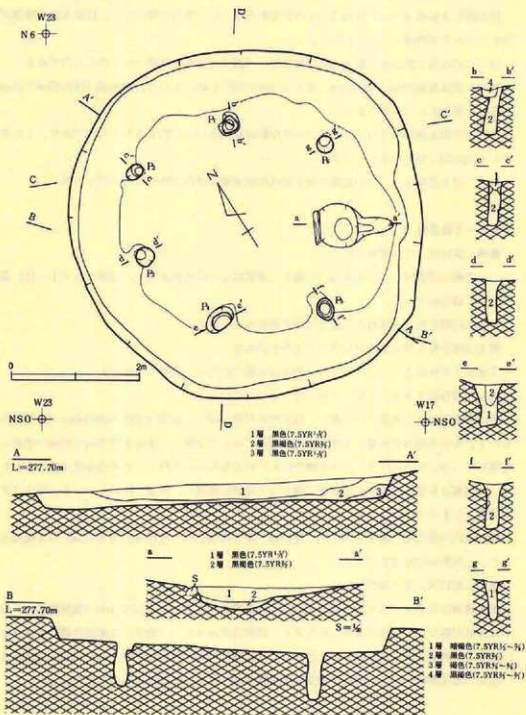
炉は中央部から南東寄りに位置し、複式炉の形態を示す。石囲い部は一辺約40cmの方形状のもので、大小5個の亜角礫を北東側を開く形に「コ」の字状に、床面下約5cm～12cmの深度に埋置している。部内には僅かに炭化物が認められるものの、火熱による赤色変化は認められない。前庭部は6個の亜角礫を北東壁に向かって扇状に埋置し、床面と区画している。部内は平坦で堅くしまっている。

柱穴はP₁(径25cm、深さ59cm)、P₂(径15cm、深さ41cm)、P₃(径17cm、深さ63cm)の3個検出され、三角形の配置を示す。

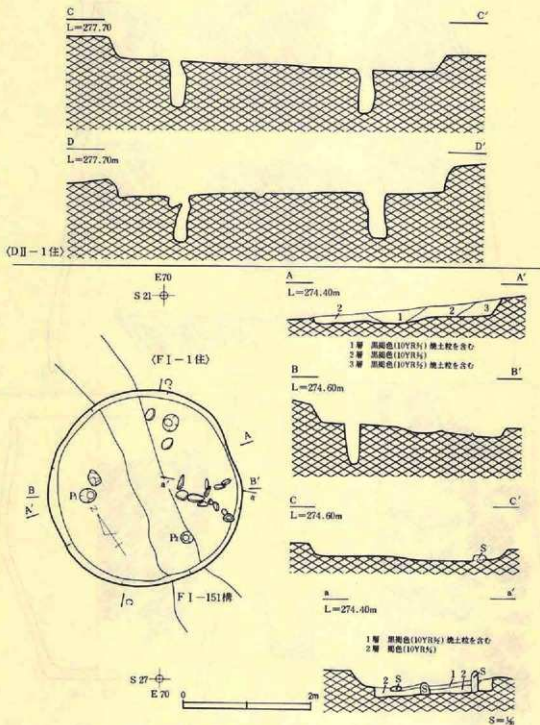
遺物 (第17図、写真図版54)

出土遺物は床面から出土した土器1点(1)のみである。これは器高20.4cmの粗製深鉢で、器形は体部が脹り、口縁部が僅かに外反する。口唇は丸みをもつ。地文には単筋斜縄文が施され、口縁部には磨消がみられる。これは器形から縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。

以上の出土遺物からこの遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。

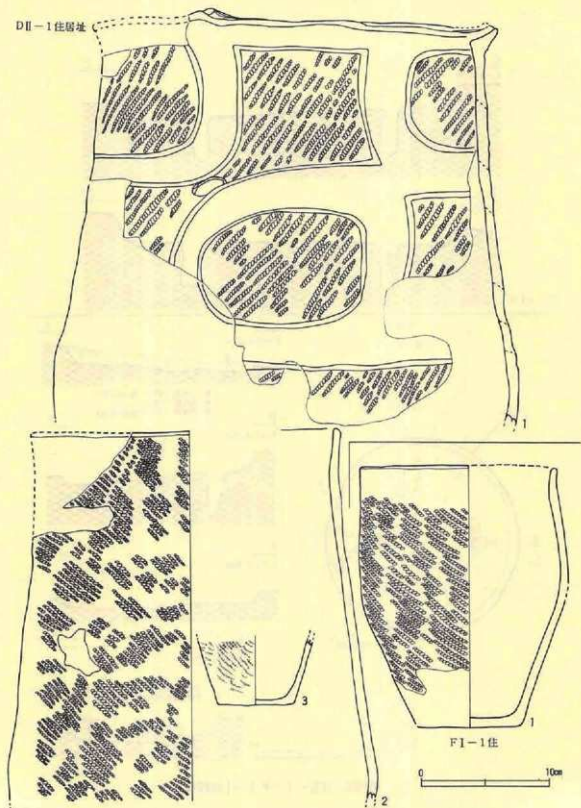


第15图 D II-1 住居址

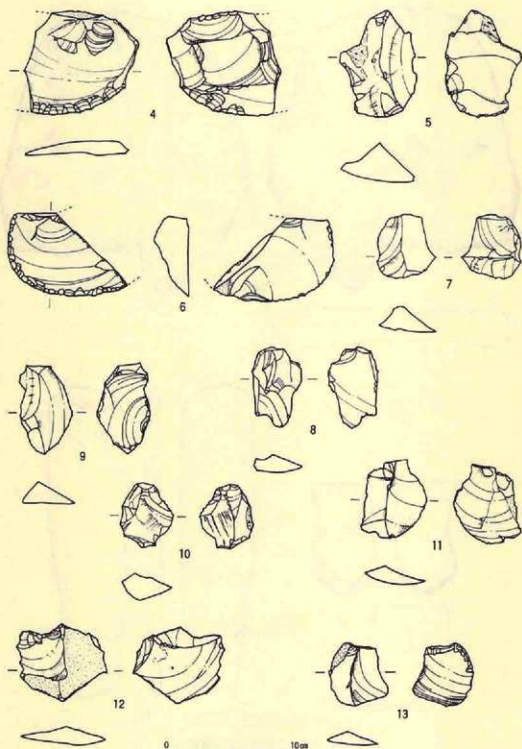


第16図 D II-1・FI-1住居址

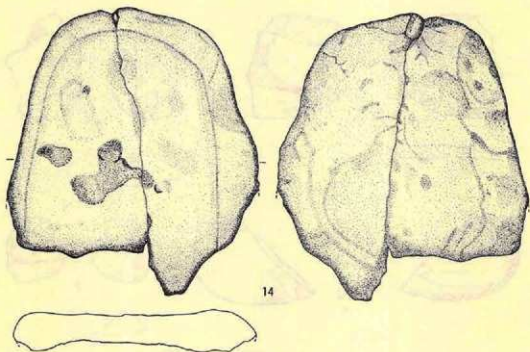
DII-1 住居址



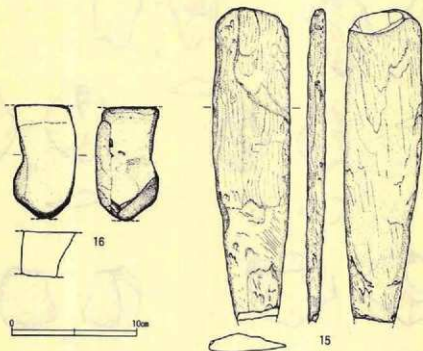
第17圖 DII-1・FI-1 住居址出土遺物



第18圖 D II - 1 住居址出土遺物 (1)



14



第19图 D II-1 住居址出土遺物 (2)

G I - 1 住居址

遺構 (第20・21・22図、写真図版8・9)

この遺構は調査区ほゞ中央部、F I - 1 住居址のほゞ東側に位置する。この遺構には床面と床面下に使用時期の異なる炉が検出されたことから、2棟分の住居址が存在することが判明した。これらの住居址をここで、G I - 1a住居址・G I - 1b住居址と呼称し、個々の住居址について記述する。

G I - 1a住居址

形状は楕円形を呈し、規模は北西から南東に約 6.1m、北東から南西に約 5.3m を測る。

埋土は上位が黒色土、下位が黒色土と炭化物を包含する黒褐色土で構成される。

壁は床面から外傾きみに立ち上がる。壁高は東壁で約30cm、西壁で約10cmである。

床面には凹凸があり、比較的やわらかい。中央部から東側の床面には得く炭化物が検出され埋土下位にも炭化物が検出されているところから、焼失住居址であると思われる。壁際直下の床面には周溝が巡る。この周溝は幅約 4cm~26cm、深さ約 1cm~9cm の規模をもち、北東壁際から北西、南西及び南壁際まで断続的に巡り途絶える。周溝の埋土はやわらかい暗褐色土である。

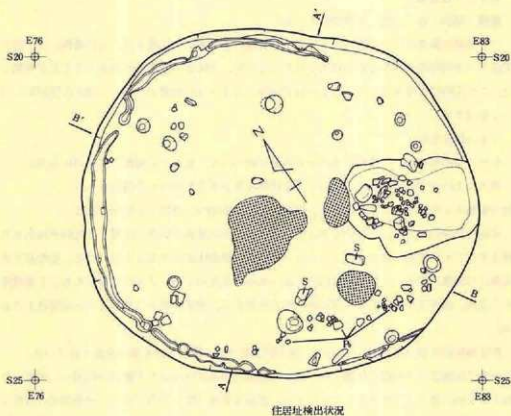
炉は地床が3基 (No 1 炉~No 3 炉)、複式炉1基 (No 4 炉) の計4基が検出されている。

No 1 炉は床面ほゞ中央部に位置する。焼土は径約 110cm×110cm の不整形の範囲に、床面より約 1~2cm の盛り上がりをもって分布する。表面は非常に堅く凹凸がある。赤色変化の層厚は約 5cm である。No 2 炉は中央部から南寄りに位置する。焼土は径約 50cm×56cm の円形の範囲に広がり、表面はやわらかい。赤色変化の層厚は約 6cm である。No 3 炉は中央部から南東寄りに位置する。焼土は径約 40cm×76cm のほゞ楕円形の範囲に広がり、表面はやわらかい。赤色変化の層厚は約 6cm である。

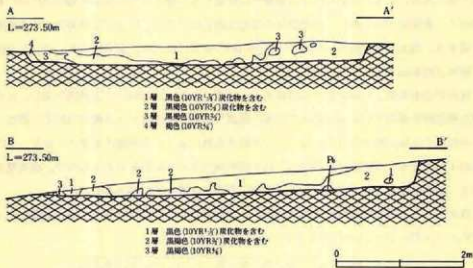
複式炉は中央部より南東寄りに位置する。石囲い部は一辺約 80cm の方形状を呈し、大小計 14 個の亜角礫を床面下約 8cm~10cm の深度に埋置している。部内からは斑状の焼土に混在して多くの炭化くるみが検出されている。この下位は火熱によって赤色変化を受けており、その層厚は約 4cm である。前庭部は幅約 90cm、長さ約 80cm のほゞ方形状を呈するもので、南東壁までのびる。部内は非常に堅く凹凸がある。石囲い部寄りには浅鉢状に凹みをもつ。

柱穴状ピットは計 10 個検出されているが、これらのうちこの住居址の主柱穴を構成するものは P₁-P₂-P₃-P₄-P₅-P₇ の 6 本で六角形状の配置を示す。

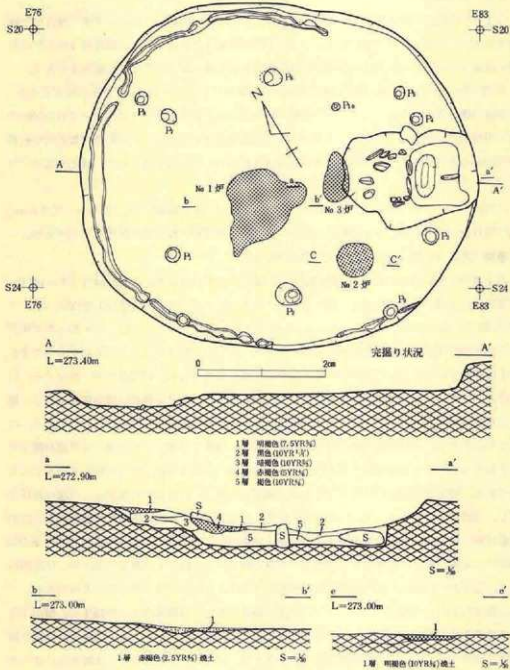
柱穴 No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	
規模cm	径	22	42	26	20	20	30	25	20	20	15
	深さ	71	72	57	43	64	77	65	34	48	55



住居址検出状況



第20図 GI-1a住居址(1)



第21図 GI-1a住居址(2)

G I-1b住居址

G I-1a住居址のNo 3 炉及びNo 4 炉立ち割りの際、床面下約10cm～12cmの深度に複式炉が検出された。この複式炉の石囲い部は、G I-1a住居址No 3 炉の直下に、又前庭部はNo 4 炉の石囲い部直下に位置する。G I-1a住居址の床面からこの複式炉までの土層は褐色土である。

石囲い部は東西に60cm、南北に約66cmの方形状を呈し、大小7個の直角礫が残存するが、その他の礫は抜き取られており、その痕跡が認められる。部内は褐色土に混じって径約58cmのほぼ円形状に炭化物が分布する。火熱による赤色変化は認められない。前庭部は幅約120cm、長さ約80cmの不整形を呈し、石囲い部寄りには浅鉢状に凹む。部内は非常に堅く、凹凸が認められる。

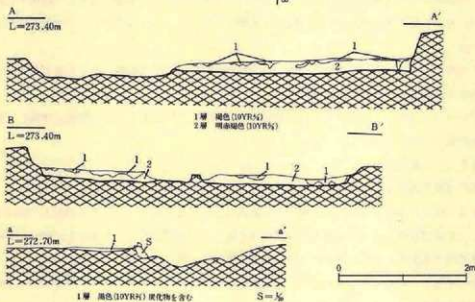
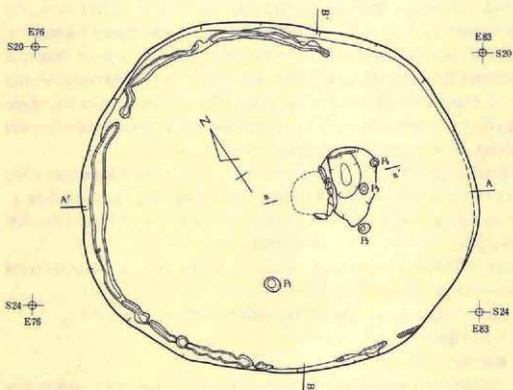
柱穴状ピットはP₁ (径25cm、深さ61cm)、P₂ (径18cm、深さ36cm)、P₃ (径18cm、深さ6cm)、P₄ (径11cm、深さ53cm) の4個検出されているが、この遺構に伴う柱穴配置は不明である。

遺物 (第23・24・25・26・27・図、写真図版55・56・57)

出土遺物はG I-1a住居址床面及び埋土から得られたものである。土器は14点 (1～14)が、石器類は加工痕のある剥片2点 (16・18)、スクレイパー2点 (20・21)、磨石1点 (22)、フレーク12点 (15・17・19・23～32) が出土している。これらのうち1・4～12・15・17・18・20～22が床面から23～32は南壁際床面下約3cmの位置から、2・3・13・14・16・19は埋土から得られたものである。

1は体部下半が欠損した深鉢である。器形は体部に脹りをもち、口縁部がや・外反する。口唇は丸みをもつ。地文は原体LRに綾絡を伴うものである。2は深鉢の口縁部破片である。地文に単節斜縄文を施した後、その上から原体Lを2条平行の山形状に押し出したものである。口唇は平縁である。3は粗製深鉢の口縁部破片である。口唇は平縁であり、地文に単節斜縄文が施されている。4は注口を伴う器高11.3cmの鉢である。これは床面上から一括して出土したものである。器形は底部から外傾し立ち上がり頸部で内湾し、口縁部で外反する。口縁は波状を呈し、口唇は丸みをもつ。注口は最腹部に位置し、これを囲む形に楕円状の隆線を伴う。口の断面は外に開く「ハ」の字状に突き出る。腹部と体部中位には波状の隆線が巡る。この2条の隆線間には隆線と横線に長軸をもつ楕円文が展開されている。楕円文内及び体部下半には単節斜縄文が施され、口縁部、楕円文周辺及び底面には入念なミガキが施されているものである。

5は器高9.3cmの小型深鉢である。器形は体部に脹りをもち、口縁部がや・外傾する。頸部下位には竹管工具で刺突文を施し、これと平行して1条の沈線を巡らせている。沈線下位には単節斜縄文が施されている。6は深鉢の体部破片であり、波状の沈線を巡らせ、沈線上位には入念なミガキが、下位には単節斜縄文が施されている。7は小型深鉢、8は大型深鉢の底部片で、地文に単節斜縄文が、底部周辺には磨消が施されている。9は体部上半が欠損した小型深鉢である。文様は波状沈線を巡らせ、その上位に二重の楕円文が二対対称に施されているものであ



第22図 GI-1b住居址

る。地文は単節斜縄文である。8は粗製深鉢の体部破片であり、地文には単節斜縄文が施されている。これは10と同一個体と思われる。11は器高4.5cmのミニチュア土器、12はミニチュア土器の底部破片であり、いずれもナデ調整が施されている。13は深鉢の口縁部から体部破片である。口唇は波状を呈す。文様は沈線によって三重の栞田文が施されているもので、沈線間には単節斜縄文並びに篋状工具による刺突文を施したものである。14は大型深鉢の口縁部から体部破片で、文様形式が13に類似するものである。口縁は波状を呈す。口縁部直下には2条の波状隆線を巡らし、その線間には篋状工具によって刺突文を施している。体部には隆線によって栞田文を施し、円内には隆線に沿って刺突文を施しているものである。

石器16は平面形が不整形を、18は三角形を呈し、いずれも一辺片面に剝離調整が加えられているものである。21・22はいずれも三角形を呈し、二辺に剝離調整が加えられているものである。22は長軸 6.6cm、短軸 5.2cmの栞田形を呈す偏平なものである。フレイク12点はいずれにも加工痕の認められないものである。(23～32は写真図版57参照)

これら出土遺物のうち、床面から得られた4・5・6・9及び埋土から得られた13・14は縄文時代中期末葉大木10式に比定されるものである。

以上の出土遺物から、この遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものである。

I I - 1 住居址

遺構 (第28・29図、写真図版10)

この遺構は調査区南東側に位置する。遺構内には異方向に巡る2条の周溝と、地床が1基(No 1切)及び2基が重複する複式切(No 2・3切)、4基のピット、柱穴状ピット34個が検出されている。

これらのうち、周溝、切の位置、柱穴配置を相関的に検討した結果、少なくとも3棟分の建てかえがあることが判明した。

これらの住居址をここでI I - 1a住居址、I I - 1b住居址、I I - 1c住居址と呼称し、個々の住居址について記述する。

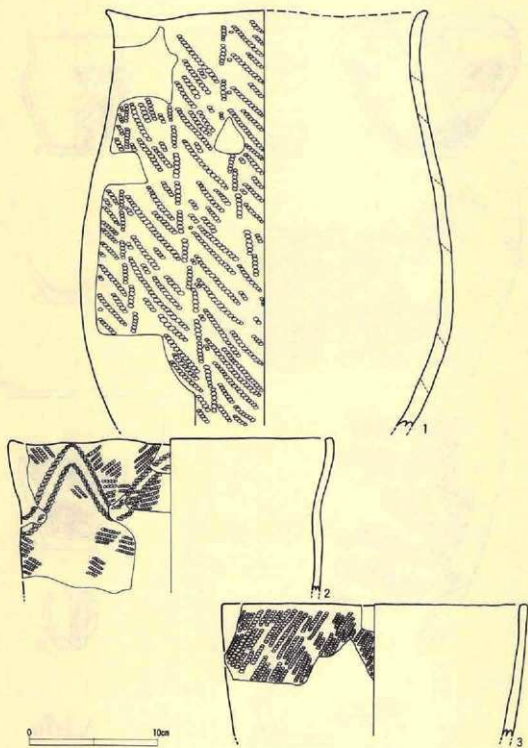
I I - 1a住居址

形状は隅丸方形を呈す。規模は南北に約7.9m、東西に約7.7mである。

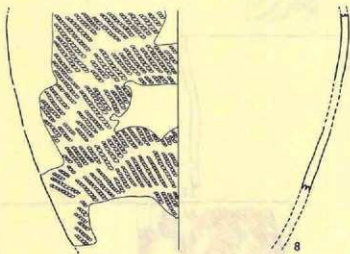
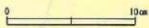
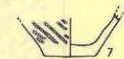
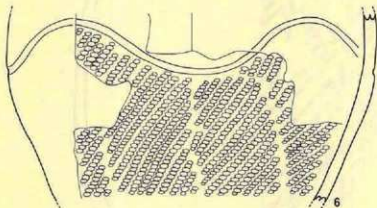
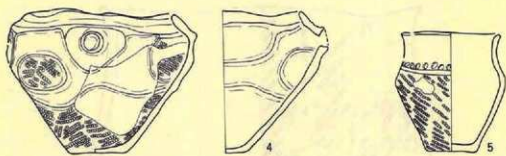
埋土は上位から中位が黒褐色土、褐色土を帯状に包含する黒色土、下位が黒褐色土で構成されるが、北東壁際埋土は、礫を混在し、黒褐色土をブロック状に包含する褐色土が層厚約30cmの帯状に埋土中位まで斜位に伸び、人為的埋土を示していた。

壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は北壁約59cm、東壁約51cm、西壁約30cmを測り南東壁は道路によって切られている。

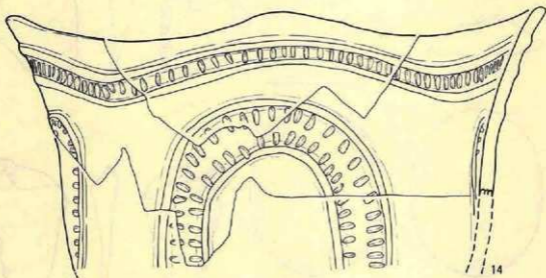
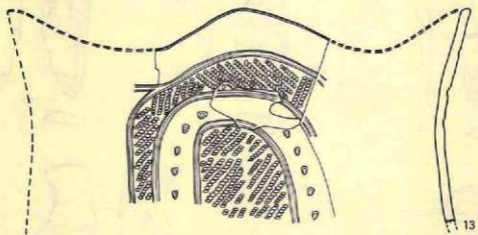
床面は全体に凹凸が認められ、堅くしまっている。特に南東壁寄りから南壁際は非常に堅く



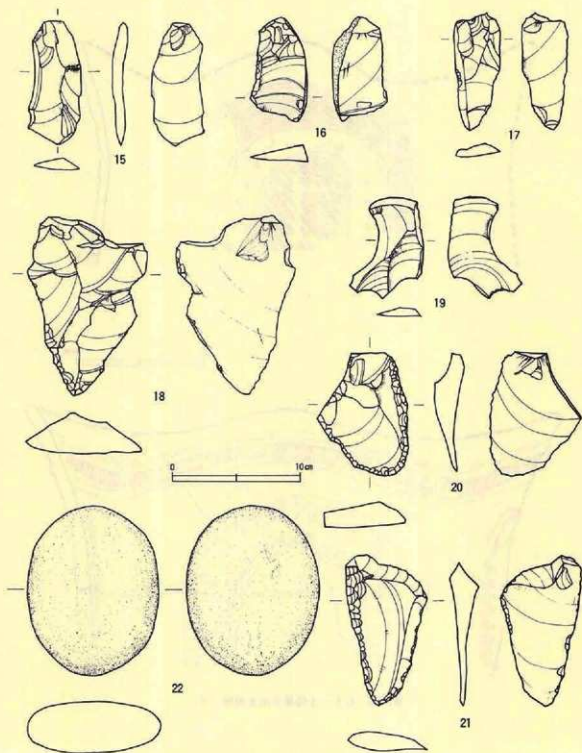
第23图 GI-1住居址出土遺物(1)



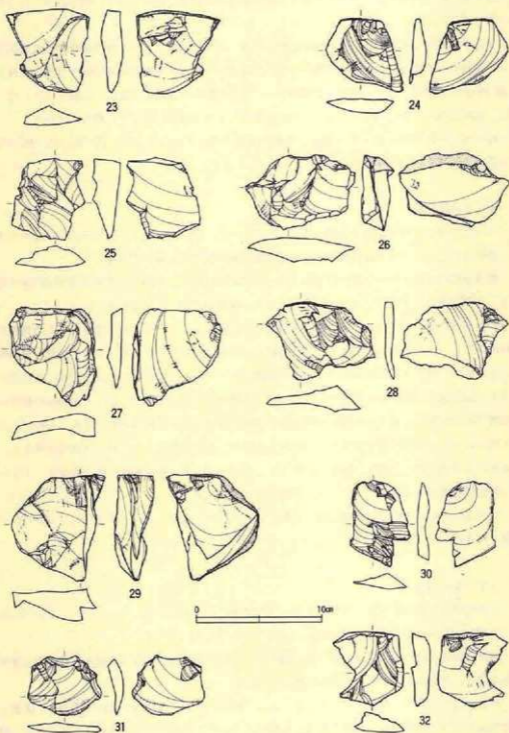
第24图 GI-1住居址出土遺物(2)



第25图 GI-1住居址出土遺物(3)



第26图 GI-1住居址出土遺物(4)



第27圖 G I-1 住居址出土遺物 (5)

凹凸が激しい。内側を巡る周溝から壁までの床面は、東側及び南側を除き、壁に近づくにつれて高くなる。

炉は中央部から南寄りに位置するNo 2 炉を伴う。石囲い部は、I I-1b住居址の前庭部として再利用されている。規模及び状況については不明である。前庭部は幅70cm～120cm、長さ約70cmの不整形を呈す。東側には幅約5cm、長さ約45cmの角礎を埋置し、床面と区画している。部内は堅くしまり凹凸がある。この前庭部はしまりある暗褐色土で閉覆されていた。

柱穴はP₁-P₂-P₃-P₄-P₅-P₆-P₇-P₈の8本で構成され、P₁-P₂、P₂-P₃、P₃-P₄、P₄-P₅がそれぞれ対になる在り方を示す。

I I-1b住居址

この住居址は、外側を巡る周溝を伴い、柱穴P₉-P₁₀-P₁₁-P₁₂-P₁₃-P₁₄-P₁₅-P₁₆の8本で構成され、炉はI I-1aの住居址前庭部の北寄りに位置するNo 3 炉を伴う。

周溝は幅約5cm～15cm、深さ約3cm～18cmで、東側は壁より約70cm、北側は約40cm内側を回り、西側は壁直下からや・内側を断続的に回り、南東側において途切れる。

炉の石囲い部は約3cm～5cmの層厚で黒褐色土に覆われていたが、その中から多くの角礎が検出された。この角礎のうち3個は床面下約6cmの深度に埋置されているもので、部の構成礎と思われる。焼土は径約50cmのほぼ円形の範囲に広がり、その層厚は約4cmである。前庭部はI I-1a住居址石囲い部を再利用したもので、黒褐色土及び暗褐色土によって約20cmの層厚に閉覆されていたが、掘り込み跡から推定するに径約60cmのほぼ円形状の規模をもつものであると思われる。部内には堅くしまった暗褐色土に混在し焼土が帯状及びブロック状に分布する。火熱による赤色変化の層厚は約6cmである。この焼土がI I-1b住居址に伴うものか、I I-1a住居址石囲い部に伴ったものか、不明である。

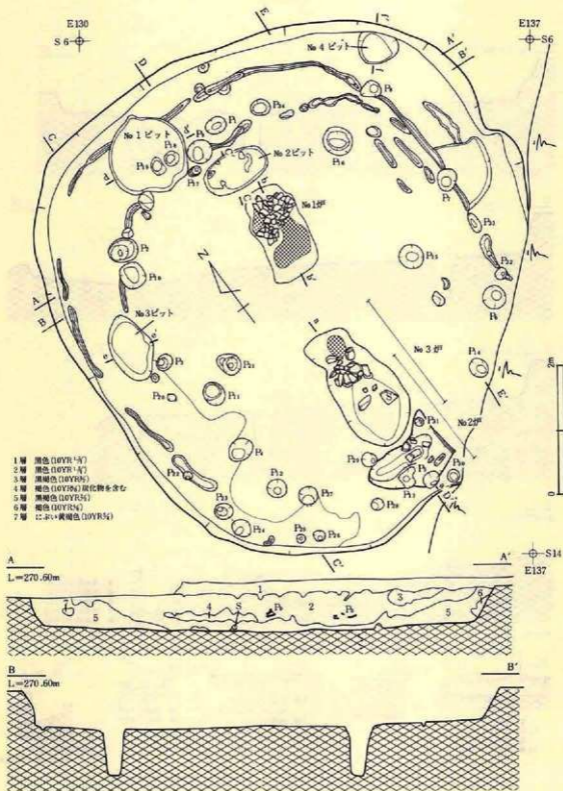
柱穴はI I-1a住居址の配置同様八角形を呈し、P₉-P₁₀、P₁₀-P₁₁、P₁₁-P₁₂、P₁₂-P₁₃が対になる在り方を示す。

I I-1e住居址

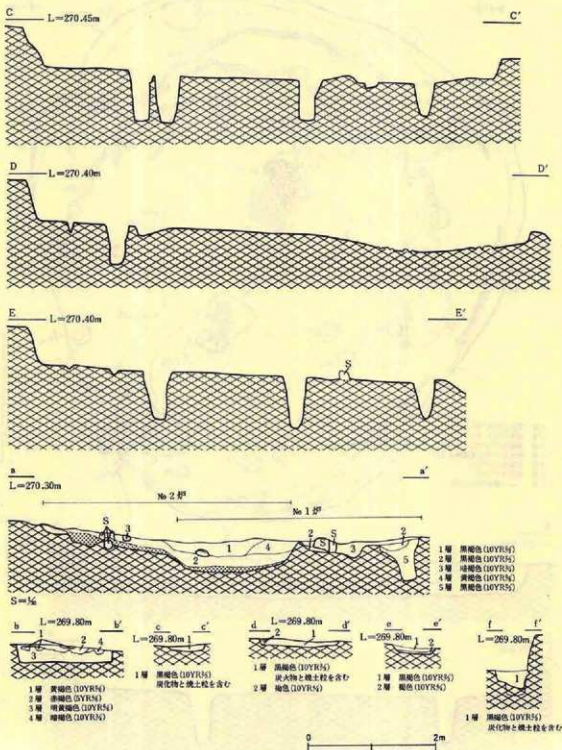
この住居址は内側の周溝を伴い、I I-1b住居址の柱穴を再利用しているもので、P₁₈-P₁₉-P₂₀-P₂₁-P₂₂-P₂₃の6本で構成されるものである。炉はNo 1 炉を伴う。

周溝は幅約5cm～15cm、深さ約5cm～14cmで、北西壁から約1m内側床面から断続的に北床面を回り、北東側でI I-1b住居址周溝と交わる。

炉は床面中央部から北寄りに位置する。焼土は径約70cm×110cmの不整形の範囲に、床面上約2cmの盛り上がりをもって分布する。火熱による赤色変化の層厚は約10cmであり、非常に堅



第28図 II-1住居址(1)



第29図 II-1住居址(2)

くしまっている。焼土からは粗製深鉢土器が一括して得られている。

柱穴はP₁₅-P₁₈、P₁₉-P₂₂、P₂₃-P₂₆がそれぞれ対になる在り方を示す。

柱 穴 No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	
規模cm	径	30	45	30	40	30	35	35	30	40	40	35	30	20	30	40	45	20
	深 さ	51	71	74	63	72	75	65	67	62	70	62	50	14	61	82	74	23

柱 穴 No	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	
規模cm	径	25	25	15	40	15	25	30	15	20	30	20	25	20	15	15	15	30
	深 さ	64	74	16	59	50	43	28	28	45	37	43	36	14	21	20	14	68

次に遺構内から検出された4基のピットについて記述する。

4基のピットの位置と各住居の床面範囲及び各ピットの埋土の堅さなどから判断するに、No2ピットとNo4ピットはI I-1a住居地に、No1ピットはI I-1c住居地に伴うものと思われ、No3ピットはI I-1a住居地かI I-1b住居地のいずれかに伴うものと思われる。

No2ピットは床面中央部からは北側に位置する。形状は円形を呈し、径約120cm、深さ約10cmの規模をもつ。埋土は比較的しまりをもった黒褐色土の単層であり、外側周溝壁沿いには堅くしまった粘性ある褐色土が僅かではあるが包含されている。底面はほぼ平坦である。

No4ピットは北東壁際に位置する。形状はほぼ円形を呈し、径約60cm、深さ約25cmの規模をもつ。埋土は比較的しまりをもつ黒褐色土である。

No1ピットは中央部から北寄りに位置する。形状は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、径約60cm×100cm、深さ約11cmの規模をもつ。埋土は焼土粒、炭化物を包含するやわらかい黒褐色土である。底面はほぼ平坦であり、炭化材が検出されている。

No3ピットは中央部から西側に位置する。形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈し、径約60cm×110cm、深さ約12cmの規模をもつ。埋土は上位が比較的しまりをもつ黒褐色土、下位が褐色土で構成される。底面はほぼ平坦である。

以上、3棟分の住居地及び検出された4基のピットについて記述したが、これら住居地の新旧関係については、① 3基の炉のうち2基の複式炉は閉覆されており、No1炉が最も新しい炉であること。2基の複式炉のうち、構成礫の残存及び各部位の埋土の堅さから、No2炉(I I-1b住居地に伴う)の方が新しいものと思われること。② 2条の周溝の埋土はほぼ同じ堅さで、その表面には貼り床が施されていなかったことなどから、I I-1c住居地が最も新しく、I I-1b住居地、I I-1a住居地の順に古い時期に位置づけられるものと推定される。

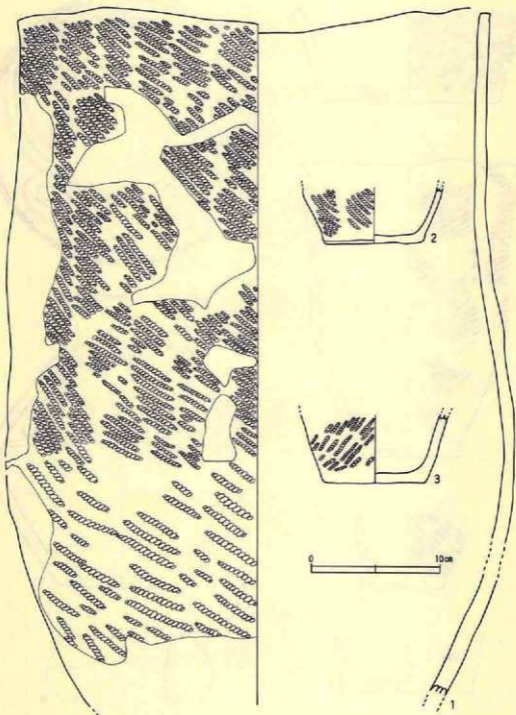
遺物 (第30~40図、写真図版58~65)

出土遺物は土器が76点(1~8、10~77)、石器類は石製装飾品1点(9)、凹石1点(78)、敲石1点(81)、磨石6点(79・80・82~85)、石刀破片1点(86)が出土している。

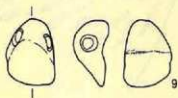
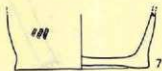
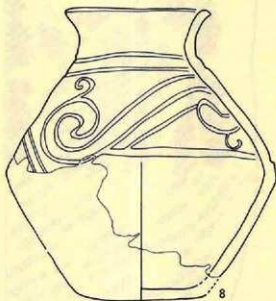
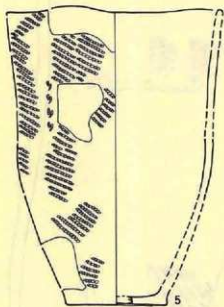
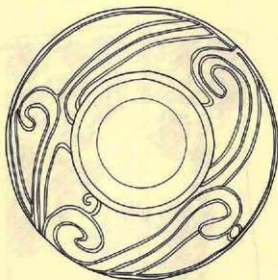
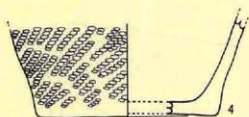
これらの土器の出土位置は、2・4が床面から、1が№1炉直上から、3・5～7・10・32・33・36～40が埋土下位から、8・11～26・28・31・34・41～74が埋土中位から、29・30・35・75～77が埋土上位から得られたものである。

石器類は9・80が床面から、その他は埋土から得られたものである。

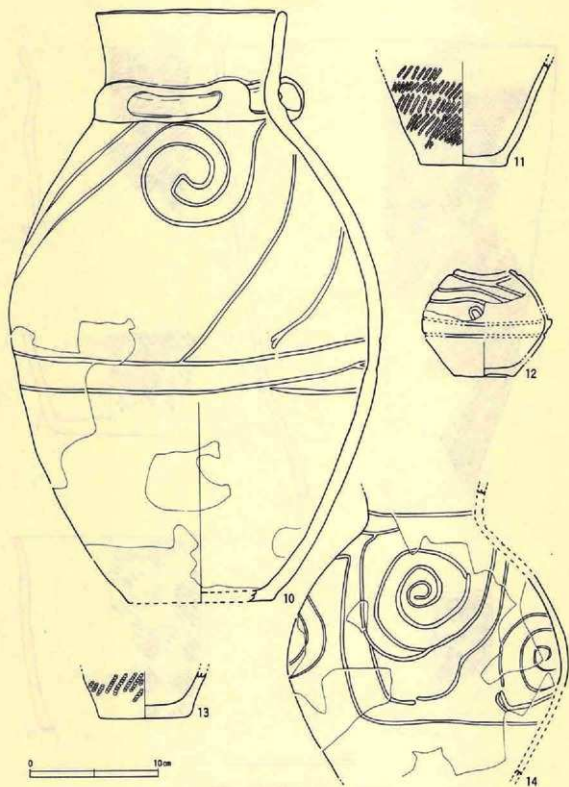
1は底部が欠損した大型深鉢である。口縁はや、液状で口唇は平縁である。器形は体部にや、張りをもち、口縁部は直立する。地文には単節斜縄文が施されている。2は小型深鉢の底部で地文に単節斜縄文が、底部周囲には磨消が施されているものである。3・4・6は深鉢の体部下位から底部で、地文に単節斜縄文が施されている。5は器高22.7cmの粗製深鉢である。口唇は丸みをもち、器形は底部より外傾して立ち上がり、体部がや、張る。口縁部はや、外傾する。地文は原体LRに綾絡を伴うものである。10は底面一部が欠損した器高45.5cmの大型壺である。器形は体部が卵形を呈し、頸部から口縁部にかけて外傾する。頸部には隱帯を伴う把手が4個、ほぼ等間隔に付く。体部中位には2条の平行沈線が巡る。この平行沈線と頸部間には、1条の沈線によって渦巻文が施文され、渦巻文から出た沈線は斜位に流れる。このパターンが器表3面に展開されているものである。器表には入念にミガキが施されている。色調はにぶい橙色を呈し、随所に彩色がみられる。27は壺形土器の底部片であると思われ、ナデ調整が施されている。色調は明赤褐色である。32は体部上半が欠損した壺形土器である。器形は底部から外傾して立ち上がり、体部は「く」の字状に張りをもち、文様は腹部に波状沈線が巡り、その上位には、1条の沈線によって渦巻文が器表2面はほぼ対象に施文されているものである。器表には入念にミガキが施され、底面には網代痕がみられる。色調は明赤褐色であり、随所に彩色がみられる。33は深鉢の底部と思われ、地文に単節斜縄文が施され、底面には網代痕がみられるものである。8は器高22.5cmの壺形土器である。器形は体部が「く」の字状に張り、頸部から口縁部にかけて外反する。頸部直下と腹部にはそれぞれ2条の平行沈線が巡る。この平行沈線間には、3条の平行沈線を基本として、「の」及び「へ」字状に渦巻文を施文している。器表には入念にミガキが施されている。色調は明赤褐色を呈し、随所に彩色がみられる。11は粗製深鉢の体部から底部であり、地文に単節斜縄文が施されているものである。12は器高約8.2cmの壺形土器である。器形は球形状に張らむ。口縁部には1条、腹部には2条の沈線が巡る。口縁部と腹部間には3条の沈線が横位及び斜位に流れ、渦巻文を構成するものである。最腹部には突起をもち、縦位の孔を有す。器表には入念にミガキが施されている。色調は褐色土を呈し、随所に彩色がみられる。14は壺形土器の頸部から体部片である。器形は体部が球形状の張らむをもち、頸部には1条の沈線が巡る。肩部から体部下位には渦巻文を中心とする曲線及び直線の沈線が不規則に展開されている。器表には入念なミガキが施されている。色調は赤褐色を呈す。15・16・19・22・30は深鉢の口縁部から体部片であり、地文に単節斜縄文が施されているものである。



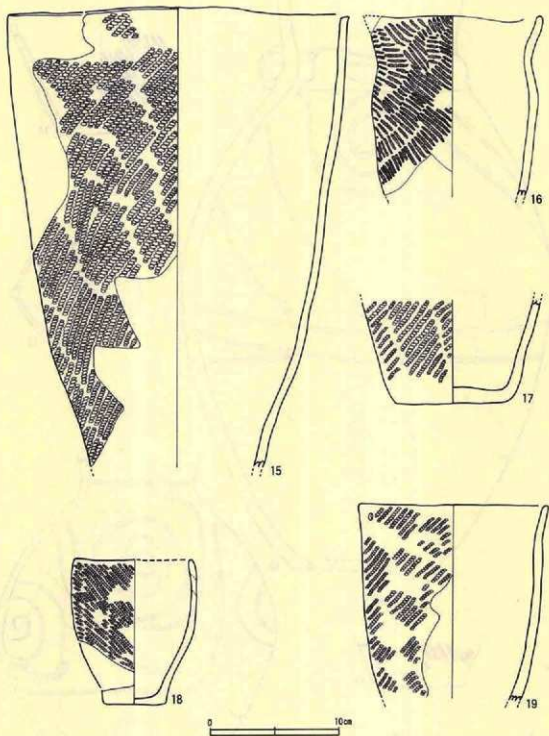
第30図 I I-1 住居址出土遺物 (1)



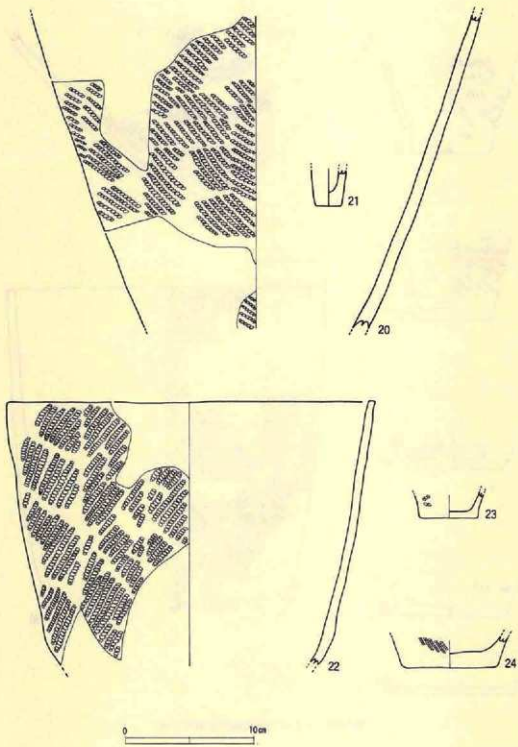
第31圖 I I-1 住居址出土遺物 (2)



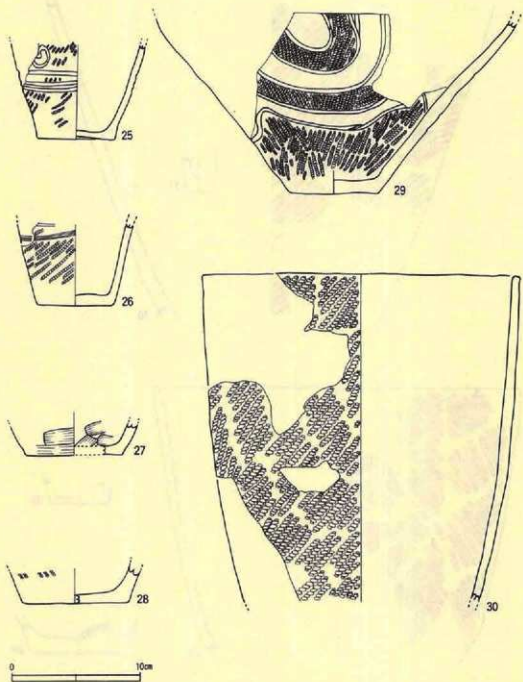
第32圖 I I-1住居址出土遺物(3)



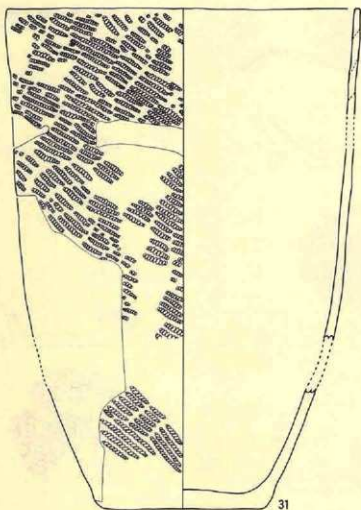
第33圖 I I - 1 住居址出土遺物 (4)



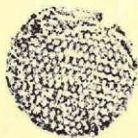
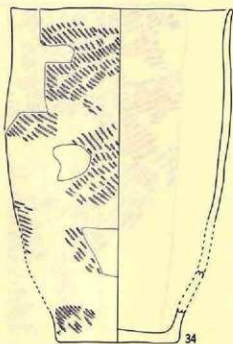
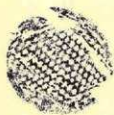
第34图 I I-1住居址出土遺物(5)



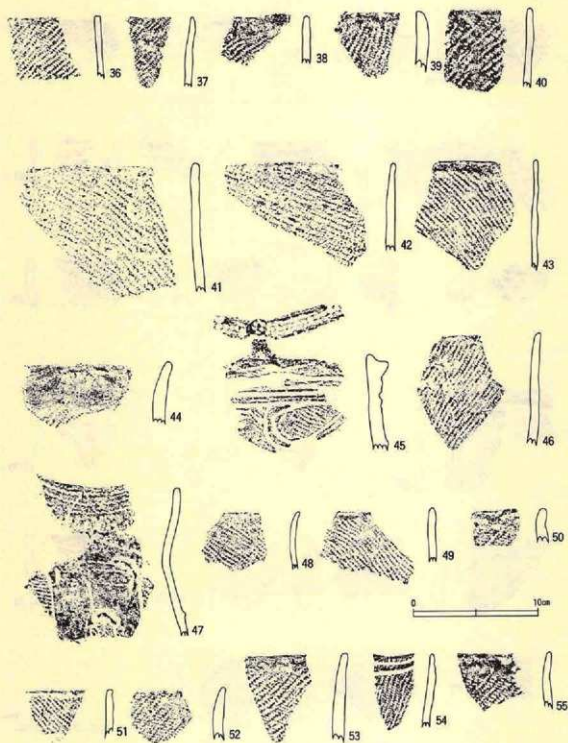
第35图 I I-1 住居址出土遺物(6)



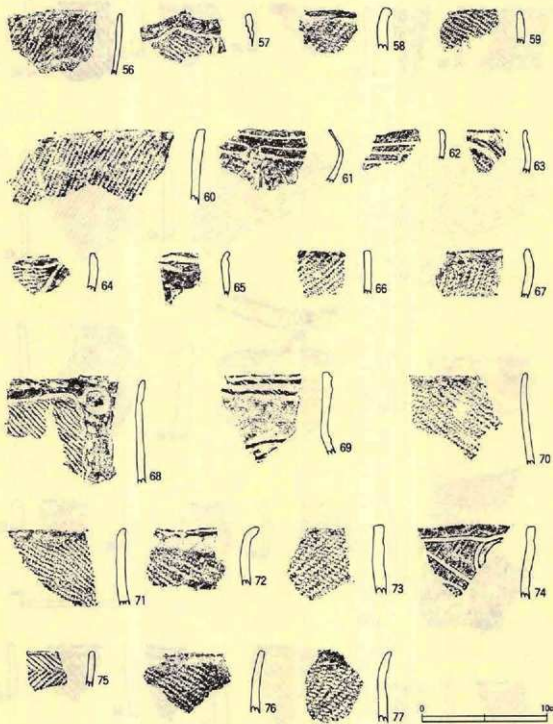
第36图 I I - 1 住居址出土遺物 (7)



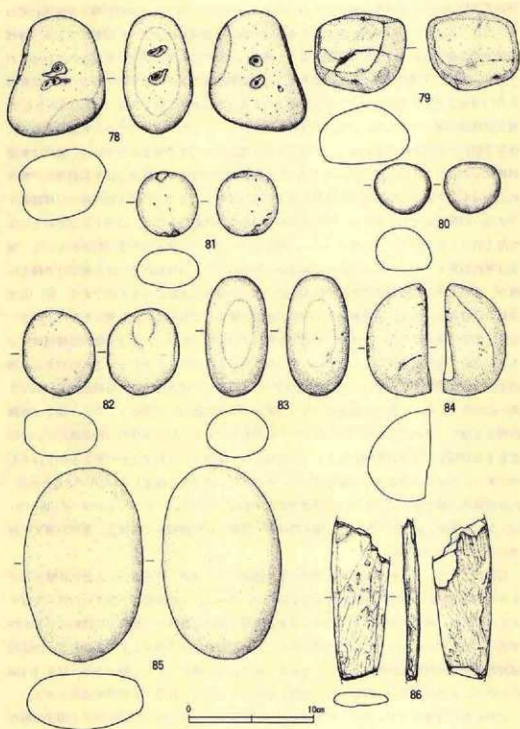
第37圖 I-1住居址出土遺物(8)



第38图 I I - 1住居址出土遺物 (9)



第39圖 I I - 1 住居址出土遺物 (10)



第40图 I I-1住居址出土遺物 (11)

18は器高11.2cmの小型粗製深鉢である。口唇は丸みをもち、地文には単節斜縄文が施されている。21はミニチュア土器片で、無文である。25・26は小型深鉢の体部から底部片である。体部には25が3条、26が2条の平行沈線が巡り、地文にはいずれも単節斜縄文が施されているものであり、器形、文様類似するものである。31は粗製深鉢である。口唇は平縁で、器形は底部から口縁部まで外傾する。地文は単節斜縄文である。34は粗製深鉢である。口唇は丸みをもつ。地文は無節斜縄文で、底面には31と同様網代痕がみられる。29は鉢の体部から底部片である。体部下位には沈線が山形状に巡り、その上位には沈線で楕円文が施文されている。地文は単節斜縄文である。7・13・17・23・24・28・35は深鉢の底部破片で、地文には単節斜縄文が施されているものであり、35の底面には網代痕がみられるものである。45は大型深鉢の口縁部破片である。口縁には突起を有する。口唇は肥厚し「M」字状の断面をなし、口唇上及び突起上には竹管工具により刺突文が施されている。口縁部直下には平行沈線と楕円文が施されている。地文は単節斜縄文である。47は深鉢の口縁部から体部破片で、口縁部直下には3条平行の縄文圧痕が、頸部下半には隆線及び沈線で区画され、縄文圧痕が施されているものである。57・64は深鉢の口縁部で、地文に単節斜縄文を施し、沈線で横位及び斜位に区画を施したものである。61は小型壺の体部片であり、沈線で楕円文を施しているものである。68は深鉢の口縁部破片であり、沈線で楕円文を施し、沈線に沿って棒状工具による刺突文を施しているものである。楕円文内は無節斜縄文が施されている。54・62・65は深鉢の口縁部破片で、口縁部直下に54は2条、62は3条、65は1条の沈線が巡るものである。63は深鉢の口縁部破片であり、地文に単節斜縄文を施し、その上から楕円文を施文しているものである。69は深鉢の口縁部破片で、口縁部直下及び頸部に2条の隆線を巡らし、口縁部直下の隆線上には縄文圧痕が施文されているものである。74は口縁部直下に沈線を巡らし、その下位に渦巻文を施文しているものと思われる。75は深鉢の口縁部破片で、地文に羽状縄文が施文されているものである。36~44・46・48~53・55・56・58~60・66・67・70~73・76・77は鉢・深鉢の口縁部破片で、地文に単節斜縄文が施されているものである。

石器類のうち、9は断面形が三角形状を呈す裝飾品で、横位に孔を有し、入念に研磨されたものである。78は平面形が三角形状を呈す凹石で、両面及び一側縁部に2個ずつの凹みを有するものである。81は平面形がほぼ円形を呈する敲石で側縁部数個所に敲打痕の認められるものである。80・82・83・84・85は平面形が円形から楕円形、79は不整形を呈する磨石で、79は側縁部数個所に敲打痕の認められるものである。86は石刀の破片である。幅4.8cm、厚さ1.1cmのもので、刃部は両面から研磨され、鋭利を作り出している。背部にも研磨が認められる。

これら出土遺物のうち、炉直上から得られた1は器形から縄文時代中期末葉大木10式に相当するものであり、埋土下位から得られた10・27・32及び埋土中位から得られた8・12・14は縄

文時代後期初頭十腰内I式に比定されるものである。また、埋土上位から得られた29は1と同様中期末葉大木10式に比定されるものである。

以上の出土遺物から、この遺構は縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられるものである。

I II-5 住居址

遺構 (第41図、写真図版11)

この遺構は調査区中央部から東側、I I-1住居址の北東寄りに位置する。

遺構の、南東側は道路によって切られ、さらに東側もI II-4平安時代住居址によって切られており、検出されたのは南西側約半分である。遺構内には炉2基と1条の周溝が検出されている。これらの炉、壁及び周溝の位置を相関的に検討した結果、2棟分の建てかえが判明した。これらの住居址をここでI II-5a住居址、I II-5b住居址と呼称し、個々の住居址について記述する。柱穴状ピットは計5個検出されているが、いずれの住居址に伴うものか不明である。

I II-5a住居址

この住居址は検出された壁とNo1炉を伴う住居址である。

形状は円形を呈し、規模は推定するに径5.3m前後であると思われる。

埋土は中央部が暗褐色土を帯状及びブロック状に包含する黒色土、壁際がしまりをもつ黒褐色土で構成される。

壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は西壁で約36cm、北壁で約18cmである。

床面は堅くしまり、凹凸が認められる。

炉は中央部から南東寄りに位置し、石囲い炉の形態を示すが、I II-4住居址南壁によって約1/2を切られ、残存するのは3個の垂角礫が床面下約6cm～20cmの深度に埋置されているのみである。部内には火熱による赤色変化は認められない。この炉は床面より僅かに低いレベルにあり、検出時においては南部浮石を包含する褐色土で覆われていた。

I II-5b住居址

この住居址は壁際を巡る周溝とNo2炉を伴うものである。

形状は円形を呈し、規模は推定するに約5m前後であると思われる。

周溝は幅約6cm、深さ約8cm～10cmの規模をもち、壁際を断続的に巡る。

炉は中央部から北寄りに位置し、石囲い炉の形態を示す。規模は一辺約50cmの方形状を呈し、大小計11個の垂角礫を床面下約10cm～35cmの深度に埋置している。部内は床面下約25cmの深度に掘りこまれている。火熱による赤色変化はみられない。この炉は黒褐色土で覆われていた。

以上2棟分の住居址について記述したが、これら新旧関係については前述した検出状況から№1が№2より古いものである。従って、IⅡ-5a住居址はIⅡ-5b住居址より古いものである。

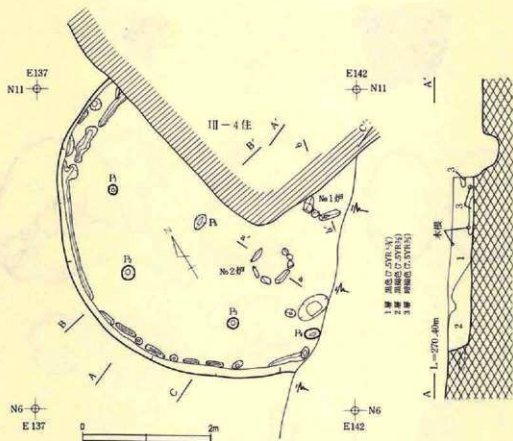
柱穴 №		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
規模cm	径	15	20	20	22	17
	深さ	66	45	59	16	15

遺物 (第42図、写真図版66)

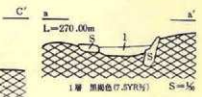
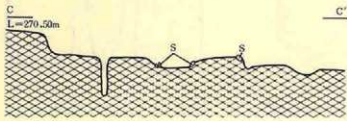
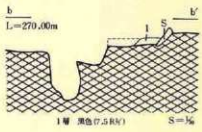
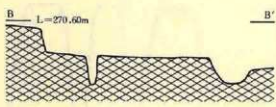
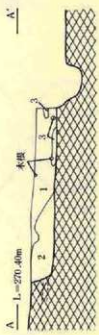
出土遺物は土器片が2点(1・2)、石器類が凹石1点(4)、磨石2点(3・6)、石刀破片1点(5)、磨製石斧1点(7)が出土している。これらのうち、3・4・5は床面から、1・2・6・7は埋土から得られたものである。

1は大型粗製深鉢の口縁部破片である。口唇は平縁で、地文に単節斜縄文が施されているものである。2は小鉢の口縁部破片と思われ、口唇は丸みをもち、地文に単節斜縄文が施されているものである。4は約半分が欠損した楕円形の凹石で、片面に1個の凹みがあることから、両面に1個ないし複数の凹みをもつものであると思われる。3は楕円形を、6は円形を呈す磨石で、6の側縁部には数個の敲打痕が認められるものである。5は青竜刀形を呈するもので、幅7cm、厚さ1.9cmの規模をもち、内反りの刀をもつ。刀は両面から研磨され、刃部を作り出しているものである。7は平面形が長方形を呈する磨製石斧で、頭部、体部、刃部とも、入念に研磨されているものである。

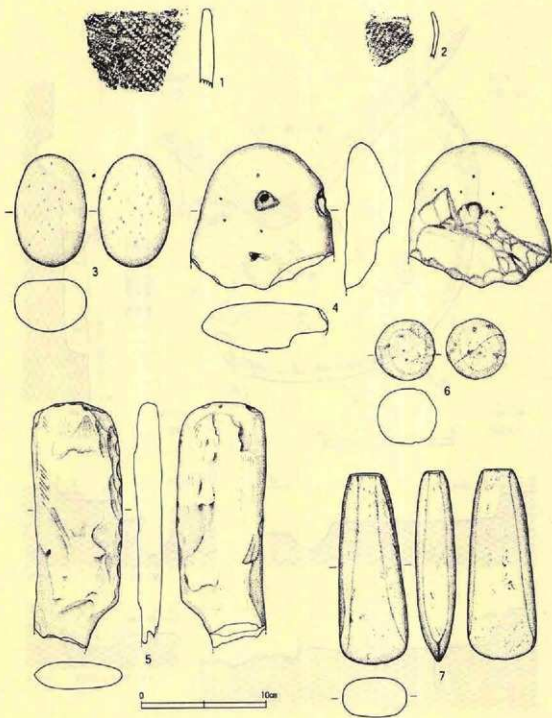
以上の出土遺物からはこの遺構の時期決定に足る資料を欠くが、周囲の遺構の時期及びびがの形態・位置から、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。



- 1層 頂色(7.5YR/5)
- 2層 頂色(7.5YR/5)
- 3層 頂色(7.5YR/5)



第41圖 I II-5住居址



第42图 I II-5 住居出土遺物

J I - 1 住居址

遺構 (第43図、写真図版11)

この遺構は調査区南東側、I I - 1 住居址の東側に位置する。南側は一部調査区外にはいる。形状は円形を呈し、東西に約 4.6m の規模をもつ。

埋土は上位が暗褐色土、中位が焼土を帯状に包含する暗褐色土、下位が褐色土で構成される。埋土のほぼ中央部には近世の掘り込み跡がみられ、中位に検出された焼土もこの掘り込みに伴ったものと思われる。

壁は床面から外傾ぎみに立ち上がる。壁高は北側で約53cm、東側、西側で約46cmである。

床面は比較的やわらかく、ほぼ平坦である。中央部から南東寄りには、開口部径約 100cm、底部径約80cm、深さ約 5 cm のピットが検出されている。

炉は中央部から南寄りに位置し、複式炉の形態を示す。石囲い部は東西に約60cm、南北に約50cmの長方形を呈し、大小計10個の垂角礫を床面下約 5 cm ~ 10 cm の深度に埋置している。部内表面はやわらかい焼土混じりの黒褐色であるが、その下位には堅くしまった焼土が約 8 cm の層厚でレンズ状に形成されている。前底部は幅約 100cm、長さ約80cmの規模をもち、南壁下まで伸びる。部内は床面下約15cmの深度に掘り込まれ、堅くしまっている。この複式炉の他に、床面中央部から北寄りには径約30cmの円形に分布する焼土が検出されている。火熱による赤色変化の層厚は約 5 cm である。

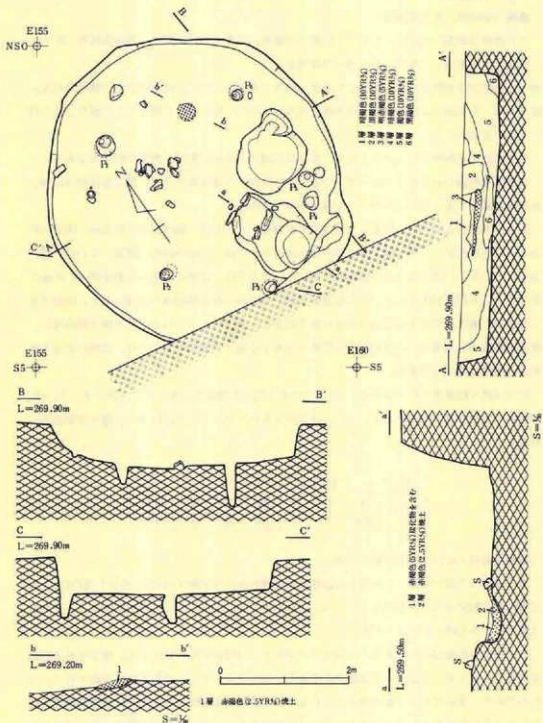
柱穴は計 6 個検出されているが、これらのうち主柱穴を構成するものは $P_1 - P_2 - P_3 - P_4 - P_5$ の 5 本で五角形状の配置を示す。これら柱穴のうち $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ の 4 本には掘り方が認められる。

柱穴 No	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	
規模 cm	径	30	20	20	25	18	25
	深さ	70	47	39	41	69	39

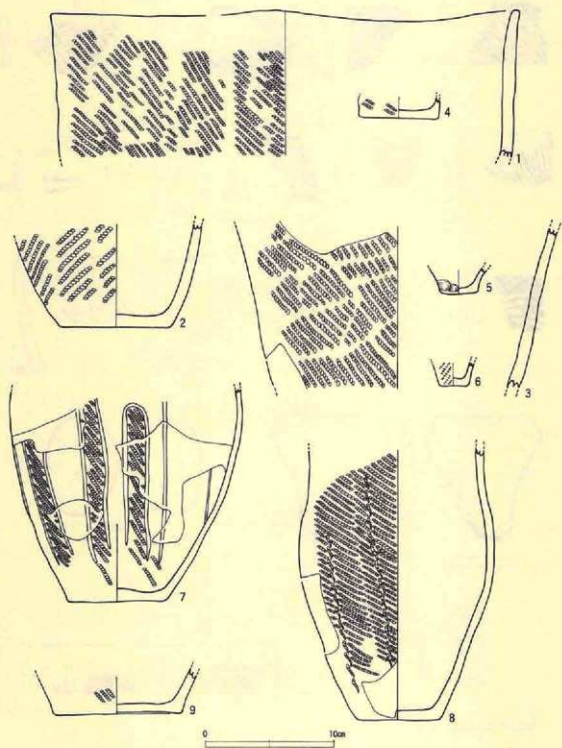
遺物 (第44・45図、写真図版67・68)

出土遺物は土器が20点 (1~20)、石器類は剝離痕のある板状礫 1 点(21)、磨石 1 点(22)、加工痕のある剝片 1 点(23)が出土している。これらのうち、1・2・3・21が床面から、その他は埋土中位から得られたものである。

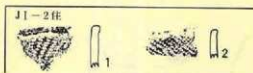
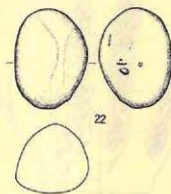
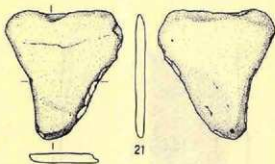
1 は深鉢の口縁部破片である。口径はほぼ平縁で、口縁部がや・外反する。地文は単節斜縄文である。2・4・9 は深鉢の底部破片であり、地文にはいずれも単節斜縄文が施されているものである。9 の底面には網代痕がみられる。3 は深鉢の体部破片で、地文に単節斜縄文が施されているものである。5・6 はミニチュア土器片であり、5 にはナデ調整が、6 には地文に



第43图 JI-1住居址



第44圖 J I - 1 住居址出土遺物



第45图 J I - 1 · J I - 2 住居址出土遺物

単節斜縄文が施されているものである。7は体部上位から口縁部が欠損した深鉢である。地文には単節斜縄文を施し、その上から沈線で「∩」字文をえがき、「∩」字文外には磨消を施しているものである。8は口縁部から体部上半が欠損した深鉢である。体部は脹りをもち、口縁部はや、外反するものと思われる。地文は原体LRに綾結を伴うものである。

10-20はいずれも深鉢の口縁部破片である。10・11・13・14・15・16は地文に単節斜縄文が施されているものである。12の口縁部は外傾し、口縁部下には隆沈線を巡らせ、その下位に単節斜縄文を施しているものである。17は沈線で楕円文が施文されているものと思われる。18は口縁部下に隆線を巡らせ、隆線上に縄文圧痕を施しているものである。19は波状口縁をなすものと思われ口縁部下に沈線で二重の楕円文を施し、沈線間にはこれに沿って棒状工具により刺突文を施しているものである。20の口縁は丸みをもち、地文に複節斜縄文を施し、口縁部直下を磨消しているものである。

石器21は平面形が三角形を呈す厚さ8mmの板状礫で、三辺に荒い剝離痕が認められるものである。22は楕円形を呈する磨石で、敲打痕は認められない。23は三角形を呈するもので、二辺に剝離痕の認められるものである。

これら出土遺物のうち、埋土中位から得られた62は、縄文時代中期末葉大木9式に比定されるものである。

以上の出土遺物のうち床面から得られた遺物からは、この遺構の時期決定に足りる資料は得られなかったが、炉の形態・位置から、この遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。

J I - 2 住居址

遺構 (第46図、写真図版12)

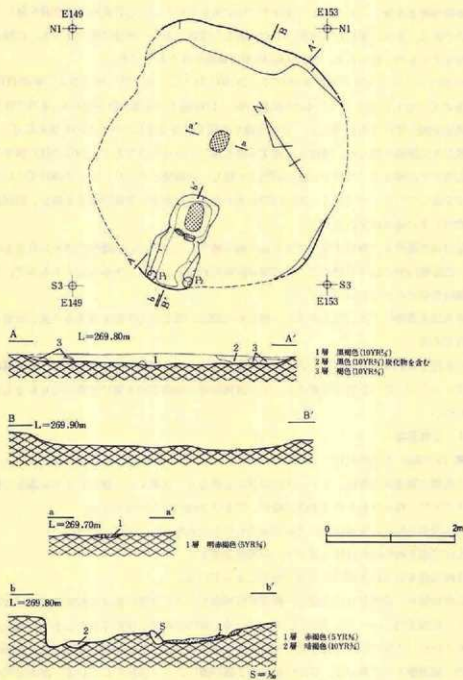
この遺構は調査区南東側、J I - 1住居址の北西寄りに位置する。耕作により床面まで攪乱を受けており、検出されたのは床面の輪郭、炉及び2個の柱穴のみである。

形状は円形を呈し、規模は径約4m前後のものと思われる。

埋土は床面上約15cmの層厚に過ぎず、黒褐色土である。

床面は検出面を見る限り凹凸があり、堅くしまっている。

炉は中央部から南西寄りに位置し、複式炉の形態を示す。石囲い部は径約60cmのほぼ方形形状を呈し、床面下約5cm～7cmに掘り込まれている。部内中央部には堅く焼きしまった焼土が検出されている。火熱による赤色変化の層厚は約4cmである。前庭部は幅約75cm、長さ約80cmの規模で、南西壁下まで伸びる。石囲い部とは2個の礫によって区切られている。部内は凹凸があり、堅くしまっている。この複式炉の他に床面中央部には径約25cmの円形に分布する焼土が検出されている。



第46图 J I - 2住居址

この焼土の火熱による赤色変化は層厚約3cmである。

柱穴は南西壁下、伊前庭部を挟む形でP₁（径約15cm、深さ約12cm）、P₂（径約15cm、深さ約14cm）の2個検出されている。

遺物（第45図、写真図版68）

出土遺物は埋土から粗製深鉢口縁部破片2片（1・2）が出土しているのみである。

1は口縁部が肥厚するもので、2と同様口唇は平縁、地文に単斜斜縄文が施されているものである。

これら出土遺物からは時期決定に足りる資料は得られないが、伊の形態・位置から推定してこの遺構は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと思われる。

2. 平安時代竪穴住居址

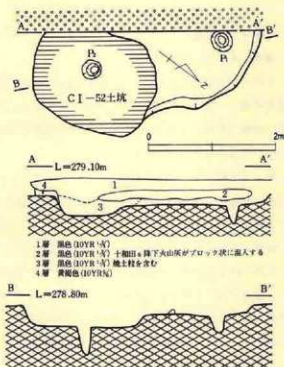
C I-1 住居址

遺構（第47図、写真図版13）

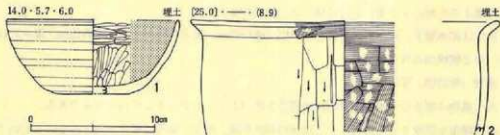
この遺構は調査区西部の緩斜面上に位置している。遺構の大部分は調査区域外に存在し、南東側はC I-52土坑と重複しているために、詳細な規模・形態は不明である。検出された南西・北東辺は1.2mを呈する。土坑との新旧関係は、土坑が住居址を切っていることから（新）土坑（旧）住居址となる。

埋土は黒色シルト質土主体の4層で構成され、ブロック状の十和田a降下火山灰は2層に多く混入が認められる。壁の高さは約30cmで、床上からやや急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平里である。

小穴はP₁（径28cm×35cm、深さ28cm）、P₂（径27cm×29cm、深さ44cm）の2個検出され、位置的にこの遺構に伴う柱



第47図 C I-1 住居址



第48図 C I-1 住居址出土遺物

穴と思われる。

カマドと周溝は調査区域内においては確認されない。

遺物 (48図、写真図版69)

埋土から土師器の坏と甕が出土している

坏はロクロ使用で、内面寛ミガキ調整後黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切り無調整である。ロクロ不使用の甕は現存1/3程の口縁部～体部破片で、口縁部は外反し、外面は寛ケズリ調整、内面は寛ナデ調整を施している。

C II-1 住居址

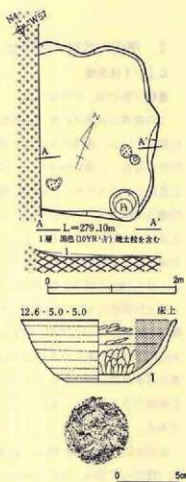
遺構 (第49図、写真図版13)

遺構は調査区西部のC II-3住居址北側に接して位置する。遺構西側の一部は、調査区域外に存在するために、詳細な規模・形態は不明であるが、検出された南北辺から、一辺2.5m前後の隅丸方形を呈すと推定される。

埋土は黒色シルト質土の単層である。壁は削平され残存、5cm～15cmで、床上から緩やかに立ち上がる。床面は平坦で、や・堅くしまっている。

南壁と東壁寄りの床上3cmには、径15～20cmの楕円形ないし不整形を呈す焼土と南東コーナーには小穴P₁(径46cm×48cm、深さ35cm)があり、出土状況と位置的に、いずれもこの遺構に伴うものではない。

柱穴・カマド・周溝は検出されないが、調査区域外に存在の可能性もあろう。



第49図C II-1 住居址・出土遺物

遺物 (第49図、写真図版69)

ロクロ使用の土師器の坏が東壁寄りの床上から1個出土している。口縁部は体部から外傾気味に立ち上がり、内面は荒ミガキ調整後黒色処理を施している。底部は回転糸切り後に、細かい荒ケズリを全面に行っている。

CⅡ-4住居址

遺構 (第50図、写真図版14)

この住居址は調査区西部の緩斜面上に位置し、CⅡ-1・3住居址と隣接している。遺構の西壁側はCⅡ-152溝と重複しており、新旧の関係は溝が住居址を切っていることから、溝の方が新しい。規模は6.4m×6.8mの南北辺が長い隅丸長方形を呈する。

埋土はシルト質の黒色土と黒褐色の2層で構成され、全体に焼土粒を含有し、やや堅くしまっている。壁の大部は削平を受け、残存の良好な西壁で30cm、削平が著しい東壁で2~5cmを測る。床面は擾乱され多少の凹凸があるもののほぼ平坦である。

カマドはすでに削平されており、袖部、煙道部、煙出し部等の構造は不明である。北壁中央部寄りと東壁中央部南寄りの2箇所には燃焼部下端と思われる焼土が残存している。北壁側の焼土は径55cm×85cm、厚さ3cm前後の瓢箪形、東壁側の焼土は径55cm×60cm、厚さ2~4cmの隅丸方形である。焼土の位置から北壁と東壁にカマドが設置されていたと推定される。

小穴は大小56個余り検出されたが、遺構に伴う柱穴は埋土状況と位置的にP₁~P₄の4個と考

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	35×55	43×53	25×25	58×63
深さcm	46	58	35	47

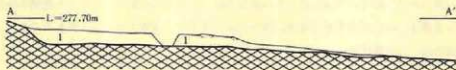
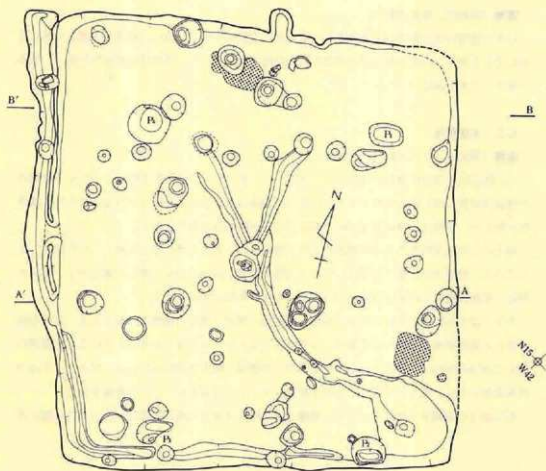
えられる。他の小穴は中世および近世における擾乱の小穴である。周溝は南西コーナー寄りから南壁の一部にかけ、幅12~20cm、深さ7cm前後で巡っている。南東コーナーより遺構中央部にのびている溝は、検出状況等から遺構に伴うものではなく、廃棄されたのちのものである。

遺物 (第51図、写真図版69)

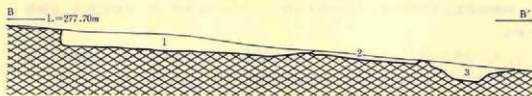
床上からは土師器と須恵器の破片を、埋土からは鉄器が2点出土している。

坏はいずれもロクロ使用で、1~4は土師器である。1~4の口縁部は、やや直線的に外傾し、内面は非黒色処理である。4の底部は欠損し、1~3の底部切り離しは回転糸切り無調整である。

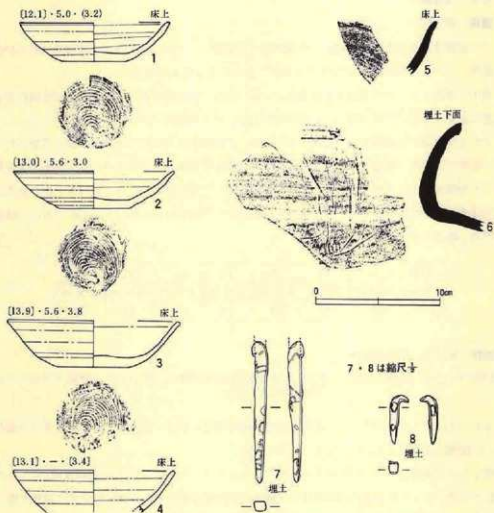
5と6は須恵器である。5の器種は不明で口縁部外面に灰釉が認められる。6は現存1/8位の須恵器の破片で口縁部は外反する。内面はナデ調整、外面には叩き目を施している。



- 1層 黒色(10YR⁵/3) 焼土粒を含む
- 2層 黒褐色(10YR⁶/3) 焼土粒を含む
- 3層 黒色(10YR⁵/3) 焼土粒を含む



第50図 C II-4住居址



第51図 CⅡ-4住居址出土遺物

鉄器7と8は角釘である。7の一部は欠損し、現存7.4cm、厚さ0.5cm角である。8は長さ2.6cm、厚さ0.45cm角で頭部は折れ曲がっている。

C II-5 住居址

遺構 (第52図)

この遺構は調査区西端部の沢沿いの緩斜面上に位置し、西壁側はB II-2住居址(縄文時代)と重複している。規模は3.2m×3.45mのやや歪みのある隅丸方形を呈する。

埋土は黒色シルト質の黒色土と褐色土の2層である。壁は削平され、平均6cm前後残存する。床面は北側に多少の凹凸が見られるものの平坦で、堅さは曖昧である。

カマドは南壁の中央西寄りに設置されている。公団の道路中心杭により大部分は破壊されているために、規模・形態等は不明である。床上に散在する褐色シルトの中には長さ20cm大の角礫と土師器が含まれており、これらは袖部の補強材として使用したものであろうと思われる。

穴は大小7個検出されたが、埋土状況と位置的にいずれも遺構に伴わないものである。柱穴と周溝は検出されない。

PNo	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	60×74	72×72	34×44	32×34	40×43	54×56	42×44
深さ cm	20	18	32	29	15	12	25

遺物 (第53図、写真図版70)

公団の中心杭で破壊されたカマドから主に土師器の坏と甕が、埋土からは鉄器が出土している。

坏1~4はロクロ使用で、いずれも底部切り離しは回転糸切り無調整である。4はバタ高台で、口縁部は体部中位から直立気味に立ち上がる。

甕はロクロ使用した5とロクロ不使用の6~8がある。5は現存1/5位の口縁部破片で、ロクロ痕が明瞭である。6と7の口縁部はや、直立し、内面は寛ナデ、外面は寛ケズリ調整を施している。8の口縁部は外反し、外面は指ナデと寛ケズリ調整が行われている。

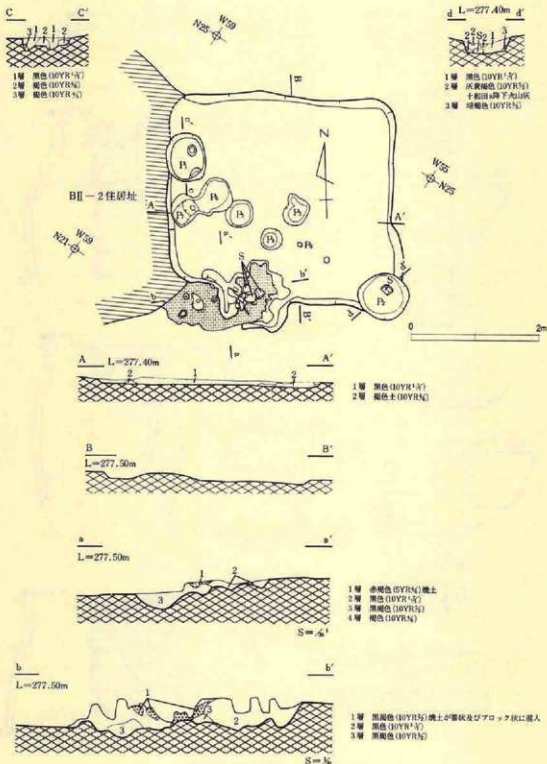
鉄器9は刀子で、両端部が欠損している。現存長9.8cm、最大刃厚0.4cm、楔状の断面形である。

D I-1 住居址

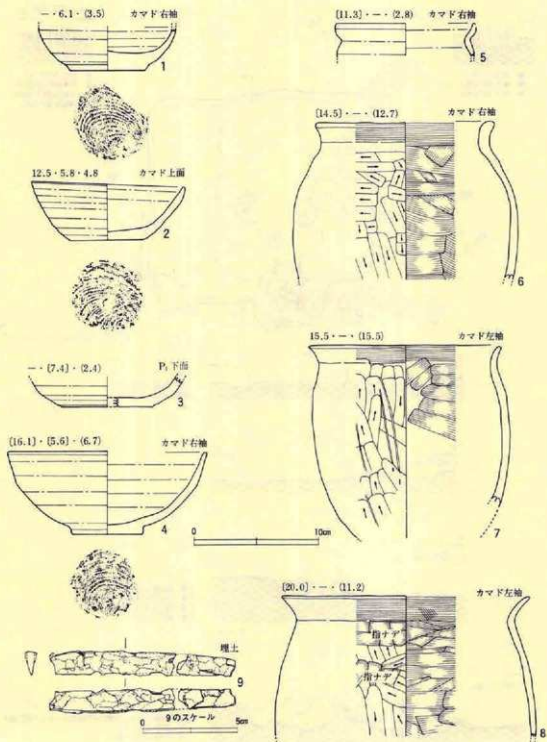
遺構 (第54図、写真図版14)

この遺構は調査区西部のD I区の緩斜面上に位置し、東壁側は縄文時代の住居址D I-2・3住居址と重複している。規模は5.25m×5.30mの隅丸方形を呈する。

埋土は黒褐色シルト質土主体の6層で構成されている。1層~4層にはブロック状ないし帯状で十和田A降下火山灰の混入が認められる。全体的にしまりはなく軟らかい。壁の高さは東壁21cm、西壁48cm、南壁50cm、北壁47cmを測り、床上からやや急な傾斜で立ち上がる。床面は



第52図 C II-5住居址



第53図 C II-5住居址出土遺物

は、平坦で、厚さ10cm～20cm前後の貼り床が施されている。また床上には焼土・炭・炭状の炭化物が散在する事から焼失家屋と思われる。遺構中央部東側には炭・焼土と同一面で直角礫・角礫（長さ10cm～40cm、幅10cm～25cm大）が散乱している。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、大部分はすでに崩壊・流出している。残存する袖部はシルトで構築されており、表面は焼失時における火熱のため全面赤色変化を生じている。燃焼部は径45cm×50cm、厚さ6cm前後の不整形円形状焼土が形成されている。くりぬき式の煙道は燃焼部からやや急な下り勾配で煙出し部へと続いている。煙道の全長は約1.8m、横断面は径20cmの不整形円形状を呈する。煙出し部は径30cm×35cmの楕円形状土坑が掘られている。

小穴は7個検出され、柱穴は位置的にP₁・P₂・P₃・P₄の4個で、P₁・P₄は南壁際に位置して

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径cm	28×34	50×61	22×27	26×30	25×30	30×35	29×35
深さcm	30	28	62	76	64	53	35

いる。P₂はカマドの東袖部に接し、形状、埋土状況等から貯蔵穴のものかと思われる。周溝はカマドと北東コーナーの一部を除いて幅10cm、深さ9～12cmで巡っている。

遺物（第55～57図、写真図版71・72）

埋土と床上から土師器、須恵器、陶器が出土している。

坏1～4はいずれもロクロ使用の土師器である。内面は篋ケズリ調整後黒色処理を施し、3を除く底部切り離しは回転糸切り無調整である。4はベタ高台で、口縁部は外反する。

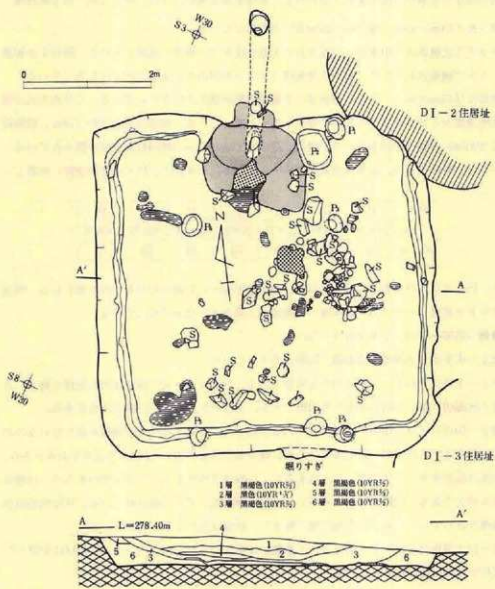
甕5～10はロクロ不使用の土師器で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施しているのが大部分である。5は体部～底部破片で、底に砂が多く付着が認められる。6は多少歪みがあり、口縁部は直立する。7は胴部に最大径を有し、口縁部は外反する。8は大型のもので、口縁部の歪みが大きく、口縁部は強く外反し、底部は全面篋ケズリが施されている。9は内外面黒色処理がされている。10の口縁部は強く外反し、底部は篋ケズリを施している。

11～13は須恵器の破片で、内面はナデ調整、外面は叩き目を施している。陶器14は小甕（？）の破片で、内面は緑釉されている。

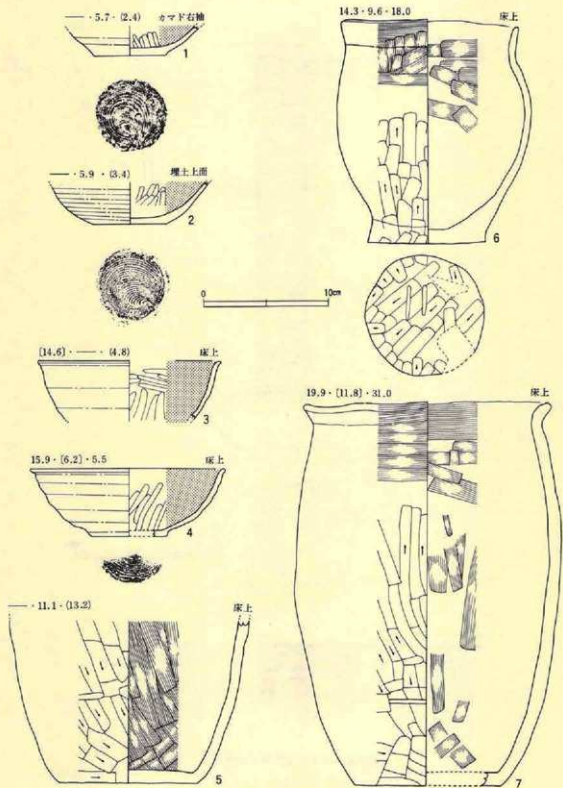
D II - 2 住居址

遺構（第58図、写真図版15）

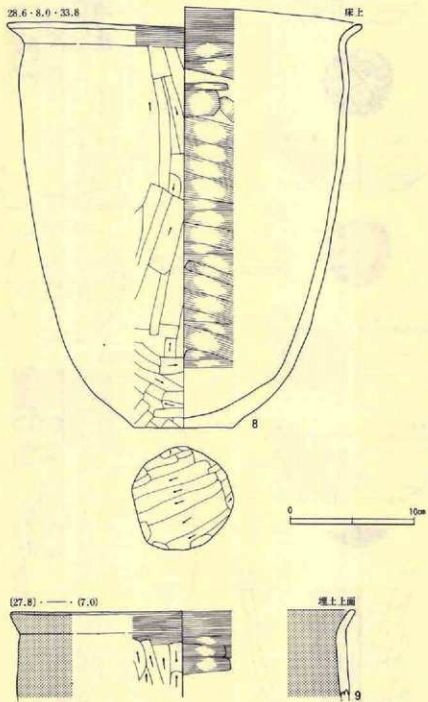
この住居址は遺構がやや密集している調査区西部の緩斜面上に位置している。規模は4.56m×4.66mの隅丸方形である。各コーナーは崩れてやや隅丸方形を呈しているが、本来は基本的に角形であったと推定される。



第54図 DI-1 住居址

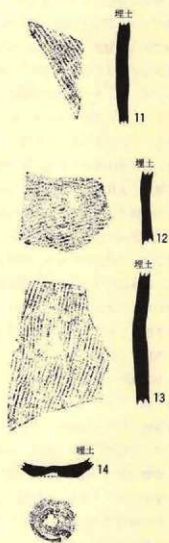
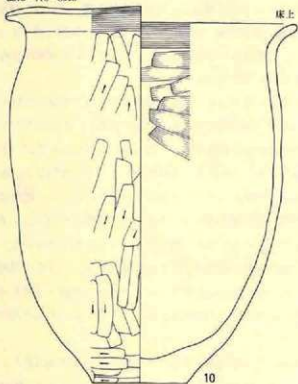


第55図 D I - 1 住居址出土遺物 (1)



第56圖 DI-1住居址出土遺物(2)

23.6・7.6・30.3



第57图 DI-1住居址出土遺物(3)

埋土は黒色シルト質土主体の7層に大別され、粒形0.5cm大の浮石が全体に混入する。2層はブロック状の十和田a降下火山灰でレンズ状に堆積し、住居址全体を覆っている。層厚は5cmである。壁高は東壁14cm、西壁35cm、南壁34cm、北壁25cmを測り、壁の傾斜は急である。床面はほぼ平坦で全体的に堅くしまり、東壁側から南壁際にかけての一部に炭の薄層が認められる。貼り床はカマド燃焼部周辺と北壁側の一部に施されている。

カマドは東壁北側コーナー寄りに設置されている。袖部は角礫を左右に2個ずつ芯材として据え、その上をシルトで被覆しているが、角礫はいずれも八字状に傾斜し、上面のシルトは流出し、残存は僅かである。燃焼部の天井は本来角礫で口字に組んでいたと思われるが、すでに崩壊し、天井部の角礫は焚き口部前方におしつぶされ、土器の破片とともに散乱している。これらの様相は故意にカマド本体の破壊が行なわれたことを示しているといえよう。燃焼部下面には径25cm×45cm、層厚5cmの不整楕円形の焼土があり、その上には支脚に使用した土師器の甕が伏せて置かれてある。煙道はくりぬいてつくられ、燃焼部から下り勾配で煙出し部へと続く。長さは約1.5mあり、燃焼部付近の側壁は火熱を受け、赤色変化を生じている。煙出し部はおむすび状の不整土坑が掘りこまれ、深さは75cmを測る。カマド右袖部南側には焚き口より掻き出したと思われる木炭、焼土粒、炭等の混土が径46cm×56cm、厚さ2cm～4cmの楕円形状に堆積している。

小穴はP₁(径45cm×48cm、深さ20cm)、P₂(径18cm×19cm、深さ9cm)の2個検出され、いずれも埋土にブロック状の十和田a降下火山灰を含む事から遺構に伴う小穴であろう。P₁は形状、位置的に柱穴の可能性がある。周溝はカマド部分を除き幅10cm～20cm、深さ5cm～15cmで全周する。北壁側の残りが良好で東壁側は作物等による擾乱を受けている。

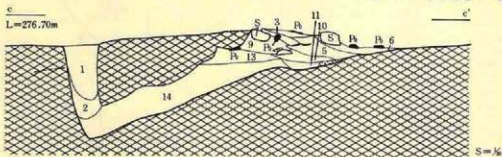
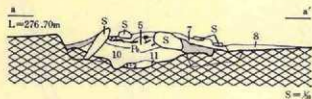
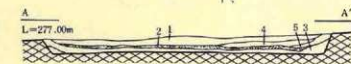
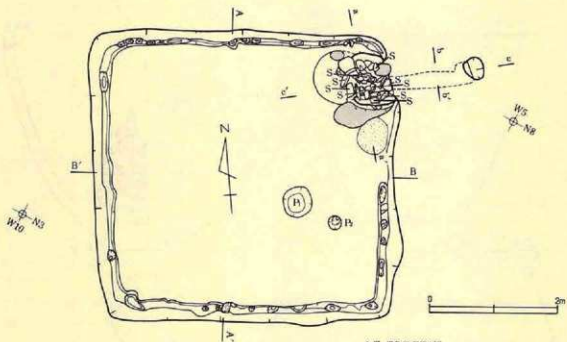
遺物(第59・60図、写真図版73)

床上とカマドから、土師器と小型の鉄器が出土している。土師器の器種は坏と甕である。

坏は細破片のために図化することができないが、すべてロクロ使用である。内面は黒色処理と非黒色処理とがある。

甕はロクロ使用とロクロ不使用がある。2と3はロクロ使用で、口縁部は外反し、胴部に最大径を有す。外面は2が寛ケズリ、3が寛ナデ調整を一部に施している。1・4～6はロクロ不使用である。1はカマド内支脚で、口縁部は強く外反する。内面は寛ナデ、外面と底部は寛ケズリ調整を施している。4と5は体部～底部破片で、内面は寛ナデ、外面はや、荒い寛ケズリ、底部は全面寛ケズリ調整が行われている。6の口縁部は外反し、外面に寛ケズリ調整を施している。

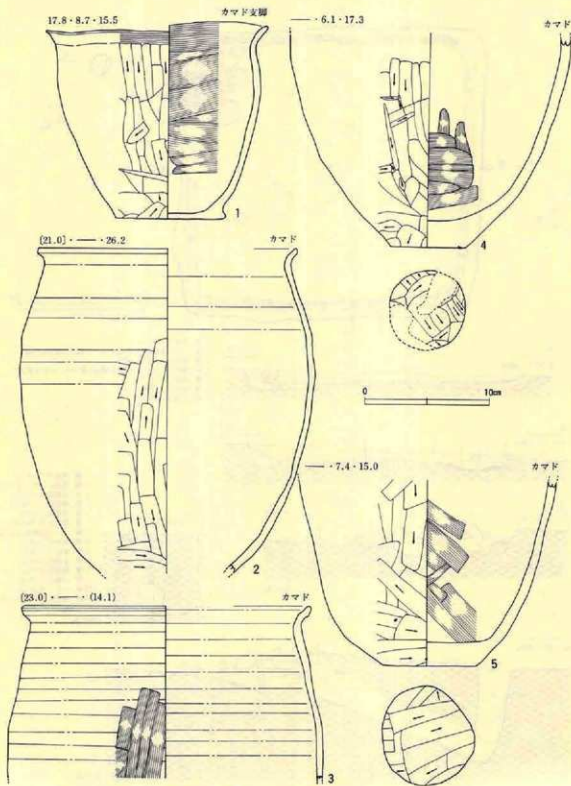
鉄器7は現存長2.4cm、幅0.6cmで、断面形は楔状を呈する。器種は細かい破片のため不明である。



- 1層 黒色(7.SYR+K)
- 2層 白・赤・黄褐色(10YR5/1-6) 土間・障下・土間
- 3層 黒色(7.SYR+K-1)
- 4層 黒色(7.SYR+K-1) 土間・障下・土間・土間・土間・土間
- 5層 黒色(7.SYR+K)
- 6層 黒色(7.SYR+K)
- 7層 黒色(7.SYR+K)

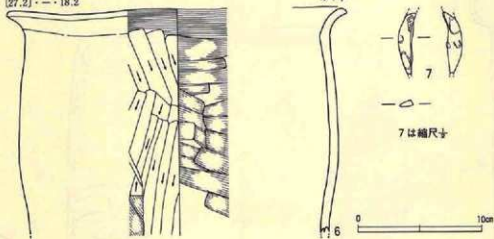
- 1層 黒色(7.SYR+K)
- 2層 黒色(7.SYR+K-1)
- 3層 黄褐色(7.SYR5)
- 4層 黄褐色(7.SYR5)
- 5層 赤褐色(SYR5)
- 6層 黄褐色(7.SYR5)
- 7層 白・赤・黄褐色(SYR5)
- 8層 黒色(7.SYR5)
- 9層 黒色(7.SYR5)
- 10層 赤褐色(SYR5)
- 11層 黄褐色(SYR+K)
- 12層 黄褐色(SYR5)
- 13層 黒色(7.SYR5)
- 14層 黄褐色(7.SYR+K)

第58図 DII-2住居址



第59図 D II-2住居址出土遺物 (1)

[27.2]・一・18.2



第60図 D II-2住居址出土遺物(2)

D II-3住居址

遺構(第61図、写真図版16)

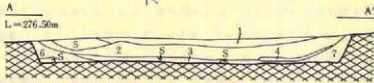
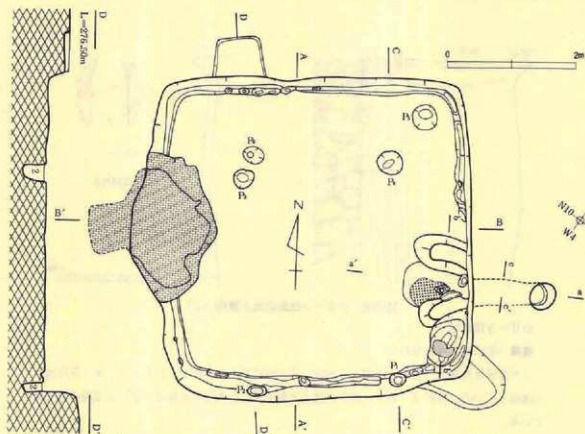
この住居址は調査区西部の西側より東側へ下る緩斜面上に位置し、D II-2・4・5住居址と隣接している。規模は一辺5m前後の隅丸方形を呈し、西壁中央部は木根による擾乱を受けている。

埋土はシルト質の黒～黒褐色土の7層に大別され、2層には十和田a降下火山灰がブロックに混入している。壁の高さは平均40cmで、床上から急な傾斜で立ち上がる。床面は全面貼り床が施され、ほぼ平坦である。堅い踏みしめ箇所はカマド周辺部に認められる。

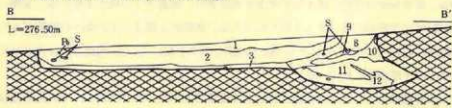
カマドは東壁中央から南側寄りに設置され、すでに大部分は崩壊し、袖部下端と燃焼部のみが残存する。袖部はシルトで構築され、中に補強材として甕の破片を用いている。またシルトには火熱により赤色変化を生じ堅くしまっている。燃焼部は床面から若干掘り窪められ、径45cm×60cm、厚さ5cmの楕円形状を呈す焼土が形成され、煙道寄りの焼土上面には、支脚に使用されたと思われる土師器の環が伏せて置かれてある。燃焼部と煙道には約8cmの段差があり、煙道は遺構外に約1mくりぬかれ、下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径38cm×44cm、深さ55cmの土坑が掘られている。

小穴は6個検出され、柱穴は埋土の状況と配置等からP₁～P₆の4個である。P₁とP₂は壁際に

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	21×30	12×29	28×30	32×38	38×39	25×32
深さ cm	56	33	37	48	34	15



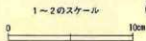
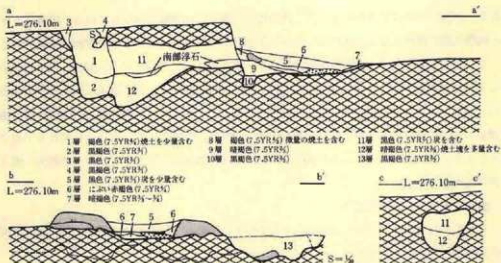
- | | |
|---|----------------------------------|
| 1層 黒色(7.5YR 1/3) + 相田 a 降下丸山灰をブロック状に混入 | 8層 黒色(7.5YR 1/3) |
| 2層 黒色(7.5YR 1/3) | 9層 黒色(7.5YR 1/3) |
| 3層 黒褐色(7.5YR 5/3) | 10層 黒褐色(7.5YR 5/3) |
| 4層 黒褐色(7.5YR 5/3) + 相田 a 降下丸山灰をブロック状に混入 | 11層 黒色(7.5YR 1/3) 八戸丸山灰をブロック状に混入 |
| 5層 黒褐色(7.5YR 5/3) + 相田 a 降下丸山灰を少量含む | 12層 黒色(7.5YR 1/3) 八戸丸山灰混入 |
| 6層 黒色(7.5YR 1/3) + 相田 a 降下丸山灰を少量含む | 13層 盛り土(相田 a) |
| 7層 黒褐色(7.5YR 5/3) + 相田 a 降下丸山灰をブロック状に少量混入 | |



- | |
|------------------|
| 1層 黒色(7.5YR 1/3) |
| 2層 黒色(7.5YR 1/3) |
| 3層 黒色(7.5YR 1/3) |

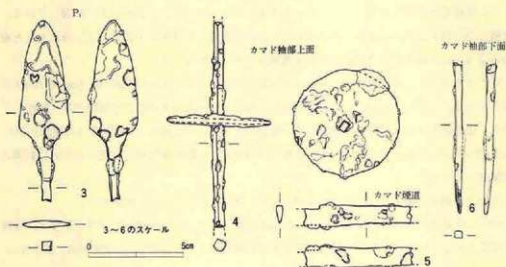


第61図 D II-3 住居址



埋土

2



第62図 D II-3住居址カマド・出土遺物

あり、平面の形状は長方形を呈する。P₁の埋土上面からは鉄鏝が出土している。周溝はカマドと西壁の攪乱箇所を除いて幅10cm～20cm、深さ8cmで廻り、南壁側では幅が20cm前後と広がっている。貯蔵穴はカマド南側の南東コーナー寄りであり、規模は40cm×55cm、深さ20cmのやや歪む長方形状である。底面は多少凹凸があり、袖部の崩壊土と思われるシルトが下面に散在している。南東コーナーと北壁側北西コーナー寄りの2箇所には、隅丸長方形の浅い張り出し部がある。北壁側の張り出し部には薄層の炭と土師器破片が混入し、底面はいずれも平坦で堅くしまる。北壁側の張り出し部の周りからは、小穴等は検出されなかったが、位置的に出入口の可能性もあろう。

遺物 (第62図、写真図版74)

カマドと柱穴から、土器と鉄器が出土している。土器は土師器と須恵器があり、破片の大部分は埋土からの出土である。

環1はカマド燃焼部上面から出土し、ロクロ使用の土師器である。内面は瓦ミガキ調整後黒色処理され、底部は回転糸切り無調整である。

2は須恵器の甕破片で、内面はナデ、外面は叩キ目である。

鉄器は3～6である。3は柱穴1から出土した鉄鏝で、基部は一部欠損し、現存長は9.6cm最大幅2.6cmである。4は紡錘車でカマド袖部上部からの出土である。両端部は欠損し、径10.9cm、現存長10.9cm、厚さ0.5cm角である。5は刀子破片で、現存長5.6cm、刃厚0.3cmの楔形断面形である。6は角釘で現存長8cm、厚さ0.3cm角である。

DⅡ-4 住居址

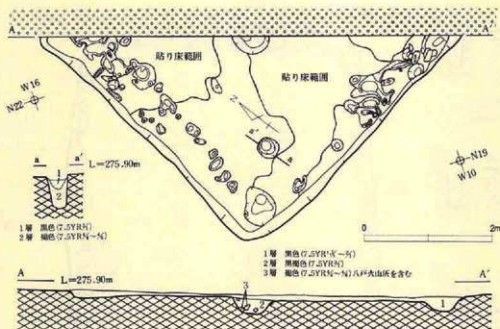
遺構 (第63図、写真図版17)

この住居址は調査区西部にあるDⅡ-3住居址の北側約4.5mの緩斜面上に位置している。遺構の2/3以上は調査区域外に伸びており、詳細な規模・形態等は不明である。検出された東西辺は4.6m、南北辺は4.5mあり、南西側コーナーは隅丸である。

埋土は黒色シルト質土の単層で、ブロック状の十和田a降下火山灰と粒形0.2cm～0.5cm大の浮石を含み、全体にしまりはなく軟らかい。十和田a降下火山灰は薄層で壁際のみ散在している。壁の高さは20cm前後で、傾斜はや、急を呈する。床面は作物と耕作等による攪乱を受け、大小の小穴があるものの全体に堅くしまり、平坦である。貼り床は攪乱が著しいために範囲の確認はできない。

カマドは調査区域内では確認されなかったが、区域外に存在すると思われる。

柱穴P₁は調査区域内で1個検出され、規模は径30cm×32cm、深さ52cmの長方形を呈す。柱痕は確認されなかったが、掘り方埋土から柱を固定補強するために用いたと思われる、長さ6cm、



第63図 D II-4住居址

幅10cm大の角礫を数個出土する。周溝と貯蔵穴は確認されない。

遺物

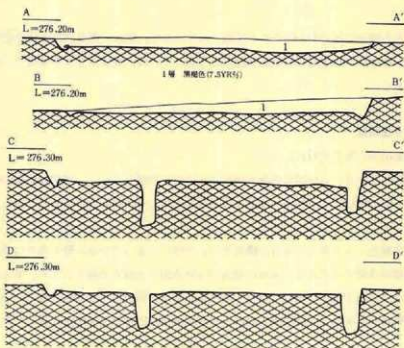
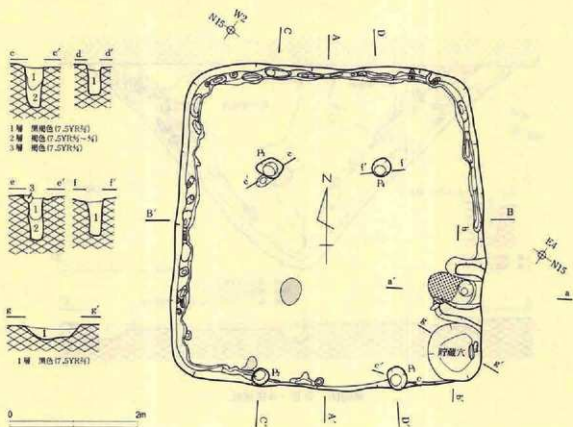
埋土から土師器の環と甕の破片を少量出土しているが、細かい破片のために図化することができない。環はロクロ使用で、内面黒色処理を施している。甕はロクロ不使用で、外面鉈ケズリ調整である。

D II-5住居址

遺構 (第64図、写真図版17)

この住居址はD II-3住居址の南東側約2mの所に隣接している。規模は4.8m×4.9mの南辺側がや、長い隅丸方形を呈する。遺構全体は耕作等による削平を受けており、特に東辺側が著しい。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成され、全体にしまっている。壁の高さは平均15cmと浅く、壁の傾斜は緩やかである。床面は地山の八戸火山灰上面まで掘りこまれ、多小の凹凸があるものは平坦で堅くしまっている。貼り床はカマド周辺の一部に施されている。遺構中央部から南壁寄りの床上には径33cm×44cm、厚さ3cmの楕円形状を呈す小石混じりの粘土の堆積



第64圖 D II-5住居址



第65図 D II-5住居址カマド

- 1層 褐色(7.5YR5/1)土器片を含み、焼土が混入する
- 2層 明褐色(7.5YR5/4-6)焼土を含む
- 3層 褐色(7.5YR5/1)焼土を含み、灰を少量含む
- 4層 黒褐色(7.5YR5/1)微量の焼土を含む
- 5層 暗褐色(7.5YR5/3)焼土を含む

がある。下端部は火熱により赤色変化を生じているが用途は不明である。

カマドは東壁中央部からやや南寄りに設置されている。残存する袖部はシルト質土で構築されており、芯材として使用され

た角礫は削平擾乱を受け、焼焼部側に倒壊し、上面を覆ったシルトの大部分は流出している。焼焼部下面には径40cm×45cm、厚さ5cmの焼土の形成があり、上面に鼓状を呈す土製支脚が破片で散乱している。壁際には径22cm×24cm、深さ27cmの円形土坑がある。煙道は住居址の外では検出されない。煙道が住居址の外に存在しないことは、カマド本体の焼焼部天井になんらかの煙出し機能を持つタイプであろうと推定される。

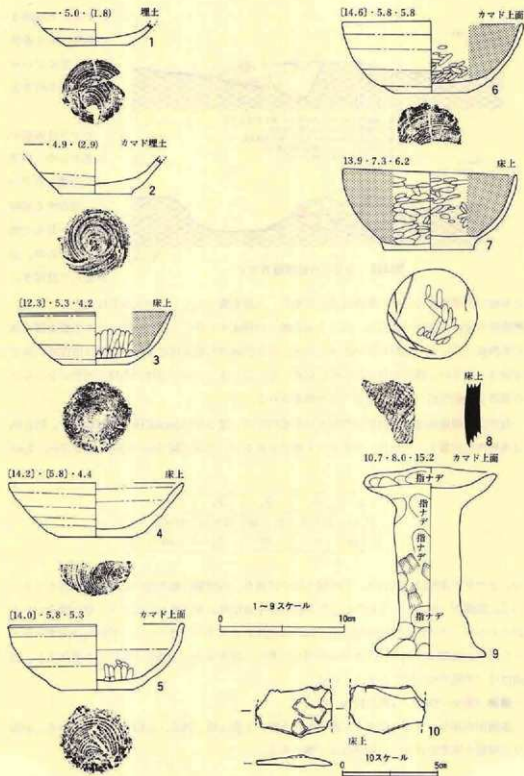
柱穴は4個検出され、形状は円形ないし楕円形で、深さ平均58cm前後と比較的深い。P₁とP₂は南壁際に位置し、柱痕はいずれからも確認されない。周溝は幅8cm～18cm、深さ7cm～15cm

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	28×35	23×26	31×32	28×30
深さ cm	64	40	72	56

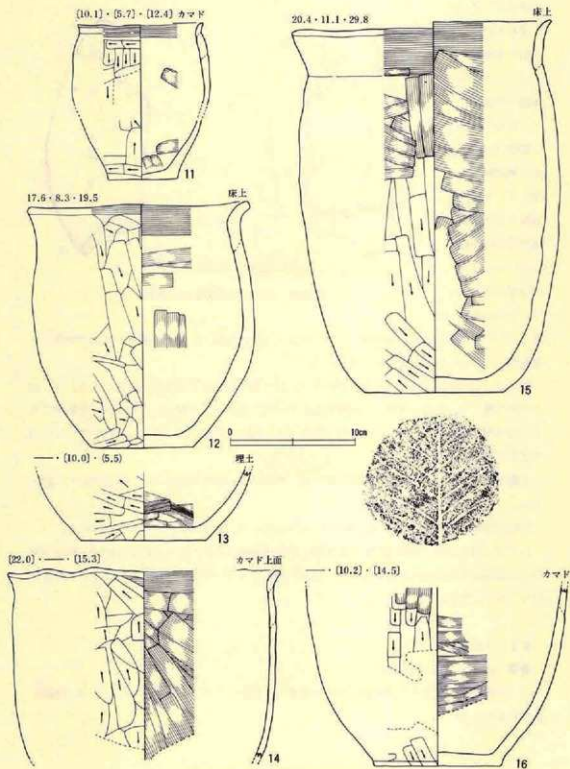
で、カマドと南壁際の柱穴P₁とP₂の間を除いて回り、西壁側の幅が他に比較しやや広くなっている。周溝が一部途切れる柱穴P₁とP₂の間の床土は壁際にかけ僅かに高まり、堅い踏みしめが認められる。この箇所は住居址の出入口の可能性もあろうかと思われる。貯蔵穴は南東コーナーにあり、径80cm×90cm、深さ16cmの円形である。埋土からは土師器の破片を少量出土し、底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。

遺物 (第66～68図、写真図版74・75)

遺構中央部カマド寄りの床土と埋土から土器、土製支脚、鉄器、石臼が出土している。土器は土師器と須恵器があり、器種は坏と甕である。

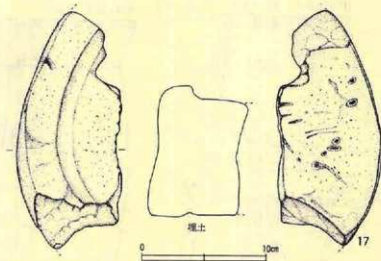


第66図 D II-5住居址出土遺物(1)



第67図 D II-5住居址出土遺物(2)

坏は1～7で
 いずれもロクロ
 使用の土師器で
 ある。1と2は
 体部～底部破片
 で、底部切り離し
 調整は回転糸
 切り無調整であ
 る。3と6は内
 面寛ミガキ調整
 後黒色処理を施
 している。4の
 口縁部は外傾す
 る。5は内面に



第68図 D II-5住居址出土遺物(3)

寛ミガキ調整が一部に認められる。7はベタ高台で、内外面とも細かい寛ミガキ調整後黒色処理を施している。底部も寛ミガキされている。

甕は8・11～16である。8は須恵器破片で、11～16はロクロ不使用の土師器である。11～16の内面は笹ナデ、外面は寛ケズリ調整を施している。11はや・小型で、口縁部は直立気味である。12は胴部に最大径を有し、口縁部は外反する。14の口縁部はや・重み、波状している。15の底部は木葉痕である。

土製支脚9はカマド燃焼部上面から出土し、器高15.2cmの鼓状を呈する。外面は指ナデ調整を施し、や・粗雑なつくりである。

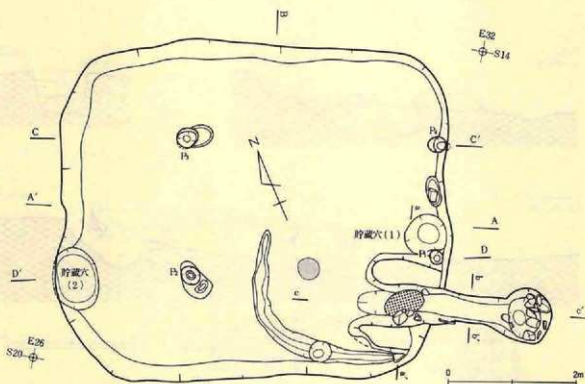
鉄器10は現存長2.7cm、幅4cm、厚さ0.5cmの長方形で、器種は破片のため不明である。

石臼17は現存1/5位の破片で、現存長8cm、厚さ10.5cmである。推定される径は29cm前後の円形で、表面には使用痕跡が認められる。出土状況等からこの遺構に伴うものではなく、後世の投げこみかと思われる。

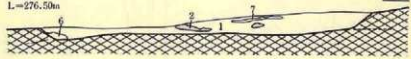
E I-1住居址

遺構(第69図、写真図版18)

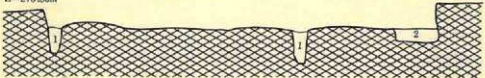
この住居址は、調査区の中央部よりや・西寄りに位置している。規模は5.2m×6.0mの隅丸長方形を呈する。



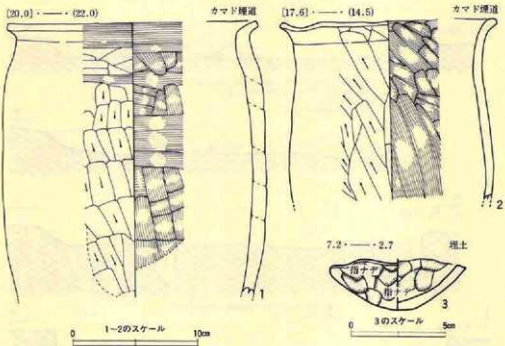
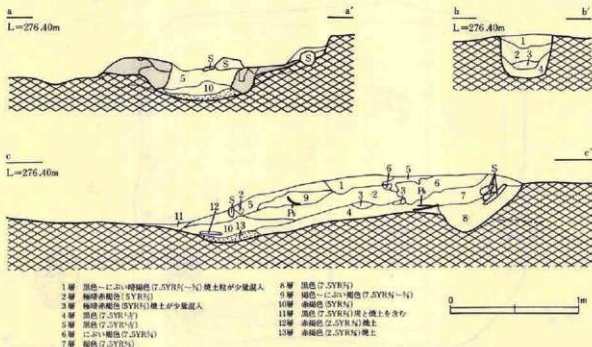
- 1層 黒色(7.SYR5)十粗田a降下a山灰を微量に含む
- 2層 黒褐色(7.SYR5-1号)灰化物と屑を含む
- 3層 黒色(7.SYR5)
- 4層 黒褐色(7.SYR5-1号)
- 5層 黒色(7.SYR5)
- 6層 黒色(7.SYR5)
- 7層 黒-黒褐色(7.SYR5-1号)



- 1層 黒色(7.SYR5)十粗田a降下a山灰を含む
- 2層 黒色(7.SYR5)



第69図 E I - 1 住居址



第70図 E I-1 住居址カマド・出土遺物

埋土は粒径0.5cm大の浮石を全体に含む黒～黒褐色シルト質土の6層に大別され、壁際にはブロック状の十和田a 降下火山灰の堆積が認められる。

壁は床上から緩やかに立ち上がり、壁の高さは東壁22cm、西壁28cm、南壁25cm、北壁18cmを測る。床面は多少の高低差はあるもののほぼ平坦で、貼り床は西壁と北壁側の一部に施されている。西壁寄りの床上10cmには笠状の炭化物と炭化材が少量散在する。

カマドは東壁南東コーナー寄りに設置され、大部分は崩壊し、袖部と燃焼部が残存するのみである。残存する袖部はシルトで構築され、中に補強材として石と土師器の甕の破片を用いている。また燃焼部煙道寄りの側壁には、本来天井の礎を支えるために使用したと思われる、長さ15cm前後の角礫が左右に据えられている。燃焼部は径35cm×60cm、厚さ6cmの楕円形状を呈す焼土の形成がある。焼道は長さ1.8mあり、燃焼部から緩やかな上り勾配で煙出し部へと続き煙出し部で約18cm下がる。煙道は溝状に掘りこまれ、天井部を褐色シルトで破覆し、トンネル状としている。天井部を覆ったシルトは火熱による赤色変化が著しい。煙出し部は径65cm×84cm、深さ42cmの楕円形状の土坑が掘りこまれ、上面の壁の周りには甕の破片を黄褐色シルトで貼ってある。埋土から長さ20cm～25cmの角礫（チャートと安山岩）が10数個出土している。これらの礫は出土の様相等から煙出し部上部の施設に用いたものであろうと思われる。

柱穴は4個検出され、P₁とP₂は東壁際にあり、形状は円形を呈す。周溝は南東壁コーナーからカマドを囲む様な半円形状に幅20cm～25cm、深さ7cm前後で巡る。断面は洗面器状で、埋土

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	19×24	28×31	27×29	25×26
深さ cm	45	54	57	48

に炭と十和田a 降下火山灰の混入が僅かに認められる。この周溝はカマドと居住区をしきる、間じきり的なものであろう。

貯蔵穴と思われる土坑は東壁と西壁際の2箇所にある。貯蔵穴（1）はカマドの左袖部わきにあり、径60cm×65cm、深さ17cmの円形で、土師器の甕の破片を出土する。貯蔵穴（2）は西壁の南側コーナー寄りにあり、径70cm×100cm、深さ22cmの楕円形で、西側は壁の外側に僅かに入るフラスコ状である。遺物は出土しない。

遺物（第70図、写真図版76）

カマド煙道埋土から土師器の甕、南壁際から手づくぬ土器が出土している。

甕1・2はロクロ不使用である。1の口縁部はや、強く外反し、内面は逸ケズリ調整を施している。2は多少垂みがあり、口縁部は緩やかに外反する。3は手づくぬ土器で、内外面とも指ナデされ、や、複雑なつくりである。

F II-1 住居址

遺構 (第71図、写真図版19)

この住居址は調査区中央部の緩斜面上に位置し、東壁と南壁の一部は掘削時における削平を受けている。規模は3.7m×3.8mの隅丸方形を呈す。

埋土は炭と炭化物を含む黒色シルト質土で構成され、全体に堅くしまっている。壁の高さは12cm～27cmで、床上から緩やかな傾斜で立ち上がる。本来の検出面はもう少し上面であろう。床面は多少の凹凸があるもののほぼ平坦である。堅い踏みしめ箇所はカマド周辺に認められ、貼り床は南東コーナーから南壁寄りに施されている。当遺構は焼失家屋で、床上5cm～10cmに炭化材、葦状の炭化物、焼土粒、角礫(長さ15cm～20cm)、土器、炭化穀類等が広い範囲で散在している。炭化材と葦状炭化物は角礫と角礫の間に多く検出され、遺構の中央から南西側にかけ、広く散在する。炭化穀類は東壁寄りの床上より出土し、種類は米、粟、麦、小豆、等がある。炭化穀類の出土レベルは炭化材および礫とほぼ同じである。またカマド焚き口部から遺構中央部にかけて、層厚2cm～4cm前後の褐色シルト(八戸火山灰に類似)の広い散在が認められる。これら多くの礫とシルトは本来屋根の上に使用したものであろうと推定される。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、角礫を□字状に組み、その上を褐色シルトで被覆している。袖部の礫は左に2個、右に3個据えているが、いずれも燃焼部内側に倒れ、上を被覆したシルトの大部分はすでに流出している。2個ある天井部の角礫は原位置にはなく、焚き口前方に散在している。くりぬき式の煙道は燃焼部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続き、煙出し部は径28cm×30cm、深さ40cmの円形土坑が掘りこまれている。煙道の長さは1.25mを測る。燃焼部の焼土は厚さ4cm前後の形成がされている。支脚は燃焼部のほぼ中央に角礫(長さ6cm×9cm×13cm)を据えている。支脚はほぼ原位置のままである。

柱穴は4個検出され、形状は僅かに重む円形である。周溝と貯蔵穴は確認されない。

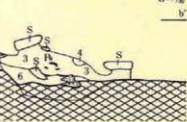
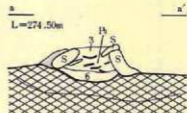
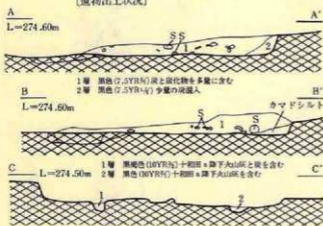
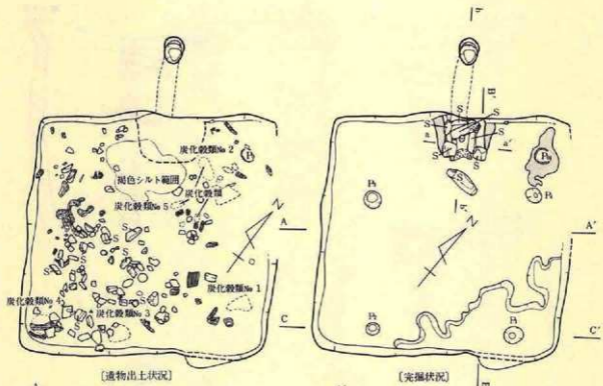
P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	26×27	18×21	28×30	22×24
深さ cm	10	16	20	18

北東コーナー寄りの床上には、周りを黄褐色粘土で被覆した土師器の甕(体部上半～口縁部)が直立状態で出土している。これは破損した甕を水甕として転用したものと思われる。

遺物 (第72図・73図、写真図版76・77)

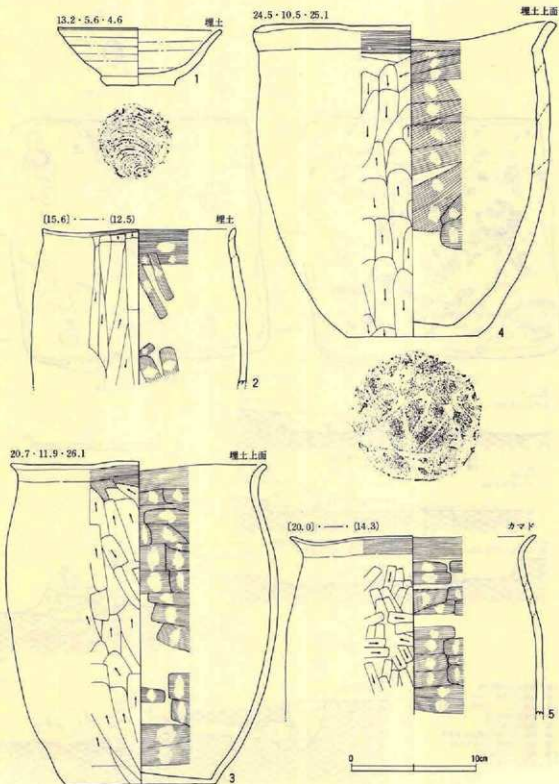
カマド周辺の床上と埋土から土師器、鉄器、木製品が出土している。土師器の器種は環と甕である。

環1はや・雑なロクロ成形で、口縁部は直線的に外傾している。底部はベタ高台で、切り離



- 1層 黒色(7.5YR5)砂
- 2層 黒色(7.5YR5)土和珪土
- 3層 黒色(7.5YR5)土和珪土に炭、焼土粒を含む
- 4層 褐色(10YR5)
- 5層 褐色(7.5YR5)
- 6層 黒色(7.5YR5)焼土粒を含む
- 7層 黒色(7.5YR5)炭を含む
- 8層 褐色(7.5YR5)土和珪土
- 9層 褐色(7.5YR5)

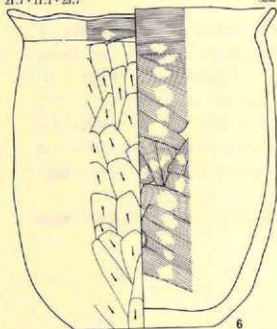
第71図 FⅡ-1住居址



第72図 FⅡ-1住居址出土遺物(1)

21.7・11.1・25.7

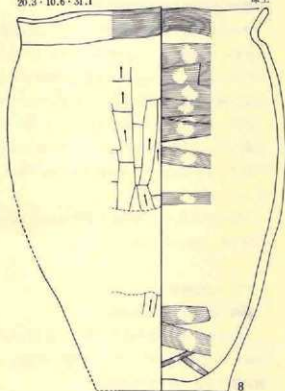
埋土



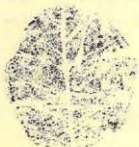
6

20.3・10.6・31.1

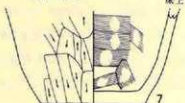
床上



8



—・8.4・(7.5)



床上

7



0 6-8のスケール 10cm



9

床上



10

床上



11

床上

0 9-11のスケール 5cm

第73図 F II-1住居址出土遺物(2)

し調整は回転糸切り無調整である。

甕2～8はいずれもロクロ不使用で、内面は寛ナデ、外面は寛ケズリ調整を施している。2は体部→口縁部破片で、口縁部は直立する。3の底部は荒い寛ケズリが施され、砂の付着が多く認められる。4・6～8の底部は木葉痕である。3・5・8は胴部に最大径を有す。ロクロ使用の甕の口縁部破片が床上から出土しているが、細かい破片のために図化できない。

鉄器9と11は鉄鏝で、南壁東側コーナー寄りの床上からの出土である。9は先端部の一部が欠損している。現存長は15cmあり、茎の長さは4.5cmを測る。11は錆の付着があるもののほぼ完形品で、長さ12.6cm内、茎の長さは4.3cmである。いずれも茎の形状は0.4cmの角ないし台形状である。

木製品10は床上から出土した櫛の破片で、焼失のため炭化している。櫛目は精巧で、現存長は縦3cm、横1.9cmである。

FⅡ-2住居址

遺構（第74図、写真図版20）

この遺構は調査区中央部に位置し、西方約10mの所にはFⅡ-1住居址がある。東壁側は粗掘り時における削平を受けている。規模は東辺4.5m、西辺5.25m、南辺4.6m、北辺4.6mで、西辺側が僅かに長い隅丸方形を呈する。

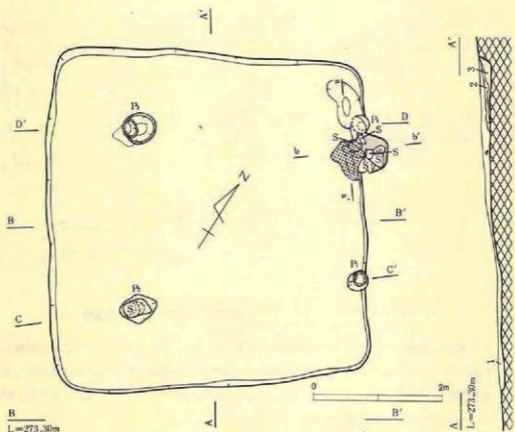
埋土は十和田^a降下火山灰を混入する黒色シルト質土の3層で構成され、壁際には砂質の明褐色土が堆積する。壁の高さは平均11cmと浅く、床上から緩やかな傾斜で立ち上がる。床面は多少の凹凸があり、南側と北側とでは約10cmの高低差がある。遺構の中央部は堅くしまり、貼り床は壁の周りに施されている。

カマドは東壁中央部南寄りに設置され、大部分は崩壊し燃焼部のみが残存する。燃焼部は下面に角礫（長さ15cm～25cm×5cm～10cm）を10個平らに据え、周りを褐色シルトで貼っている。角礫は火熱等による赤色変化を生じ、その上面には層厚6cm～8cmの不整形形状を呈す焼土の形成が認められる。軸部は本来シルトで構築されていると推定されるが、大部分は流出し存在していない。焼道と煙出し部は確認されないことから、煙出し部は壁の外よりすぐ上方に立ちあがるタイプのものかと思われる。

柱穴は4個検出され、内P₃とP₄は東壁際に位置している。形状は長方形から楕円形で柱痕は

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	25×28	25×27	30×32	23×28
深さ cm	48	58	52	58

N6
E56



B
L=273.30m



1層 黒色(SYR) 燼量の多量と十割田・降下火山灰がブロック状に混入
2層 明褐色(SYR) 焼土含む
3層 黒色(SYR) 十割田・降下火山灰を少量含む



1層 黒色(SYR)
2層 明褐色(SYR)

D
L=273.30m



1層 黒色(SYR) 燼と焼土粒を多く含む
2層 赤褐色(SYR) 焼土
3層 褐色(SYR)

a
L=273.30m



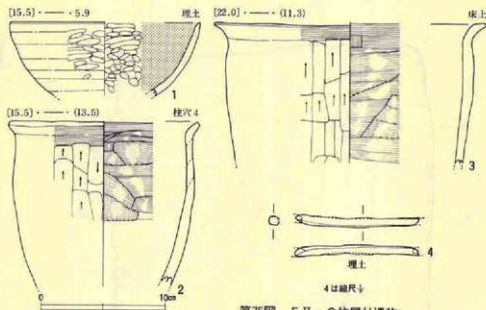
S=1/2

b
L=273.30m



S=1/2

第74図 F II - 2住居址



第75図 F II-2住居址遺物

いずれからも確認されない。P₁-P₁-P₁の埋土上部には褐色シルトが厚さ6cmで被覆され、P₂の上面(床上と同じレベル)には長さ40cm、幅23cm大の角礫が穴を塞ぐ様に置かれてある。北東壁コーナーは径35cm×73cm、深さ17cmの不整楕円形の落ちこみが確認されたが、貯蔵穴とはいいがたい。周溝は確認されない。

遺物(第75図、写真図版77)

埋土と床上から土師器と鉄器が出土している。

環1はロクロ使用で、底部が欠損している。内面は寛ミガキ調整後黒色処理を施し、外面の一部には寛ミガキ調整痕が認められる。

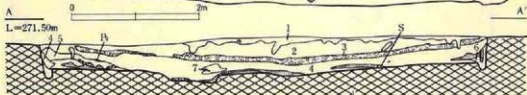
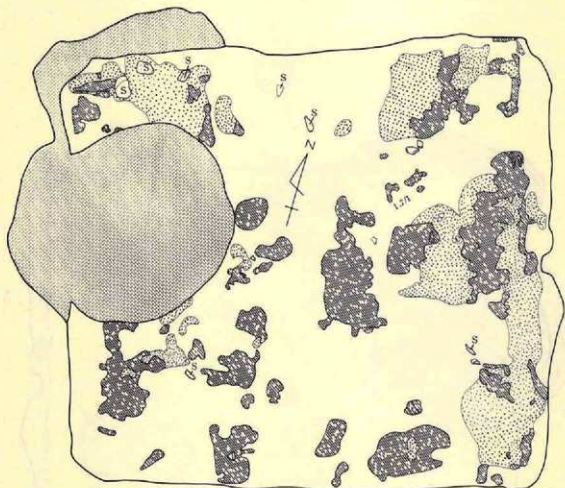
壺2と3は現存1/3以下の破片である。いずれもロクロ不使用で、内面は寛ナデ、外面は寛ミガキ調整を施している。2はや・小型で、輪積痕が明瞭に認められる。3の口縁部は強く外反する。

鉄器4は両端部欠損の角釘で、現存長6.6cm、厚さ0.5cm角である。鉄滓も少量出土している。

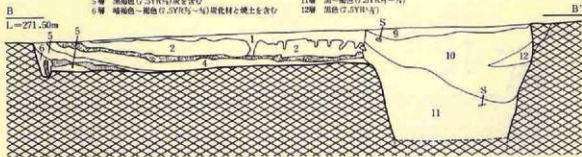
H II-1住居址

遺構(76~78図、写真図版21)

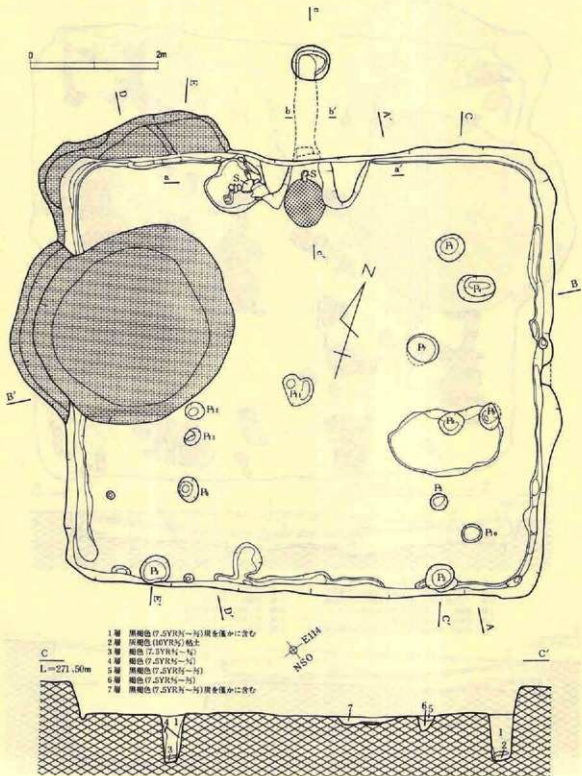
遺構は調査区中央部東寄りの緩斜面上に位置し、北側にはH II-2掘立柱建物跡(近世)が隣接している。規模は6.7m×7.6mの長方形で、長軸方向は東北東-西南西を指す。西壁側は開口部径が2.9m×3.1mの長円形を呈す井戸によって攪乱されている。地元の人の話では、井戸は昭和55年に埋めどしが行なわれ、5m~6mの深さがあったということである。



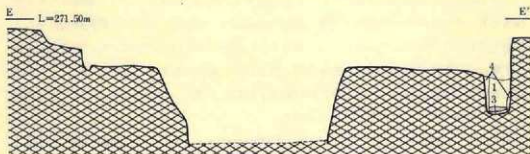
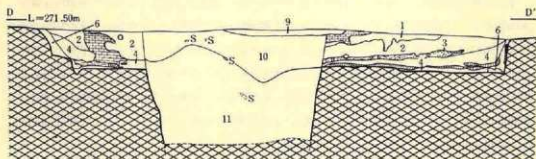
- 1層 黒色(7.SYR1号)木炭による模様が著しい
- 2層 黒褐色(7.SYR1号)炭を全体的に少量含む
- 3層 比較的暗褐色(7.SYR1号)土和泥・降下灰土混
- 4層 暗褐色(7.SYR1号)土・灰土炭を僅かに含む
- 5層 黒褐色(7.SYR1号)炭を含む
- 6層 暗褐色～黒色(7.SYR1号)炭化材と焼土を含む
- 7層 黒色(7.SYR1号)炭と土和泥・降下灰土混を含む
- 8層 黒色(7.SYR1号)
- 9層 暗褐色(7.SYR1号)
- 10層 黒～褐色(7.SYR1号)
- 11層 黒～褐色(7.SYR1号)
- 12層 黒色(7.SYR1号)



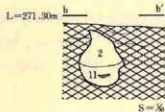
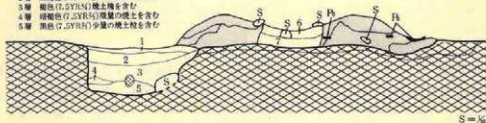
第76図 H II-1 住居址 (1)



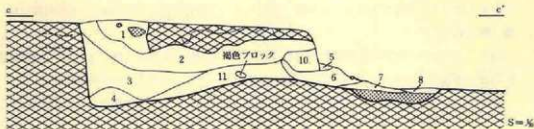
第77圖 H II-1 住居址 (2)



- 1層 黒褐色(7.5YR5/3)微量の焼土と灰を含む
- 2層 黒褐色(7.5YR5)灰と焼土粒を含む
- 3層 褐色(7.5YR5)焼土塊を含む
- 4層 暗褐色(7.5YR5)微量の焼土を含む
- 5層 黒色(7.5YR5)少量の焼土粒を含む



- 1層 黒褐色(7.5YR5/3)焼土がブロック状に薄氷に混入
- 2層 黒褐色(7.5YR5)
- 3層 暗褐色(7.5YR5/3)
- 4層 褐色(7.5YR5)
- 5層 褐色(7.5YR5/3)焼土を少量含む
- 6層 褐色(7.5YR5/3)灰と焼土を少量含む
- 7層 暗褐色(7.5YR5)微量の灰を含む
- 8層 褐色(7.5YR5)焼土と灰を含む
- 9層 暗赤褐色(7.5YR5)
- 10層 褐色(7.5YR5)
- 11層 濃い褐色-黒褐色(7.5YR5/3)灰、焼土を含む
- 12層 黒褐色-暗褐色(7.5YR5/3)灰、焼土を含む



第78図 HII-1住居址(3)

埋土は黒～黒褐色シルト質土主体の8層で構成され、3層には厚厚6cm前後の十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積している。壁の高さは東壁42cm、西壁60cm、南壁45cm、北壁45cmを測り、床面からは垂直な傾斜で立ち上がる。床面は東壁側が僅かに高まるほかは平坦で、全体に堅くしまっている。床上には多量の焼土と炭化材・炭状の炭化物が散在することから焼失家屋と思われる。焼土は厚さ4cm前後で東壁側に多く堆積し、炭化材は壁際から遺構中央部にかけて放射状に広がっている。炭化材は厚さ1cm～1.5cmの板状のものが多く、材の上には火熱を受け、赤褐色したシルトが載っている。

カマドは北壁中央部に設置されているものの、大半は崩壊・流出している。袖部はシルトで構築され、中に土師器の甕破片と角礫（長さ20cm～25cm、幅10cm～20cm）を数個補強材として使用している。燃焼部は径65cm×75cm、厚さ8cmの楕円形状の焼土が形成され、煙道寄りの焼土上面には支脚に使用したと思われる角礫（長さ17cm、幅・厚さ7cm）が据えてある。くりぬき式の煙道は全長1.8mあり、燃焼部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続き、煙出し部は径55cm、深さ68cmの円形土坑が掘りこまれている。

小穴は大小13個余検出され、柱穴は形状・位置的にP₁～P₄である。この遺構の柱穴数は基本的に4本と推定されるが、西側北寄りの1本は井戸によって削除されている。

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀						
径 cm	41	44	35	46	42	44	40	38	25	26	30	40	43	50	35	38	33	35	28	32	48	50	25	30	22	30
深さ cm	77	77	68	40	35	30	32	16	13	12	5	6	5	5												

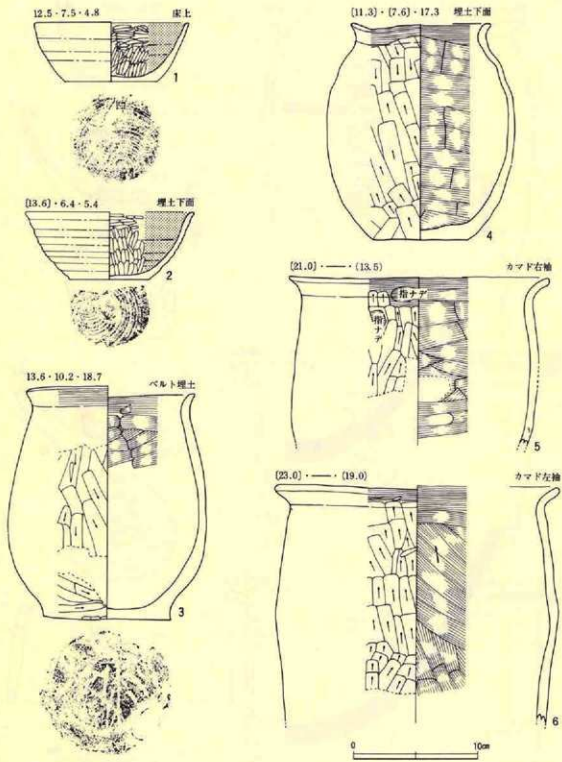
形状は開口部が円形ないし楕円形、底部は円形である。いずれも埋土下端には厚さ4cmの灰黄褐色粘土の堆積が認められる。P₁は位置的に添え柱的なものかと思われる。貯蔵穴はカマド左袖部に接し、規模は径80cm×85cm、深さ37cmの歪んだ円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、埋土下端からは土師器の坏と甕破片が出土している。周溝は一部途切れる箇所もあるが幅6cm～15cm、深さ10cm前後で全周している。周溝から壁に密着して炭化材が確認され、材は厚さ2cm～4cmの板状である。これら板状の炭化材は出土の様相などから壁材として使用したものであろう。

遺物（第79～82図、写真図版78・79）

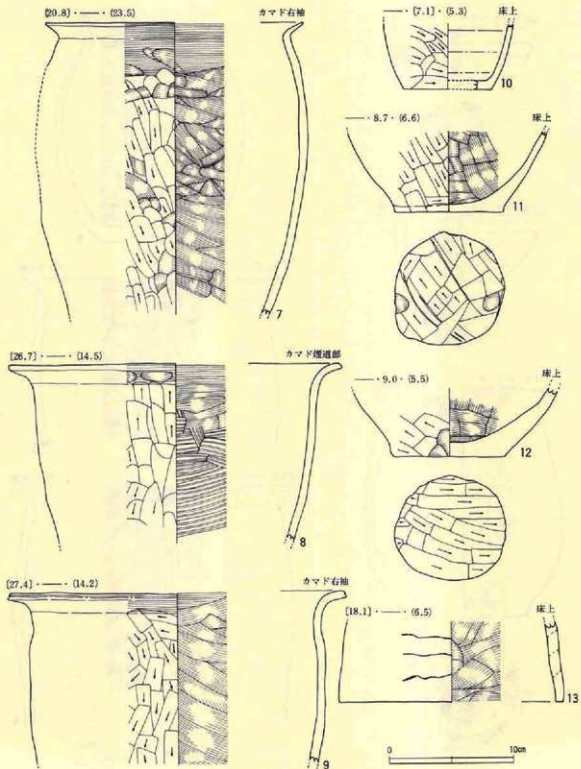
床土とカマドから主に土師器、須恵器、鉄器、ふいご口等が出土している。土器の器種は坏、甕、甗である。

坏1と2はロクロ使用の土師器で、内面は篋ケズリ調整後黒色処理を施している。底部は回転系切り無調整である。1の口縁部は直線的に外傾し、2はロクロ成形痕が明瞭である。

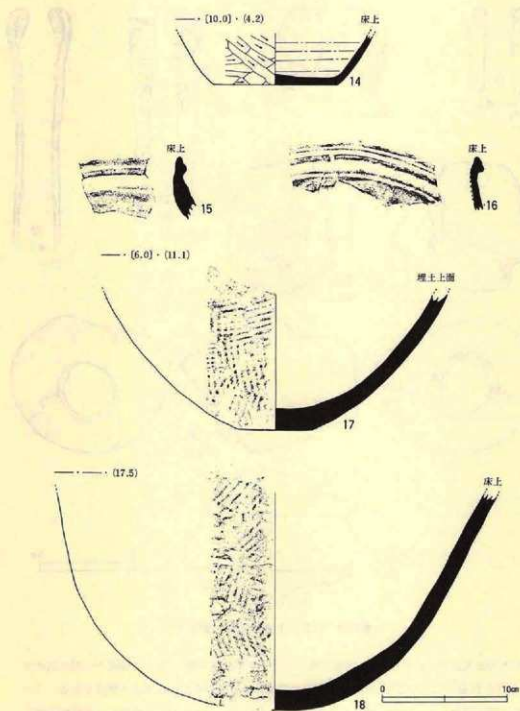
甕3～9・11・12はロクロ不使用の土師器で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施して



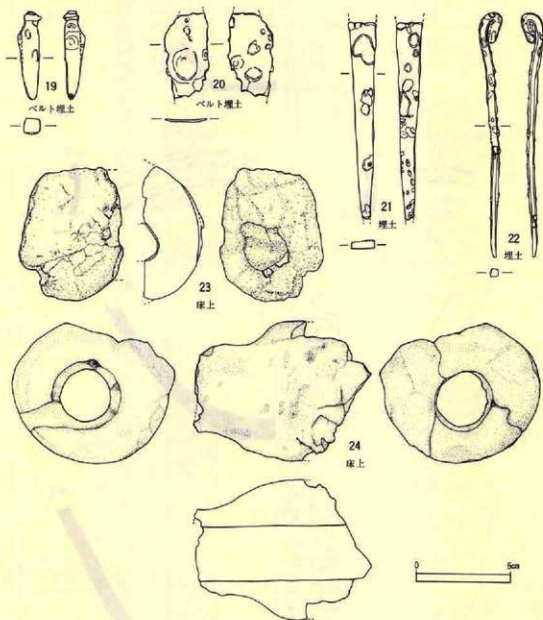
第79図 HII-1住居址出土遺物(1)



第80図 H II-1 住居址出土遺物 (2)



第81圖 HⅡ-1住居址出土遺物(3)



第82図 H II-1住居址出土遺物(4)

いるものが大部分を占める。8の内面は笥ナデとハケメ調整が施してある。外面の一部に指ナデが認められるのは5と7である。3は体部下半に最大径を有し、底部は木葉痕である。4の体部は球胴形を呈し、底部は笥ケズリ調整を施している。5～9は体部中位～口縁部破片で、口縁部は外反している。8と9は強く外反し、9の口唇部には一条の沈線が巡っている。11と

12は体部下半～底部破片で、底部は寛ケズリされている。10はロクロ使用の土師器で、外面と底部は寛ケズリ調整を施している。14～18は須恵器である。14は小形の体部下半～底部破片で、外面は寛ケズリ調整を施している。15と16は口縁部破片である。17と18は体部下半～底部破片で、内面はナデ、外面は叩き目調整されている。底部は丸底で、寛ケズリ調整をしている。

甗13は現存1/4位のロクロ不使用の土師器である。内面は寛ナデ調整され、外面は磨滅しているため調整は不明である。下端は平縁である。

鉄器は19～22で、器種は角釘、楔状破片、不明なものがある。角釘は19と22で、19は長さ3.7cm、厚さ0.7cm角、22は長さ14.5cm、厚さ0.4cm角で、頭部は折れ曲がっている。21は両端部が欠損した楔状の破片で、現存長10.4cm、厚さ0.4cmの台形状の断面を呈す。20は器種不明なもので、縦3.4cm、横2.3cm、厚さ0.1cmである。また床上と埋土下端からは多量の鉄塊と鉄滓が出土している。

ふいご口は23と24で、床上からの出土である。23は破片で径2cmの孔を有す。24は径7.6cm×8.6cmの楕円形状で、まん中に径2.9cmの窄孔がある。先端部はや、細めになり、径4.5cmの円形を呈する。

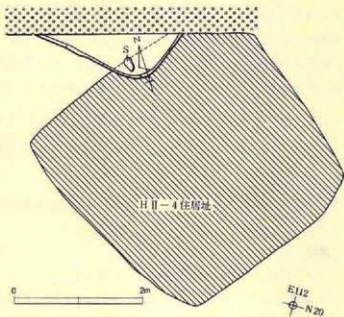
HⅡ-3住居址

遺構 (第83図)

この住居址は調査区の東部に位置し、遺構の大部分は調査区域外に存在するために規模・形態等は不明である。検出された規模は東辺1m、西辺1.8mを測り、南東コーナーは隅丸を呈す。

埋土は粒径1mm大の浮石を僅かに混入する黒褐色シルト質土の単層である。壁の高さは8cm～10cm前後で、床上よりやや急な傾斜で立ち上がる。検出された床面はほぼ平坦でしまっている。またHⅡ-4住居址と重複し、当遺構がHⅡ-4住居址の上面に存在する事より、新旧の関係は(新)HⅡ-3住居址→(旧)HⅡ-4住居址となる。カマド、柱穴等は調査区域外に存在すると思われる。

遺物は埋土から土師器の變の破片を数個出土しただけで、図化できるものはない。



第83図 HⅡ-3住居址

HⅡ-4住居址

遺構 (第84図、写真図版22)

この住居址は調査区の東部に位置し、北東コーナーは調査区域外に存在する。規模は3.7m×3.9mのやや重む隅丸方形を呈す。またHⅡ-3住居址、HⅡ-2掘立柱建物跡と重複しており、遺構の新旧関係は新しい順に①HⅡ-2掘立柱建物跡、②HⅡ-3住居址、③HⅡ-4住居址となる。

埋土はシルト質土主体の3層に大別され、全体に十和田a降下火山灰をブロック状に混入している。火山灰は遺構の中央から南側寄りに多く堆積が認められる。壁の高さは平均30cmで床上よりやや急な傾斜で立ち上がり、南壁側はHⅡ-2掘立柱建物跡による攪乱を受けている。床面は八戸火山灰上面まで掘りこまれ、多少凹凸はあるものの平坦であり、貼り床は東壁寄りの一部に施されている。また北東コーナー寄りの床上には板状を呈す角礫(長さ10cm~28cm、幅10cm~20cm)が10数個散在している。

カマドは東壁中央部から南東コーナー寄りに設置され、大部分は破壊されている。本来は角礫(長さ20cm~30cm、幅15cm~20cm)を門字状に据え、その上を褐色シルトで被覆したものとされるが、角礫は上方向からおしつぶされた形で散在し、上部を覆ったシルトの大部分は流出している。袖部は下端部のシルトだけが残存し、補強材として中に土師器の甕の破片を使用している。煙道と煙出し部は遺構外では確認されないことから、煙道は壁際よりすぐ立ち上がるタイプのものであろう。燃焼部は径30cm×50cm、厚さ8cmの楕円形状を呈す焼土の形成があり、全体的に堅くしまる。燃焼部の東壁寄りには径5cm、深さ10cmの支脚ぬきとり痕跡が認められる。

柱穴は4個検出され、P₁とP₂は南壁際に位置し、形状は円形を呈す。西壁寄りには70cm×130cm、深さ6cm~8cmの不整楕円形状の浅い落ちこみがあり、埋土から土師器の破片を数個出土

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	32×33	24×26	34×37	31×32
深さ cm	57	44	48	42

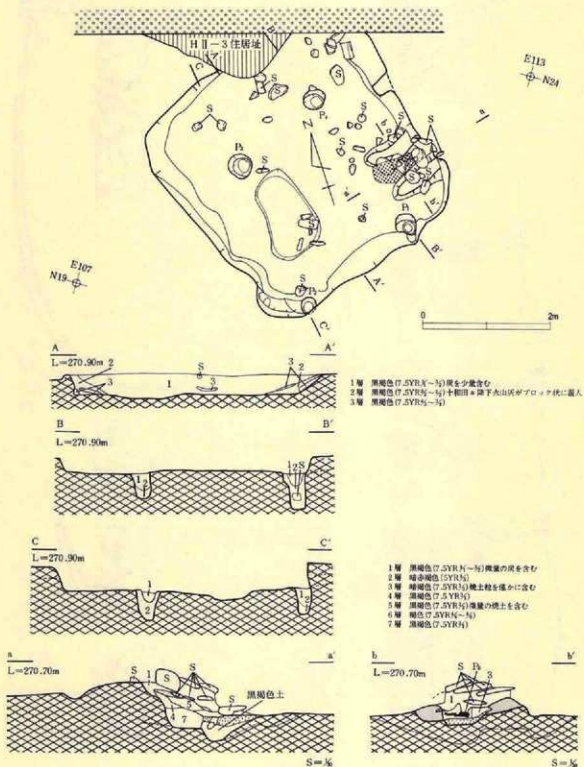
する。遺構に伴うなんらかの施設とも思われるが用途は不明である。貯蔵穴と周溝は確認されない。

遺物 (第85・86、写真図版80)

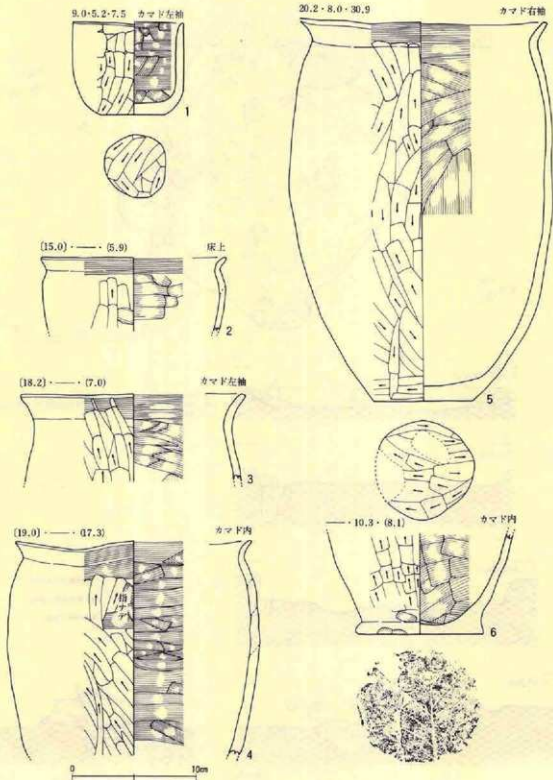
カマドを中心に土師器の坏と甕が出土している。

坏は細破片のため凶化できるものはないが、いずれもロクロ使用の土師器で、内面は黒色処理を施している。

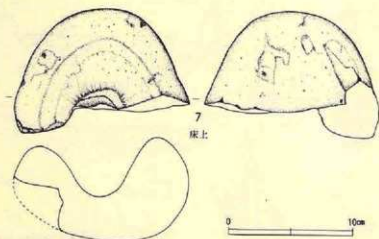
甕1~6はロクロ使用で、内面は艶ナデ、外面は艶ケズリ調整を施している。1は小型のも



第84図 H II-4住居址



第85図 H II-4 住居址出土遺物 (1)



第86図 H II-4 住居址出土遺物 (2)

ので、全体に歪みがあり、口縁部は直立している。底部は寛ケズリである。2～5の口縁部は外反し、2と3の外面の一部には指ナデ痕が認められる。5はや・膨張りし、体部中位に最大径を有し、底部

は寛ケズリ調整を施している。6は体部下端～底部の破片で、木葉痕である。

石臼7は床上からの出土で、現存1/2程の破片である。縦8cm、横14cm、厚さ3.5cm～5cmの半円形を呈す。まん中はU字状に凹み、使用痕跡が認められる。

また、細破片のため図化はできないものの、ふいご口が1点出土している。

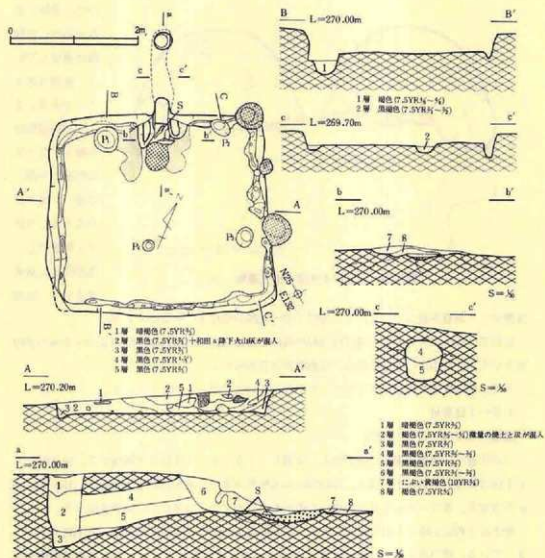
I II-1 住居址

遺構 (第87図、写真図版22)

この住居址は調査区東部の緩斜面上に位置し、I II-2・3住居址と隣接する。住居址のあるI区は全体的に耕作土も浅く、作物等による攪乱が著しい地区である。規模は3.15m×3.40mの方形で、各コーナーは多少崩壊した箇所もあるが、ほぼ直角に近い様相を呈する。

埋土は十和田a降下火山灰を含む黒色シルト質粘土主体の5層に大別され、全体的に堅くしまっている。壁の高さは平均26cm前後で、床上から直に近い傾斜で立ち上がる。床面は南壁側が僅かに高まるほかは、ほぼ平坦で堅くしまり、全体に貼り床を施している。床上には長さ10cm～30cm大の角礫が散在し、大半は火熱等を受けもろくなっている。石質はチャートと安山岩である。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、大部分は崩壊し、袖部と燃焼部が残るのみである。残存する袖部は下端部のシルトだけで、芯材として使用されたと思われる、礫は遺構中央部の床上に散在する。燃焼部は径35cm×45cm、厚さ8cmの楕円形状の焼土が形成されている。くりぬき式の煙道は燃焼部から長さ1.4mで、煙出し部へ緩やかな下り勾配で続く。煙出し部は径26cm、深さ57cmの円形の土坑が掘りこまれている。



第87図 ⅠⅡ-1住居址

小穴は4個検出され、P₁とP₂が位置的に当遺構に伴う柱穴であろう。周溝はカマド周辺部を除いて、攪乱のため一部途切れる箇所もあるが幅10cm、深さ8cm～25cmで巡っている。貯蔵穴は確認されない。

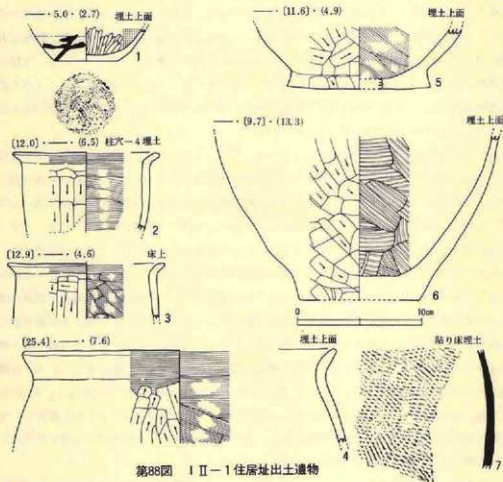
P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	38×40	22×34	26×30	16×18
深さ cm	33	8	10	6

遺物 (第88図、写真図版81)

主に埋土から土師器と須恵器の破片が少量出土している。器種は環と甕である。

環1はロクロ使用の土師器で、内面は篋ミガキ調整後黒色処理され、外面は「千」と読まれる墨書がされている。底部は回転糸切り無調整である。細破片のため図化できないが、P₁と貼り床中からロクロ使用の内黒破片が2個出土している。

甕2～6はロクロ不使用の土師器である。2～4は現存1/3以下の口縁部破片で、口縁部は外反し、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。5と6は体部下半～底部破片で、外



第88図 I II-1 住居址出土遺物

面と底部は笥ケズリされている。6の体部はや、球胴形を呈し、内面はハケメ調整を施している。7は須恵器で、内面はナデ、外面は叩き目されている。

ⅠⅡ-2 住居址

遺構 (第89図、写真図版23)

この遺構は調査区東部西寄りの緩斜面上に位置する。ⅠⅡ-4住居址と隣接し、南西コーナーはⅠⅡ-56土坑と重複している。規模は5.9m×6.0mの方形を呈す。土坑との新旧関係は住居址が土坑を切っていることから(新)ⅠⅡ-2住居址(旧)ⅠⅡ-56土坑となる。

埋土は黒色シルト質土主体の8層に分けられ、壁際の4層と5層には十和田a降下火山灰の混入が認められる。壁の高さは東壁36cm、西壁63cm、南壁51cm、北壁43cm前後で、床上からほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がる。床面は八戸火山灰層を40cm掘りこみ、平坦にし使用している。

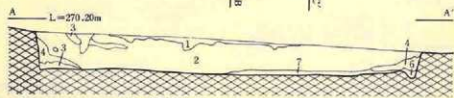
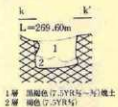
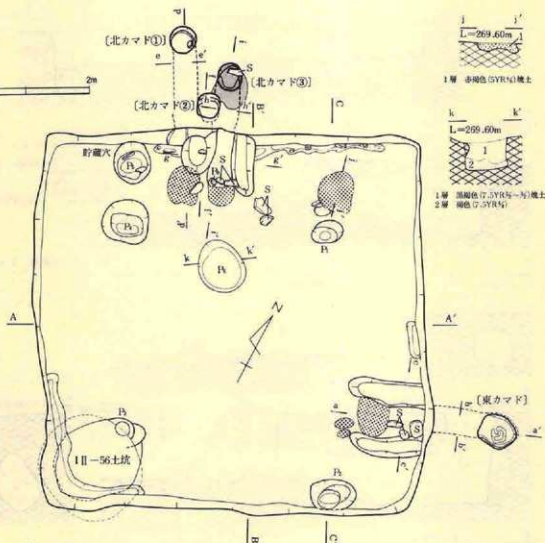
カマドは東壁中央部南寄りと北壁中央部西寄りに設置されている。東カマドの大部分は崩壊・流出し、袖部下端のシルトが僅かに残存するのみである。袖部のシルトは床面に広い範囲で散在し、芯材に使用したと思われる角礫(長さ18cm~28cm、幅10cm~18cm大)が2個、燃焼部内側に倒れている。燃焼部は径48cm×58cm、厚さ8cmの楕円形の焼土が形成されている。支脚は燃焼部の煙道寄りに角礫(長さ26cm、幅11cm)を据えてあり、ほぼ原位置にある。くりぬき式の煙道は長さ1.5mあり、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径50cm×60cm、深さ52cmの楕円形土坑が掘りこまれている。

北カマドは3基の造り変えが行なわれている。カマド①は燃焼部の焼土痕と煙道だけが残存している。焼土は径48cm×57cm、厚さ5cmの不整楕円形状の広がりを持ち、上面の一部は褐色シルトで貼られている。煙道はくりぬき式で、燃焼部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続く。長さは1.7mである。煙出し部は径44cm、深さ70cmの円形土坑が掘りこまれている。カマド②は径35cm×40cm、深さ75cmの煙出し部と思われる円形状の土坑が掘りこまれているだけで、造りかけ途中で中止したものであろう。カマド③の大部分は崩壊し、袖部下半が残存するのみである。袖部は褐色シルトで構築されている。燃焼部は径40cm×42cm、厚さ5cmの円形状の焼土が形成されている。煙道寄りの上には角礫(長さ14cm×20cm、幅10cm)2個と土師器の甕底部破片が伏せて置かれてあることから、支脚として使用したものと思われる。くりぬき式の煙道は長さ1.05mあり、や、急な上り勾配で煙出し部へと続く。煙道の煙出し寄りの天井には褐色シルトが厚さ10cm前後で貼られてある。煙出し部は径25cm×40cmの楕円形状を呈し、角礫(長さ20cm、幅10cm)が斜めに置かれてある。3基のカマドの新旧関係はカマド①が1番古く、次に造りかけのカマド②、カマド③の順となる。北カマドと東カマドの使用時差は検出状況等からは不明であるが、2基同時使用の可能性もあろう。

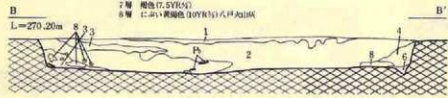
小穴は大小6個検出され、柱穴はP₁~P₆である。P₂は南壁際にありP₃はⅠⅡ-56土坑(縄文)

E133
N24 中

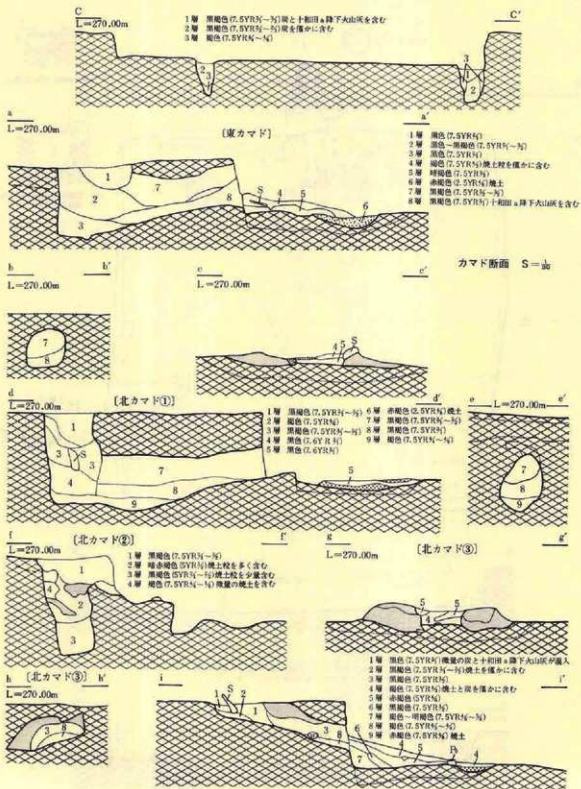
0 2m



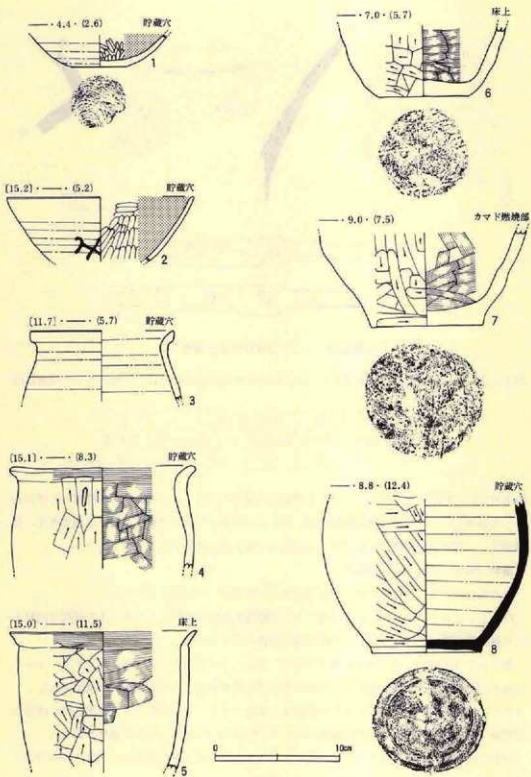
- 1層 黒色 (SYR1-2)
- 2層 褐色 (SYR3)
- 3層 褐色 (SYR4)
- 4層 黒色 (SYR1-2) 土相田 a 降下火跡を僅かに含む
- 5層 黒色 (SYR1-2) 土相田 b 降下火跡を僅かに含む
- 6層 褐色 (SYR4)
- 7層 褐色 (SYR4)
- 8層 (c) 赤褐色 (SYR5) 灰質赤土



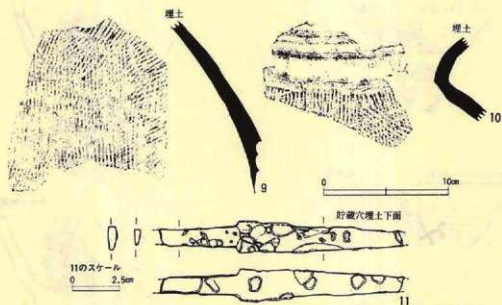
第89図 I II-2 住居址



第90図 ⅠⅡ-2住居址カマド



第91図 I II-2住居址出土遺物 (1)



第92図 IⅡ-2住居址出土遺物(2)

の上に造られ、位置的には多少ずれている。柱穴の形状は楕円形ないし不整円形で、柱痕は確

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	35×50	50×70	35×40+α	65×75	60×65	70×85
深さ cm	57	58	65	60	48	52

認されない。P₃は埋土下端から、刀子と須恵器の變等が出土していることから貯蔵穴と思われる。北壁東寄りの床上には径50cm×65cm、厚さ8cm前後の不整楕円形状を呈す現地性焼土の堆積がある。周溝は北壁側の一部に幅7cm～15cm、深さ5cm前後で巡っている。

遺物(第91・92図、写真図版81)

土師器の坏と甕、須恵器の甕、鉄器等が床上と貯蔵穴から出土している。

坏1と2はロクロ使用で、内面は寛ミガキ調整後黒色処理を施している。1の底部は回転糸切り無調整、2は底部が欠損し、外面下端に墨書が認められる。

甕3～7は土師器、8～10は須恵器である。3はロクロ使用で、口縁部は外反する。4～7はロクロ不使用で、内面は寛ナデ、外面は寛ケズリ調整を施している。4の口縁部は外反し、5はや・直線的に外傾する。6と7の底部は木葉痕である。8は貯蔵穴からの出土で、体部は球形形を呈す。9と10は体部と口縁部の破片で、内面はナデ、外面は甲キ目調整である。

鉄器11は貯蔵穴から出土の刀子で、両端部は欠損している。現存長13cm、刃厚1.6cmである。

全面に錆の付着が著しく認められる。

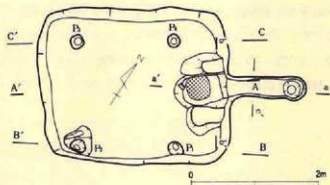
ⅠⅡ-3住居址

遺構 (第93図、写真図版24)

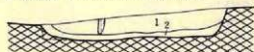
この住居址はⅠⅡ-2住居址の北方約1mの所に位置し、南壁側にⅠⅡ-102 陥し穴状遺構が接する。規模は2.4m×2.95mの隅丸長方形を呈す。

埋土は粒形0.5cm～1cm大の浮石を含む黒褐色シルト質土の2層に大別され、下端部には僅かに炭が混入している。壁の高さは東壁26cm、西壁45cm、南壁25cm、北壁33cmを測り、床上から急な傾斜で立ち上がる。床面は西壁側が僅かに高まるもののほぼ平坦で、全面に貼り床が施されている。特に堅い踏みしめはカマド周辺に認められる。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置されているが、大部分は崩壊し、燃焼部と袖部下端部が僅かに残るのみである。残存する袖部は灰黄褐色シルトと黒色土で構成されている。



A A' 1層 黒褐色(7.5YR5/4) 2層 黒褐色(7.5YR5/4)層下に炭を含む
L=270.20m

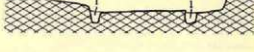


B B' L=270.00m



1層 黒褐色(7.5YR5)

C C' L=270.00m



a a' L=270.00m

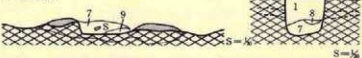


1層 褐色(7.5YR6) 2層 黒褐色(7.5YR5)焼土を含む 3層 褐色(7.5YR6) 4層 暗褐色(7.5YR5)焼土を含む 5層 黒褐色(7.5YR5)

6層 褐色(7.5YR6) 7層 赤褐色(7.5YR5) 8層 暗褐色(7.5YR5) 9層 褐色(7.5YR6)

S=1/2

b b' c c' L=269.70m L=266.70m



第93図 ⅠⅡ-3住居址

煙道は緩やかな下り勾配を呈し、遺構外に約1.2mのび煙出し部へと続く。燃焼部寄りの側面は火熱を受け赤色変化を生じている。煙道の天井部は崩壊しているが、本来の構造はくりぬき式であろうと思われる。煙出し部は径25cm、深さ45cmの円形土坑が掘りこまれている。燃焼部は僅かに掘り窪められ径40cm、厚さ7cmの円形状を呈す焼土の形成がある。

柱穴は4個検出され、形状は隅丸方形状である。柱穴P₁とP₂は南壁際に位置している。貯蔵

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	20×22	18×23	19×21	17×18
深さ cm	22	24	22	18

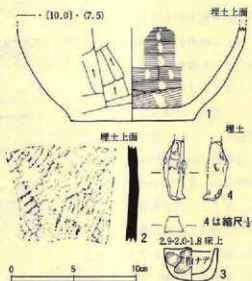
穴と周溝は確認されない。

遺物 (第94図、写真図版82)

土師器と須恵器の破片が埋土から主に出土している。出土量は僅少である。

斐1はロクロ不使用の土師器の体部下半～底部破片である。内面は匏ナデ、外面は匏ケズリ調整を施し、底部は匏ケズリされている。2は須恵器の体部破片である。3は床上から出土した土師器のミニチュア土器で、外面は指ナデ調整されている。

鉄器4は器種不明の破片で、一部は欠損し現存長3.2cm、幅1.2cm、厚さ0.8cmの台形状の断面形を呈す。



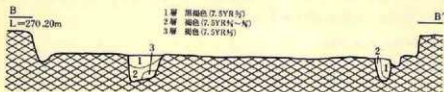
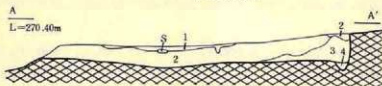
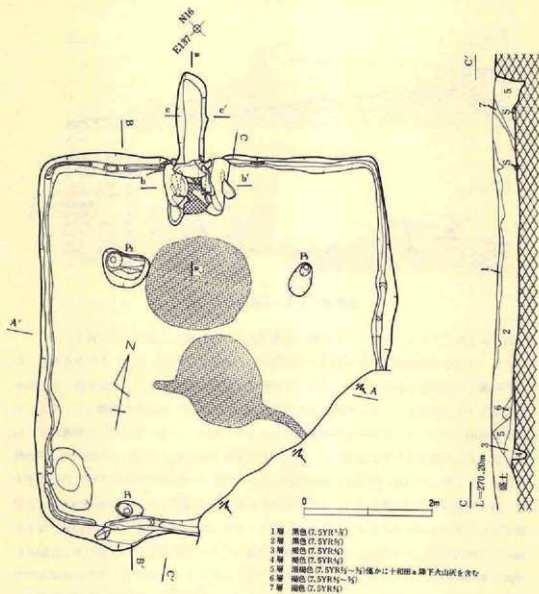
第94図 I II-3住居址出土遺物

I II-4住居址

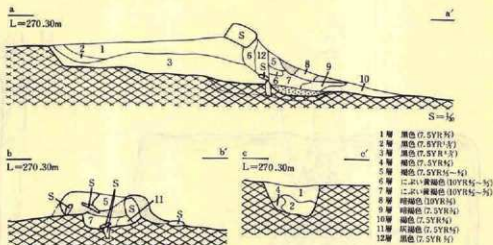
遺構 (第95図、写真図版24)

この住居址は調査区東部I区に位置し、I II-3住居址の南側約1.5mの所に隣接している。遺構の西壁側南寄りにはI II-5住居址(縄文時代)と重複し、南東コーナーは村道により削除されている。規模は5.4m×5.8mの方形を呈す。

埋土はシルト質の黒褐色土の7層に大別され、全体にしまりがあり、壁際には十和田A降下火山灰がブロック状に堆積している。壁の高さは東壁20cm、西壁40cm、南壁42cm、北壁37cmを測り、床上から急な傾斜で立ち上がる。床面は木根による攪乱のため多少の凹凸があり、全面



第95図 I II-4住居址



第96図 I II-4住居址カマド

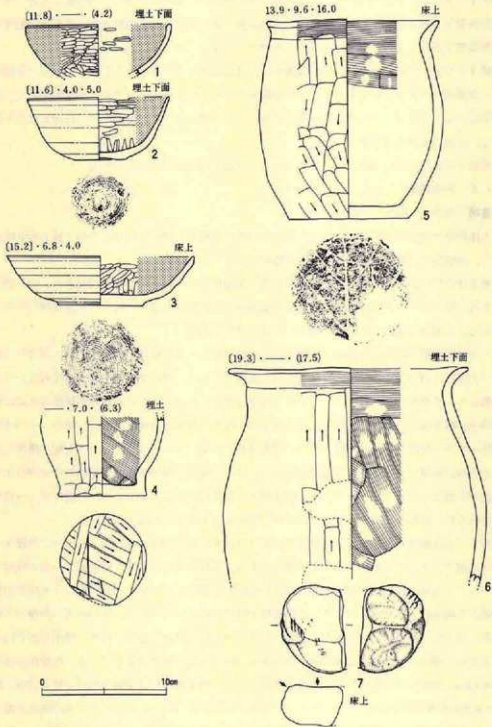
に貼り床を施している。またカマドの周りと東壁側には堅い踏みしめが認められる。

カマドは北壁の中央部よりやや西寄りに設置され、角礫を「」字状に組み、その上を褐色シルトで被覆した焚口部と袖部からなっている。燃烧部天井の一部は崩壊し、上面を覆ったシルトの大半はすでに流出している。袖部は長さ20cm~30cm、幅10cm~15cm大の角礫を左に3個、右に2個使用しているが、いずれも燃烧部内側に八字状に倒れている。煙道寄りの角礫の上には、天井部の石を固定するために使用されたとされる長さ10cm、幅7cmの石が2個あり、その周りはシルトで覆っている。燃烧部には径45cm×55cm、厚さ7cmの楕円形を呈す焼土の形成がある。焼土煙道寄りの前方中央部には支脚に使用した長さ12cm、幅5cmの石が8cm前後握りこんで据えられ、その上には煮炊きの際に土器を安定するために使用したと思われる径10cm、厚さ2cmのや、楕円形の石が1個置かれてある。煙道は僅かに上り勾配を呈し、遺構の外に1.4mのび煙出し部へと続く。煙道は耕作による擾乱削平が著しいためにくりぬき式かおりこみ式なのかは不明であるが、他の遺構と同様にくりぬき式であろうと思われる。煙出し部の深さは17cmである。

柱穴は3個P₁(径23cm×42cm、深さ38cm)、P₂(径50cm×75cm、深さ48cm)、P₃(径33cm×50cm、深さ57cm)検出され、形状は長方形ないし楕円形である。南東コーナー部は削除されているため不明であるが、本来は4本柱であろう。周溝はカマド部分を除いて幅10cm~15cm、深さ5cm~15cmで全周する。貯蔵は確認されない。

遺物 (第97図、写真図版82)

床上と埋土から、土師器の坏と甕、砥石が出土している。



第97图 I II-4住居址出土遺物

環1～3はロクロ使用である。1は現存1/4位の体部～口縁部の破片で、内外面とも篋ミガキ調整後黒色処理を施している。2と3の内面は篋ミガキ調整後黒色処理され、底部は回転糸切り無調整である。2の口縁部は直線的に外傾している。

甕4～6はロクロ不使用で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。4は体部下半～底部破片で多少歪みがあり、底部は全面篋ケズリされている。4はや・小型のもので、体部中位に最大径を有し、底部は木葉痕である。6は体部中位～口縁部破片で、口縁部は強く外反し、体部は球胴形を呈す。

砥石7は長さ6.9cm、幅4.7cm、厚さ3cmで、3面に使用痕跡が認められる。

I II-6 住居址

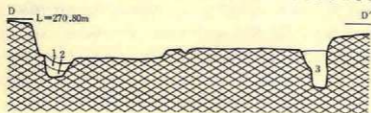
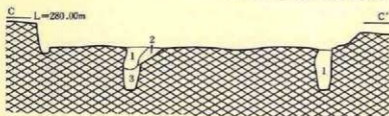
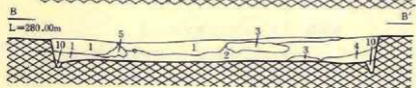
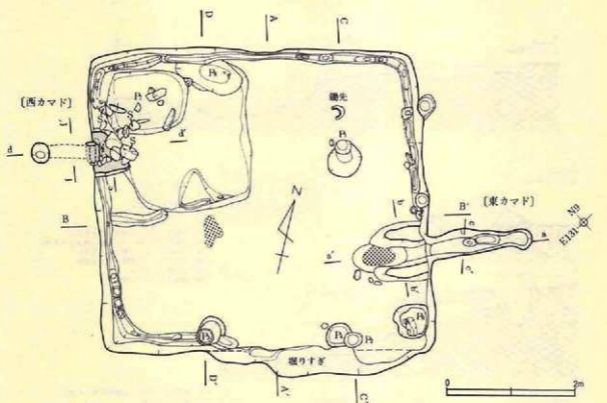
遺構 (第98図、写真版25)

この住居址は調査区東部のI II区に位置している。規模は4.70m×5.15mのや・長方形気味を呈し、南壁側の一部は耕作による削平・攪乱を受けている。

埋土は粒形0.2cm～0.5cm大の浮石を含む黒～黒褐色シルト質土の10層で構成され、や・堅くしまる。壁の高さは東壁37cm、西壁39cm、南壁20cm、北壁37cmを測り、床上から急な傾斜で立ち上がる。床面は全体的に貼り床が施され、ほぼ平坦である。

カマドは東壁と西壁の2箇所に設置されている。東カマドは東壁中央部からや・南寄りにあり、大部分は耕作による削平・攪乱のために崩壊している。残存する袖部は南部浮石混じりの褐色シルトで構築されているが、すでに大部分は流出している。右袖部前方燃焼部寄りには長さ13cm、幅6cmの角礫が1個据えられてあることから、本来は角礫を門字状に組み、その上を褐色シルトで被覆したものと思われる。煙道は長さ1.68mあり、緩やかな上り勾配で煙出し部へと続き、側壁は火熱による赤色変化を示している。煙出し部は僅かに下端部だけが残存する。煙道天井部はくりぬき式かほりこみ式かは削平・攪乱のために不明である。燃焼部は4cm程掘り窪められ、径30cm×50cm、厚さ8cmの楕円形状を呈す焼土が形成されている。

西カマドは西壁中央部からや・北寄りにあり、長さ20cm～40cm、幅10cm～20cm大の角礫を門字状に組み、その上を褐色シルトで被覆してある。角礫は煙道部寄りの原位置に一部が残存するのみで、他は燃焼部内側に重さなるように崩壊し、攪乱している。また袖部には土師器の甕の破片を補強材として用いている。燃焼部の天井には長さ30cm～40cm、幅10cm大の角礫が3個残存している。煙道はくりぬき式で、緩やかな上り勾配で煙出し部へと続き、煙出し部で14cm程下がる。煙出し部は径27cm×30cm、深さ8cmの円形土坑が掘りこまれている。燃焼部は径30cm×40cm、厚さ3cmの楕円形を呈す焼土が形成され、煙道寄りには支脚に用いた長さ17cm、幅6.5cm大の角礫が据えられている。西カマドの周りには規模2.3m×2.4m、深さ12cmの隅丸不整形を呈す浅い掘りこみがあり、床面は平坦で堅くしまり、下面から西カマドの崩壊した角礫、

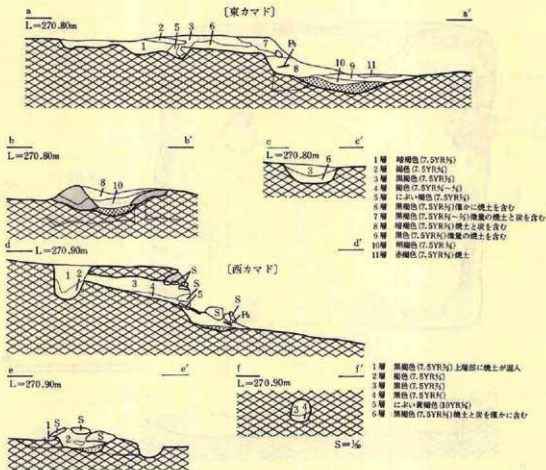


- 1層 褐色(7.5YR 1/4)
- 2層 黒褐色(7.5YR 1/1-2)
- 3層 褐色(7.5YR 5)
- 4層 暗褐色(7.5YR 4)
- 5層 濃い褐色(7.5YR 3)
- 6層 褐色(7.5YR 4) 焼物の灰が混入
- 7層 褐色(7.5YR 4-5)
- 8層 褐色(7.5YR 4)
- 9層 褐色(7.5YR 4)
- 10層 黒褐色(7.5YR 2)

- 1層 黒褐色(7.5YR 1/1-2)
- 2層 黒褐色(7.5YR 1/1)
- 焼物の灰が混入
- 3層 褐色(7.5YR 5)

- 1層 黒褐色(7.5YR 2)
- 2層 褐色(7.5YR 4)
- 3層 黒褐色(7.5YR 2)

第98図 I II-6住居址



第99図 I II-6住居址カマド

土師器の坏と甕の破片を出土する。西カマドに伴う施設であろうが用途は不明である。

両カマドの使用時期差は出土状況等からは不明であるが、燃焼部の焼土は東カマドの方が西カマドより多く堆積が認められる。

P №	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	22×24	21×28	22×26	34×35	19×20	50×53	98×123	50×88
深さ cm	65	67	61	19	31	10	22	23

穴は大小7個検出され、柱穴は形状・位置的にP₁・P₂・P₃である。P₄は不整円形状を呈し、埋土から炭と土師器破片を出土し、開口部の一部は灰黄褐色シルトで貼られていることから貯蔵穴かと思われる。P₅は隅丸長方形で全面灰黄褐色シルトで貼っており、その上に西カマドを構築していることから、西カマド使用時にはすでに廃棄されていたことがいえる。用途は不明

である。

周溝は幅10cm～15cm、深き16cm～26cmで、カマド部分と南壁側の一部を除いて巡っている。

遺物 (第100図、写真図版83)

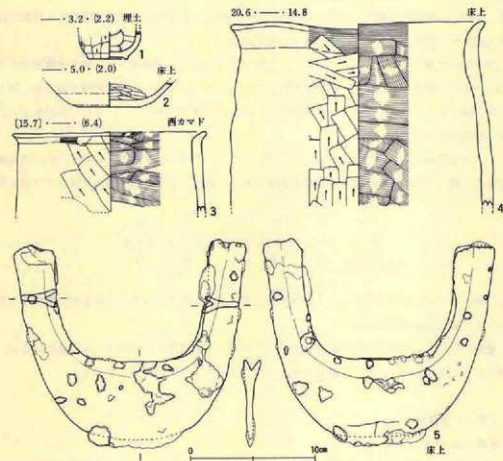
主に床上から土師器と鉄器が出土している。土師器の器種は環、甕、手づくねがある。

環2はロクロ使用で、内面は篋ミガキ調整、底部は回転糸切り無調整である。環は細破片が多く図化することはできないが、内面黒色処理と非黒色処理とがある。

甕2と3はロクロ不使用で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。口縁部はいずれも外反している。4は全体に歪みが著しく、口縁はや・液状を呈す。

手づくね1は口縁部が欠損し、内外面とも指ナデ調整を施している。

鉄器5は縦15.8cm、横18.65cm、刃厚0.7cmのU字形を呈す鋤先である。木質部の風呂と刃先の接続部内側には、V字状の溝が巡っている。



第100図 I II-6住居址出土遺物

ⅠⅢ-1 住居址

遺構 (第101図、写真図版26)

この住居址は調査区の東部に位置し遺構の1/3(北東側)は調査区域外に存在するために詳細な規模・形態は不明である。検出された西辺等から3.3m×3.6m前後の隅丸方形であろうと推定される。南西コーナーはⅠⅢ-51土坑、北西コーナーはⅠⅢ-52土坑、東側はⅠⅢ-2住居址と重複しており、新旧の関係は①土坑が一番新しく、②ⅠⅢ-2住居址、③ⅠⅢ-1住居址の順に古くなる。

埋土はブロック状の十和田a降下火山灰を含む黒色シルト質土主体の4層に大別され、壁際にはふい赤褐色焼土の堆積が認められる。壁の高さは平均30cm前後で、床上からや、急な傾斜で立ち上がる。床面は多少の凹凸があり、堅くしまっている。床上10cm~12cmには笠状の炭化物、炭化材、木炭、焼土粒等が遺構全体を覆うように厚さ10cm前後のレンズ状に堆積している。これらの堆積物は埋土の様相から、住居址が廃棄され、ある程度土砂等に埋まった時期に投げ入れられ、燃やされたものであろうかと思われる。

カマドの大部分は調査区域外に存在し、北壁東寄りの床上に燃焼部下端の焼土が検出されるのみである。焼土の半分以上は調査区域外に存在するために規模・形態は不明であるが、厚さは約3cmである。焼土の上面には長さ10cm~15cm大の角礫が3個あり、いずれも火熱を受け、や・赤色変化を生じている。

小穴は4個検出され、形状・位置的にみてP₁とP₂が当遺構に伴う柱穴であろう。P₁は隅丸方形で、埋土上面に僅かに焼土の堆積が認められる。P₂は円形で断面は僅かにフラスコ状を呈

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	32×36	25×26	32×44	58×68	77×90
深さ cm	50	36	14	22	60

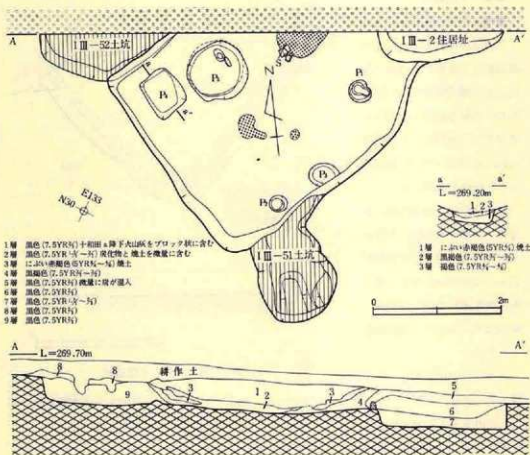
し、埋土に十和田a降下火山灰、土師器の甕片を含む。位置的には多少ずれるが貯蔵穴かと思われる。周溝は確認されない。

遺物は埋土から土師器の甕の破片が出土しているが、細破片のため図化できるものはない。甕はロクロ不使用のもので、内面は匏ナデ、外面は匏ケズリ調整を施している。

ⅠⅢ-2 住居址

遺構 (第101図、写真図版26)

この遺構は調査区の東部に位置し、大部分は調査区域外に存在するために規模・形態は不明である。検出された南西コーナーは隅丸を呈する。またⅠⅢ-1住居址と重複しており、新旧



第101図 I III-1・2住居址

の関係は当遺構が切っていることから(新)I III-2住居址(旧)I III-1住居址となる。

埋土は黒色シルト質土の3層に大別され、中に十和田a降下火山灰の混入は認められない。壁の高さは南西コーナーで26cmを測り、床上から急な傾斜で立ち上がる。検出された床面は平坦で、や・しまっている。

カマド、柱穴、貯蔵穴、周溝は調査区域内では確認されないが、調査区域外に存在する可能性もある。

遺物は埋土から土師器の甕の破片を数個出土しただけで、図化できるものはない。甕は口クロ不使用である。

J II-1 住居址

遺構 (第102図、写真図版26)

この住居址は調査区東部の緩斜面上に位置し、遺構の半分以上は圃場整備の際に削除され、詳細な規模・形態は不明である。検出された西辺は3.1m、南辺は2.7mで、南西コーナーは隅丸を呈する。

埋土は粒形5mm大の浮石を含む、黒褐色土主体の5層に大別される。壁の高さは西壁55cm、南壁32cmを測り、床から急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、比較的堅くしまる。

カマドは不明であるが、削除された北壁か東壁に存在したと思われる。周溝は一部途切れる箇所もあるが幅15cm～20cm、深さ5cm～12cmで巡っている。柱穴と貯蔵穴は確認されない。

遺物は埋土から数個土師器の破片を出しただけで、図化できるものはない。

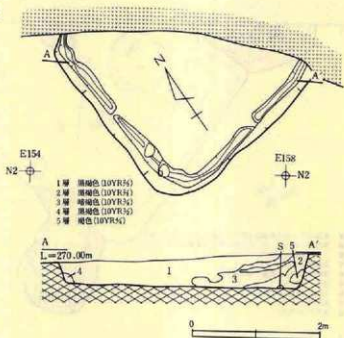
K II-1 住居址

遺構 (第103図、写真図版27)

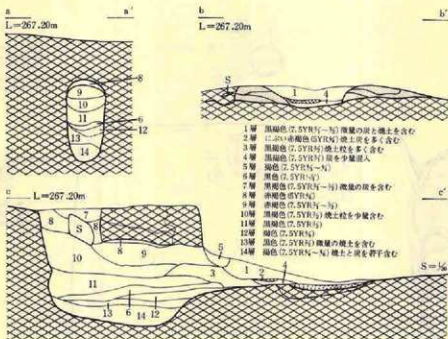
この住居址は調査区東端部の緩斜面上に位置している。南側はK II-2住居址と隣接し、北側はK III-1住居址とカマド煙道の一部が重複し、当遺構が切られていることから新旧の関係は(新) K III-1住居址(旧) K II-1住居址となる。規模は5.40m×5.45mのや、重んだ隅丸方形を呈す。

埋土は全体に炭を含む、黒褐色シルト質土主体の4層に大別される。壁の高さは東壁31cm、西壁44cm、南壁47cm、北壁53cmを測り、床から直に近い急な傾斜で立ち上がる。西壁側は最近の土坑で攪乱されている。床面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦である。

カマドは北壁中央部や、西寄りに設置され、大部分は崩壊し、僅かに袖部と燃焼部が残存する。袖部は褐色シルトで構築し、中に補強材として小礫と土師器の甕の破片を使用している。



第102図 J II-1 住居址



第104図 K II-1 住居址カマド

天井部の構造は崩壊のため不明である。煙道はくりぬき式で、燃焼部から緩やかな勾配で下がり、約55cmの所より、一段低い(28cm前後)溝状を呈し煙出し部へと続いている。くりぬき式の煙道横断面は径28cm×60cmの長楕円形で、上面は火熱により赤色変化をしている。煙出し部は径48cm、深さ80cmの円形土坑が掘りこまれ、埋土上部には長さ40cm、幅18cmの二等辺三角形の礎が埋設している。この礎は埋土状況等から、遺構が廃棄された後に投げ入れられたものであろう。燃焼部は径55cm×64cm、厚さ5cmの円形を呈す焼土の形成がある。

小穴は8個検出され、柱穴は埋土状況・配置等からP₁・P₂・P₃である。柱穴は3本しか確認

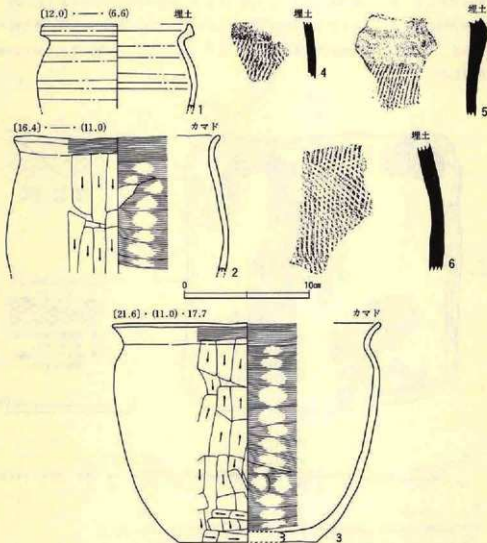
P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	23×24	25×30	20×24	32×35	75×115	90×115	50×50	18×25
深さcm	10	12	13	55	16	43	25	30

されなかったが、本来は4本あったと思われる。貯蔵穴は位置的にP₇であろう。P₄はカマド袖部下端から検出され、カマド構築前の小穴で、遺構に伴うものかは不明である。P₂とP₆は遺構埋土と類似し、遺構に伴う何んらかの施設と思われるが用途は不明である。周溝は東壁側と南壁側の一部だけに幅10cm~20cm、深さ10cm~15cmで巡る。

遺物 (第105図、写真図版84)

土器は埋土からの出土が大部分を占め、器種は土師器と須恵器の變がある。

甕1～3は土師器である。1はロクロ使用の小型甕で、口縁部は外反し、口唇部を上方にか
るく引き出している。2と3はロクロ不使用で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施して
いる。3の口縁部は外反し、底部は篋ケズリされている。4～6は須恵器で、内面は篋ナデ、
外面は叩き目である。



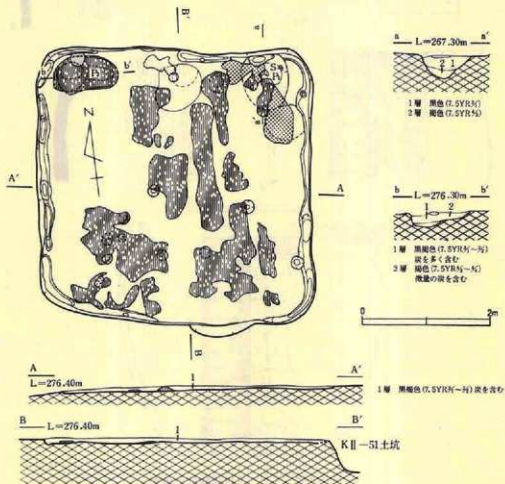
第105図 K II-1 住居址出土遺物

K II - 2 住居址

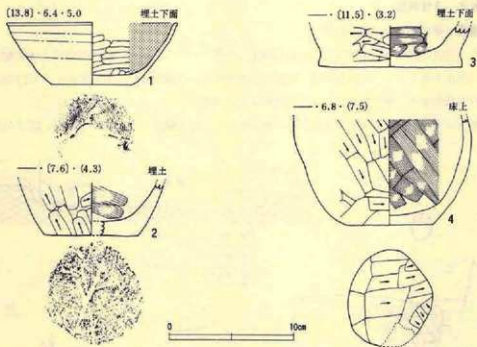
遺構 (第106図、写真図版28)

この住居址は調査区の東端部に位置し、K II - 1 住居址と隣接している。遺構の上部は圃場整備の際に削平され、下層部が僅かに残存するだけで、規模は4.25m × 4.30mのやや重む隅丸方形を呈す。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で構成され、粒形5mm大の浮石と炭を含む。壁の高さは6cm ~ 10cmであるが、本来の検出面はもう少し上面であろう。床面は多少の凹凸はあるものの、ほぼ平坦で堅くしまる。当住居址は焼失家屋で床上に多量の炭化材、管状の炭化物、焼土粒の散在がある。炭化材は遺構の中央部に多く散在し、板状と棒状のものがあり、厚さ2cm ~ 3cmの板状のものが多く。



第106図 K II - 2 住居址



第107図 K II-2住居址

カマドの大部分は削平され、東壁北東コーナー寄りの床上に燃烧部下端の焼土の形成が僅かに認められる。焼土は径55cm×60cm、厚さ8cmの円形状を呈する。

小穴は11個検出されたがいずれも浅く、配置の点からも柱穴とはなりえない。周溝は南壁と北壁の一部で途切れるほかは幅10cm～20cm、深さ5cm前後で巡っている。北壁の北東コーナーと北西コーナー際には土坑 P₁ (径73cm×87cm、深さ35cm楕円形)、P₂ (径55cm×95cm、深さ17cm隅丸長方形) が検出され、P₁は形状・位置的に貯蔵穴と思われる。P₂は埋土と同じ堆積であるが用途は不明である。

遺物 (第107図、写真図版84)

埋土下面から土師器の坏と甕が出土している。量は僅少で破片が主である。

坏1はロクロ使用で、口縁部は直線的に外傾する。内面は篋ミガキ調整後に黒色処理され、底部は回転米切り無調整である。

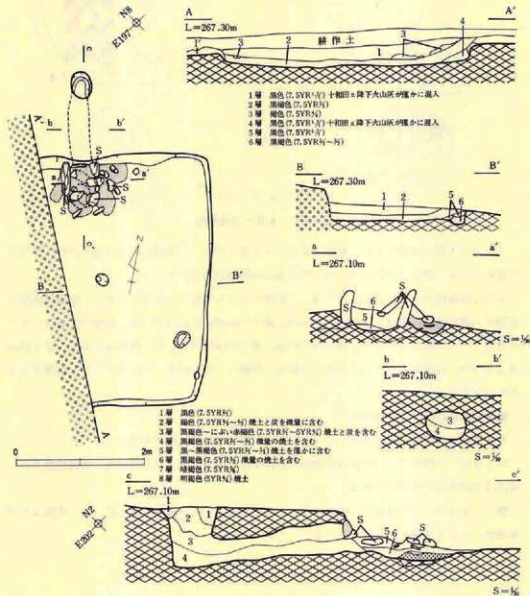
甕2～4はロクロ不使用で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。底部は2が木葉痕、3と4は篋ケズリされている。

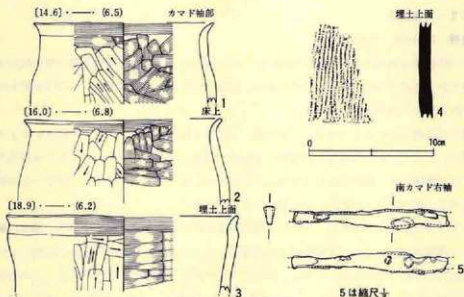
K II - 3 住居址

遺構 (第108図、写真版29)

この住居址は調査区東端部K区の緩斜面上に位置している。遺構の西側半分以上は調査区域外に存在するために、詳細な規模・形態は不明であるが、検出された東辺等から、一辺3.8m前後の方形を呈すと推定される。東辺側はや・胴張り状を呈す。

埋土は黒～黒褐色シルト質土の6層に大別され、1層と壁際の4層には十和田a 降下火山灰





第109図 KⅡ-3住居址出土遺物

がブロック状に混入する。壁は床上からやや急な傾斜で立ち上がり、高さは平均16cmである。床は八戸火山灰上面まで掘りこみ床面とし、ほぼ平坦でしまっている。

カマドは北壁に設置され、一部は耕作による削平擾乱を受けている。袖部は長さ25cm～30cm、幅6cm前後の角礫を芯材として据え、その上を褐色シルトで被覆しているが、シルトの大部分はすでに流出している。燃焼部には径35cm×50cm、厚さ7cmの不整形円形状を呈す焼土が形成され、中央に径17cm、厚さ2cmの木灰の堆積が認められる。また天井部に使用された角礫の一部は焚口側に崩れ散乱している。くりぬき式の煙道は遺構の外に長さ1.4mのび、燃焼部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続く。煙道の燃焼部寄りの側壁は火熱により赤色変化を生じている。煙出し部は径31cm×43cm、深さ47cmの土坑が掘られている。

小穴は2個検出されたが、埋土状況、位置的に柱穴とはなりえない。周溝、貯蔵穴は確認されない。

遺物 (第109図、写真図版85)

カマド周辺部を中心に土器と鉄器が出土している。土器の大部分は破片で量も僅少である。壺1～3はロクロ不使用の土器で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。1と2の口縁部はや、外反し、3は直立気味に立ち上がる。4は須恵器で、外面は叩キ目を施している。

鉄器5は刀子破片で、全体に錆の付着が著しい。現存長8.3cm、刃厚0.9cmである。

KⅡ-4 住居址

遺構 (第110図、写真図版29)

この住居址は調査区の東端部に位置している。遺構の東側半分は圃場整備の際に削除されているために詳細な規模・形態は不明である。検出された西辺と南辺から、一辺3.5m前後の隅丸方形を呈すと推定される。

埋土は黒色シルト質土の2層に大別され、下部の2層にはブロック状の十和田a降下火山灰が僅かに混入し、南壁側東寄りの壁際には、焼土粒混じりの褐色シルトが厚さ3cm前後で、レンズ状に堆積する。壁の高さは西壁60cm、南壁30cm、北壁50cmで、床上より緩やかな傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、やや堅くしまっている。

カマドは北壁側に設置され、大部分は圃場整備の際に削平攪乱を受けている。袖部は褐色シルトで構築されているが、下端部が4cm前後残存するだけであり、他は床上に流出している。燃焼部は少し掘り窪められ、径30cm、厚さ6cmの円形を呈す焼土の形成がある。くりぬき式の煙道は長さ1.2mあり、燃焼部から煙道中央付近までは僅かに上り勾配でゆき、そこを境に緩やかな下勾配となり煙出し部へと続く。煙出し部は削平攪乱が著しいために、掘られた土坑の形態は不明である。深さは45cmあり、径20cm～25cm大の円形を呈すと思われる。

小穴P₁(径20cm×22cm、深さ25cm)は1個検出されたが、埋土の状況等より遺構に伴う柱穴ではない。周溝は幅10cm～15cm、深さ10cmでカマド周囲を除いて巡っている。調査区域内においては貯蔵穴は確認されない。

遺物 (第110図、写真図版84)

埋土から僅かに土師器と須恵器破片が出土している。

甕1は現存1/5位の須恵器の底部破片である。2と3はロクロ使用の土師器で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。2の口縁部は頸部から直立気味に立ち上がる。3は底部破片で厚みがある。

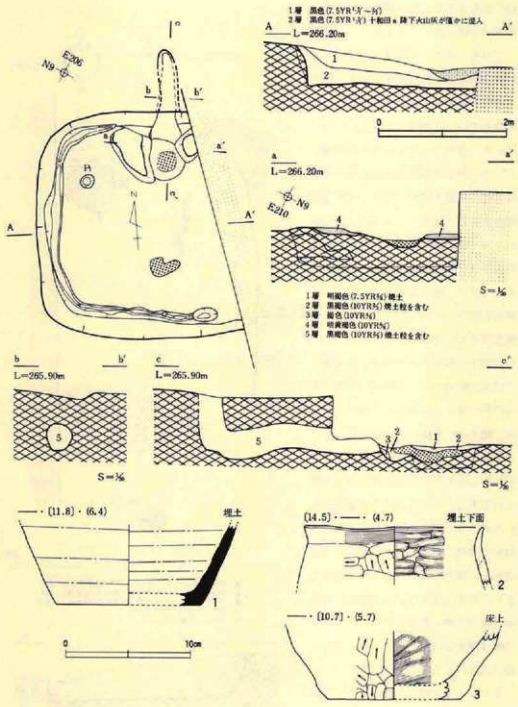
埋土からはロクロ使用の土師器の坏が出土しているが、細破片のため図化できるものはない

KⅡ-5 住居址

遺構 (第111図、写真図版29)

この住居址は調査区の東端部に位置し、遺構の東側半分以上は圃場整備の際に削除されているために詳細な規模・形態は不明である。検出された西辺は4.5m、南辺は2.8m、北辺は2.7mを測り、推定される規模は一辺4.5m前後の隅丸方形である。北西コーナーは最近の土坑による攪乱を受けている。

埋土は黒～黒褐色シルト質土の5層に大別され、1層から3層には十和田a降下火山灰がブロック状に混入している。壁の高さは西壁67cm、南壁36cm、北壁48cmで、床上からやや急な傾

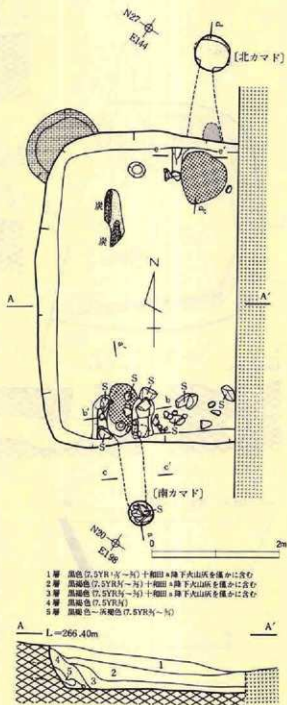


第110図 K II-4 住居址・出土遺物

斜で立ち上がる。床は地山の八戸火山灰を30cmほど掘りこみ平坦にし、使用している。また、北壁寄りの床上からは炭化材と炭化物が出土する。

カマドは南壁と北壁側の2箇所に設置されている。南カマドは南壁の南西コーナー寄りであり、大部分は崩壊している。袖部は長さ15cm～25cm、幅15cm前後の角礫を芯材に据え、その上を褐色シルトで被覆しているが、大部分のシルトは流出している。芯材の角礫の大半は欠落し、煙道寄りに数個残存するだけで、他は左袖東側の床上に土師器の破片とともに散乱している。燃焼部は径50cm×65cm、厚さ8cmの楕円形の焼土が形成されている。煙道寄りの焼土の前方には、径40cm、深さ10cmの円形の落ちこみがあり、底に長さ6cm、幅5cmの角礫を3cmほど掘りこんで据え、その上には支脚に使用したと思われる小型の土師器の壺が伏せて置かれてある。くりぬき式の煙道は長さ1.35mあり、燃焼部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続く。煙出し部は径36cm、深さ58cmの円形土坑が掘りこまれ、埋土には長さ15cm～20cm、幅5cm前後の角礫が充填している。これらの礫は埋土状況から廃棄された後に、投げ込まれたものであろう。

北カマドは北壁中央部からやや東側にあり、大部分は削平・攪乱され、袖部の一部と燃焼部だけが僅かに残存す



- 1層 黒色(7.5YR4/1～2)十和田+降下火山灰を混かに含む
- 2層 黒褐色(7.5YR3/1～2)十和田+降下火山灰を混かに含む
- 3層 黒褐色(7.5YR3/1～2)十和田+降下火山灰を混かに含む
- 4層 黒褐色(7.5YR3/1)
- 5層 黒褐色～灰褐色(7.5YR3/1～2)

第111図 K II-5住居址

るだけである。袖部は褐色シルトで構築され、右側袖部は圍場整備の際に削除されている。燃焼部は径75cmの不整形円形状を呈し、厚さ6cmの焼土が形成されている。煙道は長さ1.7mあり、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続く。天井部は崩壊しているものの本来はくりぬき式であろうと思われる。また燃焼部寄りの煙道下面には灰黄褐色粘土が貼りつけてある。煙出し部は多少擾乱があり径55cm、深さ68cmの円形土坑が掘られている。

2基のカマドはい

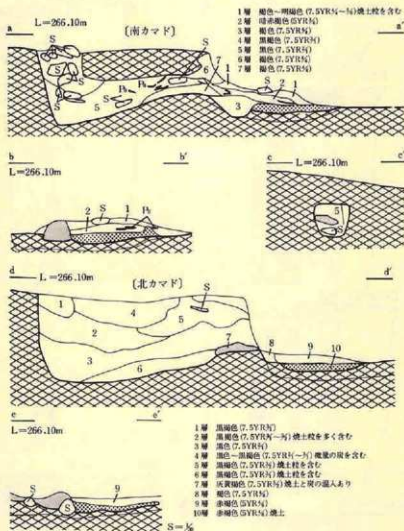
ずれも崩壊・削平・流出のために残存状態は悪く、使用時期に差があるものか是不明であるが、燃焼部焼土の堆積状況と残存形態等から、ほぼ同時使用かと推定される。

調査区域内においては柱穴・周溝・貯蔵穴は確認されない。

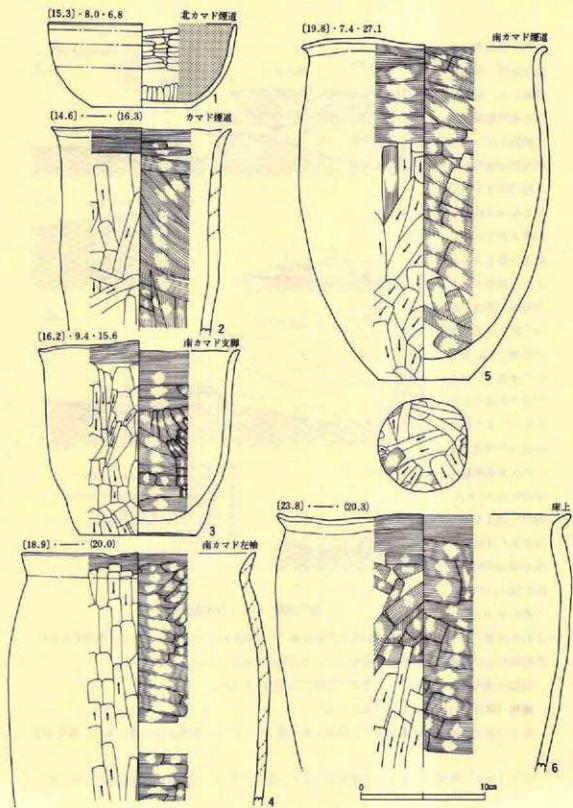
遺物 (第113~115図、写真図版85・86)

南カマドと西壁寄りの床上から土師器が多く出土している。器種は坏と甕があり、破片が多い。

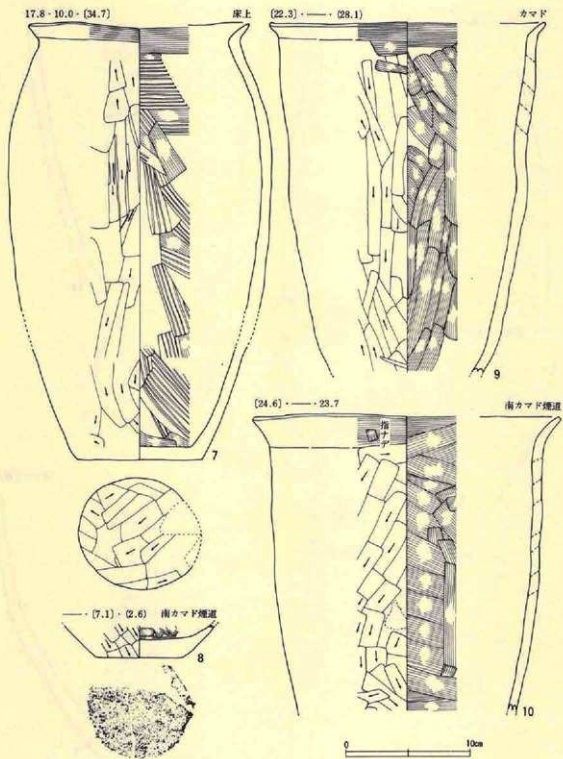
坏1はロクロ使用で、北カマド煙道埋土からの出土である。口縁部は体部中位から直立的に



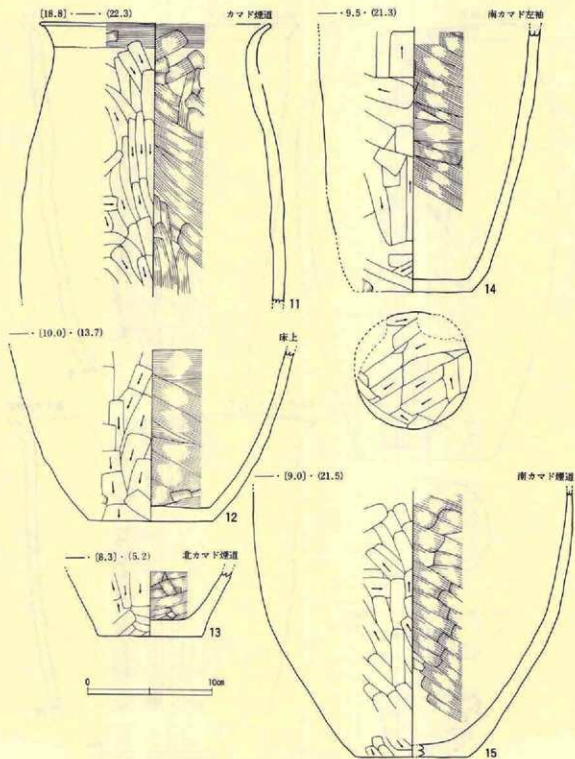
第112図 K II-5住居土カマド



第113図 K II-5住居址出土遺物(1)



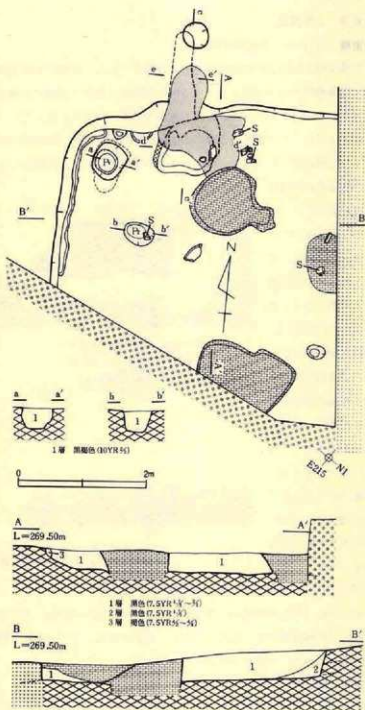
第114図 K II-5住居址 (2)



第115図 K II-5住居址出土遺物 (3)

立ち上がり、内面は篋ミガキ調整後黒色処理を施している。

壺2～15はロクロ不使用である。2と3の口縁部は体部から直立的に立ち上がり、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。3はや・小型のもので、南カマド支脚に使用されている。4は現存1/3以下の体部中位～口縁部の破片で、輪積痕が明瞭に認められる。5と6の口縁部は外反し、外面上位は篋ナデ、中位～下位は篋ケズリ調整である。5の底部は篋ケズリされている。7は大型のもので、口縁部は強く外反する。内面はハケメと篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。底部は一部欠損しているが篋ケズリされている。8は底部破片で、木葉痕である。9～11は底部が欠損している。12～15は体部中位～底部の破片で、底部は篋ケズリ



されている。

K II-6 住居址

遺構 (第116図、写真図版30)

この住居址は調査区の東端部K区に位置している。遺構の南側半分は調査区域外にあり、東側は圃場整備の際に削除されているために詳細な規模・形態は不明である。検出された西辺と北辺から、一辺4.5m~4.8mの隅丸方形を呈すと推定される。

埋土は黒色シルト質土の3層で、上面は攪乱が著しい。壁の高さは平均35cmを測り、床からや、急な傾斜で立ち上がる。床面はごく最近改葬された土坑墓等による攪乱を受け、多少の凹凸はあるもののほぼ平坦である。

カマドは北壁の北西コーナー寄りに設置され、大部分は崩壊・流出し僅かに燃焼部だけが残存する。

燃焼部は50cm×60cm

の不整形形状を呈し、

厚さ8cmの焼土が形

成されている。袖部

は下端部の褐色シル

トだけが残存する。

煙道はくりぬき式で、

多少凹凸のある緩や

かな下り勾配で煙出

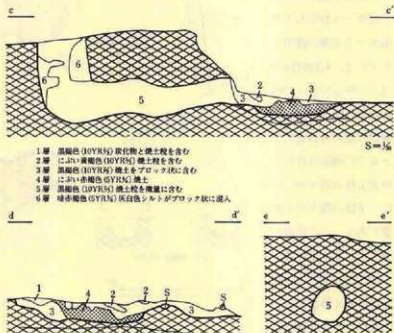
し部へと続く。煙出

し部は径38cm、深さ65cmの土坑が掘られている。

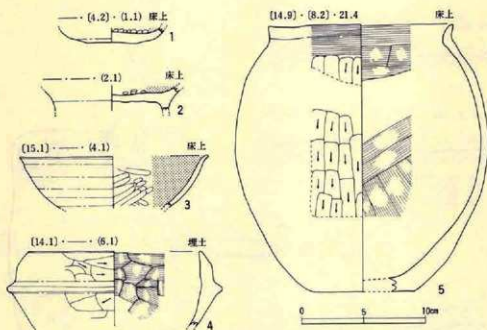
小穴はP₁(径34cm×35cm、深さ31cm)・P₂(径35cm×50cm、深さ32cm)の2個が検出され、位置的にP₁が遺構に伴う柱穴であろう。周溝は北西コーナーから西壁側に幅10cm、深さ6cm前後で巡っている。貯蔵穴は確認されない。

遺物 (第118図、写真図版87)

床上と埋土から土師器が出土している量は僅少で、大部分は破片である。器種は環、甕、甗の3種類がある。



第117図 K II-6住居址カマド



第118図 KⅡ-6住居址出土遺物

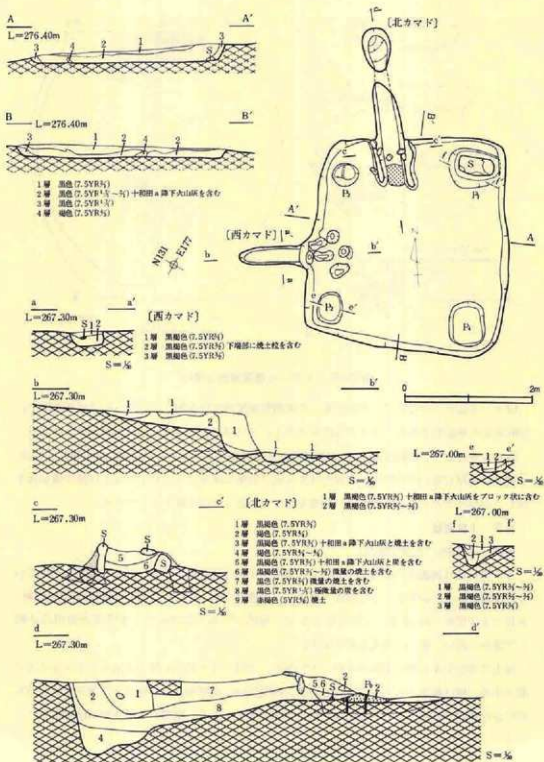
環1～3はロクロ使用で、内面は寛ミガキ調整後黒色処理を施している。1は底部破片で、回転糸切り無調整である。2は高台破片である。3は現存1/4位の破片で、口縁部は外反する。甕4は無底式で、内面は寛ナデ、外面は寛ケズリ調整がされている。現存は1/4の破片である。甕5は現存1/3以下の破片で、口縁部はや・直立気味に頸部より立ち上がる。体部は球形状を呈し、内面はナデ、外面は寛ケズリ調整を施している。底部は寛ケズリである。

KⅢ-1住居址

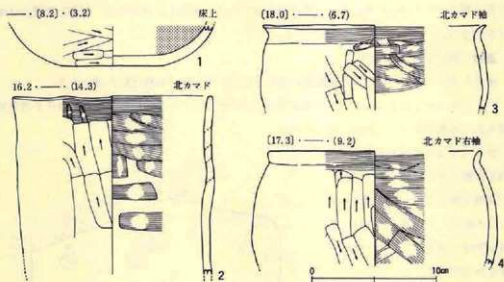
遺構 (第119図、写真図版31)

この住居址は調査区の東端部に位置し、遺構の上部は圃場整備の際に削平・攪乱を受けている。南西コーナーはKⅡ-1住居址と重複し、当遺構が切っていることから新旧の関係は(新)KⅢ-1住居址(旧)KⅡ-1住居址となる。規模は3.0m×3.25mで、東辺側が他辺に比較して僅かに長い、垂んだ隅丸台形を呈す。

埋土は黒色シルト質土主体の4層に大別され、2層には十和田a降下火山灰がブロック状で混入する。壁は削平のために浅く東壁12cm、西壁26cm、南壁20cm、北壁17cmを測り、床上から緩やかな傾斜で立ち上がる。床面は平坦で全体に堅くしまる。壁際の一部は貼り床が施されている。



第119図 K III-1 住居址



第120図 KⅢ-1住居址出土遺物

カマドは北壁と西壁側の2箇所に設置されている。北カマドは北壁の中央部からやや西寄りであり、大半は崩壊し軸部と燃焼部が残存するのみである。軸部は長さ15cm～20cm、幅6cm大の角礫を据え、その上を褐色シルトで被覆しているが、シルトの大部分は流出し、角礫は煙道寄りの2個だけ残存し他は欠落している。煙道は長さ1.8mあり、燃焼部から緩やかな下り勾配で焼出し部へと続く。煙道の天井部の大部分はすでに崩壊しているが、くりぬき式である。煙出し部は径43cm×70cm、深さ57cmの長楕円形状の土坑が掘られている。燃焼部には25cm×35cm、厚さ6cmの隅丸長方形の焼土が形成され、煙道寄りの焼土には土師器の甕の上半部破片が埋設している。埋設土器の前方には支脚に使用したと思われる長さ7cm、幅8cmの長方形の石が置かれてある。

西カマドは西壁の中央部からやや南寄りにあり、大部分は削除され僅かに燃焼部下端の焼土が残存するだけである。煙道は緩やかな上り勾配で煙出し部へと続くが、煙出し部と煙道上部は削平され構造等は不明である。2基のカマドの残存状態から、西カマドを廃棄したのち削除し、北カマドに造り変えを行なっている。使用時期は①西カマド②北カマドの順となる。

柱穴は4個検出され、P₁には長さ57cm、幅28cm大の角礫が埋設されている。P₂とP₄は貼り床

P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	58×81	41×50	35×40	55×70
深さ cm	27	14	10	29

を若干掘り下げた時点で検出され、 P_1 と P_2 ・ P_3 と P_4 は対角線上に対応する。周溝と貯蔵穴は確認されない。

遺物 (第120図、写真図版87)

床面と北カマドから、僅かに土師器の破片が出土している。器種は坏と甕がある。

坏1は床上から出土した、ロクロ不使用の底部細破片である。内面は磨滅しているが黒色処理され、外面は篋ケズリ調整を施している。

甕2～3はロクロ不使用で、内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。口縁部は2が直立、3は外反、4は外傾気味に立ち上がる。4の体部は球形状を呈す。

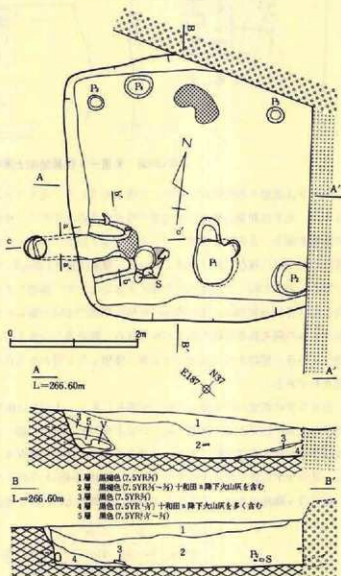
KⅢ-2住居址

遺構 (第121図、写真図版31)

この住居址は調査区東端部の緩斜面上に位置している。遺構の東側は圃場整備の際に削除され、北側の半分は調査区域外に存在するために詳細な規模・形態は不明である。検出された西辺と南辺から一辺3.7m前後の隅丸方形を呈すと推定される。

埋土は黒褐色シルト質土主体の5層に大別され、十和田a降下火山灰は2層と4層にブロック状で含まれる。

壁の高さは削除された東壁を除いて、西壁66cm、南壁60cm、北壁50cmと比較的深く、床上からやや急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で堅くしまっ

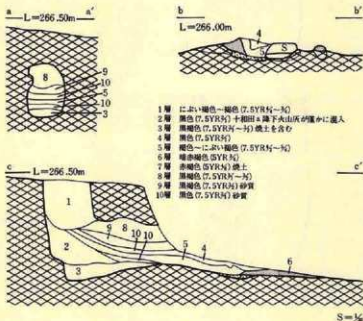


第121図 KⅢ-2住居址

ている。貼り床は一部に施され、北壁中央部寄りの床上には焼土が厚さ3cmで堆積している。カマドは西壁の南西コーナー寄りに設置されているが、大部分は崩壊している。袖部は下端部の褐色シルトが僅かに残存するのみで、大半は床上に流出・散在している。煙道はくりぬき式で長さ90cmを測り、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続き、煙出し部は径35cm、深さ77cmの円形土坑が掘りこまれている。燃焼部は径30cm×45cmの楕円形状を呈す焼土が、厚さ2cmで形成されている。

小穴は5個検出され、P₁はフラスコ状の横断面を呈し、開口部の一

部上面は黒色土と褐色シルト混土で板状に貼られている。位置的にみて貯蔵穴であろう。P₂は埋土に十和田a降下火山灰を含み、形態等から柱穴と思われる。P₃~P₅は浅い落ちこみで、柱



第122図 KⅢ-2住居址カマド

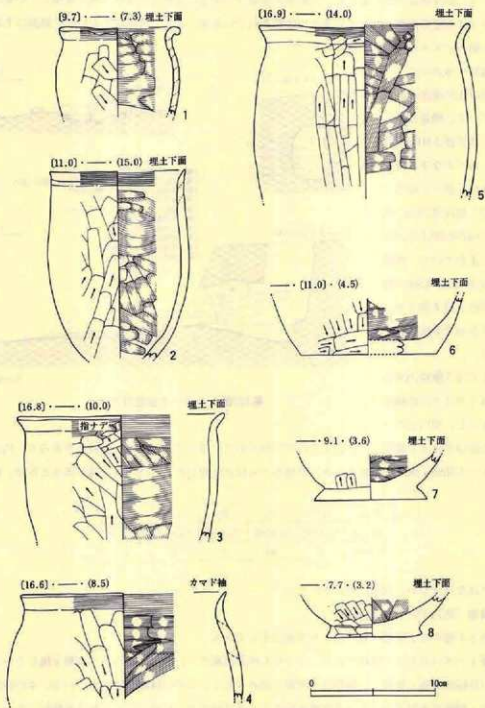
P No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	60×65	52×60	23×24	35×45	25×25
深さ cm	37	40	9	9	10

穴とはなりえない。周溝は確認されない。

遺物 (第123図、写真図版87)

埋土下面から土師器の甕の破片を少量出土している。

甕1~8はロクロ不使用である。いずれも内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。1の口縁部は強く外反し、輪積痕が明瞭に認められる。2の口縁部は直立している。4の体部はや、胴張りを呈する。6~8は底部破片で、6は砂が多く付着し、7と8は木葉痕である。



第123図 KⅢ-2住居址出土遺物

KⅢ-3住居址

遺構 (第124図、写真図版32)

この住居址は調査区東端部K区の緩斜面上に位置している。規模は3.65m×3.85mで、西辺が他の3辺に対して僅かに長い歪んだ隅丸台形を呈する。

埋土は黒褐色シルト質土主体の6層に大別され、1層には小ブロック状の十和田a降下火山灰が全体に混入している。壁の高さは東壁24cm、西壁40cm、南壁30cm、北壁36cmを測り、床上より急な傾斜で立ち上がる。床面は多少の凹凸があるものの平坦で、堅くしまる。また床上には炭化材・葦状の炭化物・焼土粒が遺構中心部に広い範囲で散在することから焼失家屋であろうと思われる。

カマドは北壁と南壁と2箇所に設置されている。北カマドは北壁中央部からやや東寄りにあり、大部分は削除され僅かに燃焼部下端だけが残存する。燃焼部は61cm×99cmの長楕円形を呈し、厚さ6cmの焼土が形成されている。煙道は僅かに下り気味の勾配で煙出し部へと続き、煙出し部は径50cm×52cm、深さ27cmの円形土坑が掘りこまれている。煙道上部は削平のために、くりぬき式かほりこみ式かは不明である。

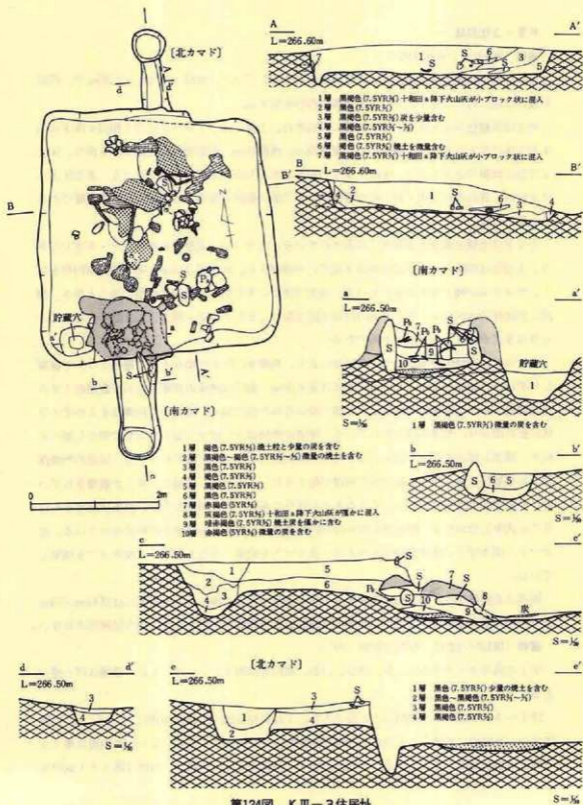
南カマドは南壁中央部からやや西寄りにあり、角礫を門字状に組み上面を褐色シルトで被覆した焚口部と袖部からなっている。袖部は長さ30cm、幅15cm前後の角礫を左右に数個据えその上を褐色シルトで被覆している。天井部に用いられた長さ54cm、幅28cmの角礫はまん中でく字状に折れ曲がり、燃焼部側に崩れている。煙道は燃焼部から緩やかな上り勾配で煙出し部へと続き、煙出し部は径45cm×55cm、深さ42cmの隅丸長方形の土坑が掘られている。煙道の燃焼部寄りの東壁には長さ70cm、幅20cmの角礫が据えられ、その上面には褐色シルトが被覆されている。煙道上部は削平のために、くりぬき式かほりこみ式かは不明であるが、出土状況等からほりこみ式かと思われる。燃焼部は径70cmの円形を呈し、厚さ3cmの焼土が形成されている。北カマドと南カマドには使用時期差があり。北カマドを廃棄したのち削除し、南カマドを構築している。

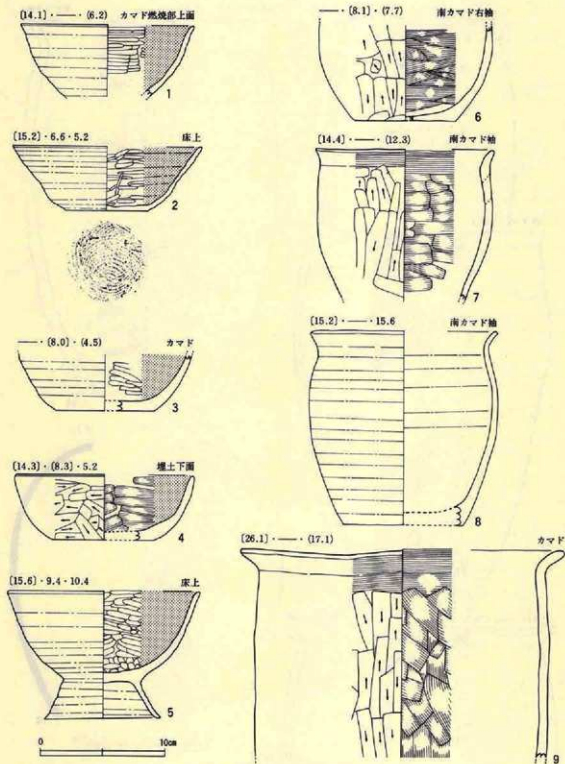
周溝は北壁側だけに幅12cm、深さ6cm～10cm前後で巡る。南カマドの西側には径44cm×54cm、深さ25cmの隅丸方形状の土坑が、形態・位置的にみて貯蔵穴と思われる。柱穴は確認されない。

遺物 (第125～127図、写真図版88・89)

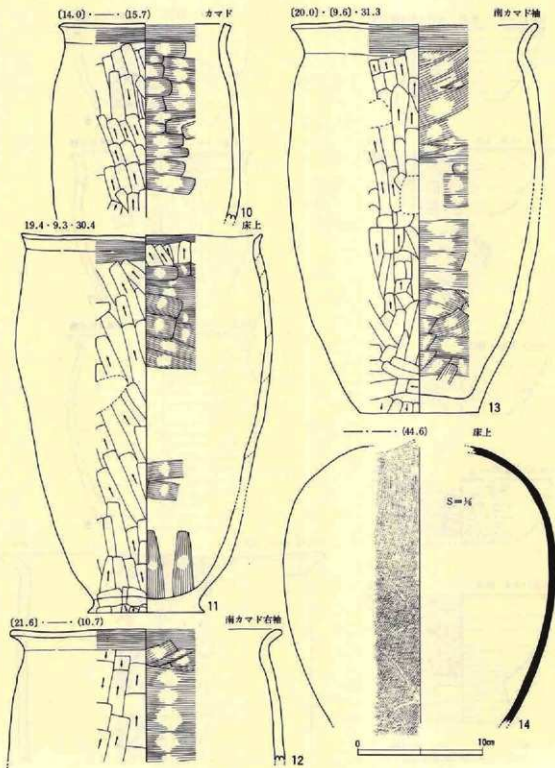
床上と南カマドを中心に土器、鉄器、石器、琥珀等が出土している。土器の器種は坏と甕がある。

坏1～3・5はロクロ使用の土師器である。1は現存1/2位で底部は欠損している。2の口縁部はや・直線的に外傾し、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。1～3の内面は篋ミガキ調整後黒色処理を施している。5は高台坏で、口縁部はや・外傾し、内面は篋ミガキ調整後





125図 KⅢ-3 住居址出土遺物(1)



第126図 KⅢ-3住居址出土遺物(2)

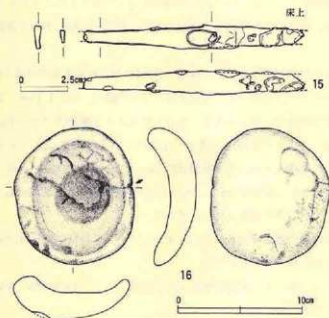
黒色処理を施している。4はロクロ不使用である。内面は篋ナデ調整後黒色処理され、外面は篋ケズリ調整を施している。底部は木葉痕で一部は欠損している。

甕は6～13までが土師器で14が須恵器である。8はロクロ使用で、口縁部は外反する。底部は欠損しているため調整は不明である。6・7・9～13はロクロ不使用で、いずれも内面は篋ナデ、外面は篋ケズリ調整を施している。6は体部下半～底部破片で、体部は球形状を呈する。7は輪痕が明瞭で、口縁部は外傾する。9・12・13の口縁部は外反し、10は頸部から外傾気味に立ち上がる。11は体部上半に最大径を有し、口縁部は外傾し、底部は木葉痕である。14は大型の須恵器の破片で、内面は篋ナデ、外面は叩キ目調整を施している。

鉄器15は両端部が欠損した刀子で、床上から出土している。現存長11.75cm、刃厚1.25cmで、錆の付着が著しい。

石器16は縦11cm、横9.5cm、厚さ2.2cmの楕円形状を呈し、内面は窪み煤が付着している。用途は灯明皿的なものかと思われる。

またカマド焚口部付近の床上からは琥珀の原石が出土している。大きさは子供の拳大程で、火熱を受けているため脆くなっている。



第127図 KⅢ-3住居址出土遺物(3)

3. 中世竪穴住居址

BⅡ-1住居址

遺構 (第128図、写真図版33)

この遺構は調査区最西端、BⅡ-2縄文時代住居址の西側に位置する。

形状は方形を呈し、一辺約3.7mの規模をもつ。出入口に伴う張り出しは構築されていない。埋土は黒色土の単層であり、上位に十和田a降下火山灰が微量ではあるがブロック状に包含される。

壁は床面から外傾し立ち上がる。壁高は西側で約20cm、東側で約5cmである。

床面は全体が堅くしまり凹凸が激しい。

炉は中央部から南東寄りに位置し、径約65cm×75cmのほぼ円形に焼土が分布する。これは床面下約4cm～6cmの低いレベルにあり、層厚約6cmのほぼレンズ状に火熱による赤色変化を受けている。

柱穴は計14本検出されているが、いずれも4壁際に沿って列をなす。これら柱穴の柱据え方の径は約18cm～38cm、掘り方の径約32cm～50cmである。据え方・掘り方の平面形は円形から楕円形を呈す。

これら柱穴のうち主柱穴は床面中央部に検出されたP₁₄を含む計9本で構成されると思われる。

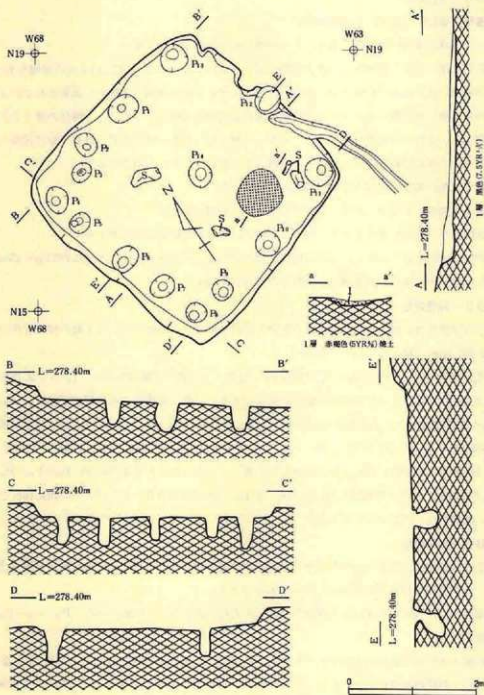
まず北壁際はP₁₃-P₁-P₄で構成され、柱据え方の芯々距離は、順に1.15m、1.8m 計2.95mとなり、1スパンの平均値は1.47mである。これと対比される南壁際はP₈-P₁₀-P₁₁で構成され、芯々距離は1.6m、1.4m、計3.0mとなり、1スパンの平均値は1.5mである。

西壁際はP₁-P₆-P₈で構成され、芯々距離は1.4m、1.4m、計2.8mとなり、スパンは一定している。これと対比される東壁際はP₁₁-P₁₀-P₁₃で構成され、芯々距離は1.35m、1.6m、計2.95mとなり、1スパンの平均値は1.47mである。

床面からは大小計18個の礫が検出されているが、いずれにも特徴的変化は認められなかった。この遺構から出土遺物は得られていない。

柱穴規模は、据え方、掘り方とも開口部最大径を計測したが、精査段階において多少の誤差が生じているものと思われる。

柱穴 No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	
規模 cm	据え方径	38	30	22	31	28	18	20	26	18	20	34	24	32	24
	掘り方径	50	35	35	43	35	45	40	32	32	40	42	40	40	40
	深さ	46	36	20	47	32	38	42	45	39	50	50	47	39	40



第128图 B II-1 住居址

BⅡ-3住居址

遺構 (第129・130図、写真図版33)

この遺構は調査区最西端、BⅡ-1中世住居址の南側に位置する。

形状はほぼ南北に長軸をもつ長方形を呈し、東西に約4.2m、南北に約6mの規模をもつ。この遺構には、出入口に伴う張り出しが北壁中央部と東壁南側隅の2箇所構築されている。この張り出しの位置と検出された計41個の柱穴を相関的に検討した結果、3棟分の建てかえが判明した。これらの住居址をここで、BⅡ-3a住居址、BⅡ-3b住居址、BⅡ-3c住居址と呼称する。これらの新旧関係については判断とする資料に欠き、不明である。

まず、各住居址に共有する事項について記述する。

埋土は褐色土をブロック状に包含する黒色土の単層である。

壁は床面から外傾し立ち上がる。壁高は西壁で約32cm、東壁で約12cmである。

柱穴は検出されていない。柱穴の柱据え方の径は12cm～15cm、掘り方の径は約23cm～45cmである。据え方、掘り方の平面形は円形から楕円形を呈す。

BⅡ-3a住居址

この住居址は北壁中央部の張り出しを伴うものである。この張り出しは1対の柱穴を伴い、間口約1.65m、奥行約1.4mの規模をもつ。

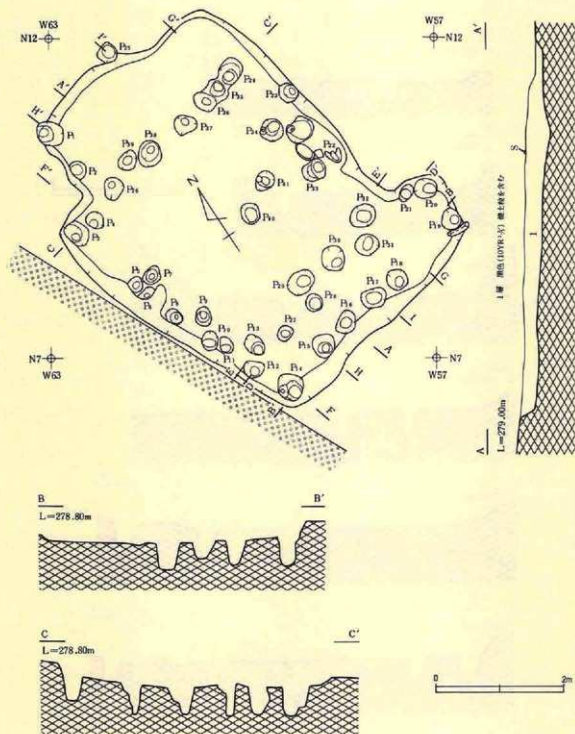
北辺の柱穴はP₁-P₁₁-P₁₂-P₁₁で構成され、柱据え方の芯々距離は0.65m、1.5m、0.75m、計2.9mとなり、1スパンの平均値は0.96mである。これと対比される南辺柱穴はP₁₁-P₁₂-P₁₁-P₁₁で構成され、芯々距離は0.75m、0.7m、1.2m、計2.65mとなり、1スパンの平均値は0.88mである。西辺柱穴はP₁-P₂-P₃-P₁₁で構成され、芯々距離は1.2m、1.0m、1.2m、計3.4mとなり平均値1.13mとほぼ一定している。これと対比される東辺柱穴はP₁₁-P₁₁-P₁₁-P₁₁で構成され、芯々距離は1.1m、1.0m、1.4m、計3.5mとなり、1スパン平均値1.16mとなり、西辺とほぼ同じスパンである。

BⅡ-3b住居址

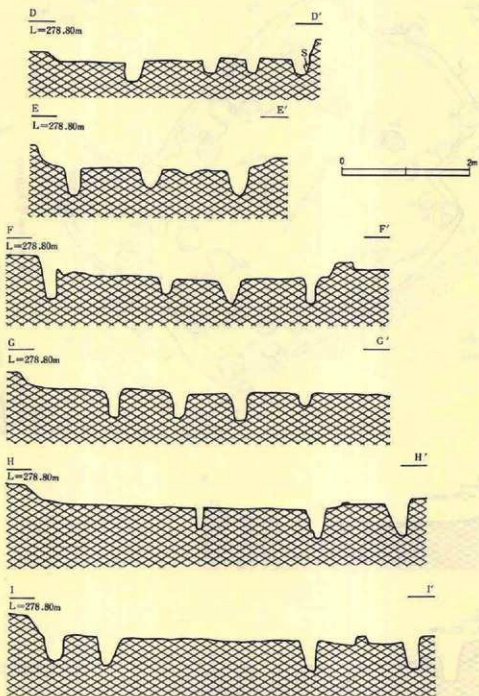
この住居址は、BⅡ-3a住居址と同様北壁中央部の張り出しを伴い、柱穴も南辺を除き、BⅡ-3a住居址に伴う柱穴を使用しているものである。

南辺の柱穴列は、BⅡ-3a住居址に使用された柱穴列よりやや内側にあり、P₁₁-P₁₁-P₁₁で構成される。

柱据え方の芯々距離は西辺でP₁-P₂-P₃-P₁₁の順に、1.2m、1.0m、1.0m、計3.2mとなり、1スパンの平均値は1.06mとなる。これと対比される東辺はP₁₁-P₁₁-P₁₁-P₁₁の順に、1.05m、0.95m、1.05m、計3.05mとなり、1スパンの平均値は1.02mとなる。



第129圖 B II-3住居址 (1)



第130图 B II-3住居址(2)

B II-3c住居址

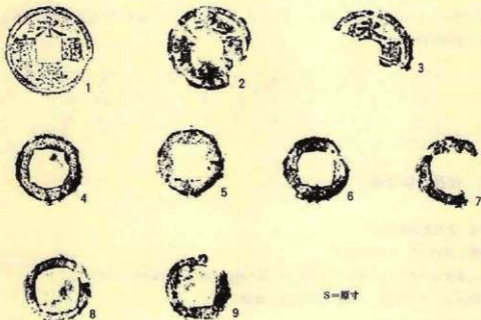
この住居址は東壁南側隅の張り出しを伴うものである。この張り出しは1対の柱穴を伴い、間口約1m、奥行0.7mの規模をもち、床面は非常に堅くしまっている。

南辺の柱穴はP₁₄-P₁₄-P₁₄で構成され、柱据え方の芯々距離は、1.35m、1.0m、計2.35mとなる。これと対比される北辺の柱穴はP₇-P₃₁-P₃₁で構成され、芯々距離は1.7m、1.7m、計3.4mとスパンは一定するが、南辺のスパンとは差異がみられる。

西辺の柱穴はP₂-P₂-P₂-P₁₁-P₁₄で構成され、芯々距離は、1.2m、0.8m、0.9m、1.2m、計4.1mであり、1スパンの平均値は1.03mである。これと対比される東辺の柱穴は、P₁₄-P₁₄-P₃₁-P₃₁-P₁₄で構成され、芯々距離は、1.05m、0.95m、1.05m、1.15m、計4.2mであり、

柱穴 No		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	
規模 cm	張り方径	23	20	32	18	不明	不明	不明	16	不明	14	10	不明	18	30	20	不明	不明	28	不明	不明	不明	不明
	張り方径	40	27	40	30	26	25	30	26	30	30	26	30	35	45	38	38	38	35	33	34	25	
	深さ	46	40	40	40	31	30	34	18	24	25	33	23	43	41	40	46	38	39	49	58	42	

柱穴 No		P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀	P ₄₁
規模 cm	張り方径	20	17	28	不明	25	不明	不明	34	30	30	25	20	24	不明	不明	22	30	20	25	25
	張り方径	54	30	34	23	35	25	30	40	41	36	40	38	35	35	35	35	45	35	30	30
	深さ	33	34	49	55	50	23	19	28	51	32	38	52	39	47	47	53	36	40	23	23



第131図 B II-3住居址出土遺物

1 スパンの平均値は1.05mとなり、西辺のスパンとの差はあまりみられない。

柱穴規模の計測方法は、BⅡ-1住居址と同じである。

遺物 (第131図、写真図版90)

出土遺物は、永楽通寶が床面から1枚、柱穴埋土から2枚、無文銭が床面から7枚得られている。いずれも銅製の鋳銭である。

CⅡ-2住居址

遺構 (第132図、写真図版33)

この遺構は調査区最西端、BⅡ-3中世住居址の東側に位置する。

この遺構には、中世の遺構として判断に値する資料に欠くが、カマド及び炉址が検出されなかったこと、BⅡ-1・BⅡ-3中世住居址に接近した位置にあり、埋土状況も類似することなどから、中世住居址として登録した。

形状は南北に長軸をもつ長方形を呈し、東西に約2.4m、南北に約3.3mの規模をもつ。

壁は床面から外傾し立ち上がる。壁高は西壁で約30cm、東壁で約3cmである。

埋土はやわらかい黒色土の単層である。

床面はやわらかく、ほぼ平坦である。床面には溝が検出されている。この溝は床面から東壁を切り、遺構外に約2m伸びて途切れる。規模は幅約20cm、深さ約8cmである。埋土は黒色土と黒褐色土で構成される。

柱穴状ピットは計9本検出されているが、この遺構に伴う柱穴及び柱穴配置は不明である。

出土遺物は得られていない。

柱穴 No	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
規模	径	15	20	30	20	28	24	25	25
cm	深さ	50	24	40	7	37	15	14	17

4. 住居址状遺構

CⅡ-21住居址状遺構

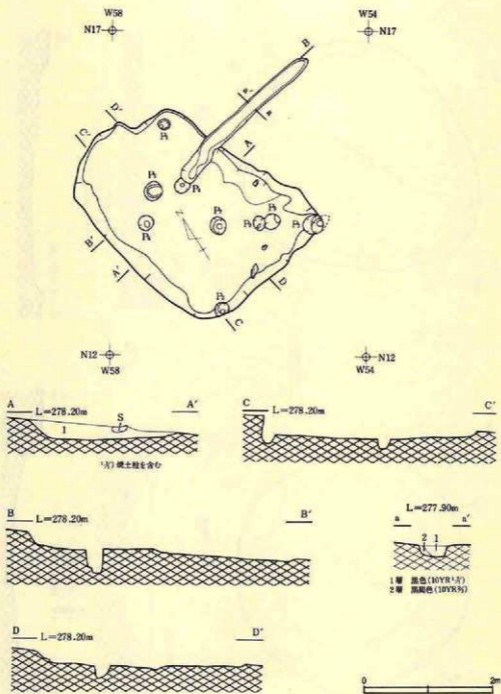
遺構 (第133図、写真図版34)

この遺構は調査区北西端寄り、BⅡ-2縄文時代住居址の南東側に位置する。

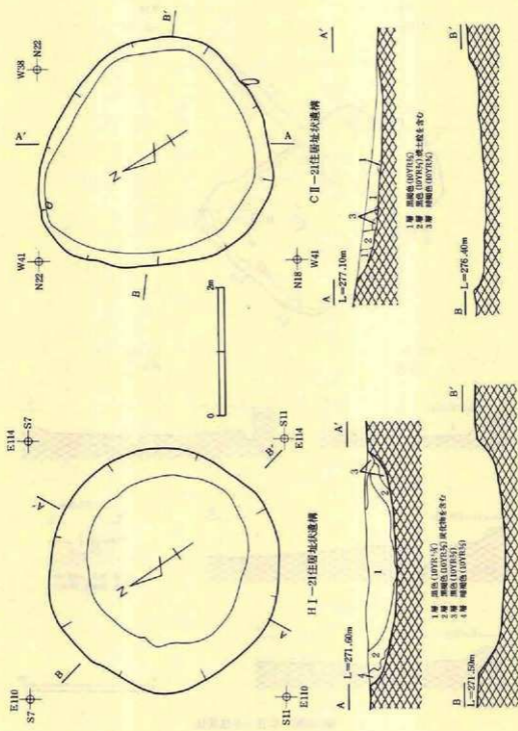
形状はほぼ円形を呈し、東西に約3.6mの規模をもつ。

埋土は黒褐色土の単層である。

壁は床面からゆるやかに外傾する立ち上がりを示す。壁高は北西側で約14cm、南東側で約16



第132图 C II-2住居址



第133圖 C II-21 · H I-21住居址狀遺構

cmである。

床面はやわらかく、平坦である。

炉址は検出されていない。又この遺構に伴う柱穴も検出されていない。

この遺構から、出土遺物は得られず、性格及び時期は不明である。

HI-21住居址状遺構

遺構（第133図、写真図版34）

この遺構は調査区南東寄り、GI-1縄文時代住居址の東側に位置する。

形状は円形を呈し、南北に約3.6mの規模をもつ。

埋土は、黒色土が中央部上位から下位にレンズ状に堆積し、その両面は黒褐色土で構成される。

壁は床面からゆるやかに外傾する立ち上がりを示す。壁高は南壁、北壁共約30cmである。

床面は堅くしまり、凹凸が認められる。

炉址及び柱穴は検出されていない。

この遺構から、出土遺物は得られず、時期は不明である。

5. 掘立柱建物跡

CII-6掘立柱建物跡（第134図）

この遺構は調査区北西端寄り、CI-2縄文時代住居跡の北側に位置する。

規模は、南北に長軸をもつ桁行3間、梁行2間で、桁行西面に廂をもつものである。

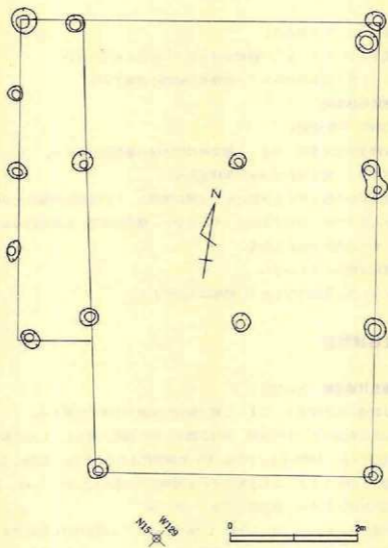
梁行北側間尺は4.7m、南側は4.4mである。桁行東側間尺は北から2.3m、2.5m、2.3mで、1スパンの平均は2.36mである。これと対比される西側間尺は北から2.2m、2.4m、2.4mで、1スパンの平均は2.33mであり、東側間尺のほぼ一致する。

廂の間尺は北から1.2m、1.2m、1.3m、1.4mで、1スパンの平均は1.27mである。

柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、規模は径約26cm～40cmである。埋土は黒色土の単層である。

EII-1掘立柱建物跡（第135図、写真図版36）

この遺構は調査区西部北東寄りの緩斜面上に位置する。桁行7間（11.30m）、梁行3間（5.70m）の東面に廂をもつ南北棟の掘立柱建物跡である。棟方向は北に対して約6度西偏している。身舎の桁行柱間寸法は西側A列北から1.3m+2.0m+2.0m+1.2m+1.2m+1.8m+1.8m（現行尺4.29尺+6.60尺+6.60尺+3.96尺+3.96尺+5.94尺+5.94尺）で、対応する東側D列の柱穴は不明なものが多く、間尺も曖昧である。梁行柱間寸法は北側A₁から1.5m+2.1m+2.1m（現行尺4.95尺+6.93尺+6.93尺）。廂柱間寸法はE列北から2.1m+5.9m〔E₁～E₄間は柱穴不

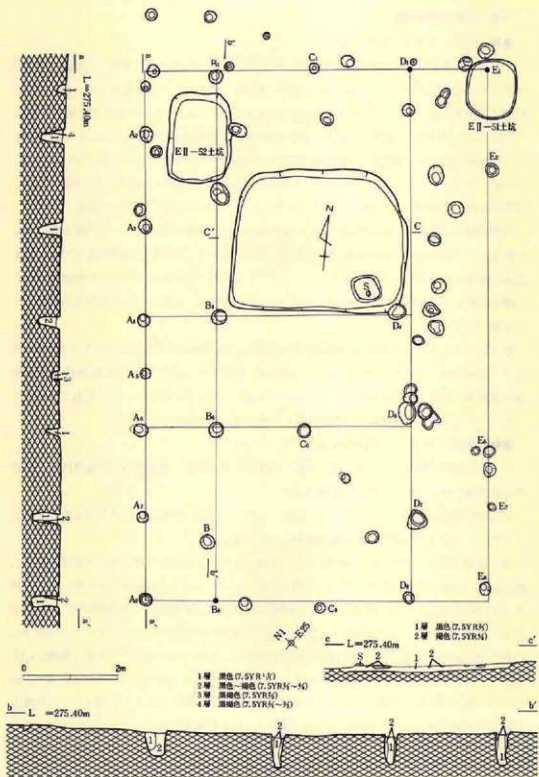


第134図 C II-6掘立柱建物跡

明] +1.2m +2.0m (現行尺6.93尺+19.47尺+3.96尺+6.60尺)である。

北側には縦3.0m×横3.7m、深さ12cmの隅丸長方形の土間があり、底面はほぼ平坦で堅くしまっている。土間の南東コーナー寄りには縦56cm×横60cm、厚さ8cmの焼土が形成され、長さ17cm、幅7cm、厚さ7cmの角礫がほぼ垂直に据えられているが、用途は不明である。

柱穴(掘り方)の規模は径20cm~30cm、深さ20cm~60cmの円形を呈し、柱痕(柱あたり)は径10cm前後である。遺構全体としては桁行西側柱列の間尺に規則性があるものの、他は柱すじも多少歪み、間尺も不規則で柱穴も不明なものが多い。遺物の出土はなく、時期は不明である。



第135图 E II-1 掘立柱建物跡

Ⅱ-2 掘立柱建物跡

遺構 (第136・137図、写真図版35)

この遺構は調査区中央部東側に位置する。桁行6間(11.70m)、梁行4間(7.80m)の東面に廂をもつ掘立柱建物である。棟方向は南西―北東で、北に対して46度東偏する。身舎の桁行柱間寸法はA列北から、2.1m+1.8m+1.8m+2.1m+1.8m+2.1m(現行尺6.93尺+5.94尺+5.94尺+6.93尺+5.94尺+6.93尺) 梁行柱間寸法は北側A₁から、2.1m+1.8m+1.8m+2.1m(現行尺6.93尺+5.94尺+5.94尺+6.93尺)。廂柱間寸法はF列北から、2m+1.8m+2m+2.4m+1.8m+1.8m(現行尺6.60尺+5.94尺+6.60尺+7.92尺+5.94尺+5.94尺)である。柱間は1.8m(5.94尺)~2.1m(6.93尺)の間にあり、1.8m(5.94尺)が主である。

身舎の柱穴(掘り方)は径50cm~80cm、深さ30cm~70cm前後の円形ないし楕円形を呈し、A₄とA₇を除いて径25cm~30cmの柱痕(柱あたり)が認められる。廂の柱穴は径25cm~35cm、深さ20cm~60cmの円形で、全体に規模は小さく、深さも浅いものが大部分である。柱根固定のために礫を使用している柱穴はA₁・B₁・C₁・E₁・E₂・E₃の6本で、礫は径10cm~20cm大の円礫ないし角礫である。

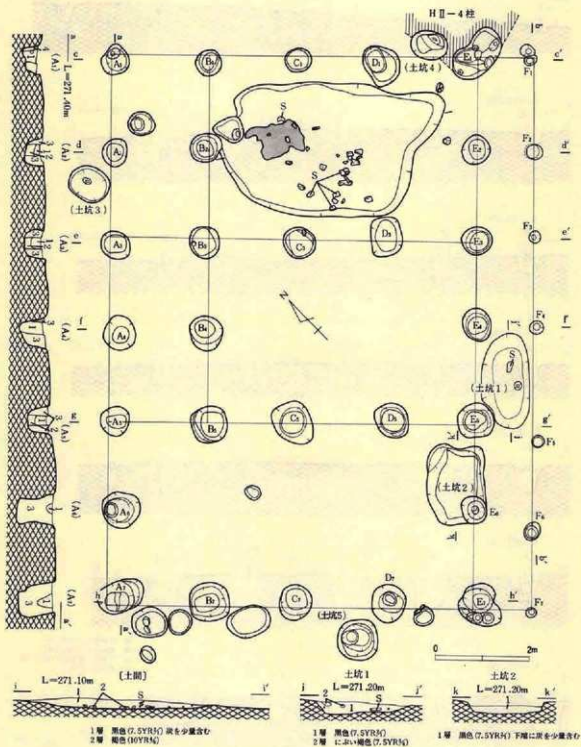
柱穴B₁~E₃とB₁~E₃の区画には縦2.8m×横4.4m、深さ約10cmの不整形形状を呈する土間があり、底面はほぼ平坦で、堅く締まる。土間の中央部北寄りには赤色~赤褐色粘土が縦70cm×横90cm、厚さ4cmで不整形形状に広がり、底には炭が多く散在し、他の底面よりも堅くしまっている。出土状況等からこの粘土は、カマド残痕の一部かと思われる。

遺物 (第138~140図、写真図版90・91)

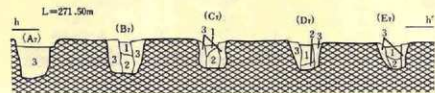
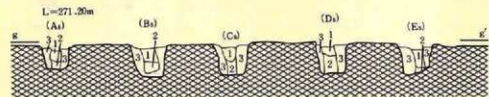
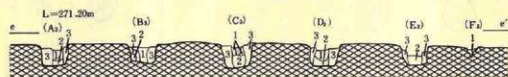
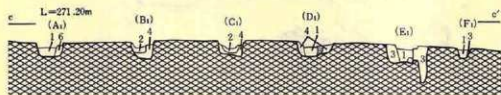
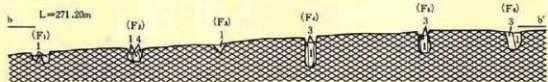
出土した遺物の種類としては、銭、角釘、毛抜き、銅製の髻、蕎麦猪口、鉄製品破片、貝殻漆器の漆膜、縄文土器、土師器破片等がある。

鉄銭はC₁柱(3枚)、C₂柱(1枚)、D₁柱(1枚)、D₂柱(15枚)、土坑1(1枚)、土間(6枚)、土坑2(12枚)から合計39枚出土している。

寛永通寶はC₁柱(1枚)、E₁柱(1枚)、土間(2枚)からのものである。角釘はA₄柱、C₁柱、C₂柱、C₃柱、D₁柱、D₂柱、E₁柱、E₂柱、土坑1・3~5から合計14本出土している。毛抜き(第138図の2)はB₁柱、銅製の髻(第138図の6)はC₁柱、蕎麦猪口(第138図の8)はC₁柱中位からの出土である。土坑4は鎌の先端部、土間は円形状の鉄製品等を出土する。貝殻破片はC₁柱と土坑2から出土し、C₁柱の種類は鮑貝殻である。漆器の漆膜が出土したのはB₁柱、D₁柱、土間、土坑4で、種類としては黒漆と朱漆とがある。遺物の量が多い柱穴はC₂柱とD₁柱で、鉄銭が多く出土したのは土坑2である。土坑4からは木炭が10数片出土し、樹種はいずれも雑木(社団法人岩手県木炭協会早坂松次郎氏の鑑定による)である。



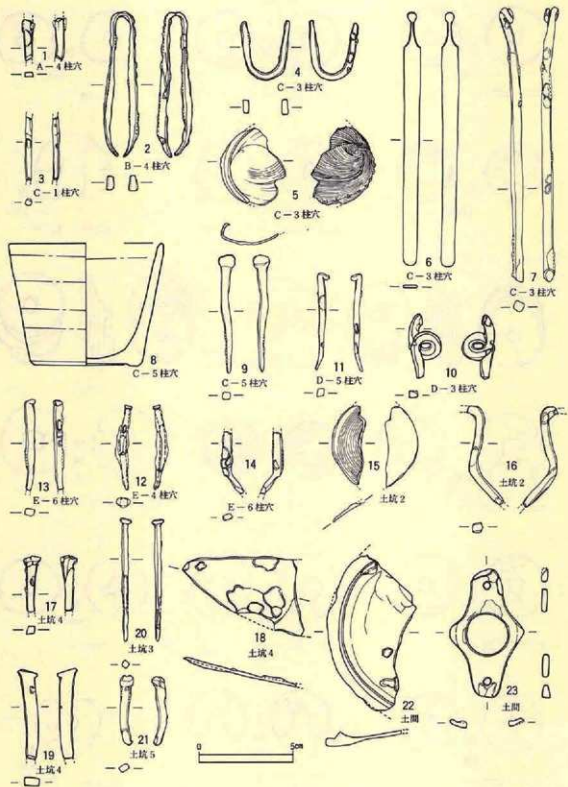
第136 圖H II-2 掘立柱建物跡 (1)



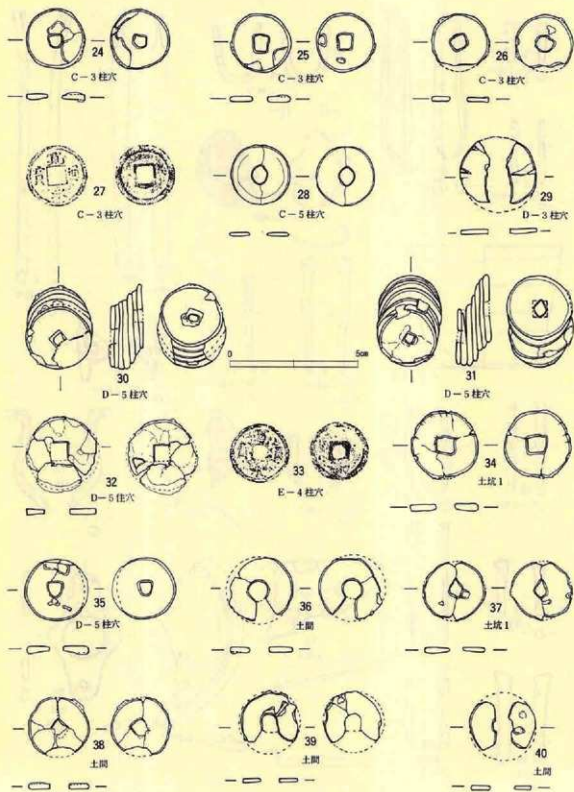
- 1層 黒褐色(G.5YR5/1-2)
- 2層 黒褐色(G.5YR5/2-3)
- 3層 黒褐色~褐色(G.5YR5/3-4)
- 4層 褐色(G.5YR5/3)

0 2m

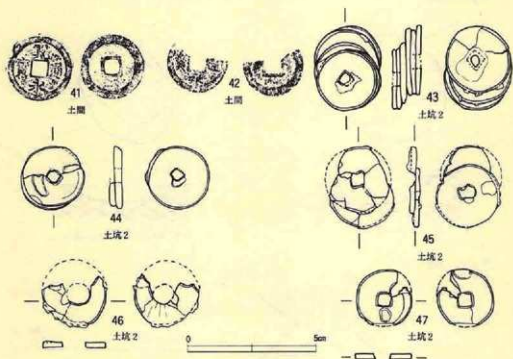
第137圖 H II-2 掘立柱建物跡 (2)



第138图 H II-2 掘立柱建物跡出土遺物 (1)



第139圖 H II-2 掘立柱建物跡出土遺物 (2)



第140図 H II-2掘立柱建物跡出土遺物(3)

6. 土 坑

B 区

B II-51土坑 (第141図)

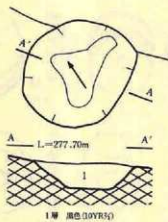
この遺構は調査区最北西端に位置し、B II-2縄文時代住居址の南西壁を切って構築されているものである。平面形は開口部・底部共不整形を呈す。規模は開口部径約115cm、底部径約80cm、深さ約30cmである。埋土は黒色土の単層である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面はやわらかく、凹凸が認められる。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

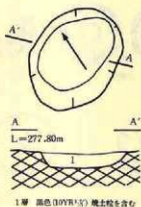
B II-52土坑 (第141図、写真図版37)

この遺構は調査区最北西端、B II-51土坑の西側に位置する。平面形は開口部・底部共楕円形を呈す。規模は開口部径約90cm×110cm、底部径約65cm×90cm、深さ約20cmである。埋土は南部浮石を包含するしまりある黒色土である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面はやわら

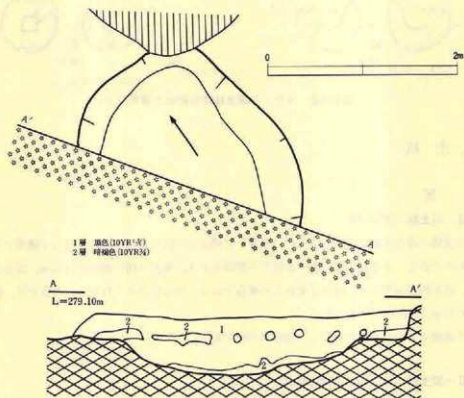
B II-51 土坑



B II-52 土坑



C I-51 土坑



第141圖 土坑 (1)

かく、ほぼ平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C 区

C I-51土坑 (第141図、写真図版37)

この遺構は調査区北西端寄りに位置し、C II-4 平安時代住居地の南壁に北側開口部を僅かに切られているものである。南西側半分は調査区外にはいり、形状及び規模については不明である。検出された深さは約33cmである。埋土は上位がしまりある黒色土、下位が暗褐色土で構成され、いずれも南部浮石を包含する。壁は底部から外傾し立ち上がる、床面は堅くしまり、ほぼ平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C I-52土坑 (第142図)

この遺構は調査区北西端寄りに位置し、C I-1 平安時代住居地の床面及び東壁を切って構築されているものである。南西側一部は調査区外にはいる。平面形は開口部、底部共南北に長軸をもつ長方形を呈す。規模は開口部径約150cm×190cm、底部径約120cm×160cm、深さ約32cmである。埋土はやわらかい黒色土の単層である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は堅くしまり、ほぼ平坦である。底面中央部と北東側には柱穴状ピットが検出されているが、検出状況及び埋土からこの遺構に伴うものではない。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-51土坑 (第142図、写真図版37)

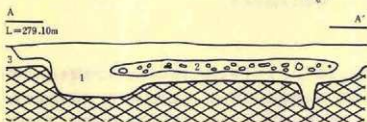
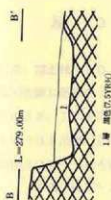
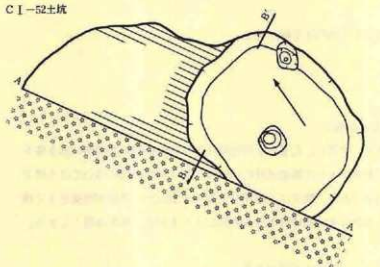
この遺構は調査区北西端寄り、B II-3 中世住居地の南寄りに位置する。西側半分は調査区外にはいり、形状及び規模については不明である。断面形はフラスコ形を呈す。埋土は上位が黒色土、中位が南部浮石を包含する褐色土、下位が暗褐色土で構成される。壁は北西側で底部より直立ぎみに立ち上がるが、その他は開口部まで内湾する立ち上がりを示す。深さは約55cmである。底面は凹凸があり、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-52土坑 (第142図、写真図版37)

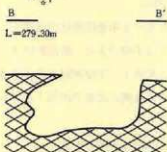
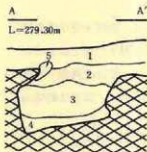
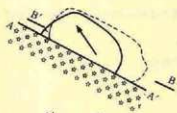
この遺構は調査区北西端寄り、C II-4 平安時代住居地の北寄りに位置する。平面形は開口

C I - 52 土坑

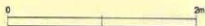


- 1層 褐色(10YR⁵/3)
- 2層 褐色(10YR⁵/5) 黄土粒を含む
- 3層 黄褐色(10YR⁶/3)

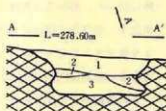
C II - 51 土坑



- 1層 褐色(10YR⁵/3)
- 2層 褐色(10YR⁵/5)
- 3層 褐色(10YR⁵/3)
- 4層 绿褐色(10YR⁵/3)
- 5層 绿褐色(10YR⁵/3)



C II - 52 土坑



- 1層 黄褐色(10YR⁶/3)
- 2層 黄褐色(10YR⁶/5)
- 3層 绿褐色(10YR⁵/3)

第142图 土坑 (2)

部が不整形、底部が南北に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈す。規模は開口部径約60cm×90cm、頸部径約65cm×105cm、底部径約80cm×110cm、深さ約43cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が暗褐色土で構成される。壁は底部から頸部まで内湾し立ち上がり、頸部から開口部にかけて外傾する。底面はほぼ平坦で、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

CⅡ-53土坑（第143図）

この遺構は調査区北西端寄り、CⅡ-2中世住居址の西壁を切って構築されているものである。平面形は開口部・底部共方形を呈す。規模は開口部一辺が約95cm、底部約90cm、深さ約16cmである。埋土は黒色土の単層である。底面は凹凸があり、やわらかい。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

CⅡ-54土坑（第143図、写真図版38）

この遺構は調査区最北西端、BⅡ-2縄文時代住居址の東側に位置する。平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約87cm、底部径約65cm、深さ約54cmである。埋土は上位が南部浮石を包含する黒色土、下位が黒褐色土で構成される。壁は底部から外傾ぎみに立ち上がる。底面は平坦であり、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

CⅡ-55土坑（第143図、写真図版38）

この遺構は調査区北西端寄り、CⅡ-4平安時代住居址の北側に位置する。平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約80cm、底部径約70cm、深さ約36cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が暗褐色土で構成され、いずれも南部浮石を包含する。壁は底部より外傾し立ち上がる。底面には柱穴状ピット2個が検出されているが、検出状況及び埋土からこの遺構に伴うものではない。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

CⅡ-56土坑（第143図、写真図版38）

この遺構は調査区北西端寄り、CⅡ-55土坑の南西側に位置する。平面形は開口部・底部共、北東から南西に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約55cm×85cm、底部径約40cm×70cm、深さ約30cmである。埋土は南部浮石を包含する黒褐色土で大半を占め、下位に暗褐色土がはいる。壁は底部から外傾ぎみに立ち上がる。底面北東側は、後世の柱穴により擾乱を受けている。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-57土坑 (第143図、写真図版38)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-56土坑の南東側に位置する。平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約70cm、底部径約60cm、深さ約15cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が褐色土で構成される。壁は底部より外傾し立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-58土坑 (第143図、写真図版38)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-57土坑の東側に位置する。平面形は開口部が南北に長軸をもつ楕円形を、底部が不整形を呈す。規模は開口部径約70cm×95cm、底部径約55cm×75cm、深さ約15cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が南部浮石を包含する黄褐色土で構成される。壁は底部から外傾ぎみに立ち上がる。底面は凹凸があり、堅くしまっている。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-59土坑 (第144図、写真図版38)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-52土坑と隣接した位置にある。平面形は開口部・底部共円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈す。規模は開口部径約130cm、底部径約150cm、深さ約53cmである。埋土は暗褐色土を帯状に包含する黒褐色土である。壁は底部から中部まで内湾し、中部から開口部にかけて直立ぎみに立ち上がる。底面は平坦であり湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-60土坑 (第144図、写真図版39)

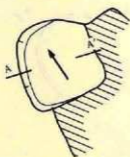
この遺構は調査区北西端寄り、C II-4平安時代住居址の東側に位置する。平面形は開口部・底部共、東西に長軸をもつ不整形を呈す。規模は開口部径約70cm×210cm、底部径約55cm×200cm、深さ約10cmである。埋土は黒色土の単層である。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

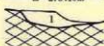
C II-61土坑 (第144図、写真図版39)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-60土坑の南側に位置する。平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約90cm、底部径約80cm、深さ約25cmである。埋土は黒色土の単層である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

C II-53土坑

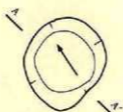


L=278.10m

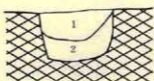


1層 黒色(10YR 4/1)

C II-54土坑



L=277.40m

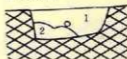


1層 黒色(10YR 4/1)
2層 黒褐色(10YR 4/2)

C II-55土坑



L=278.00m



1層 黒褐色(10YR 4/2)
2層 暗褐色(10YR 4/3)

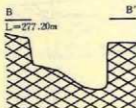
C II-56土坑



L=278.20m



1層 黒褐色(10YR 4/2)
2層 暗褐色(10YR 4/3)
3層 黒褐色(10YR 4/2)



C II-57土坑



L=278.30m



1層 黒褐色(10YR 4/2)
2層 褐色(10YR 5/3)

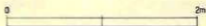
C II-58土坑



L=277.30m

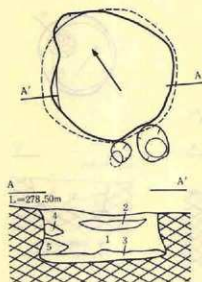


1層 黒褐色(10YR 4/2)
2層 黄褐色(10YR 5/3)



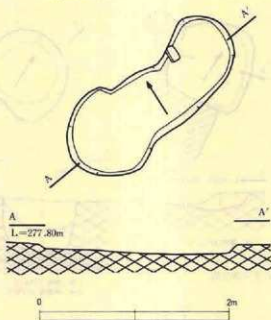
第143図 土坑 (3)

C II-59土坑

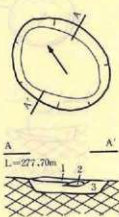


- 1層 黒褐色(10YR5)
- 2層 暗褐色(10YR5)
- 3層 黒褐色(10YR5)
- 4層 黒褐色(10YR5)
- 5層 暗褐色(10YR5)

C II-60土坑

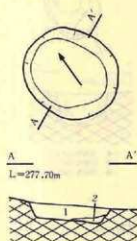


C II-62土坑



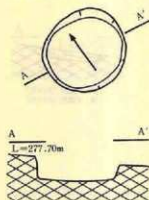
- 1層 黒色(10YR1)
- 2層 黒色(10YR5)
- 3層 暗褐色(10YR5)

C II-63土坑



- 1層 黒色(10YR1)
- 2層 黒褐色(10YR5)

C II-61土坑



第144圖 土坑(4)

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-62土坑 (第144図)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-61土坑の南東に位置する。平面形は開口部・底部共、南北に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約90cm×110cm、底部径約65cm×100cm、深さ約20cmである。埋土は上位が黒色土、下位が黒褐色土で構成される。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-63土坑 (第144図、写真図版39)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-62土坑の北東側に位置する。平面形は開口部・底部共、北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約90cm×105cm、底部径約65cm×90cm、深さ約22cmである。埋土は黒色土で大半を占めるが、下位に黒褐色土がはいる。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-64土坑 (第145図、写真図版39)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-51土坑の東側に位置し、C II-65土坑の南壁約半分を切って構築されているものである。平面形は開口部・底部共、東西に長軸をもつ楕円形を呈するものと思われる。断面形はフラスコ形を呈す。規模は推定するに、開口部径約150cm×200cm、底部径約170cm×220cmであると思われ、深さは約58cmである。埋土については、土層断面の設定位置が悪く、下位までの状況を把握することはできなかった。上位は黒色土で構成される。壁は底部から開口部まで内湾し立ち上がる。底面は凹凸があり、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-65土坑 (第145図、写真図版39)

この遺構はC II-64土坑に南壁約半分を切られているものである。平面形は開口部が不整形、底部が楕円形を、断面形はフラスコ形を呈す。規模は推定するに開口部径約160cm×180cm、底部径約170cm×210cmであると思われ、深さは約60cmである。埋土は上位が黒褐色土、中位が褐色土、下位が暗褐色土で構成されるが、C II-64土坑に切られている部分のみが黒色土となる。壁の大半は底部から開口部まで内湾し立ち上がる。底面は凹凸があり、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-66土坑 (第145図)

この遺構は調査区最北西端、C II-6住居址状遺構の北側に位置する。平面形は開口部が北西から南東に長軸をもつ楕円形状を、底部がほぼ方形を呈す。規模は開口部径約250cm×290cm、底部一辺約85cm、深さ約35cmである。埋土は上位が黒色土、下位が南部浮石を包含する黒褐色土で構成される。壁は底部から外傾ぎみに立ち上がった後、開口部に向けて放射状にゆるやかな立ち上がりを示す。底面には凹凸がある。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-67土坑 (第145図、写真図版39)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-59土坑の北東側に隣接する。埋土上位にはC II-201焼土遺構が位置する。平面形は開口部・底部共円形を、断面形はフラスコ形を呈す。規模は開口部径約100cm、中位の最大径約130cm、底部径約80cm、深さ約50cmである。埋土は上位が焼土をレンズ状に包含する黒褐色土及び暗褐色土、下位は暗褐色土で構成される。壁は底部から中部にかけて外傾し、中部から開口部にかけて内湾する立ち上がりを示す。底面は凹凸があり、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-68土坑 (第146図、写真図版39)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-61土坑の西側に位置し、C II-69土坑に北東壁を切られているものである。平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約110cm、底部径約95cm、深さ約19cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が褐色土を包含する黒褐色土で構成され、いずれも南部浮石を包含する。壁は底部から外傾し立ち上がる。平面は平坦である。

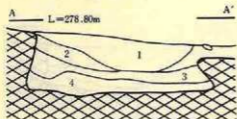
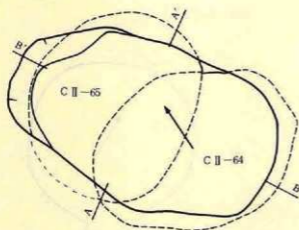
この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-69土坑 (第146図、写真図版39)

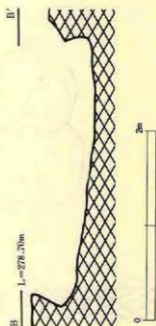
この遺構はC II-68土坑の北東壁を切って構築されているものである。平面形は開口部がほぼ円形を、底部が東西に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約90cm、底部径約70cm×85cm、深さ約22cmである。埋土は上位が黒色土及び黒褐色土、下位が南部浮石を包含する褐色土で構成される。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

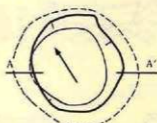
C II-64·65土坑



- 1層 黑土 (10YR 4/3)
- 2層 黑棕色 (10YR 5/2)
- 3層 暗棕色 (10YR 5/3)
- 4層 暗棕色 (10YR 5/3)

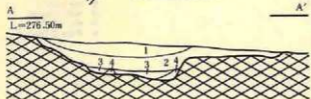
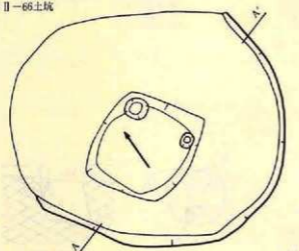


C II-67土坑



- 1層 赤褐色 (5YR 4/3)
- 2層 黑棕色 (10YR 5/2)
- 3層 黑棕色 (10YR 5/2)
- 4層 黃褐色 (10YR 5/3)
- 5層 黑棕色 (10YR 5/2)
- 6層 暗棕色 (10YR 5/3)

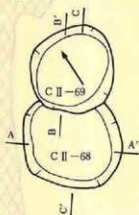
C II-66土坑



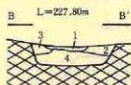
- 1層 黑土 (10YR 4/3)
- 2層 黑棕色 (10YR 5/2)
- 3層 暗棕色 (10YR 5/3)
- 4層 黑棕色 (10YR 5/2)

第145圖 土坑 (5)

C II-68・69土坑



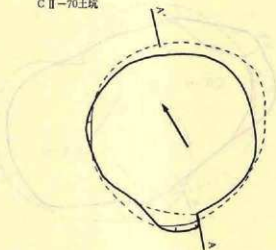
- 1層 黒褐色(10YR5/4)
- 2層 褐色(10YR5/4)
- 3層 黒褐色(10YR5/4)



- 1層 黒色(10YR5/4)
- 2層 黒褐色(10YR5/4) 南部浮石を含む
- 3層 黒褐色(10YR5/4) 南部浮石を含む
- 4層 褐色(10YR5/4) 南部浮石を含む

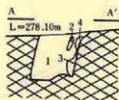


C II-70土坑



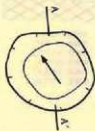
- 1層 黒色(10YR5/4) 焼土粒を含む
- 2層 黒褐色(10YR5/4) 焼土粒を含む
- 3層 黒色(10YR5/4)
- 4層 褐色(10YR5/4)
- 5層 黒褐色(10YR5/4)

C II-72土坑

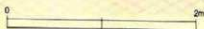


- 1層 黒色(10YR5/4)
- 2層 黒褐色(10YR5/4)
- 3層 褐色(10YR5/4)
- 4層 黒褐色(10YR5/4)

C II-71土坑



- 1層 黒褐色(10YR5/4) 焼土粒を含む
- 2層 黒色(10YR5/4)
- 3層 褐色(10YR5/4) 焼土粒を含む
- 4層 黒褐色(10YR5/4)



第146圖 土坑(6)

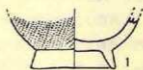
CⅡ-70土坑 (第146図、写真図版40)

この遺構は調査区北西端寄り、CⅡ-55土坑の北側に位置する。平面形は開口部・底部共円形を、断面形はフラスコ形を呈す。規模は開口部径約180cm、底部径約200cm、深さ約50cmである。埋土は上位から下位まで黒色土と黒褐色土が相互に重なり合い、人為的埋土を示す。壁は底部より開口部にかけて内湾し立ち上がる。底面は凹凸があり、粘性をもつ。

出土遺物 (第147図、写真図版91)

出土遺物は埋土中位から土器片1・2・3が出土している。1は高台鉢の底部と思われる、地文には細かい単節斜縄文が、高台には入念なミガキが施されているものである。2は浅鉢の口縁部と思われる、地文に単節斜縄文を施した後、沈線で楕円文を施しているものである。3は深鉢の口縁部である。口唇は平縁で、地文には口縁部直下から無節斜縄文を施しているものである。これらのうち、1は縄文時代晩期に位置づけられるものである。

以上の出土遺物からは、この遺構の時期決定に足る資料を欠き、時期は不明である。



第147図 CⅡ-70土坑出土遺物

CⅡ-71土坑 (第146図、写真図版40)

この遺構は調査区最北西端、CⅡ-2中世住居址の東側に位置する。平面形は開口部がほぼ円形を、底部が方形状を呈す。規模は開口部径約95cm、底部一辺約60cm、深さ22cmである。埋土は上位が黒褐色土、下位が暗褐色土と黒褐色土で構成される。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

CⅡ-72土坑 (第146図、写真図版40)

この遺構は調査区北西端寄り、CⅡ-57土坑の南側に位置する。平面形は開口部・底部共、南北に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約35cm×60cm、底部径約55cm×65cm、深さ約58cmである。埋土は黒色土で大平を占める。壁は底部から内湾する部分と外傾する部分とがあり、立ち上がりは一定ではない。底面は凹凸がある。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-73土坑 (第148図、写真図版40)

この遺構は調査区最北西端、C II-54土坑の西側に位置する。平面形は開口部・底部共、東西に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約65cm×90cm、底部径約45cm×60cm、深さ約35cmである。埋土は黒色土の単層である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は凹凸がある。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-74土坑 (第148図、写真図版40)

この遺構は調査区北西端寄り、C II-66土坑の南側に位置する。平面形は開口部・底部共、東西に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約50cm×55cm、底部径約37cm×52cm、深さ約46cmである。埋土は上位が黒色土、中位が南部浮石を包含する褐色土、黒褐色土、暗褐色土、で構成され、下位は黒褐色土である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

D 区

D I-51土坑 (第148図、写真図版41)

この遺構は調査区北西側、D I-3縄文時代住居址の南東側に位置する。平面形は開口部・底部共、南東から北西に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約90cm×105cm、底部径約70cm×85cm、深さ約20cmである。埋土は黒色土の単層であるが、中位には層厚約3cm、長さ約17cmの規模に焼土が包含される。壁は底部から外傾ぎみに立ち上がる。底面は平坦である。

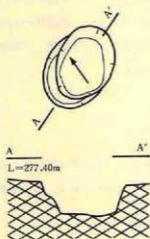
この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

D I-52土坑 (第148図、写真図版41)

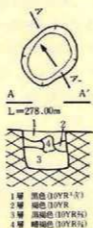
この遺構は調査区北西側、D I-51土坑の南東側に位置する。平面形は開口部・底部共、南北に長軸をもつ楕円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈す。規模は開口部径約330cm×400cm、頸部径約250cm×300cm、底部径約290cm×340cm、深さ約60cmである。埋土は上位が黒色土、中位が黒褐色土、下位には灰褐色土、褐色土、明褐色土、黒褐色土が混在する。壁は底部から中部にかけて内湾し、中部から開口部にかけて外傾する。底面は凹凸が激しく、粘性をもち、湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-73土坑

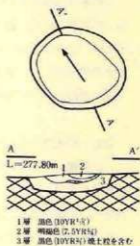


C II-74土坑



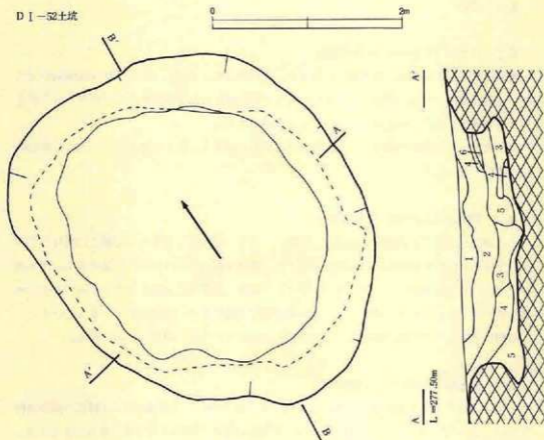
- 1 層 黑色 (10YR⁵/3)
- 2 層 褐色 (10YR)
- 3 層 黑褐色 (10YR⁵/3)
- 4 層 暗褐色 (10YR⁵/3)

D I-51土坑



- 1 層 黑色 (10YR⁵/3)
- 2 層 暗褐色 (7.5YR⁵/3)
- 3 層 黑色 (10YR⁵/3) 燒土殘存

D I-52土坑



第148圖 土坑 (7)

DⅡ-51土坑 (第149図、写真図版41)

この遺構は調査区北西端寄り、DⅡ-1縄文時代住居址の北西側に位置する。平面形は開口部・底部共、東西に長軸をもつ楕円形を呈す。規模は開口部径約105cm×140cm、底部径約60cm×85cm、深さ約44cmである。埋土は上位が黒色土、下位が南部浮石を包含する黒褐色土と暗褐色土で構成される。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は凹凸がある。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

DⅡ-52土坑 (第149図)

この遺構は調査区北西側、DⅡ-2平安時代住居址の南側に位置する。平面形は開口部・底部共方形を呈す。規模は開口部一辺約120cm、底部一辺約100cm、深さ約10cmである。埋土は黒褐色土の単層である。底面はほぼ平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

E 区

EⅠ-51土坑 (第149図、写真図版41)

遺構はEⅠ-1住居址の南西側に位置する。平面形は卵形を呈し、規模は開口部径85cm×105cm、底部径28cm×60cm、深さ25cmである。埋土は黄褐色土和田a降下火山灰と黒色シルト質土の2層で構成される。底面はや・堅くしまり、平坦である。

出土遺物はなく時期不明であるが、埋土に和田a降下火山灰を包含することから、平安時代の遺構と考えられる。

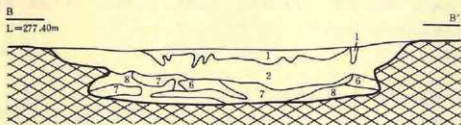
EⅠ-52土坑 (第149図、写真図版42)

この遺構はEⅠ-1住居址の南西側に位置し、EⅠ-51土坑とEⅠ-201焼土に隣接している。平面形は円形で断面形は半円形状を呈する。規模は開口部径135cm、底部径50cm、深さ30cmである。埋土は黒色シルト質主体の3層で、下端部に多量の炭と焼土が2～4cmの厚さで堆積する。焼土中には骨片(砕粉状)と土師器の破片が混入する。底面は堅くしまっている。

時期は出土した土師器の破片等から平安時代と考えられるが、用途は不明である。

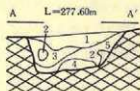
EⅡ-51土坑 (第150図、写真図版42)

この遺構はEⅡ-1掘立柱建物跡の北東隅にある柱穴(E1)と重複している。新旧の関係は柱穴を切っていることから、土坑の方が新しい。平面形は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。



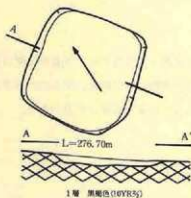
- 1層 褐色(7.5YR 5/4)
- 2層 深褐色(7.5YR 3/2)
- 3層 灰褐色(7.5YR 5/2) 燒土粒多含む
- 4層 褐色(7.5YR 5/2)
- 5層 暗褐色(7.5YR 3/2)
- 6層 暗褐色(7.5YR 3/2)
- 7層 深褐色(7.5YR 3/2) 南部浮石を含む
- 8層 褐色(7.5YR 5/2)

D II-51土坑



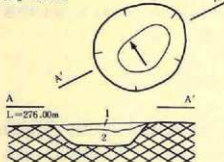
- 1層 黑色(10YR 1/1)
- 2層 黑褐色(10YR 2/1) 炭化物多含む
- 3層 暗褐色(10YR 3/1)
- 4層 暗褐色(10YR 3/1)
- 5層 褐色(10YR 5/1)

D II-52土坑

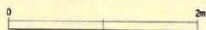


- 1層 黑褐色(10YR 3/1)

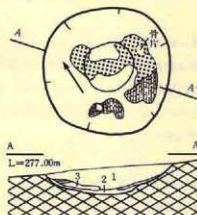
E I-51土坑



- 1層 1:Jh+黄褐色(10YR 5/1) 十和田+火山灰
- 2層 黑色(7.5YR 1/1)



E I-52土坑



- 1層 褐色(7.5YR 5/2)
- 2層 褐色(7.5YR 5/2)
- 3層 褐色(7.5YR 5/2) 燒土、木炭多量に含む

第149圖 土坑(8)

規模は開口部径 106cm×128cm、底部径 100cm×120cm、深さ26cmである。埋土は黒色砂質シルトの単層で、下端部に微量の炭が包含される。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は南部浮石層と八戸火山灰層の境目で、平坦で堅くしまっている。

遺物は出土しない。

E II-52土坑 (第150図、写真図版42)

この遺構はE II-1掘立柱建物跡の北西隅に位置し、柱穴(B₃)と一部重複している。新旧の関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向はほぼ北を指す。規模は開口部径138cm×192cm、底部径114cm×170cm、深さ17cmである。埋土は黒色砂質シルトの単層である。底は攪乱により多少の凹凸があり、堅くしまっている。

遺物は出土しない。

F 区

F I-51土坑 (第150図、写真図版42)

この遺構は調査区中央部、F I-1縄文時代住居址の北東寄りに位置する。平面形は開口部・底部共は▽円形を呈す。規模は開口部径約90cm×100cm、底部径約70cm×75cm、深さ約20cmである。埋土は黒褐色土の単層である。壁は底部から外傾し立ち上がる。底面は平坦である。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

F II-51土坑 (第151図、写真図版42)

遺構は調査区の中央部北西寄りに位置している。平面形は瓢箪形で、断面形はスプーン状を呈する。規模は開口部形210cm×420cm、底部径110cm×140cm、深さ68cmである。埋土は黒色シルト主体の4層に分けられる。底面は平坦で、全体に堅くしまる。

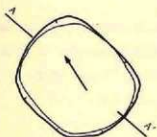
遺物は出土しない。

F II-52土坑 (第151図、写真図版42)

遺構は調査区中央部北西寄りの緩斜上に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は開口部径92cm×122cm、底部径76cm×105cm、深さ22cmである。壁は底面から急な傾斜で立ち上がる。埋土はシルト質の黒色土と黒褐色土の2層で、十和田a降下火山灰をブロック状に包含する。
*底面はほぼ平坦で、堅くしまっている。

遺物は出土しない。

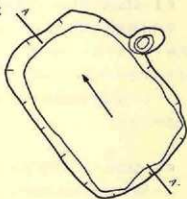
E II-51 土坑



A
L=275.00m



E II-52 土坑

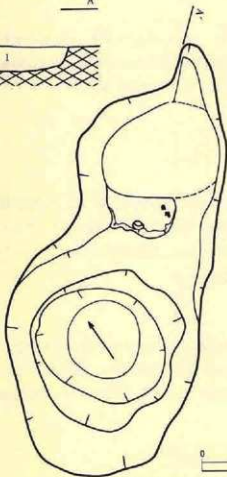


A
L=275.30m

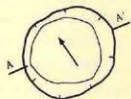


1層 褐色(5YR5)

F II-51 土坑



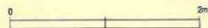
F I-51 土坑



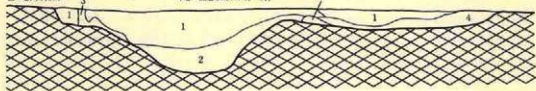
A
L=274.40m



1層 淡褐色(5YR5)



A
L=274.40m



- 1層 褐色(5YR5)
- 2層 褐色(5YR5)
- 3層 褐色-紅色(5YR5-6)
- 4層 褐色(5YR5-6)

第150圖 土坑(9)

F II-53土坑 (第151図、写真図版43)

遺構は調査区中央部北西寄りに位置し、F II-54土坑に隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸方向は北を指す。規模は開口部径72cm×98cm、底部径64cm×92cm、深さ5cm前後である。埋土は黒色シルト質土の単層で、ブロック状の十和田a 降下火山灰と径16cm大の角礫を1個包含する。底面は木根攪乱による多少の凹凸があり、や、しまっている。

遺物は出土しない。

F II-54土坑 (第151図、写真図版43)

この遺構は調査区中央部北西寄りに位置し、F II-52土坑とF II-53土坑に隣接する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径72cm×116cm、底部径53cm×98cm、深さ12cmである。埋土は炭化物和褐色土がブロック状に混入する黒色シルト質土の単層である。底面は堅くしまり、多少の凹凸がある。

遺物は出土しない。

F II-55土坑 (第151図、写真図版43)

遺構は調査区中央部北西寄りにあるF II-51土坑の南側に位置する。平面形は円形を呈する。規模は開口部径128cm×136cm、底部径106cm×122cm、深さ16cmである。埋土は黒色シルト質土の単層で、馬の脚部骨片と尙の破片を包含する。底面は凹凸があり、しまっている。

埋土状況等から最近の馬の土塚墓かと考えられる。

F II-56土坑 (第151図、写真図版43)

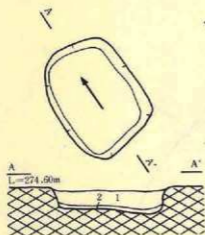
遺構は調査区中央部北西側の緩斜面上に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向はほぼ北を指す。規模は開口部径64cm×102cm、底部径54cm×85cm、深さ12cmである。埋土はブロック状の十和田a 降下火山灰を含む、黒褐色シルト質混土の単層である。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しない。

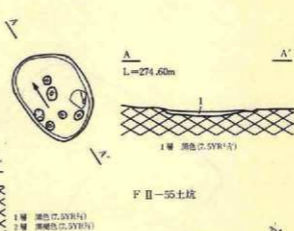
F II-57土坑 (第151図、写真図版43)

この遺構はF II-56土坑の北西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は開口部径64cm×108cm、底部径50cm×98cm、深さ22cmである。底面には開口部径20cm×60cm、深さ8cmの楕円形の小穴がある。埋土はF II-56土坑と同じく黒褐色シルト質混土の単層である。底面はや、堅くしまり、平坦である。

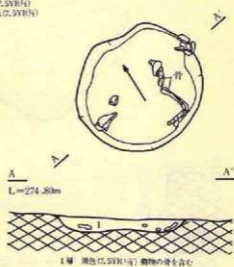
F II-52土坑



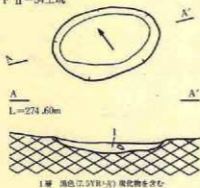
F II-53土坑



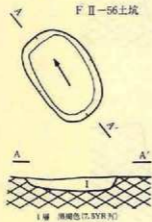
F II-55土坑



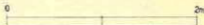
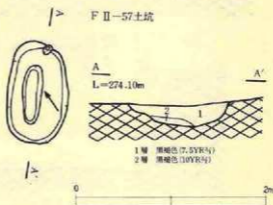
F II-54土坑



F II-56土坑

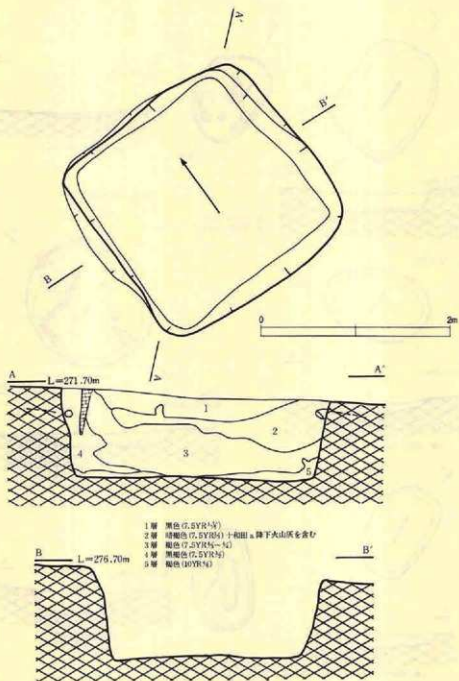


F II-57土坑



第151圖 土坑 (10)

H II-51土坑



第152圖 土坑 (11)

遺物は出土しない。

H 区

H II-51土坑 (第152図、写真図版44)

この遺構は調査区中央部東寄りにあるH II-1住居地の北西側に位置する。平面形は多少崩れた筒形もあるが、ほぼ方形を呈し、規模は開口部径230cm×230cm、底部径200cm×200cm、深さ90cmである。埋土はシルト主体の5層に分けられ、ブロック状の十和田a降下火山灰を僅かに包含する。壁は床面から急な傾斜で立ち上がる。底面は平坦で堅くしまる。

遺物は埋土上部から須恵器と土師器の破片が出土している。時期は十和田a降下火山灰の包含等から平安時代の土坑と考えられるが、用途は不明である。

H II-52土坑 (第153図、写真図版44)

遺構は調査区中央部東側に位置しH II-1住居地とH II-2掘立柱建物跡に隣接する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部径162cm×164cm、底部径150cm×154cm、深さ12cmである。埋土は黒色シルト質土の単層である。底面は平坦である。

遺物は縄文と土師器の破片を出土したが、流れ込みの土器と考えられる。時期は不明である。

I 区

I II-51土坑 (第153図、写真図版44)

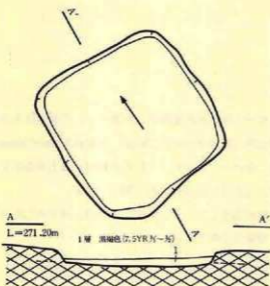
この遺構は調査区東部にあるI II-2住居地の南東側に位置する。平面形は隅丸長方形、断面形は台形状を呈する。規模は開口部径106cm×122cm、底部径82cm×188cm、深さ44cmである。埋土上部は粒形0.5cm大の浮石と褐色土を含む黒褐色シルト質混土で、下部はブロック状の八戸火山灰土と黒色シルトで構成されている。底面は木根による攪乱のため、西側半分が窪んでいる。

遺物は出土しない。

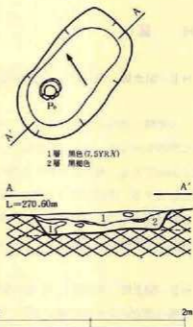
I II-52土坑 (第153図、写真図版44)

遺構は調査区東部西側に位置する。平面形は楕円形ないし隅丸長方形を呈し、長軸方向は東西を指す。規模は開口部径82cm×148cm、底部径56cm×120cm、深さ20cmである。埋土は上部

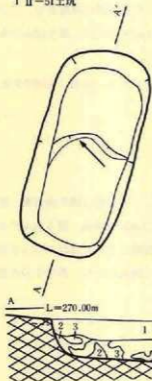
H II-52土坑



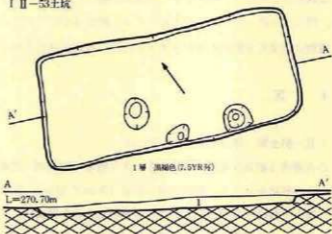
I II-52土坑



I II-51土坑



I II-53土坑

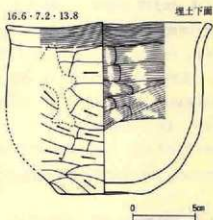


第153圖 土坑 (12)

が十和田a 降下火山灰をブロック状に含む黒色シルト質土で、下部は黒褐色シルト質土で構成されている。層の境には厚さ5mm前後で炭がレンズ状に堆積している。底面はほぼ平坦で堅くしまる。

遺物は底面から土師器の甕(第154図、写真図版91)が出土している。甕の口縁部はや・外反し、体部外面ヘラケズリ調整、内面ヘラナデ調整を施している。

時期は遺物と十和田a 降下火山灰から平安時代と考えられるが、用途は不明である。



第154図 I II-52土坑出土遺物

I II-53土坑 (第153図)

遺構はI II-6住居址の南東側に接し位置する。平面形は長方形を呈する。規模は開口部径120cm×276cm、底部110cm×262cm、深さ8cmである。埋土は黒褐色シルト質土の単層で、下部からビニールが出土することからごく最近の土坑である。

I II-54土坑 (第155図、写真図版45)

この遺構は調査区東部にあるI II-5住居址の南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は開口部径70cm×116cm、底部径40cm×96cm、深さ20cmである。埋土は上部が十和田a 降下火山灰を含む黒色シルト質土、下部が黒褐色シルト質土で構成されている。底面は堅くしまり、平坦である。

遺物は出土しない。

I II-55土坑 (第155図、写真図版45)

遺構はI II-1住居址の北西側に位置する。平面形はほぼ方形を呈し、規模は開口部径152cm×160cm、底部径88cm×92cm、深さ30cmである。南壁寄りの底面には、開口部径26cm×30cm、深さ40cm、開口部が台形、底部が円形を呈する小穴がある。埋土は十和田a 降下火山灰をブロック状に含む黒褐色～暗褐色シルト質混土主体の3層に分けられる。底面は堅くしまり、平坦である。

遺物は埋土上部から流れ込みの縄文土器破片を出土している。時期は十和田a 降下火山灰の包含から平安時代かと考えられる。

I II-56土坑 (第155図、写真図版45)

この遺構はI II-2住居址の南西コーナー寄りに位置する。住居址の床面精査中において検出され、柱穴3と重複し、柱穴によって切られていることから新旧の関係は住居址の方が新しい。平面形は開口部がや、楕円形、底部が円形である。規模は開口部径114cm×138cm、底部径150cm×160cm、深さは9cmである。断面形は住居址によって削平されているため上部は不明であるが、底面から口頸部にかけてフラスコ状を呈する。埋土は柱穴精査の際に大半を除去したために省略をする。底面はほぼ平坦でしまっている。

遺物は埋土下部から粗製の縄文土器破片が1個出土したが、詳細な時期は不明である。

I II-57土坑 (第155図、写真図版45)

遺構は調査区東部にあるI II-2住居址南西コーナーに隣接して位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径124cm×156cm、底部径92cm×105cm、深さ47cmである。埋土は黒色シルト質土の2層である。底面は木根攪乱による小穴が多数あるもののほぼ平坦で、堅くしまっている。

遺物は出土しない。

I II-58土坑 (第155図、写真図版46)

この遺構はI II-57土坑の西側に位置する。平面形は開口部が少し垂みのある円形、底部が卵形、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径100cm×108cm、底部径120cm×128cm、深さ108cmである。埋土は黒～黒褐色シルト質の5層で構成され、全体に炭の混入が認められる。底面はほぼ平坦で、しまっている。

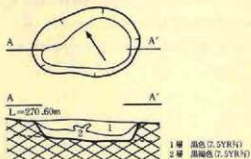
遺物は埋土中位から粗製の縄文土器破片と土師器破片を数個出土したが、流れ込みかと考えられる。

I III-51土坑 (第156図、写真図版46)

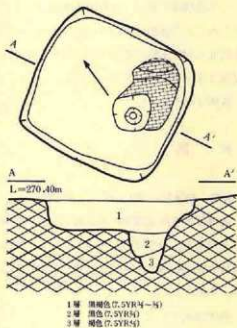
遺構は調査区東部にあるI III-1住居址の南西コーナー寄りに位置し、北側の一部は住居址と重複している。新旧の関係は住居址に切られていることから土坑の方が古い。平面形はや、垂みのある隅丸長方形状を呈し、規模は開口部径116cm×148cm+ α 、底部径86cm×134cm+ α 、深さ15cmである。埋土は十和田a降下火山灰を含む黒色シルト質土主体の3層で構成され、2層には焼土と炭と灰がレンズ状に包含している。底面は南側の一部が窪むほかは、ほぼ平坦である。

遺物は出土しない。

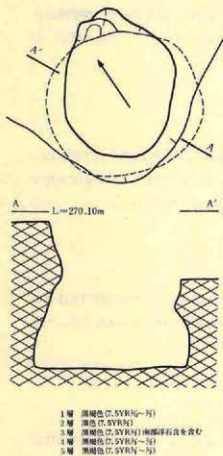
I II-54土坑



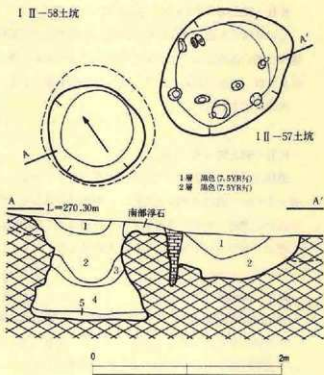
I II-55土坑



I II-56土坑



I II-58土坑



I II-57土坑

第155圖 土坑 (13)

I Ⅲ-52土坑 (第156図、写真図版46)

この遺構はI Ⅲ-1住居址の北西コーナーと重複し、遺構の半分以上は調査区域外に存在するために、平面形と規模は不明である。新旧の関係は住居址に切られていることから、(新)住居址(旧)土坑となる。検出された深さは37cmである。埋土は黒色シルト質土の2層である。底面はほぼ平坦で、しまっている。

遺物は出土しない。

K 区

K Ⅱ-51土坑 (第156図、写真図版46)

遺構は調査区東端部にあるK Ⅱ-2住居址の北側に位置する。平面形はおむすび形ないし円形を呈する。規模は開口部径184cm×198cm、底部径94cm×140cm、深さ58cmで、西壁側は半円状に8cm程高まる。埋土は黒~黒褐色シルト質土の3層で構成されている。底面は堅くしまり、平坦である。

遺物は出土しない。

K Ⅱ-52土坑 (第156図、写真図版46)

この遺構はK Ⅲ-3住居址の西側に位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い皿状を呈する。規模は開口部径82cm×112cm、底部径67cm×98cm、深さ7cmである。埋土は十和田a降下火山灰をブロック状に含む、黒色シルト質土の単層である。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しない。

K Ⅱ-53土坑 (第157図)

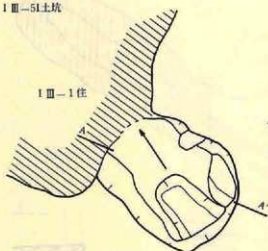
遺構はK Ⅱ-5住居址の南側に位置する。平面形はや、楕円形を呈し、規模は開口部径106cm×120cm、底部径90cm×100cm、深さ24cmである。埋土は十和田a降下火山灰をブロック状に含む、黒色シルト質の単層である。底面は平坦で堅くしまる。

埋土下端部から土師器の破片を1個出土している。

K Ⅱ-54土坑 (第157図)

遺構は調査区東端部に位置し、K Ⅱ-101陥し穴状遺構と重複している。新旧の関係は陥し穴状遺構に切られていることから、(新)K Ⅱ-101陥し穴状遺構(旧)土坑となる。開口部の平面形は陥し穴による削平のため不明瞭であるが、円形ないし楕円形と考えられる。底部は

I Ⅲ-51土坑

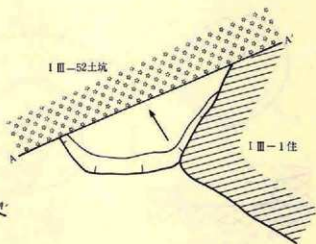


I Ⅲ-1住

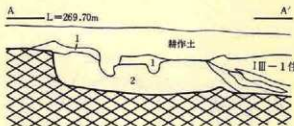


- 1層 褐色(7.5YR5/1)土層田土層下火山灰土を含む
- 2層 灰褐色~紅褐色(7.5YR5/1~7)
- 3層 褐色(7.5YR5/1)土層田土層下火山灰土層を含む

I Ⅲ-52土坑

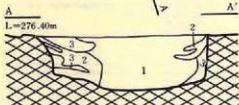
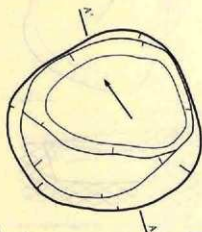


I Ⅲ-1住



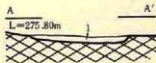
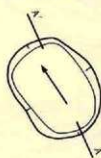
- 1層 褐色(7.5YR5/1)
- 2層 褐色(7.5YR5/1)

I Ⅲ-1住埋土

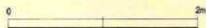


- 1層 黒褐色(7.5YR5/1~7)
- 2層 褐色(7.5YR5/1~4)
- 3層 褐色(7.5YR5/1)

K II-52土坑

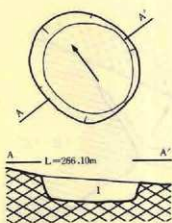


- 1層 褐色(7.5YR5/1)



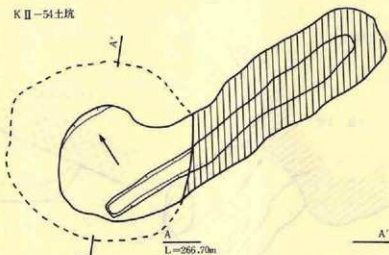
第156圖 土坑 (14)

K II—53土坑



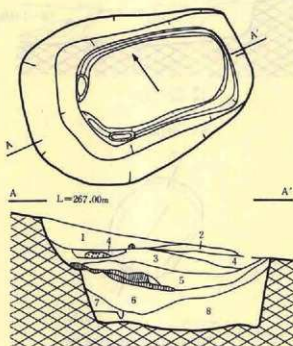
1層 褐色(7.SYR¹/A—1/4) 十和田 a 降下火山灰を含む

K II—54土坑



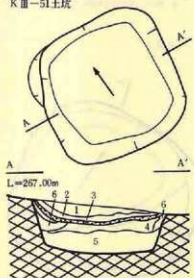
L=266.70m

K II—55土坑



1層 褐色(7.SYR¹/A) 十和田 a 降下火山灰と灰を含む
 2層 黒褐色(7.SYR¹/A—1/4)
 3層 黒褐色(7.SYR¹/A) 十和田 a 降下火山灰と灰を含む
 4層 黒褐色(7.SYR¹/A) 灰、硬土粒を含む
 5層 褐色(7.SYR¹/A—1/4)
 6層 黒褐色(7.SYR¹/A) 十和田 a 降下火山灰を含む
 7層 黒褐色(7.SYR¹/A)
 8層 褐色(7.SYR¹/A—1/4)

K III—51土坑



L=267.00m

1層 褐色(7.SYR¹/A)
 2層 褐色(7.SYR¹/A—1/4) 十和田 a 降下火山灰を含む
 3層 赤褐色(SYR¹/A) 焼土
 4層 褐色(7.SYR¹/A)
 5層 黒褐色(7.SYR¹/A—1/4)
 6層 褐色(7.SYR¹/A)

0 2m

第157图 土坑 (15)

やや重んだ円形で、断面はフラスコ状を呈する。規模は開口部径 $100\text{cm} + \alpha \times 116\text{cm}$ 、底部径 $190\text{cm} \times 200\text{cm} + \alpha$ 、深さ約 100cm である。埋土断面は陥し穴状遺構精査の際に大半を除去したため省略する。底面は平坦である。

遺物は出土しない。

KⅡ-55土坑 (第157図、写真図版47)

この遺構は調査区東端部に位置し、KⅡ-54土坑と隣接している。開口部と底部の平面形は多少重む隅丸長方形を呈する。規模は開口部径 $160\text{cm} \times 242\text{cm}$ 、底部径 $100\text{cm} \times 170\text{cm}$ 、深さ 94cm である。埋土はシルト質土主体の8層に大別され、炭と焼土とブロック状の十和田a降下火山灰を包含する。底面はほぼ平坦で、幅 10cm 、深さ 4cm 前後の溝が西壁側の一部を除いて全周している。

遺物は埋土上部から縄文土器と土師器の破片を出土している。時期は十和田a降下火山灰の包含から平安時代と考えられるが、用途は不明である。

KⅢ-51土坑 (第157図、写真図版47)

遺構は調査区東端部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は開口部径 $144\text{cm} \times 146\text{cm}$ 、底部径 $113\text{cm} \times 120\text{cm}$ 、深さ 50cm である。埋土は黒褐色シルト質土主体の8層に分けられ、焼土がレンズ状に厚さ 4cm で堆積している。上部には十和田a降下火山灰がブロック状に包含されている。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しない。

KⅢ-52土坑 (第158図、写真図版47)

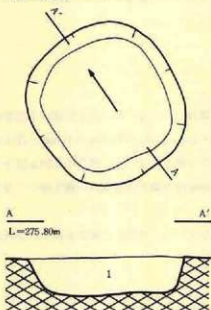
遺構は調査区東端部にあるKⅢ-2住居地の南側に位置する。平面形は隅丸方形、断面形は台形状を呈する。規模は開口部径 $156\text{cm} \times 166\text{cm}$ 、底部径 $125\text{cm} \times 128\text{cm}$ 、深さ 38cm である。埋土は十和田a降下火山灰をブロック状に含む、黒色シルト質土の単層である。底面は平坦で、しまっている。

遺物は出土しない。

KⅢ-53土坑 (第158図、写真図版47)

遺構はKⅢ-2住居地の北西側に位置し、KⅢ-51土坑に隣接する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は東西を指す。規模は開口部径 $104\text{cm} \times 126\text{cm}$ 、底部径 $84\text{cm} \times 106\text{cm}$ 、深さ 48cm である。埋土は十和田a降下火山灰を含む、黒色シルト質土主体の5層で構成され、焼土が

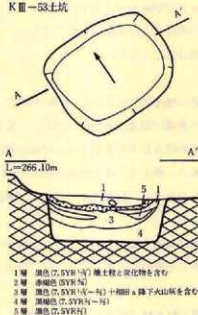
KⅢ-52土坑



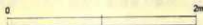
1層 黒色(7.5YR 4/1~5/1)十細田 a 降下火山灰を含む

第158図 土坑 (16)

KⅢ-53土坑



1層 黒色(7.5YR 4/1)焼土粒と炭化物を含む
 2層 赤褐色(5YR 5/6)
 3層 黒色(7.5YR 4/1~5/1)十細田 a 降下火山灰を含む
 4層 黒褐色(7.5YR 4/2)
 5層 黒色(7.5YR 4/1)



レンズ状に厚さ4cmで堆積する。焼土の上面には火熱を受け、赤褐色変化した径10cm~20cm大の角礫が数個散在している。底面は堅くしまり、平坦である。

遺物は出土しない。

7. 陥し穴状遺構

GⅠ-101陥し穴状遺構 (第159図、写真図版48)

遺構は調査区中央部南寄りの緩斜面上に位置する。検出面はⅡ層上部下端から中位にかけてである。平面形は溝状で、横断面形はや・開き気味のV字形を呈する。規模は開口部径120cm×464cm、底部径16cm×412cm、深さ146cmである。埋土は上部が南部浮石を包含する黒色~黒褐色シルト質土で下部はブロック状の黒褐色土が混入する褐色シルト質土で構成されている。底面はや・起伏にとみ、北端部が高まり、南端部との比高は約20cm~25cmである。

遺物は出土しない。

I II-101 陥し穴状遺構 (第159図、写真図版48)

遺構は調査区東部北西寄りの緩斜面上に位置し、I II-3 住居地の東壁と接する。検出面はⅢ層上面である。平面形は東側がやや広めの溝状を呈し、横断面形はV字形である。規模は開口部径90cm×335cm、底部径20cm×358cm、深さ86cmである。埋土はシルト質土の5層で構成され、開口部から流れ込みの自然堆積の様相を呈する。底面は東側から西側に緩やかに傾斜し、ほぼ平坦である。東端部と西端部の比高は約34cmである。

遺物は出土しない。

I II-102 陥し穴状遺構 (第159図、写真図版48)

遺構はI II-101 陥し穴状遺構の南東側約4.5mに位置し、I II-1・2 住居地と隣接する。検出面はⅢ層上面である。平面形は溝状を呈し、横断面形は側壁中位から上部はやや開くV字形である。規模は開口部径70cm×365cm、底部径24cm×380cm、深さ118cmである。埋土はシルト質土で構成され、黒色土と暗褐色土が交互に堆積をする。全体にしまりはなく、やわらかい。底面は西側から緩やかに東側へ傾斜し、平坦である。東端部と西端部との比高は約30cmである。

遺物は出土しない。

K II-101 陥し穴状遺構 (第159図、写真図版48)

遺構は調査区東端部に位置し、K II-54 土坑と重複している。新旧の関係は土坑を切っていることから(新)K II-101 陥し穴状遺構(旧)土坑となる。平面形は西側が土坑と重複のため不明であるが、検出された形態等より溝状を呈すと考えられる。横断面形はV字形である。規模は開口部径78cm×350cm+ α 、底部径20cm×318cm、深さ136cmである。埋土はシルト質土の4層で構成され、上部は黒色土と黒褐色土、中位から下部にかけては褐色土と黒色土が交互に堆積する。底面は平坦で、堅くしまる。

遺物は出土しない。

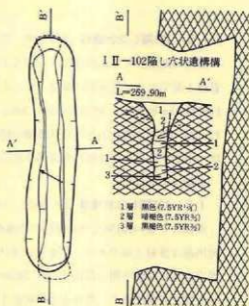
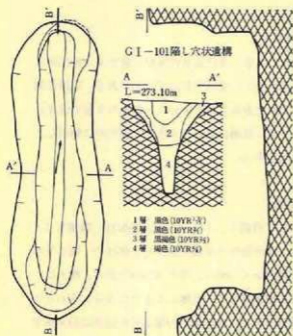
8. 溝遺構

C II-151 溝遺構

遺構 (第160図)

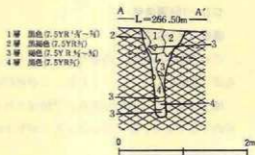
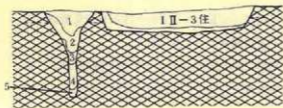
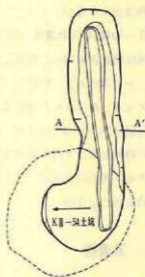
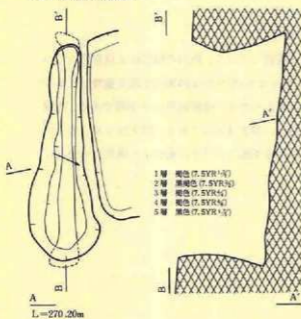
この遺構は調査区北西端寄りに位置する。掘り込みはC II-4 平安時代住居地の北壁近くからほぼ直線的に北へ伸び、C II-2 中世住居地の南西壁を切って途切れる。

埋土は黒色土から極暗褐色土で構成される。規模は幅約50cm～85cm、深さ約30cm～52cm、全長約9mである。断面形はほとんどがV字状を呈すが、C II-2 住居地に近づくにつれ、U字

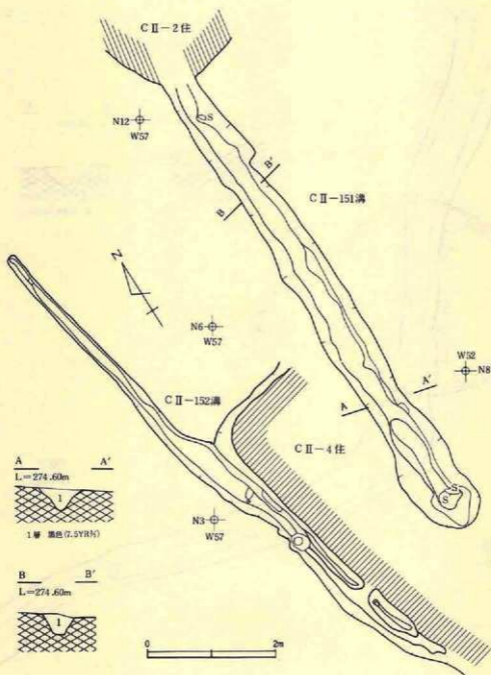


I II-101陥し穴状遺構

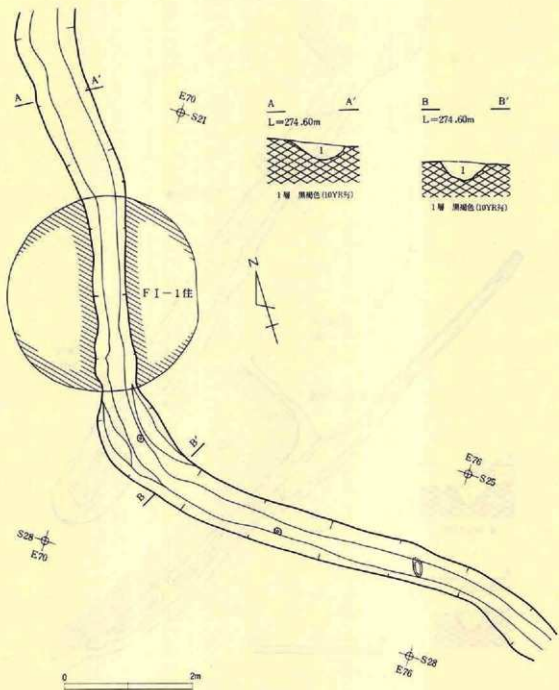
K II-101陥し穴状遺構



第159図 陥し穴状遺構



第160図 C II-151・C II-152溝遺構



第161圖 FI-151溝遺構

状に変化する。南端底面には人為的に埋置されたとと思われる磚2個が検出され、この部分から湧水する。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

C II-152溝遺構

遺構 (第160図)

この遺構は調査区北西端寄りに位置する。掘り込みはC II-4 平安時代住居址西壁ほゞ中央部を僅かに切り、壁際を北へ伸び、C II-151 溝の西際に至って途切れる。

埋土は黒色土の単層である。規模は幅約17cm～50cm、深さ約15cm～33cm、全長約9mである。断面形はU字状を呈す。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

F I-151溝遺構

遺構 (第161図、写真図版36)

この遺構は調査区中央部に位置する。掘り込みはF I-1 縄文時代住居址の北側道路から伸び、住居址北壁、床面中央部、南壁を切り、「く」の字状に折れて調査区外にはいる。埋土は北側が黒色土、南側が黒褐色土である。規模は幅約50cm～85cm、深さ約11cm～33cmである。断面形はV字状及びU字状と一定しない。

この遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

9. 焼土遺構

C II-201焼土遺構 (第162図、写真図版49)

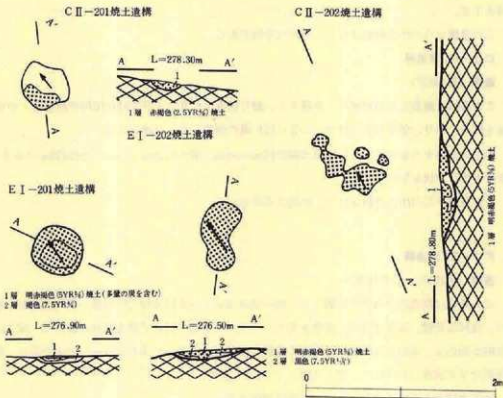
この遺構は調査区北西端寄り、C II-67土坑の埋土上位に位置する現地性焼土である。規模は約50cm×50cmの不整形の範囲に広がりを持ち、最大層厚約10cmのレンズ状に形成されているものである。色調は赤褐色を呈し、やわらかい。

遺物は出土しない。

C II-202焼土遺構 (第162図、写真図版49)

この遺構は調査区北西端寄り、D II-51土坑の西側に位置する現地性焼土である。規模は約35cm×85cmの不整形の範囲に広がりを持ち、最大層厚約14cmのレンズ状に形成されているものである。色調は明赤褐色を呈し、やわらかい。

遺物は出土しない。



第162図 焼土遺構

E I-201 焼土遺構 (第162図、写真図版49)

遺構はE I-1住居址の南西側に位置する現地性焼土である。規模は50cm×54cmの円形の範囲に広がりを持ち、最大層厚約5cmのレンズ状に形成されている。色調は明赤褐色を呈する。遺物は出土しない。

E I-202 焼土遺構 (第162図)

遺構は調査区中央部西端寄り、E I-1住居址の東側に位置する現地性焼土である。規模は34cm×72cmのやや不整の弧線形で、最大層厚9cmのレンズ状に形成されている。色調は明赤褐色を呈し、やわらかい。

遺物は出土しない。

V 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文土器・土師器・土製品・錢・石帯・石器類・鉄器類が得られている。縄文土器・土師器は数量的に少なく、大半は小破片である。なお、平安時代住居址埋土から得られた、縄文土器及び縄文時代に位置づけられると思われる石器は一括してこの項で扱った。

1. 縄文時代

(1) 縄文土器

縄文時代早期・中期・後期・晩期に属する土器が出土している。これらの土器を次のように分類した。

早期に属する土器を第Ⅰ群土器、中期に属する土器を第Ⅱ群土器、中期末葉から後期初頭に属する土器を第Ⅲ群土器、後期に属する土器を第Ⅳ群土器、後期後半から晩期前半に属する土器を第Ⅴ群土器、晩期に属する土器を第Ⅵ群土器とした。

① 第Ⅰ群土器 (第163図、写真図版92・93)

この群に属する土器は1～21・及び実測・拓本は割愛したが体部破片(写真図版93参照)が出土している。

これらのうち1～11、13～16は口縁部破片、17が体部破片、12・18が口縁部に近い体部破片、20が尖底部に近い体部破片、19・21が尖底部である。

口縁部破片は文様形態によって、次の㉠～㉢に細分した。

㉠ 斜位の貝殻腹縁文と爪形状刺突文の組み合わせにより文様を構成しているもの。

1と2がこれに該当する。1は貝殻条痕文を施した後、口縁部直下斜位に貝殻腹縁文を施し、その下に横位の爪形状刺突文を二段に巡らせているものである。2は1とほとんど同じ文様構成であるが、爪形状刺突文が斜位で一段の巡りとなる。

㉡ 横位の貝殻腹縁文と爪形状刺突文の組み合わせにより文様を構成しているもの。

7と8がこれに該当する。7は口縁部に縦位に縦位の爪形状刺突文を二段に施し、その間に貝殻腹縁文を横位二段に巡らせているものであり、口縁部下に孔を有するものである。8は口縁部に縦位の爪形状刺突文を施し、その下に貝殻腹縁文を横位二段に巡らせているのものである。いずれも口縁部文様帯下には、貝殻条痕文が斜位に施されている。

㉢ 爪形状刺突文主体に文様を構成しているもの。

3・4・5・6・10・13・14・15が該当する。4は口縁部直下から縦位の刺突二段と横位の刺突四段の計六段の刺突文を巡らせているものである。貝殻条痕文はらみられない。

3は4と同じ文様構成であると思われる、口縁上にも刺突文が施されているものである。5・10は貝殻条痕文を施した後、斜位の刺突を、15は横位の刺突を二段に巡らせているものである。10は口唇上にも刺突文がみられる。6・13は横位の刺突を三段に巡らせているものであり、13には口唇上にも刺突文がみられる。14は斜位・横位の刺突が平行に施文されているものである。

㊦ 貝殻腹縁文主体に文様を構成しているもの。

9・11が該当する。9は口唇上に爪形状刺突文を、口縁部には数条の貝殻腹縁文を横位に施したものである。11は2条の平行沈線を巡らせ、その上位には斜位の、下位には斜位及び横位の腹縁文を施しているものである。

㊧ 貝殻条痕文のみのもの

16が該当する。これは口縁部直下から横位及び斜位の条痕文が施されているものである。

次に体部及び尖底部破片について記述する。

体部破片12・17・18・19のうち、12・18・19は爪形状刺突文が施されているものである。17は貝殻腹縁文及び爪形状刺突文が縦位・斜位・横位に幾可学的に施されているものである。20・21は砲弾形を呈する尖底部破片で、縦位及び斜位にナデ調整が施されているものである。

写真図版のみに掲載した体部破片はほとんどが横位及び斜位の貝殻条痕文が施されているものである。

以上、第Ⅰ群土器を記述したが、これらは白浜式に比定されるものと思われる、いずれの破片にも繊維の混入は認められない。

② 第Ⅱ群土器（第164図、写真図版94）

この群に属する土器には、28・29が出土している。28はミニチュア土器の底部破片である。地文には単節斜縄文を施し、その上から棒状工具により粗雑に縦位の沈線を施したものである。

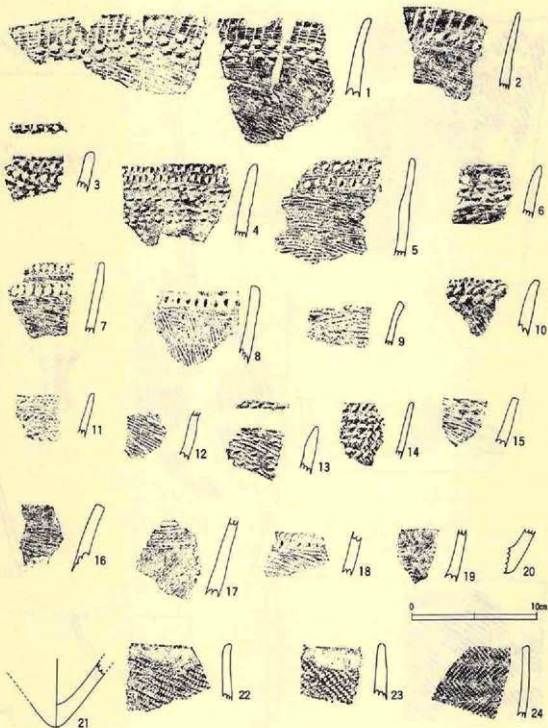
29は台付小型浅鉢の底部破片と思われ、器表にナデ調整が施されているものである。

この2片は縄文時代中期末葉に位置づけられるものである。

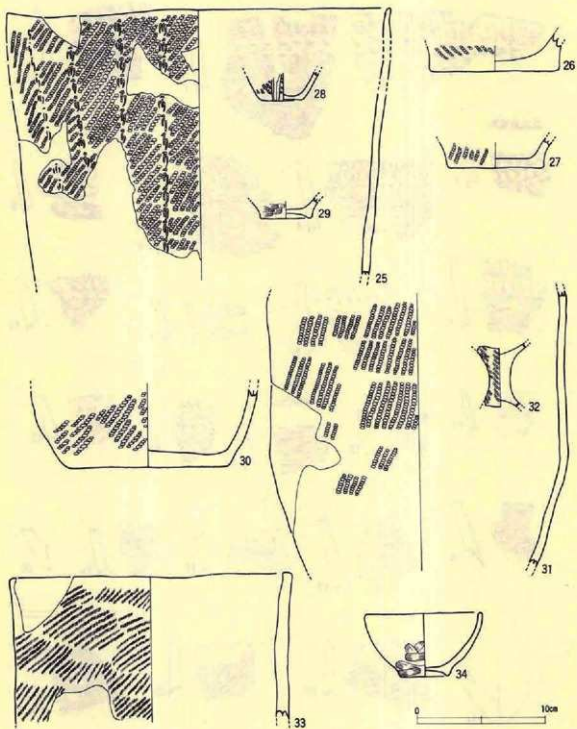
③ 第Ⅲ群土器（第163・164図、写真図版92・94）

この群に属する土器は、22～27、30・31・33、35～56が出土している。いずれも深鉢の破片である。

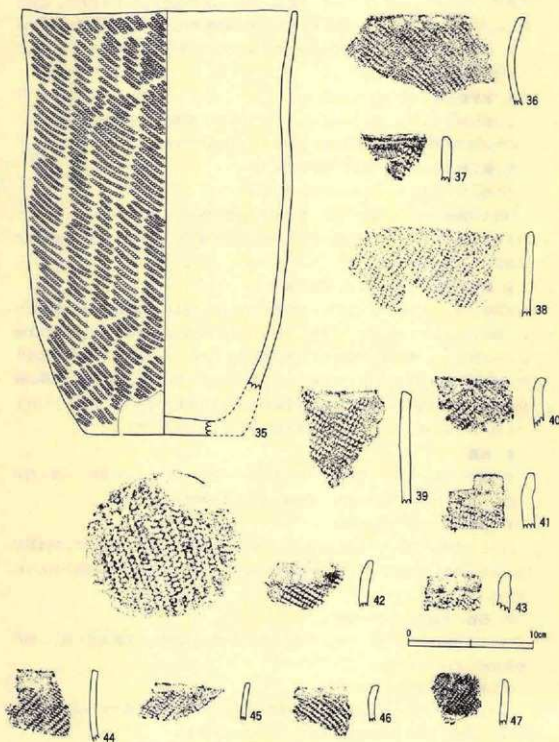
24は口縁部破片である。口唇は平縁で、地文に羽状縄文が施されている。25は口縁部から体部破片である。口唇は平縁で、地文は原体RLに縷絡を伴うものである。26・27・30・56は底部破片であり、地文に単節斜縄文が施されているのである。56の底面には網代痕がみられる。31は体部破片であり、地文に単節斜縄文が施されている。33は口縁部から体部破片で、地文に無節斜縄文が施されている。35は器高34cmの粗製深鉢である。器形は底部から体部下位にかけ



第163圖 遺構外出土遺物 (1)



第164図 遺構外出土遺物 (2)



第165圖 遺構外出土遺物 (3)

て外傾し立ち上がり、体部上位でややくびれる。地文には単節斜縄文が施されており、底面に縄痕がみられるものである。36は大きく外反する口縁部破片で、地文に単節斜縄文が施されている。22・23・37～55は直立ぎみ及びやや外傾する立ち上りを示す口縁部破片で、いずれにも単節斜縄文が施されているものである。

④ 第Ⅳ群土器 (第166図、写真図版96)

この群に属する土器は、57・58が出土している。いずれも深鉢の口縁部破片である。

57の口唇は平縁で、文様は58と同様、沈線で平行及び楕円文が施されているものである。

⑤ 第Ⅴ群土器 (第164・166図、写真図版94・96)

この群に属する土器は、34・60～67が出土している。

34は台付浅鉢である。口唇は平縁で、器表にナデ調整が施されているものである。60～67はいずれも深鉢口縁部破片で、60・62・64～66の地文は羽状縄文が、61・63・67には単節斜縄文が施されているものである。

⑥ 第Ⅵ群土器 (第164・166図、写真図版94・96)

この群に属する土器は、32・59・68・69が出土している。32は高台付浅鉢の高台部分と思われる、細かい単節斜縄文が施されているものである。59は口縁部に山形突起を有し、文様は沈線によって区画され、磨消及び帯縄文を作り出しているものである。68は粗製深鉢の口縁部破片で、地文に単節斜縄文を、口唇上には縄文圧痕を施しているものである。69は浅鉢の口縁部破片と思われる。口縁部から体部にかけて5条の平行沈線とその間に刻み目文が施され、口唇上にも刻み目がみられるものである。これは大洞C₁式に比定されるものである。

(2) 石器

石器類は、石鏃・石錐・小型石槍・石匙・スクレイパー・フレーク・磨製石斧・石皿・石刀・凹石・磨石・円盤状石製品・敲石・抉り痕のある自然石が出土している。

① 石鏃 (第167図、写真図版96)

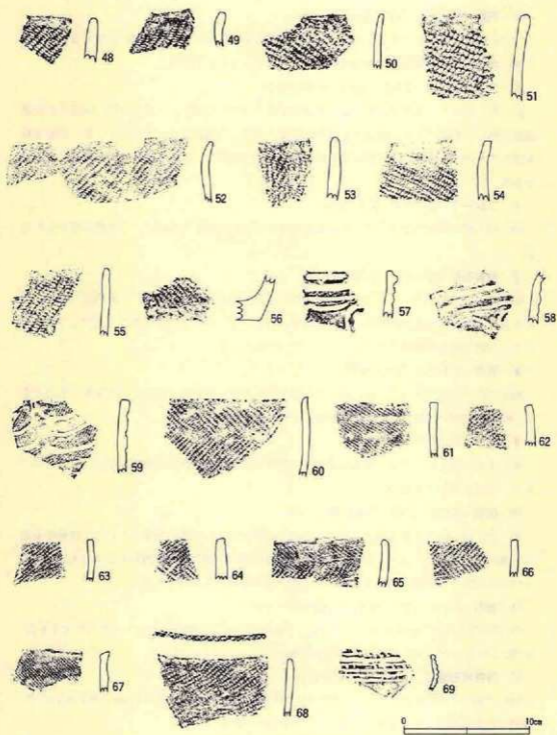
出土した石鏃は、70～74の5点である。70・71・73・74は基部が突出するもので、72は基部が丸味を呈するものである。71は断面形が肉薄である。いずれにも入念な剝離調整が加えられている。

② 石錐 (第167図、写真図版96)

75の1点のみ出土している。これは不定形な剥片の一角端に両端から剝離調整を施し、錐部を作り出しているものである。

③ 小型石槍 (第167図、写真図版96)

76の1点のみ出土している。これは平面形が木葉状を呈し、基部が丸味をもつ長さ6.1cmのもので、両面ともに入念な剝離調整が加えられているものである。



第166圖 遺構外出土遺物(4)

④ 石匙 (第167図、写真図版96)

77・78の2点出土している。2点とも石器の長軸方向に抓み部をもつ縦型石匙である。どちらとも抓み部から片面両側縁辺に剝離調整が加えられているものである。

⑤ スクレイパー (第167・168図、写真図版97)

80・81・82の3点が出土している。80は平面形が三角形を呈し、二辺の縁辺に両面から剝離調整を施したものである。81は平面形が楕円形状を呈し、縁辺に沿って片面から荒く剝離調整を施したものである。82は平面形が不整形を呈し、二辺縁辺に片面から剝離調整を施したものである。

⑥ フレーク (第168図、写真図版97)

83・84・85の3点が出土している。平面形はいずれも不整形なもので、加工痕は認められない。

⑦ 磨製石斧 (第169図、写真図版97)

86・87の2点が出土している。86は刃部の一部が欠損しているもので、平面形は二等辺三角形を呈し、体部両面及び両側面は入念に研磨されている。87は体部から頭部が欠損しているもので、研磨は86より粗雑である。

⑧ 石皿 (第169図、写真図版97)

88・89の2点が出土している。いずれも偏平なもので、中央部が磨滅し凹みをもつものである。88の縁辺部には敲打痕と磨滅痕が認められる。

⑨ 石刀 (第169図、写真図版97)

90の1点が出土している。小破片であり、背部と見られる縁辺に研磨痕が認められるものである。刃部は認められない。

⑩ 凹石 (第169・170図、写真図版97・98)

91・92・94・96の4点が出土している。91は平面形が長方形の偏平なもので、片面中央部に一個の凹みを有するものである。92・96は平面形が楕円形を、94は円形を呈するもので、92・94には両面に各1個の凹みを、96は各2個の凹みを有するものである。

⑪ 磨石 (第170・171・172図、写真図版99・100)

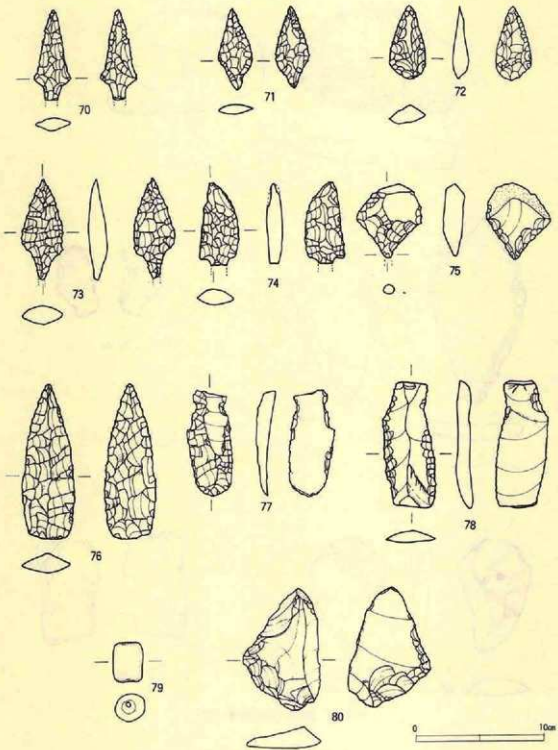
93・95・97～117の23点が出土している。平面形は円形から楕円形を呈するものが大半を占める。これらのうち、107・112・115には敲打痕が認められるものである。

⑫ 円盤状石製品 (第173図、写真図版100)

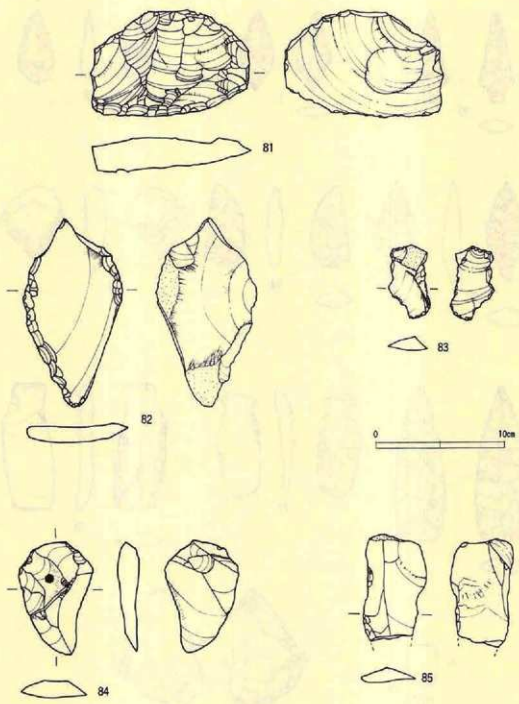
118・119の2点が出土している。118の最大径は3.2cm、119の最大径は4.4cmの偏平なもので、縁辺に加工痕が認められるものである。119は全体が磨滅している。

⑬ 敲石 (第173図、写真図版100)

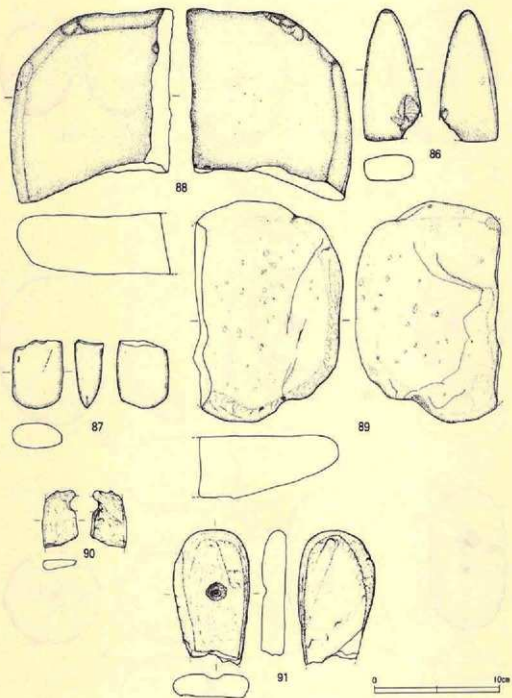
120の1点のみ出土している。縁辺に敲打痕と磨滅痕が認められるものである。



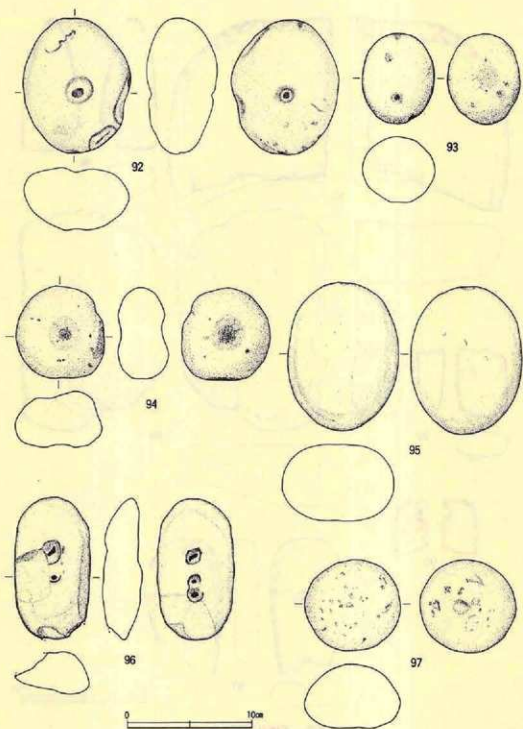
第167圖 遺構外出土遺物 (5)



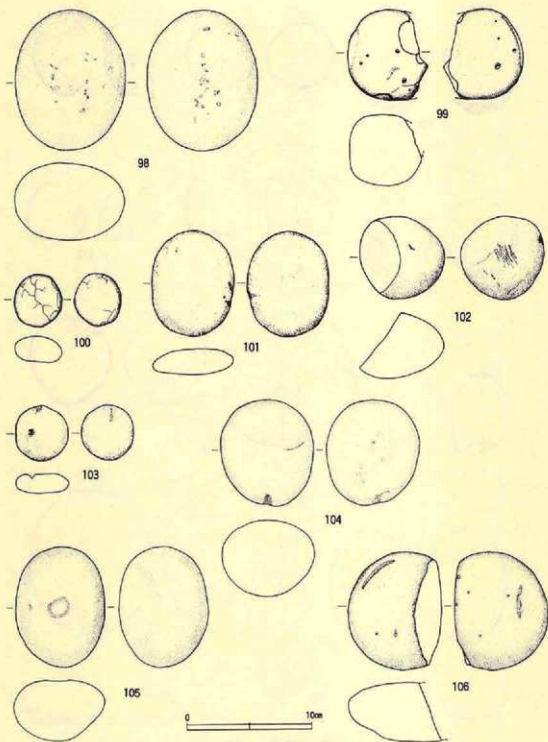
第168圖 遺構外出土遺物 (6)



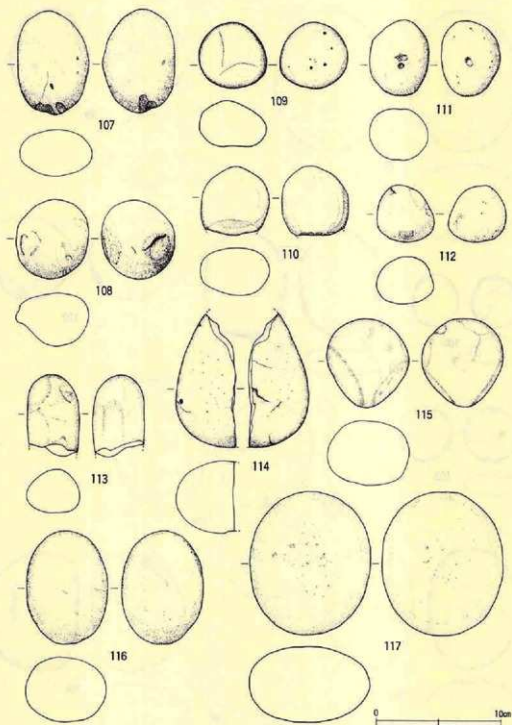
第169圖 遺構外出土遺物 (7)



第170図 遺構外出土遺物 (B)



第171圖 遼陽外出土遺物 (9)



第172図 遺構外出土遺物 (10)

④ 挟り痕のある自然石 (第173図、写真図版100)

121の1点のみ出土している。平面形が半円状を呈する厚さ1.3cmの扁平な自然石であるが、弦状にあたる部分のほぼ中心部に、幅3.5cm、奥行1.5cmの三角形の挟り痕が認められるものである。

(3) 土製品

① 土製管玉 (第167図、写真図版96)

79の1点が出土している。直径1.1cm、長さ1.5cmの円筒状を呈するもので、孔を有するものである。表面は入念に研磨されている。

2. 平安時代

平安時代の遺物としてはロクロ成形の土師器輪高台杯 (第174図の135、写真図版101) がある。体部中位から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がり呈する。内面は寛ミガキ調整後黒色処理を施している。体部外面上半には黒斑が認められる。

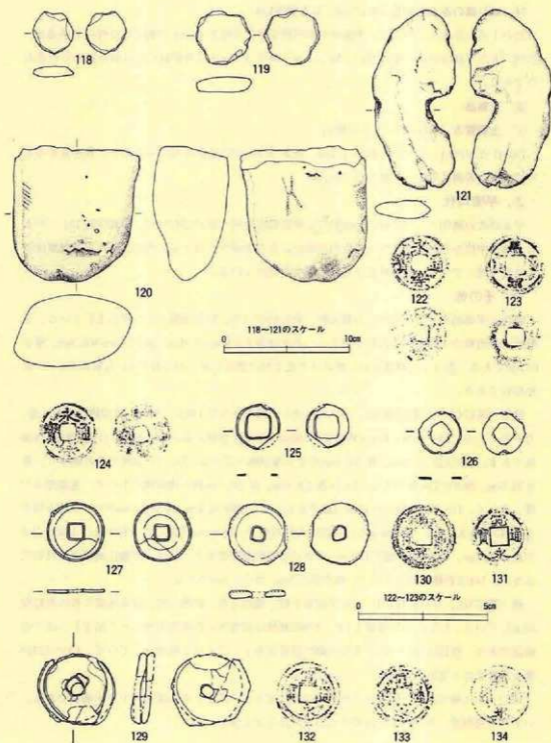
3. その他

調査区東部西寄りⅡ区から石帯丸柄 (第174図の145、写真図版101) が出土している。平面形は半円形で、断面形は台形を呈する。長さは表が2.6cm×4.0cm、裏が3.0cm×4.3cm、厚さ0.7cmである。表はよく研磨され、裏には2孔1対の潜り孔を三方に有する。石質はチャート質粘板岩である。

鉄器 (第174図、写真図版101) は9点出土し、種類としては角釘、楔形、雁股鎌、火打ち金、刀子等がある。136・138・140は角釘で、136は中位でV字状に曲がり、長さ3.6cm、厚さ0.4cm角である。138は長さ6.0cm、厚さ0.6cm角で下端が曲っている。140は3箇所折れ曲がり、長さ28.5cm、厚さ0.7cm角である。134は長さ3.6cm、厚さ0.7cm角の楔形状のもので、先端部は欠落している。139は長さ12.9cmの雁股鎌である。141は径約3.3cm、厚さ0.3cmのリング状を呈する。142は長さ7.8cm、幅2.8cmの台形状の火打ち金で、径0.3cm前後の孔を有する。143は刀子で長さ10.2cm、茎3.5cm、幅約1.6cm、くさび形の断面形である。茎尻の形態は剣形で、目釘穴はない。144は器種不明なもので、現存長5.7cm、厚さ0.3cmである。

銭 (第173図、写真図版101) は永樂通寶1枚、鋳銭2枚、鉄銭4枚、寛永通寶5枚の計12枚出土している。124の永樂通寶と125・126の鋳銭は調査区の西端部沢寄りから出土し、ほぼ完形品である。鉄銭は127～129で全体に錆の付着が多く、129は2枚接合している。130～134の寛永通寶はほぼ完形品である。

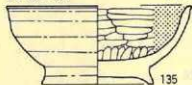
122と123は縄文時代の住居址 (BⅡ-4住) 埋土から出土した永樂通寶と皇宋通寶である。いずれも完形で、BⅡ-3住居址からの流れ込みかと思われる。



第173図 遺構外出土遺物 (11)

9.9・6.0・4.2

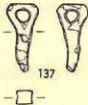
I II K



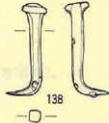
135



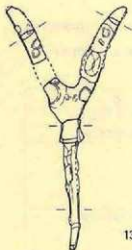
136



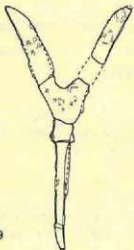
137



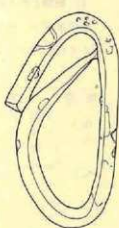
138



139



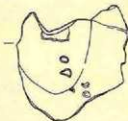
140



141



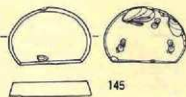
143



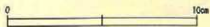
144



142



145



第174图 遺構外出土遺物 (12)

Ⅶ まとめ

1. 遺構

(1) 縄文時代竪穴住居址

当遺跡で検出された縄文時代住居址は13棟であり、建てかえを含むと計17棟となる。

①時期及び占地

13棟を時期別にみると、中期末葉に位置づけられる住居址は9棟、中期末葉から後期初頭に位置づけられる住居址1棟、後期末葉から晩期初頭に位置づけられる住居址2棟、時期不明の住居址1棟である。

以上のように当遺跡では、時期的にみると中期末葉に位置づけられる住居址が多く検出されている。

占地についてみると、後期末葉から晩期初頭に位置づけられる住居址は沢沿いに位置し、中期末葉に位置づけられる住居址は沢からや、離れた緩斜面上に分布する。

②形状及び規模

形状については、中期末葉に位置づけられる住居址は円形を、中期末葉から後期初頭に位置づけられる住居址は隅丸方形を、後期末葉から晩期初頭に位置づけられる住居址は楕円形を呈するものである。

規模については、壁面直径で計測すると、中期末葉の住居址が3m前後のもの2棟、4m前後のもの2棟、5m前後のもの2棟、6m前後のもの2棟と、3m～6mの規模をもつものである。中期末葉から後期初頭の住居址1棟は約8mで、や・大形である。後期末葉から晩期初頭の住居址2棟は5m前後のものである。

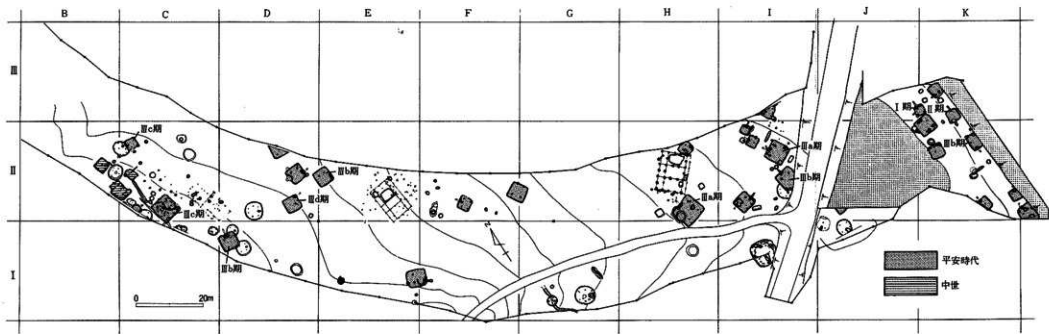
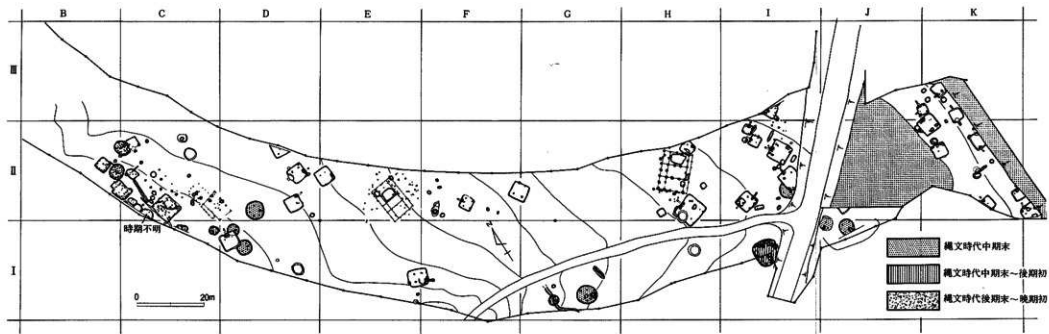
③炉の形態とその位置

中期末葉の住居址は、石囲炉をもつもの3棟、複式炉をもつもの6棟であり、いずれも壁寄りの位置にある。中期末葉から後期初頭の住居址1棟は、複式炉、地床炉をもち、複式炉は壁寄りに、地床炉はほぼ中央部に位置する。後期末葉から晩期初頭の住居址2棟は、石囲い炉をもち、中央部と中央部や・東寄りに位置するものである。

以上のことから傾向として、中期末葉の住居址は、壁寄りに石囲炉か複式炉を伴うといえる。

④柱穴配置

柱穴配置が明らかになった住居址は、中期末葉のもの7棟と中期末葉から後期初頭に位置づけられるII-1住居址の建てかえ3棟分である。



第177圖 時期別住居址立地状況

表16 縄文時代住居址一覧表

(注) 検定規模

項目 No	遺構名	規模(m)	平面形	炉	柱穴	時期	図面番号	写真番号	備考
1	BⅡ-2住	4.0×5.0	楕円形	石囲炉	不明	後期末～後期初	7	3	
2	BⅡ-4住	4.2×4.8	楕円形	石囲炉(?)	不明	後期末～後期初	10	3	小土坑1基
3	CⅠ-2住	2.7×2.8	円形	石囲炉	3+a(?)	中期末(?)	12	4	入口状施設と思われる石
4	CⅡ-3住	4.0×4.0	円形(?)	不明	不明	不明	12	5	
5	DⅠ-2住	3.6×3.7	円形	石囲炉	4	中期末	13	5	半円状の溝
6	DⅠ-3住	4.3×4.6	円形	石囲炉	4	中期末	13	5	
7	DⅡ-1住	5.6×5.6	円形	複式炉	6	中期末	15・16	6	
8	FⅠ-1住	3.0×3.0	円形	複式炉	3	中期末	16	7	
9	GⅠ-1住	5.3×6.1	楕円形	地床炉・複式炉	6	中期前半	20～22	8・9	2期の建て替え
10	IⅠ-1住	7.7×7.9	隅丸方形	複式炉・地床炉	8	中期末～後期初	22・23	10	3期の建て替え
11	IⅡ-5住	5.3×5.3	円形	石囲炉	不明	中期末	41	11	2期の建て替え
12	JⅠ-1住	4.6×4.6	円形	複式炉	5	中期末	43	11	
13	JⅠ-2住	4.6×4.6	円形	複式炉	2+a	中期末	46	12	

中期末葉に位置づけられる住居址の柱穴は3本・4本・5本・6本で構成され、それぞれの柱穴配置は三角形・四角形・五角形・六角形の配置を示す。中期末葉から後期初頭に位置づけられる住居址の柱穴は6本・8本で構成され、それぞれの柱穴配置は六角形・八角形の位置を示す。

次に中期末葉の住居址7棟分について規模別にみると、3m前後の住居址2棟(CⅠ-2・FⅠ-1住居址)は3本構成で三角形配置、4m前後の住居址2棟(DⅠ-2・DⅠ-3住居址)は4本構成で四角形の配置、5m前後の住居址1棟(JⅠ-1住居址)は5本構成で五角形の配置、6m前後の住居址2棟(DⅠ-1・GⅠ-1a住居址)は6本構成で六角形の配置となり、住居址検出面直径に $\sqrt{3}$ 比例した柱本数となることが注目される。

⑤建てかえ

建てかえが判明した住居址はGⅠ-1住居址(GⅠ-1a・GⅠ-1b住居址)、IⅠ-1住居址(IⅠ-1a・IⅠ-1a・IⅠ-1c住居址)、IⅡ-5住居址(IⅡ-5a・IⅡ-5b住居址)である。IⅠ-1住居址及びIⅡ-5住居址の新旧関係については「住居址」の項で記述したので、ここではGⅠ-1住居址について若干記述する。

GⅠ-1住居址の2棟の関係については、検出状況、壁、複式炉及び周溝の位置関係から考えるに、壁際を巡る周溝はGⅠ-1b住居址に伴った可能性も否定できず、複式炉を閉覆すると

同時に南東側一部を披覆し、G I-1a住居址としたと思われる。

(2) 平安時代竪穴住居址

①立地

検出された32棟の住居址は、折爪岳東方に発達した扇状地の緩傾斜面上（低位段丘相当）の標高 278m（調査区西側）～266m（東端部）の間に立地している。西側と東端部では、12m程の比高差を生じている。住居址の分布概況は、西側の沢から中央部寄りに9棟（表17のNo1～9）、中央部付近に3棟（表17のNo10～12）東側の村道両脇に11棟（表17のNo13～23）、東端部に9棟（表17のNo24～32）の4地域に分散している。特に多く集中するのは、調査区の東側から東端部段丘縁にかけての地域である。

②形状及び規模

形状は多少歪みがあるものの、基本的に方形、長方形、台形状の3種類に大別され、コーナーは隅丸を呈するものが多い。方形の住居址22棟中においても、隅丸が18棟と8割以上を占めている。最小と最大規模の住居址は長方形の範疇にあり、台形状の住居址（K III-1・3住居址）は2基のカマドを保有している。

規模は壁面直径で計測し、2.4m～3m以下（極小）のものが2棟、3m～4m（小形）のものが10棟、4.3m～6m（中形）のものが13棟、6m以上（大形）のものが2棟で、調査区東側に小形の住居址は偏在するようである。（棟数は一部検出及び不明な5棟を除く）。規模の最小はI II-3住居址の2.4m×2.9mで、最大はH II-1住居址の6.7m×7.6mである。

③十和田 a 降下火山灰

灰白色～灰黄褐色の十和田 a 降下火山灰は、岩手県北地方二戸、軽米、九戸におけるパイパス及び自動車道関連遺跡の古代～平安時代にかけての遺構（主に住居址）に堆積する類例が多くみられる。当遺跡においても、十和田 a 降下火山灰をレンズ状に堆積するものが2棟、小ブロック状に堆積するものが16棟あるものの、堆積状況から住居址相互間の新旧関係は不明であった。この火山灰は、現在遺構検出時における目安とはなるが、堆積状況から遺構年代決定のメルクマールとはなっていない。

④焼失家屋

焼失家屋は4棟（表17のNo 5・11・13・25）あり、上屋構造の様相が分る位の炭化材は検出されなかった。当遺構で特質される点として、炭化材の直上と下部から多量の焼土が伴って出土している。これらの焼土は、出土状況から単なる投げ込みではなく、上屋材料に土が何んらかの形で介在した可能性を示している。本県の安代町厨畑 I 遺跡（C I-1 住居址）や二戸市上田面遺跡の焼失住居址等においても、上屋構造に土の存在を推察している。類例は僅少で、今後の資料収集と蓄積が必要であろう。

表17 平安時代住居址一覧表

〔 〕は推定範囲、() は推定程度

No.	遺構名	規模(m)	平面形状	位置	マ		柱穴	周溝	貯蔵穴	四角溝付	写真番号	考
					位	置						
1	C1-1住	(1.24×0.31, 2.1×0.4)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	プロッタ状の土間皿・丸山版
2	C1-1住	(2.502.5)	隅丸方形(?)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
3	C1-4住	(4.8×6.8)	隅丸長方形	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
4	C1-5住	(3.2×3.54)	隅丸方形	東部中央西寄り	不明	不明	なし	なし	なし	なし	52	コマドは遺跡中心北により破壊
5	D1-1住	(5.25×5.3)	隅丸方形	北部中央	くりぬき式	なし	4	なし	全面	コマド高麗	54	プロッタ状の土間皿・丸山版、溝板瓦葺
6	D1-2住	(4.95×4.66)	隅丸方形	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	1(?)	なし	全面	なし	58	レンズ版の土間皿・丸山版
7	D1-3住	(5.0×5.0)	隅丸方形	東部中央北寄り	くりぬき式	なし	4	全面	南東コーナー	不明	61	プロッタ状の土間皿・丸山版
8	D1-4住	(1.94×0.94, 0.6×0.7)	隅丸方形(?)	不明	不明	不明	1.1×0.6	不明	不明	不明	63	プロッタ状の土間皿・丸山版
9	D1-5住	(4.8×4.9)	隅丸方形	東部中央西寄り	不明	不明	土製	4	全面	南東コーナー	64	不明
10	E1-1住	(5.2×6.0)	隅丸長方形	東部中央北寄り	隅りこみ式	なし	4	一部	東壁・西壁	不明	69	不明
11	F1-1住	(3.7×3.8)	隅丸方形	北部中央	くりぬき式	なし	4	なし	なし	なし	71	溝板瓦葺
12	F1-2住	(4.6×4.8)	隅丸方形	東部中央北寄り	くりぬき式	なし	4	なし	全面	コマド高麗	74	プロッタ状の土間皿・丸山版
13	H1-1住	(6.79×7.6)	長方形	北部中央	くりぬき式	なし	3.1×0.6	全面	コマド高麗	76-78	83	レンズ版の土間皿・丸山版、溝板瓦葺
14	H1-3住	(1.04×0.81, 0.4×0.7)	隅丸方形	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	85	不明
15	H1-4住	(3.7×3.9)	隅丸方形	東部中央西寄り	不明	不明	不明	不明	不明	不明	84	プロッタ状の土間皿・丸山版
16	I1-1住	(3.15×3.4)	方形	北部中央	くりぬき式	なし	2(?)	全面	なし	なし	87	プロッタ状の土間皿・丸山版
17	I1-2住	(3.9×6.0)	方形	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	4	一部	北コマド高麗	不明	89	プロッタ状の土間皿・丸山版
18	I1-3住	(2.4×2.85)	隅丸長方形	東部中央	くりぬき式(?)	なし	4	なし	なし	なし	93	不明
19	I1-4住	(5.4×5.8)	方形	東部中央西寄り	くりぬき式(?)	なし	3.1×0.6	全面	なし	なし	95	プロッタ状の土間皿・丸山版
20	I1-5住	(4.7×5.15)	長方形角隅	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	3.1×0.6	全面	南東コーナー	不明	98	不明
21	I1-6住	(3.3×3.4)	隅丸方形(?)	東部中央西寄り	不明	不明	不明	不明	不明	なし	101	プロッタ状の土間皿・丸山版
22	I1-7住	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	104	不明
23	J1-1住	(1.14×0.27, 2.7×0.7)	隅丸方形(?)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	106	不明
24	K1-1住	(5.4×5.45)	隅丸方形	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	3.1×0.6(?)	一部	コマド高麗	不明	107	不明
25	K1-2住	(4.25×4.3)	隅丸方形	東部中央北寄り(?)	不明	不明	なし	一部	北東コーナー	不明	108	溝板瓦葺
26	K1-3住	(3.8×3.8)	隅丸方形(?)	東部中央(?)	くりぬき式	なし	4	なし	なし	なし	109	プロッタ状の土間皿・丸山版
27	K1-4住	(3.8×3.5)	隅丸方形(?)	東部中央(?)	くりぬき式	なし	4	全面	不明	不明	110	プロッタ状の土間皿・丸山版
28	K1-5住	(4.5×4.5)	隅丸方形(?)	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	4	なし	不明	不明	111	プロッタ状の土間皿・丸山版
29	K1-6住	(4.5×4.6)	隅丸方形(?)	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	2.1×0.7(?)	一部	不明	不明	116	不明
30	K1-7住	(3.8×3.25)	隅丸方形	東部中央西寄り	くりぬき式	なし	4	なし	なし	なし	119	プロッタ状の土間皿・丸山版
31	K1-8住	(3.7×3.7)	隅丸方形(?)	西部中央西寄り	くりぬき式	なし	1.0(?)	なし	中央部西寄り	不明	121	プロッタ状の土間皿・丸山版
32	K1-9住	(3.65×3.85)	隅丸方形	東部中央西寄り	隅りこみ式	なし	なし	一部	南コマド高麗	不明	124	不明

⑤カマド

カマドが検出された住居址は25棟あり、内2基のカマドを設置しているのは、IⅡ-2・6住居址、KⅡ-5住居址、KⅢ-1・3住居址の5棟である。

カマドの設置位置（2基設置の住居址を含む）は、東壁に10棟、西壁に3棟、南壁に3棟、北壁に14棟で、特に東壁と北壁に偏在し、壁中央部からどちらか一方に片寄る傾向性が強い。壁中央に設置されているのは8棟だけである。

カマドが2基設置された位置は、東壁・西壁に1棟、南壁・北壁に2棟、西壁北壁に1棟、東壁・北壁に1棟で、凡て壁中央部からどちらか一方に片寄っている。5棟の内3棟は、対面方向にカマドを設置している。

カマドの造り変えがはっきりわかるのは、IⅡ-2住居址、KⅢ-1・3住居址の3棟である。

カマドには、煙道のある形式と煙道のない形式の2種類がある。煙道はEⅠ-1住居址の掘りこみ式以外は、凡て地山をくりぬいて造られており、下り勾配が主である。（上り勾配もある）

カマド本体は、遺跡周辺から産する水成岩（主に凝灰岩とチャート）の石材を、側壁と天井に使用し、その上をシルトで被覆し構築している。また被覆したシルトに補強材として、甕の破片を入れる例はIⅡ-6住居址に見られる。

支脚は10棟で検出された。種類としては、小型の甕、坏、土製支脚、川原石、角礫、土器底部破片等を用いている。DⅡ-5住居址から出土の鼓状土製支脚は、青森県において多くの出土例があるものの、岩手県北地方からの出土は稀である。

⑥柱穴

柱穴が検出された住居址は17棟あり、4本柱を基本としている。柱穴の配置は長方形ないし台形状で、内2本はいずれかの壁際に寄るのが特長である。掘り方の平面形は円形が主であるが、長方形（DⅡ-3・4住居址）のものもある。

⑦周溝

周溝はカマド部分を除いた壁際を全周するものが10棟、一部巡るものが7棟あり、規模は一律ではないが幅10cm～20cm、深さ10cm前後を測る。HⅡ-1住居址（焼失家屋）の周溝からは、幅10cm、長さ20cm、厚さ2cm～4cmの板状の炭化材が壁に密着している。検出されて県内において壁材が良好に残存していた例としては、紫波町上平沢新田遺跡^(注3)の1号住居址があり、板敷床と板壁の存在を示している。当遺構も壁際のほかに床上に板状の炭化材が散在することからみて、壁材は単なる土留め材というよりも板壁の可能性が考えられる。

⑧間仕切り

EⅠ-1住居址とカマドの周りに半円状の小溝があり、間仕切り痕と思われる。

⑨貯蔵穴

貯蔵穴が検出された住居址は13棟で、カマド袖部の脇に位置するものが大部分である。

(3) 中世整穴住居址

中世住居址は3棟、建てかえを含むと計5棟検出されている。形状は方形・長方形のもので、BⅡ-3住居址には出入口状張り出しを2箇所にもち、3棟分の建てかえを有するものである。

BⅡ-3住居址の時期については、床面及び柱穴埋土から得られた銭から、中世・16世紀前後に位置づけられるものと思われるが、他2棟の時期については不明である。

(4) 住居址状遺構

検出された住居址状遺構は2棟である。いずれの遺構にも炉址、柱穴は検出されず、「住居址」として認定しなかったものである。出土遺物もなく時期は不明である。

(5) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、①CⅡ-6掘立柱建物跡・桁行3間(7.1m)×梁行2間(4.7m)、②EⅡ-1掘立柱建物跡・桁行6間(11.3m)×梁行3間(5.7m)、③HⅡ-2掘立柱建物跡・桁行6間(11.7m)×梁行4間(7.8m)の3棟検出された。

棟方向は、①と②が南北棟、③は北に向って46度東偏する南西-北東棟である。扉はいずれもあり、①が西側、②と③が東側に位置している。②と③には土間があった。

柱間寸法の平均値(桁行と梁行)は、①が7.75尺~7.8尺、②が6.27尺、③が6.43尺であり、各棟とも桁行と梁行はほぼ同値を示している。県内における古民家の例からは、①の大きな柱間寸法をとるものは18世紀中期ないしそれ以前(16世紀)にとくにもみられる。また②と③の6尺3寸~4寸の柱間寸法は、農家や町家に限らずごく一般的なもので、広く県内および宮城県にも分布が知られている。

時代は、①が柱間寸法から18世紀以前の建物跡であろう。③は出土した寛永通寶や鉄銭等の遺物と柱間寸法から、江戸末の建物跡と考えられる。②は③に類似するものの、時代は不詳である。

(6) 土坑

土坑は計64基検出されている。これらは平面形・断面形から、①平面形が円形・楕円形・不整形を呈し、断面形がフラスコ形を呈するもの。②平面形が円形・楕円形・不整形を呈し、断面形がピーカー状・皿形・逆台形・すり鉢状を呈するもの。③平面形が方形を呈するもの。④

平面形が長方形を呈するものの4つに大別できる。それぞれの基数は①が11基、②が35基、③が7基④が9基であり、残り2基については大別不可能のものである。

①に大別される土坑は、最小のもので開口部径約90cm・底部径約110cmのもので、最大のものは開口部径約400cm・底部径約340cmのものである。規模については一概に特徴を見出すことはできないが、開口部に対する部の規模の比は開口部を1にした場合底部は開口部の1.1倍から1.2倍の規模をもつものが大半を占める。

検出された土坑の時期については、③・④に大別される土坑は主に平安時代住居址に接近した位置に構築されていること、又④に大別されたIⅡ-52土坑埋土下位からは、ほぼ完形の土師器が出土していることから、③・④に大別される土坑には、平安時代に位置づけられるものが少なからずあるものと思われる。CⅡ-70土坑埋土中位からは縄文土器3片が出土しているが時期決定に足る資料とはなり得ず、①・②に大別される土坑を含み、時期は不明である。

(7) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、調査区中央部に1基、東側に3基検出された。平面形は溝状で、断面形はや・開き気味のV字形である。位置的にIⅡ-101・102陥し穴状遺構が平行に並ぶほかは、規則性は見いだせない。遺物の出土はなく当遺構の時代は不明であるが、本県の都南村湯沢遺跡^(出3)からは縄文後期初頭の土器破片、九戸村滝谷Ⅲ遺跡^(出6)（江刺家遺跡の500m北西）からも縄文後期の土器破片を出土している。また、軽米町君成田Ⅳ遺跡^(出7)では、縄文後期前葉の住居址の中に完全に入っている例（陥し穴状遺構の時期は縄文後期初頭以前）が報告されている。

(8) 溝遺構

検出された溝は3条である。断面形はいずれもU字状からV字状を呈するもので幅及び、深さも小規模のものである。

出土物も得られず、時期決定の資料を欠くが、平安時代住居址及び中世住居址との切り合い関係から、中世以後に位置づけられるものと思われる。

(9) 焼土遺構

検出された焼土は4基で、いずれも現地性焼土である。遺物は伴わず、時期は不明である。

表18 土坑一覽表(1)

項目 No.	区分	遺構名	規模			形 態		図面番号	写真番号	備 考
			開口部(m)	底 部(m)	深 さ(m)	平 面 形	断 面 形			
1	B区	BⅡ-51土坑	115×115	80×80	30	不 整 形	連 台 形	141	—	
2		BⅡ-52土坑	90×110	65×90	20	梯 円 形	連 台 形	141	37	
3	C区	CⅠ-51土坑	不 明	不 明	33	楕 円 形(?)	ナリ鉢状	141	37	
4		CⅠ-52土坑	150×190	120×160	32	長 方 形	皿 形	142	—	
5		CⅡ-51土坑	不 明	不 明	55	不 明	フラスコ形	142	37	
6		CⅡ-52土坑	60×90	80×110	43	不 整 形	フラスコ形	142	37	
7		CⅡ-53土坑	95×95	90×90	16	方 形	皿 形	143	—	
8		CⅡ-54土坑	87×87	65×65	54	円 形	ビーキー状	143	38	
9		CⅡ-55土坑	80×80	70×70	36	円 形	連 台 形	143	38	
10		CⅡ-56土坑	55×85	40×70	30	楕 円 形	ビーキー状	143	38	
11		CⅡ-57土坑	70×70	60×60	15	円 形	皿 形	143	38	
12		CⅡ-58土坑	70×95	55×75	15	楕 円 形	皿 形	143	38	
13		CⅡ-59土坑	130×130	150×150	53	円 形	フラスコ形	144	38	
14		CⅡ-60土坑	70×210	55×200	10	不 整 形	皿 形	144	38	
15		CⅡ-61土坑	90×90	80×80	25	円 形	ビーキー状	144	38	
16		CⅡ-62土坑	90×110	65×100	30	楕 円 形	連 台 形	144	—	
17		CⅡ-63土坑	90×105	65×90	22	楕 円 形	連 台 形	144	39	
18		CⅡ-64土坑	150×200	170×220	58	楕 円 形	フラスコ形	145	39	
19		CⅡ-65土坑	160×180	170×210	60	楕 円 形	フラスコ形	145	39	
20		CⅡ-66土坑	250×290	85×85	35	楕 円 形	ナリ鉢状(?)	145	—	
21		CⅡ-67土坑	100×100	80×80	50	円 形	フラスコ形	145	39	
22		CⅡ-68土坑	110×110	95×85	19	円 形	皿 形	146	39	
23		CⅡ-69土坑	90×90	70×85	22	楕 円 形	連 台 形	146	39	
24		CⅡ-70土坑	180×180	200×230	50	円 形	フラスコ形	146	40	縄文土器破片
25		CⅡ-71土坑	95×95	60×60	22	円 形	連 台 形	146	40	
26		CⅡ-72土坑	35×60	55×65	56	楕 円 形	ビーキー状	146	40	
27		CⅡ-73土坑	65×90	45×60	35	楕 円 形	連 台 形	148	40	
28		CⅡ-74土坑	58×55	37×52	46	楕 円 形	ビーキー状	148	40	
29	D区	DⅠ-51土坑	90×105	70×85	20	楕 円 形	連 台 形	148	41	
30		DⅠ-52土坑	330×400	290×340	60	楕 円 形	フラスコ形	148	41	
31		DⅡ-51土坑	105×140	60×85	44	楕 円 形	連 台 形	149	41	
32		DⅡ-52土坑	120×120	100×100	10	方 形	皿 形	149	—	

表19 土坑一覽表(2)

No.	区 名	遺 蹟 名	堀 壕			形 態		図版番号	写真番号	備 考
			開口部(m)	底 部(m)	深 さ(m)	平 面 形	断 面 形			
33	E区	EⅠ-51土坑	85×105	28×60	25	矩 形	逆台形	149	41	
34		EⅠ-52土坑	135×135	50×50	30	円 形	ナリ鉢状	149	42	骨片、灰、焼土
35		EⅡ-51土坑	106×128	100×120	26	隅丸長方形	皿 形	150	42	
36		EⅡ-52土坑	130×192	114×170	17	隅丸長方形	皿 形	150	42	
37	F区	FⅠ-51土坑	90×100	70×75	20	円 形	ナリ鉢状	150	42	
38		FⅡ-51土坑	210×420	110×140	68	瓢 箪 形	ナリ鉢状	151	42	
39		FⅡ-52土坑	92×122	76×105	22	隅丸長方形	逆台形	151	42	
40		FⅡ-53土坑	72×98	64×92	5	楕 円 形	皿 形	151	43	
41		FⅡ-54土坑	72×116	53×98	12	楕 円 形	皿 形	151	43	
42		FⅡ-55土坑	120×136	106×122	16	円 形	ナリ盆	151	43	
43		FⅡ-56土坑	64×102	54×85	12	隅丸長方形	皿 形	151	43	
44		FⅡ-57土坑	64×100	50×98	22	隅丸長方形	ナリ鉢状	151	43	
45	H区	HⅡ-51土坑	230×230	200×200	90	方 形	逆台形	152	44	
46		HⅡ-52土坑	162×164	150×154	12	隅丸方形	皿 形	153	44	
47	I区	IⅡ-51土坑	106×122	82×188	44	隅丸長方形	逆台形	153	44	
48		IⅡ-52土坑	82×148	56×120	20	楕 円 形	逆台形	153	44	土師器の壁
49		IⅡ-53土坑	120×276	110×262	8	長 方 形	皿 形	153	—	
50		IⅡ-54土坑	70×116	40×95	20	楕 円 形	逆台形	155	45	
51		IⅡ-55土坑	152×160	88×92	30	方 形	皿 形	155	45	
52		IⅡ-56土坑	114×138	150×160	94	楕 円 形	フラスコ形	155	45	
53		IⅡ-57土坑	124×156	92×105	47	楕 円 形	ナリ鉢状	155	45	
54		IⅡ-58土坑	100×108	120×128	108	円 形	フラスコ形	155	46	
55		IⅡ-51土坑	110×146	86×134	15	隅丸長方形	皿 形	156	46	
56		IⅡ-52土坑	不明	不明	37	不明	皿 形	156	46	
57	K区	KⅡ-51土坑	184×198	94×140	58	おむすび形	ビーカー状	156	46	
58		KⅡ-52土坑	82×112	67×98	7	楕 円 形	皿 形	156	46	
59		KⅡ-53土坑	106×120	90×100	24	楕 円 形	逆台形	157	—	
60		KⅡ-54土坑	100×116	190×200	100	円 形	フラスコ形	157	—	
61		KⅡ-55土坑	160×212	100×170	91	隅丸長方形	逆台形	157	47	
62		KⅡ-51土坑	144×146	113×120	50	隅丸方形	逆台形	157	47	
63		KⅡ-52土坑	156×166	125×128	38	隅丸方形	ナリ鉢状	158	47	
64		KⅡ-53土坑	104×126	84×106	48	隅丸長方形	ビーカー状	158	47	

2. 遺物

(1) 縄文時代

①土器

縄文土器は、早期・中期・後期・晩期に属する土器が得られている。

第Ⅰ群土器（早期）は、爪形刺突文・貝殻条痕文及び貝殻腹縁文を主体としたもので、従来の型式名でいうと白浜式に比定されるものである。この土器は主にⅠⅠ区及びⅠⅡ区に集中して出土しているが、これらに伴う住居址は確認できなかった。

第Ⅱ群土器（中期末葉）から第Ⅲ群土器（中期末葉～後期初頭）は出土点数が多く、出土地点もD区からJ区にかけての広範囲に点在している。これは検出された住居址の時期及び占拠とは一致するものである。これらの時期に位置づけられる住居址から得られた土器は、大木9式・大木10式及び十腰内Ⅰ式に比定されるもので占められる。ⅠⅠ-1住居址からは、炉直上から大木10式に相当する大型粗製深鉢が、埋土下位からは十腰内Ⅰ式に比定される精製土器が出土し、大木系と十腰内系が共存する形で得られている。このことは層位的に出土地は違うにせよ、時期及び文化圏を知る上に興味深い。

第Ⅳ群土器（後期）・第Ⅴ群土器（後期後半～晩期前半）・第Ⅵ群土器（晩期）の出土地点はB区・C区沢沿いの限られた部分のみに点在し、出土点数も少ない。

②石器

当遺跡で出土した石器は、遺構内から出土したものの53点、遺構外から出土したものの49点、合計102点である。

遺構内から出土した器種のうち点数の多いものは、ブレード・磨石である。GⅠ-1住居址南壁際床面下約3cmからは一括して9点のブレードが出土している。又、ⅠⅠ-1住居址の北東壁際埋土は、上位から中位まで斜位に人為的埋土を示していたが、この埋土に含まれて磨石が4点出土している。石刀破片はDⅡ-1住居址・ⅠⅡ-5住居址床面から、ⅠⅠ-1住居址埋土から各1点ずつ出土している。

遺構外から出土した器種のうち点数の多いものは、磨石・石鏃・凹石である。出土地点はF区からJ区の検出された縄文時代住居址の周辺に点在する。

(2) 平安時代

出土した遺物は、土師器、須恵器、鉄器、木製品、石器等があり、遺物量数は土師器が大部分を占めている。ここでは土師器（第Ⅶ群）と須恵器（第Ⅷ群）を主体に分類を行ない、その他のものは必要に応じて器種名を上げてゆく。

①土師器（第Ⅶ群） ロクロ使用の有無で二大別され、器面調整技法と器形によりさらに細分可能である。器種は環・甕・甗・手づくね・ミニチュアがある。

〈坏〉 ロクロ使用とロクロ不使用に大別され、器面調整技法で下記のように分けられる。

- A類（ロクロ使用）
- I、内面を黒色処理を施しているもの。
 - II、内外面とも黒色処理を施しているもの。
 - III、非内黒処理のもの。

B類（ロクロ不使用）

環A類のロクロからの切り離し技法は、回転系切りの無調整が主である。底部が切り離した後再調整（寛ミガキや寛ケズリ）されたものは、A I類（C II-1住居址）とA II類（D II-5住居址）にある。口縁部の形態は、大半が破片のため詳細は不明であるが、内湾するものと外傾する2種類がある。

A I類に属する中には、墨書されたものやベタ高台の器形が僅少にある。

A II類は、2点（D II-5住居址、I II-4住居址）だけの出土で、内外面とも緻密に寛ミガキされたのち黒色処理を施している。

A III類は、全般に浅めの器形が多くみられる。

環B類は僅か2点（K III-1・3住居址）の出土である。分類はB I類だけで、外面は寛ケズリ調整を施し、底部は磨滅しているが木葉痕である。

〈甕〉 ロクロ使用と不使用に大別され、法量と口縁部の形態で下記のように分けられる。

- A類（ロクロ使用）
- I、口径が18cm以上のもの。
 - II、口径が12cmから18cmまでのもの。
 - III、口径が12cm以下のもの。
 - a、口縁部が外反するもの。
 - b、口縁部が外傾するもの。
 - c、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。
 - d、口縁部が外反し、口唇部を上方に引き出すもの。

B類（ロクロ不使用）

甕A類は7点の出土で、大・中・小の器形がある。A I類は胴部に最大径を有し、体部下半に寛ケズリ調整と寛ナデ調整されている2種類がある。口縁部の形態はaとbがあり、aが主体を占めている。

甕B類の器面調整技法は、口縁部が横ナデ調整、体部は外面が寛ケズリ調整、内面が寛ナデ調整を基本としているものの一部には、外面に寛ミガキや内面にハケメ調整痕が加わるものも僅少ある。底部は木葉痕と寛ケズリの2種類あり、寛ケズリの中には砂が付着（砂底）するものが多くみられる。頸部に段や沈線有するものはなく、口縁部の形態はaが優占し、bやcは小型の器種にみられる。器形は大・中・小あり、胴部が膨らむもの、体部下半のしぼみ大きい

もの、最大胴形が体部中位から上方にあるもの、球形を呈するもの等がある。

内外面とも黒色処理を施した口縁部破片が1点出土しているが、B類で一括し細分は行なわないことにする。

〈甕〉 2点だけの出土であり、破片のため全容を知ることはできないが無底式と思われる。

A類 つば状の突起があるもの

B類 つば状の突起がないもの

A類は外面寛ケズリ、内面寛ナデ調整を施している。B類の内面は寛ナデ調整である。

〈手ずくね〉 全体に粗雑なつくりのものが2点出土している。内外面とも指ナデ痕が認められる。

〈ミニチュア〉 1点だけの出土で、外面は指ナデ痕である。

②須恵器(第Ⅱ群) 大部分は破片で出土量も少なく、器形の全容を知ることはむずかしい。器種は甕の1種類だけで、器面調整技法により二大別される。

〈甕〉 A類 外面を寛ケズリ調整を施しているもの

B類 外面を寛ケズリ調整以外の調整をしているもの

A類は小型の器形のものである。B類の外面調整は叩キ目紋が大部分で、大型や中型の器形と思われる口縁部破片や胴体部破片が多い。

住居地ごとの土器組成の概観は、土師器の坏(A類)と甕(B類)を基本とするものであり、甕・手ずくね・ミニチュアや須恵器の出土数は僅少である。全般に坏の点数は減少し、口縁部が短く、荒い調整を施した甕が多くなる傾向性を示している。

各遺構とも土器は破片が多く、遺物量にも偏りがあるために時期区分は不詳のものが多い。

I期 坏と甕はいずれもロクロ不使用のものである。坏はBⅠ類で、外面は寛ケズリ調整を施し、底部は木葉痕である。甕はBⅠ類とBⅡ類である。KⅢ-1住居地が該当する。

Ⅱ期 この時期は、ロクロ使用とロクロ不使用の坏と甕があり、須恵器の大甕が伴作する。坏はAⅠ類とBⅠ類があり、BⅠ類はI期に類似する。甕はAⅡ類、BⅠ・Ⅱ類である。KⅢ-3住居地が該当する。

Ⅲa期 坏はロクロ使用のAⅠ類で、甕はロクロ使用のAⅡ類とロクロ不使用のBⅠ・BⅡ類がある。須恵器は大甕と小甕の器種があり、黒書坏や甕も伴作する。HⅡ-1住居地、IⅡ-2住居地が該当する。

Ⅲb期 坏はロクロ使用で、甕はロクロ不使用のものである。坏はAⅠ~AⅢ類、甕はBⅠ類とBⅡ類である。この時期は、坏と甕に内外黒色処理を施したものや須恵器を伴作するものがある。DⅠ-1住居地、DⅡ-5住居地、IⅡ-4住居地、KⅡ-5住居地が該当する。

Ⅲc期 坏はロクロ使用のAⅢ類(非内黒処理)だけのもの。甕はロクロ使用のAⅢ類やロクロ不

使用のBⅠ・BⅡ類がある。須恵器を共伴するものもある。CⅡ-4住居址、CⅡ-5住居址が該当する。

Ⅲd期 埴と須恵器の器種は、欠きロクロ使用とロクロ不使用の變が共伴する。AⅠ類の埴は外面に再調整（寛ケズリや寛ナデ調整）されている。DⅡ-2住居址が該当する。

土器の共伴関係や形態からⅠ～Ⅲ時期に分かれるものの、各時期差はあまりないようにみうけられる。Ⅲ期は細分したものの、資料不足のため流道的である。

当遺跡における土器師の年代は、岩手県北の馬淵川上流域の一戸町北館⁽¹²⁸⁾B遺跡や二戸市中曾根⁽¹²⁹⁾Ⅱ遺跡に類似性のものがみられ、10世紀後半～11世紀と推定される。

③鉄器

鉄器及び鉄器関連遺物は、32棟中13棟から出土している。器種と点数は下記のとおりである。

角釘…6点、刀子…5点、鉄鎌…3点、紡錘車…1点、鋸先…1点、器種不明…5点
ふいご口破片…3点、鉄塊・鉄滓…多量

器種別の用途としては、武器（鉄鎌）と生産用具（鋸先、紡錘車、刀子、角釘）の2種がある。

住居址より出土の紡錘車と鉄滓は、刀剣材料研究所の新沼鐵夫氏に分析鑑定をいただいた。その結果は、いずれも砂鉄を原料に使用し加工したものである。紡錘車は鋼で、よく鍛錬したものではなく粗製品のように見受けられ、鉄滓は凡て鍛冶滓であった。また、原鉱（砂鉄・岩鉄）の供給産地は、材料を運搬して加工したものと想定した場合、当遺跡周辺の小軽米・板銅屋が最も有力との所見である。

鍛冶滓だけを出土している周辺の遺跡例は、一戸町田中4遺跡⁽¹²¹⁰⁾、北館B遺跡⁽¹²⁸⁾、田野畑村仕上綱が跡⁽¹²¹¹⁾などがある。

遺構から鍛冶道具（鉗、鉄錘、鉄床）の出土は欠くものの、ふいご口と多量の鉄塊や鍛冶滓を出土することは、鍛冶生産を行っていたことを強くうかがわせる。鉄器類は地元生産の可能性が大である。製錬炉は調査区域内では確認されなかったが、周辺に存在すると考えられる。

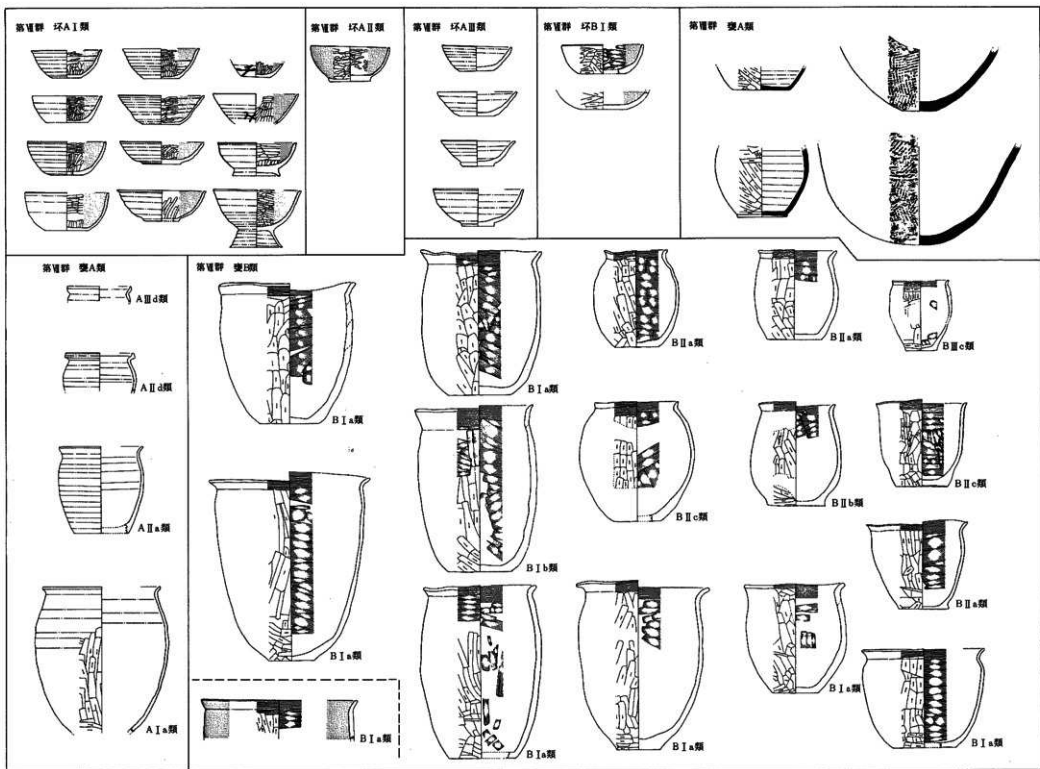
④木製品

炭化した櫛が1点FⅡ-1住居址から出土している。県北地方における古代～平安時代の遺構に伴う櫛の出土は、安代町扇畑Ⅱ遺跡⁽¹²¹⁾のCⅠ-1住居址（平安）と二戸市荒谷A遺跡⁽¹²¹²⁾のIⅠ-09住居址（古代）の例がある。

⑤石器

器種と点数は、砥石…1点、石臼…2点（内1点は近世以降の投げ込み）、不明…1点（燈明皿？）である。

また、琥珀の原石（子供の挙大）がKⅢ-3住居址の床上から1点出土している。原産地は久



第178図 土器分類図 (平安時代)

意市周辺と考えられる。県内における琥珀関連の資料は、当埋センター刊行の第67集上野山遺跡報告書（佐々木・村上）で詳細に述べられているので、そちらを参照されたい。

⑥炭化穀類

FⅡ-1住居址から多量の炭化穀類が出土しており、穀類全般は国分寺市文化財専門委員の佐藤敏也氏に、小形種子の同定は城西歯科大学講師の松谷暁子氏に分析鑑定をいただいた。

その結果炭化穀類は、米・粟・小豆・大麦の4種類であることが確認された。米は穎籾のまま焼けたもので、短粒の無芒種が中心である。これらの穀類は、ある種の貯蔵容器中に別々に貯蔵されていたと思われる。小形種子は電子顕微鏡観察等により、粟や稗ではなく粟であった。

(3) 中世～近世

①中世

関連する遺物は、中世の竪穴住居址から出土している。永楽通寶5枚、銅銭9枚、皇宋通寶1枚で、枚数は少なく、一部欠損しているものが多い。

②近世

HⅡ-2掘立柱建物跡（江戸末）からの出土が主で、器種毎に列記すると下記のようになる。

鉄製品…角釘14点、毛抜き1点、鎌の先端(?)1点、円形状1点、U字状1点、他2点。

銅製品…髷1点

木製品…漆器の漆膜

土製品…蕎麦摺口1点

銭……鉄銭39枚、寛永通寶14枚

鉄製品は器種不明なものもあるが、生活用具が多く出土している。残存した漆器の漆膜には、朱漆と黒漆の2種類があり、県内の浄法寺院系統のものであろう。

(4) その他

特記すべきこととして、遺構外から出土した石帯部品（石製部具）があげられる。石帯や鈿帯については、伊藤玄三氏、関根真隆氏、阿部義平氏らによって論じられ、律令時代の一時期において貴族・官人が用いたもので、官位制に基くものであろうとされている。また、当埋文センター刊行の調査報告書第8集（力石Ⅱ遺跡）と第44集（東大畑遺跡）でも詳細に論じられていることからここでは割愛する。本県における石帯や鈿帯を出土した遺跡数は、江刺家を含め9箇所を数え、鉸具2、巡方14、丸柄19、鉈尾3が出土している。

石帯は本県北部において、一戸町田中4遺跡B A62住居址に続いて2例目の出土であり、古い時期から律令制の浸透が馬淵川流域の一戸地方と九戸地方までおよんでいたことがうかがわれる。

〔参考・引用文献〕

- (註1) 近藤宗光・佐々木清文『原畑Ⅰ遺跡』「岩手県埋文センター文化財調査報告書第17集」
(財)岩手県埋蔵文化財センター 1981年
- (註2) 遠藤勝博・高橋義介・他『上田面遺跡』「岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集」
(財)岩手県埋蔵文化財センター 1981年
- (註3) 吉田努・他『上平沢新田遺跡』「岩手県文化財調査報告書第52集」 1980年
- (註4) 佐藤巧・他『岩手の古民家』岩手県教育委員会 1978年
- (註5) 高橋信雄・三浦謙一・他『湯沢遺跡』「岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集」
(財)岩手県埋蔵文化財センター 1977年
- (註6) 佐々木清文『滝谷Ⅲ遺跡』「岩手県埋文センター文化財調査報告書第49集」
(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983年
- (註7) 遠藤勝博・高橋義介・他『君成田Ⅳ遺跡』「岩手県埋文センター文化財調査報告書第
62集」(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983年
- (註8) 高田和徳・桐生正一・他『北館B遺跡』「一戸町文化財報告書第1集」一戸町教育委
員会 1981年
- (註9) 関 豊『中曾根Ⅱ遺跡』「中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書」二戸市教育委員会 1981年
- (註10) 高田和徳・他『田中4遺跡』「一戸町文化財報告書第1集」一戸町教育委員会1981年
- (註11) 新沼鐵夫氏よりの御教授を受けた。
- (註12) 吉田努・鈴木優子・他『荒谷A遺跡』「岩手県埋文センター文化財調査報告書第57集」
(財)岩手県埋蔵文化財センター 1983年
- (註13) 伊藤玄三『末期古墳の年代について』「古代学」14巻3の4 1968年
- (註14) 関根真隆『帯類および腰部装飾』奈良朝服飾の研究 1974年
- (註15) 阿部義平『銚帯と官位制について』「東北考古学の諸問題」 1976年
- 関 豊『馬淵川上流域を中心とした岩手県北部の古代土器の様相』岩手考古学会
資料 1982年
- 高橋信雄・他『岩手の土器』岩手県立博物館 1982年
- 今井富士雄・磯崎正彦『十腰内遺跡』「岩木山」岩木山刊行会 1968年
- 野口義磨『縄文土器大成3 後期』講談社 1981年
- 田中庄一『南部うるし』名著出版 1981年

表20 瀬内出土石器一覽表

遺構名	出土地点	器種	図録番号	写真番号	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(kg)	材質	備考
1 1B-2住	塚土	石鏃	8-3	50-3	3.00	1.70	0.39	1.40	チャート	北上山地区生葬
2 *	塚土 _Q	磨石	8-4	50-4	5.00	1.90	1.29	45.00	チャート	北上山地区生葬
3 *	塚土 _Q	スレイバー	8-5	50-5	4.80	3.20	0.77	10.30	結晶質燧石	奥石山地区生葬
4 1B-4住	塚土 _Q	凹石	11-3	51-3	11.90	9.40	4.85	280.00	花崗閃石岩	北上山地区生葬
5 1D-3住	塚土 _Q	鏃石	14-3	52-3	12.60	4.60	2.40	793.00	花崗閃石岩	野手山地区生葬
6 1D-1住	塚土下部(N4)	フレック	18-13	53-13	2.90	2.00	0.61	2.50	チャート	北上山地区生葬
7 *	塚土下部(N2)	フレック	18-5	53-5	4.20	2.90	1.94	10.05	結晶質燧石	北上山地区(?)
8 *	塚土下部(N3)	フレック	18-7	54-7	2.50	2.20	0.90	4.05	結晶質燧石	北上山地区(?)
9 *	塚土下部(N4)	フレック	18-8	54-8	3.10	1.90	0.59	2.30	結晶質燧石	北上山地区(?)
10 *	塚土下部(N5)	フレック	18-9	54-9	3.50	2.00	0.74	4.40	結晶質燧石	北上山地区(?)
11 *	塚土下部(N6)	フレック	18-12	54-12	3.00	3.30	1.21	8.40	結晶質燧石	北上山地区(?)
12 *	塚土下部(N7)	フレック	18-10	54-10	2.50	2.00	1.10	4.30	結晶質燧石	北上山地区(?)
13 *	塚土下部(N8)	フレック	18-11	54-11	3.00	2.40	0.63	3.40	結晶質燧石	北上山地区(?)
14 *	塚土下部(N3)	スクレイバー	18-6	54-6	3.20	4.15	1.25	16.50	結晶質燧石	北上山地区(?)
15 *	塚土下部(N3)	スクレイバー	18-4	54-4	4.00	4.10	0.58	13.10	チャート	北上山地区生葬
16 *	塚土下部(N12)	石 刀	19-15	54-15	25.10	6.20	1.48	305.00	燧石	野手山地区生葬
17 *	塚土下部(N12-13)	石 刀	19-14	54-14	(22.20)	20.00	(2.20)	1,880.00	燧石	奥石山地区生葬
18 *	塚土(N14)	砥石	19-16	54-16	9.20	3.30	3.88	260.00	結晶質燧石	北上山地区生葬
19 1J-1住	塚土 _Q	フレック	26-15	57-15	4.80	1.96	0.40	4.20	結晶質燧石	野手山地区生葬
20 *	塚土 _Q	加江原のある断片	26-16	57-16	3.80	2.25	1.15	8.00	結晶質燧石	野手山地区生葬
21 *	塚土 _Q	フレック	26-17	57-17	4.25	1.80	0.50	3.80	結晶質燧石	野手山地区生葬
22 *	塚土 _Q	加江原のある断片	26-18	57-18	6.70	4.30	1.60	33.35	結晶質燧石	野手山地区生葬
23 *	塚土 _Q	フレック	26-19	57-19	3.90	2.65	0.40	3.35	結晶質燧石	野手山地区生葬
24 *	塚土 _Q	スクレイバー	26-20	57-20	4.80	3.60	1.10	14.80	結晶質燧石	野手山地区生葬
25 *	塚土 _Q	スクレイバー	26-21	57-21	5.90	3.10	0.90	11.60	結晶質燧石	野手山地区生葬
26 *	塚土 _Q	砥石	26-22	57-22	6.60	5.20	0.80	120.00	燧石	野手山地区生葬
27 1J-1住	塚土 _Q (N2)	石鏃(磨石)	31-9	59-9	2.60	1.90	1.15	5.35	結晶質燧石	北上山地区生葬
28 *	塚土 _Q	凹石	40-78	65-78	9.00	7.10	4.60	510.00	燧石	北上山地区生葬
29 *	塚土 _Q	磨石	40-79	65-79	6.40	4.00	2.80	200.00	チャート	北上山地区生葬
30 *	塚土 _Q (N1)	磨石	40-80	65-80	4.20	4.60	3.50	180.00	チャート	北上山地区生葬
31 *	塚土	砥石	40-81	65-81	5.20	5.00	2.90	100.00	燧石	北上山地区生葬
32 *	塚土 _Q	磨石	40-82	65-82	6.90	3.50	210.00	磨石	野手山地区生葬	
33 *	塚土 _Q	磨石	40-83	65-83	9.00	5.00	3.80	295.00	燧石	野手山地区生葬
34 *	塚土	磨石	40-84	65-84	8.90	4.90	5.00	500.00	燧石	野手山地区生葬
35 *	塚土	磨石	40-85	65-85	15.70	9.70	4.80	1,100.00	燧石	北上山地区生葬
36 *	塚土 _Q (N2)	石 刀	40-86	65-86	(12.70)	4.80	1.10	100.00	燧石	北上山地区生葬
37 1J-3住	塚土 _Q	磨石	42-3	66-3	9.10	5.70	4.00	330.00	燧石	北上山地区生葬
38 *	塚土 _Q	凹石	42-4	66-4	(11.70)	11.60	3.00	540.00	燧石	北上山地区生葬
39 *	塚土 _Q	石 刀	42-5	66-5	(18.80)	7.00	1.90	460.00	燧石	北上山地区生葬
40 *	塚土	磨石	42-7	66-7	15.50	5.00	3.00	500.00	結晶質燧石	北上山地区(?)
41 *	塚土	磨石	42-6	66-6	4.90	4.80	4.30	150.00	燧石	北上山地区生葬
42 1J-1住	塚土	磨石のある断片	45-21	68-21	10.30	6.60	0.80	300.00	燧石	北上山地区生葬
43 *	塚土 _Q	砥石	45-22	68-22	8.10	5.60	5.35	360.00	燧石	北上山地区生葬
44 *	塚土 _Q	加江原のある断片	45-23	68-23	5.10	3.60	0.80	12.30	結晶質燧石	野手山地区生葬

() は推定

表21 遺構外出土石器一覧表

No.	遺構名	出土地点	器種	図面番号	計測			重量(g)	材質	備考	
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
1		CⅡ区	石 槌	167-70	89-70	3.60	1.40	0.50	1.55	粘板岩	北上山地帯生界
2		+	石 槌	167-71	96-71	3.20	1.30	0.40	0.59	粘板岩	北上山地帯生界(？)
3		HⅡ区	石 槌	167-72	96-72	2.90	1.40	0.70	2.40	黒色燧石	等石西田中継上層
4		HⅡ区	石 槌	167-73	96-73	3.82	1.60	0.65	3.25	黒色燧石	北上山地帯生界
5		CⅡ区	石 槌	167-74	96-74	3.20	1.50	0.60	2.55	黒色燧石	北上山地帯生界(？)
6		FⅡ区	石 槌	167-75	96-75	2.70	2.55	0.80	5.25	粘板岩	等石西田中継上層
7		HⅡ区	つばみめスレイパー	167-76	96-76	6.10	1.90	0.70	7.25	粘板岩	北上山地帯生界
8		HⅡ区	つばみめスレイパー	167-77	96-77	4.10	1.25	0.40	3.14	玉 <small>ナ</small>	遺構、時代不詳
9		HⅡ区	スレイパー	167-78	96-78	4.85	2.00	0.50	5.90	粘板岩	北上山地帯生界
10		HⅡ区	スレイパー	167-79	96-79	4.80	2.65	0.90	11.16	粘板岩	北上山地帯生界
11		KⅡ区	スレイパー	168-81	97-81	4.40	2.10	1.40	38.00	黒色燧石	北上山地帯生界
12		+	スレイパー	168-82	97-82	7.29	3.85	0.60	19.80	黒色燧石	等石西田中継上層
13		+	フレーク	168-83	97-83	2.85	1.50	0.70	2.70	玉 <small>ナ</small>	遺構、時代不詳
14		+	フレーク	168-84	97-84	4.50	2.90	0.90	8.30	燧石	等石西田中継上層
15		CⅡ区	磨石	168-85	97-85	4.15	2.30	0.90	8.15	玉 <small>ナ</small>	遺構、時代不詳
16		HⅡ区	磨石	169-86	97-86	10.60	4.61	2.35	160.00	黒色燧石	北上山地帯生界
17		HⅡ区	磨石	169-87	97-87	5.50	4.10	1.30	80.00	燧石	北上山地帯生界
18		HⅡ区	石 槌	169-88	97-88	(13.40)	(11.30)	5.30	1,540.00	燧石	北上山地帯生界
19		+	石 槌	169-89	97-89	17.70	(10.80)	4.90	1,800.00	燧石	北上山地帯生界
20		+	石 槌	169-90	97-90	(4.35)	(0.79)	13.75	粘板岩	北上山地帯生界	
21		DⅡ区	凹 石	170-91	97-91	10.20	6.10	1.40	220.00	粘板岩	北上山地帯生界
22		HⅡ区	凹 石	170-92	97-92	10.80	8.60	4.60	680.00	燧石	北上山地帯生界
23		DⅡ区	凹 石	170-94	98-94	7.40	7.10	3.70	300.00	燧石	北上山地帯生界
24		DⅡ区	凹 石	170-93	98-93	7.30	5.90	5.22	220.00	燧石	等石西田中継上層
25		CⅡ区	凹 石	170-95	98-95	11.90	9.00	5.89	980.00	燧石	等石西田中継上層
26		HⅡ区	凹 石	170-96	98-96	11.40	6.10	2.10	300.00	燧石	北上山地帯生界
27		DⅡ区	磨 石	170-97	98-97	7.30	7.80	5.20	320.00	燧石	等石西田中継上層
28		HⅡ区	磨 石	171-98	98-98	11.30	8.90	6.15	680.00	燧石	北上山地帯生界
29		HⅡ区	磨 石	171-99	98-99	7.30	5.70	5.85	360.00	燧石	北上山地帯生界
30		HⅡ区	磨 石	171-100	98-100	4.30	3.80	1.10	400.00	燧石	北上山地帯生界
31		HⅡ区	磨 石	171-101	98-101	8.50	6.70	1.10	200.00	燧石	北上山地帯生界
32		HⅡ区	磨 石	171-102	98-102	6.70	(4.30)	4.90	280.00	燧石	北上山地帯生界
33		HⅡ区	磨 石	171-103	98-103	4.40	4.25	1.60	50.00	燧石	北上山地帯生界
34		+	磨 石	171-104	99-104	8.50	7.50	6.15	550.00	燧石	北上山地帯生界
35		+	磨 石	171-105	99-105	9.60	7.20	4.90	440.00	燧石	北上山地帯生界
36		HⅡ区	磨 石	171-106	99-106	9.50	(6.70)	5.00	480.00	燧石	北上山地帯生界
37		+	磨 石	172-108	99-108	6.40	5.85	4.25	280.00	燧石	北上山地帯生界
38		+	磨 石	172-107	99-107	8.40	5.90	4.25	200.00	燧石	北上山地帯生界
39		+	磨 石	172-109	99-109	5.30	5.40	3.65	100.00	燧石	北上山地帯生界
40		+	磨 石	172-110	99-110	(4.70)	5.50	3.85	160.00	燧石	北上山地帯生界
41		+	磨 石	172-111	99-111	6.20	4.70	4.20	140.00	燧石	北上山地帯生界
42		KⅡ区	磨 石	172-112	99-112	4.60	4.60	3.85	110.00	燧石	北上山地帯生界
43		+	磨 石	172-113	99-113	(6.30)	4.30	3.50	140.00	燧石	北上山地帯生界
44		+	磨 石	172-114	99-114	10.30	4.40	6.20	300.00	燧石	北上山地帯生界
45		KⅡ区	磨石	172-115	99-115	7.10	6.10	5.00	280.00	燧石	北上山地帯生界
46		+	磨 石	172-116	100-116	9.15	6.45	5.40	460.00	燧石	北上山地帯生界
47		+	磨 石	172-117	100-117	11.34	9.53	8.88	950.00	燧石	北上山地帯生界
48		HⅡ区	円筒状石製品	172-118	100-118	(3.20)	3.23	0.90	13.00	燧石	北上山地帯生界
49		+	円筒状石製品	172-119	100-119	4.30	4.40	1.20	28.56	燧石	北上山地帯生界
50		+	磨石(燧石)	172-120	100-120	10.85	(10.10)	5.75	880.00	燧石	北上山地帯生界
51		HⅡ区	4.4×9.8mmの丸形磨石	172-121	100-121	14.40	6.60	1.30	180.00	燧石	北上山地帯生界

表26 遺構出土鉄器・銅製品一覽表

()は埋存品

背 号	遺構名	出土地点	器 種	計 量		注 記	備 考
				原形番号	写真番号		
1	CI-4住	堀上	角 釘	51-7	69-10	(7.40)	長さ(m) 重さ(g)
2	堀上	堀上	角 釘	51-8	69-11	2.60	0.50 4.45
3	CI-5住	堀上	刀 子	53-9	70-8	(8.80)	1.20 0.40 0.15
4	DI-2住	堀上	破 片	60-7	73-2	(2.40)	0.60 0.25 0.85
5	DI-3住	カサド埋藏	刀 子	62-5	74-12	(5.60)	1.00 0.30 7.20
6	+	R	鉄 鏝	62-3	74-3	(8.60)	2.00 0.45 19.85
7	+	カサド埋藏下層	角 釘	62-6	74-5	(8.00)	4.00 0.30 2.90
8	+	カサド埋藏上層	鉄 鏝	62-4	74-4	(10.90)	幅5.60 0.50 41.90
9	DI-4住	堀上	破 片	66-10	74-12	(2.70)	4.00 0.50 12.80
10	FI-1住	堀上	鉄鏝片	73-11	77-4	12.60	0.75 0.40 10.25
11	+	堀上	鉄鏝片	73-9	77-3	(15.00)	0.70 0.60 10.50
12	FI-1住	堀上	角 釘	75-4	77-8	(6.60)	0.50 0.50 5.50
13	FI-1住	堀上	角 釘	82-22	79-16	14.50	0.50 0.40 9.50
14	+	堀上	不明	82-20	79-17	(10.40)	1.35 0.40 18.95
15	+	ベオト堀上	不明	82-23	79-19	(3.40)	2.30 0.10 3.80
16	+	ベオト堀上	角 釘	82-19	79-18	3.70	0.80 0.70 15.00
17	貝瓦器土器・磁器類	A-4住次	角 釘	138-1	91-6	(2.20)	0.50 0.20 1.50
18	+	B-4住次	毛 刷	138-2	91-8	7.70	0.40 0.30 15.35
19	+	C-3住次	角 釘	138-3	91-7	(3.45)	0.35 0.30 0.95
20	+	C-3住次上層	鏝	138-6	91-13	13.40	0.90 0.15 10.35
21	+	C-3住次上層	角 釘	138-7	91-14	14.60	0.60 0.50 17.20
22	+	C-3住次上層	U字状鉄製品	138-4	91-9	3.15	0.40 0.35 7.75
23	+	C-3住次	角 釘	138-9	91-10	6.30	0.40 0.40 2.25
24	+	D-3住次	円形鉄製品	138-10	91-15	3.30	0.40 0.30 13.25
25	+	住棟-2	角 釘	138-16	91-20	3.40	0.60 0.35 6.30
26	+	D-3住次	角 釘	138-11	91-11	5.20	0.40 0.40 2.70
27	+	E-4住次上層	角 釘	138-12	91-17	(4.45)	0.30 0.40 1.80
28	+	E-4住次上層	角 釘	138-14	91-18	(3.45)	0.45 0.30 1.70
29	+	E-4住次上層	角 釘	138-13	91-16	(0.47)	0.50 0.35 2.45
30	+	土庫-1下層	角 釘	—	—	(5.55)	0.50 0.35 3.90
31	+	土庫-4上層	角 釘	138-19	91-23	(4.80)	0.70 0.50 7.25
32	+	土庫-4上層	三角状鉄製品	138-18	91-26	(5.20)	3.90 0.20 13.70
33	+	土庫-4上層	角 釘	138-17	91-21	(2.65)	0.60 0.40 1.90
34	+	土庫-5上層	角 釘	138-20	91-22	6.60	0.35 0.35 2.35
35	+	土庫-5下層	角 釘	138-21	91-24	4.80	0.45 0.30 1.90
36	+	土庫上層	破 片	138-22	91-25	(柱14.00)	0.45 52.70 6.40
37	+	土庫上層	破 片	138-23	—	(6.90)	2.40 0.25 15.90
38	DI-1住	貯蔵庫堀上下層	刀 子	92-11	81-15	(13.00)	1.60 0.40 21.75
39	DI-1住	堀上	鉄鏝片	94-4	82-3	(3.20)	1.20 0.80 10.35
40	DI-4住	堀上	鏝 片	100-5	83-5	15.80	18.65 0.70 400.00
41	FI-3住	溝下下層	刀 子	109-5	85-5	(8.20)	0.40 2.30
42	KII-3住	堀上	刀 子	127-15	89-11	(11.75)	1.25 0.35 12.15

表27 遺構外出土鉄器一覽表

背 号	遺構名	出土地点	器 種	計 量		注 記	備 考
				原形番号	写真番号		
1	CII区	大町5金	大町5金	174-142	101-138	7.75	2.80 0.40 26.20
2	IIII区	角 釘	角 釘	174-128	101-133	3.60	0.40 0.40 1.30
3	IIII区	角 釘	角 釘	174-138	101-135	6.05	0.60 0.40 10.75
4	IIII区	埋藏品	埋藏品	174-139	101-136	12.90	2.50 2.40 17.45
5	IIII区	不明	不明	174-144	101-141	5.75	5.70 0.30 57.15
6	IIII区	角 釘	角 釘	174-140	101-137	(28.45)	1.20 0.80 160.00
7	IIII区	不明	不明	174-137	101-134	3.60	1.20 0.70 8.85
8	IIII区	刀 子	刀 子	174-143	101-140	14.70	1.80 0.20 20.75
9	IIII区	リソウ鉄製品	リソウ鉄製品	174-141	101-139	幅3.30	1.00 0.30 10.20

表28 遺構出土古銭一覽表

番号	遺構名	出土地点	器種	図録番号	写真番号	年		計測値	備考	
						時代	時期			
1	1日・2日	床上	水滲瓦質	131-1	90-8	明	水滲6年	2.35	1.40	変形
2	3	柱穴	水滲瓦質	131-2	90-9	明	水滲6年	0.50	0.50	一部欠損
3	4	柱穴	水滲瓦質	131-3	90-10	明	水滲6年	2.24	0.75	一部欠損し蓋みが大
4	5	床上	銅 銭	—	90-1	—	—	1.62	0.15	一部欠損
5	6	床上	銅 銭	131-4	90-2	—	—	1.72	0.55	変形
6	6	床上	銅 銭	131-5	90-3	—	—	1.72	0.55	一部欠損
7	7	床上	銅 銭	131-6	90-4	—	—	1.67	0.40	一部欠損
8	8	床上	銅 銭	131-7	90-5	—	—	1.72	0.55	半分欠損で蓋みあり
9	9	床上	銅 銭	131-8	90-6	—	—	1.72	0.25	一部欠損
10	9	床上	銅 銭	131-9	90-6	—	—	1.73	0.35	一部欠損
11	11日・4日	土	水滲瓦質	173-122	90-11	明	水滲6年	2.32	1.80	変形
12	11	土	東水滲瓦質	173-123	90-12	末	—	2.40	1.60	変形 変形銭
13	13日・2日	C-3柱穴埋土	鉄 銭	139-24	90-13	—	—	2.28	2.50	変形 崩片欠
14	14	C-3柱穴埋土	鉄 銭	139-25	90-14	—	—	2.22	2.20	一部欠損 崩片欠
15	15	C-3柱穴埋土	鉄 銭	139-26	90-15	—	—	2.26	2.70	一部欠損 崩片欠
16	17	C-3柱穴埋土	東水滲瓦質	139-27	90-16	江戸	寛文11年	2.36	2.20	変形
17	17	C-5柱穴埋土	鉄 銭	139-28	90-17	—	—	2.24	1.85	変形
18	18	D-3柱穴埋土	鉄 銭	139-29	—	—	—	—	1.05	2/3欠損
19	19	D-5柱穴埋土	鉄 銭	139-30	90-18	—	—	2.38	21.70	変形 2枚接合
20	20	D-5柱穴埋土	鉄 銭	139-31	90-19	—	—	2.41	21.25	変形 1枚接合
21	21	D-5柱穴埋土	鉄 銭	139-32	90-20	江戸	寛文11年	2.96	2.75	変形 1枚接合
22	22	E-4柱穴埋土	東水滲瓦質	139-33	90-21	江戸	寛文11年	2.31	2.50	変形
23	23	E-6柱穴埋土	鉄 銭	—	—	—	—	—	1.50	崩片のため裏面不可
24	24	土坑・埋土	鉄 銭	—	90-22	—	—	—	1.40	崩片のため裏面不可
25	25	土坑・埋土	鉄 銭	139-34	90-23	—	—	2.62	2.35	変形
26	26	土留埋土	鉄 銭	139-35	90-24	—	—	2.63	4.40	変形 2枚接合
27	27	土留埋土	鉄 銭	139-36	90-25	—	—	2.45	2.10	一部欠損
28	28	土留埋土	鉄 銭	139-37	90-26	—	—	2.37	2.75	一部欠損
29	29	土留埋土	鉄 銭	139-38	90-27	—	—	2.33	2.10	一部欠損
30	30	土留埋土	鉄 銭	139-39	90-28	—	—	2.30	1.85	1/3欠損
31	31	土留埋土	鉄 銭	139-40	90-29	—	—	2.30	1.15	2/3欠損
32	32	土留埋土	東水滲瓦質	140-41	—	江戸	寛文11年	2.53	3.45	半分欠損
33	33	土坑・埋土	東水滲瓦質	140-42	90-10	江戸	寛文11年	2.37	1.35	半分欠損
34	34	土坑・埋土	鉄 銭	140-30	91-1	—	—	2.37	18.80	変形 6枚接合
35	35	土坑・埋土	鉄 銭	140-21	91-2	—	—	2.34	7.10	変形 2枚接合
36	36	土坑・埋土	鉄 銭	140-22	91-3	—	—	2.35	6.10	変形 2枚接合
37	37	土坑・埋土	鉄 銭	140-23	91-4	—	—	2.33	1.55	半分欠損
38	38	土坑・埋土	鉄 銭	140-24	91-5	—	—	2.16	2.35	一部欠損

表29 遺構外出土古銭一覽表

番号	遺構名	出土地点	器種	図録番号	写真番号	年		計測値	備考		
						時代	時期				
1	C区	C区3号溝	水滲瓦質	173-124	101-122	明	水滲6年	2.88	1.05	変形	
2	2	C区3号溝	銅 銭	173-125	101-123	—	—	1.08	0.30	一部欠損	
3	3	C区	鉄 銭	173-126	101-124	—	—	1.61	0.20	一部欠損	
4	4	C区	鉄 銭	173-127	101-125	—	—	2.28	2.25	変形	
5	5	H区	鉄 銭	173-126	101-126	—	—	2.28	3.75	一部欠損	
6	6	H区	鉄 銭	173-129	101-127	—	—	2.43	8.80	変形 2枚接合	
7	7	H区	東水滲瓦質	173-130	101-131	江戸	寛文11年	2.52	3.40	変形	
8	8	H区	東水滲瓦質	173-131	101-132	江戸	寛文11年	2.43	2.00	変形 半分蓋みあり	
9	9	H区	東水滲瓦質	173-132	101-129	江戸	寛文11年	1.68	2.32	変形	
10	10	H区	東水滲瓦質	173-133	—	江戸	寛文11年	1.68	2.45	2.30	一部欠損
11	11	H区	東水滲瓦質	173-134	101-130	江戸	寛文11年	1.68	2.30	1.80	変形

写 真 图 版



東側上空より



北側上空より

写真図版1 空中写真



北西上空より



北東上空より

写真図版 2 空中写真



BⅡ-2住完掘(西より)



炉址出土状況



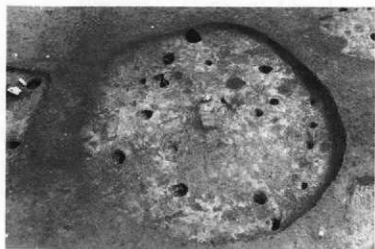
炉址埋土断面



埋土断面



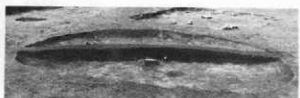
埋土断面



BⅡ-4住完掘(西より)

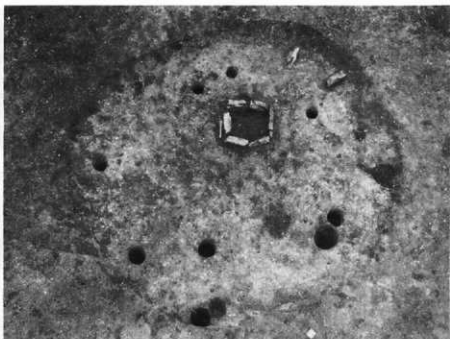


炉址出土状況



埋土断面

写真図版 3 BⅡ-2・4住居址



完掘(東より)



埋土断面



炉址埋土断面



出入口状施設埋土断面



炉址

写真図版 4 CI-2 住居址



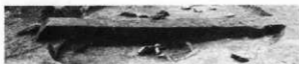
CII-3 住完掘(東より)



DI-2 住遺物出土状況(東より)



炉址埋土断面



埋土断面

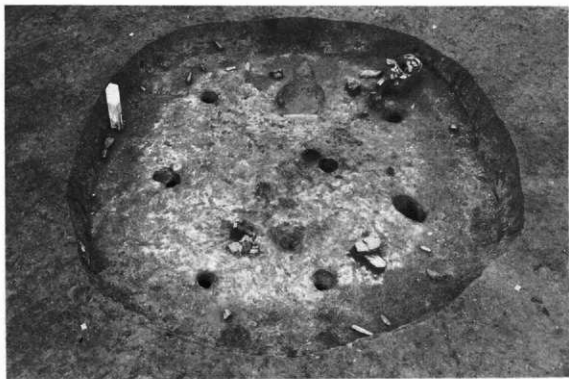


DI-3 住完掘(東より)



炉址埋土断面

写真図版5 CII-3・DI-2・3住居址



完掘(北西より)



埋土断面



炉址埋土断面

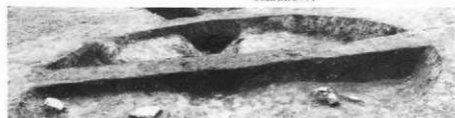


炉址

写真図版 6 DII-1 住居址



完掘(東より)



煙土断面



炉址埋土断面



炉址

写真図版7 FI-1住居址



実掘(東より)



埋土断面



炉址出土状況



炉址

写真図版8 GI-1a 住居址



埋土断面



炉址

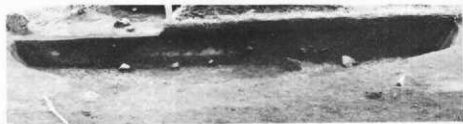


炉址埋土断面

写真图版 9 GI-1b 住居址



完掘(東より)



埋土断面



炉址



地床炉断面



炉址埋土断面

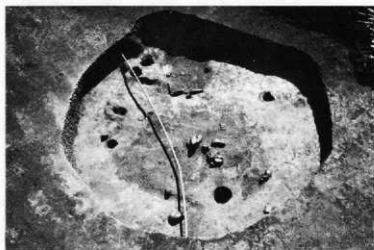
写真図版10 II-1 住居址



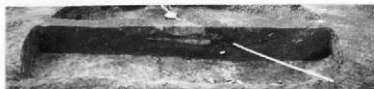
Ⅱ-5 住 発掘(西より)



埋土断面



Ⅱ-1 住 発掘(北より)



埋土断面



Ⅱ-5 住 東炉址埋土断面



Ⅱ-5 住 東炉址



Ⅱ-5 住 西炉址埋土断面



Ⅱ-5 住 西炉址



Ⅱ-5 住 遺物出土状況

写真図版11 Ⅱ-5・Ⅱ-1 住居址



完攤(東より)



炉址



炉址埋土断面

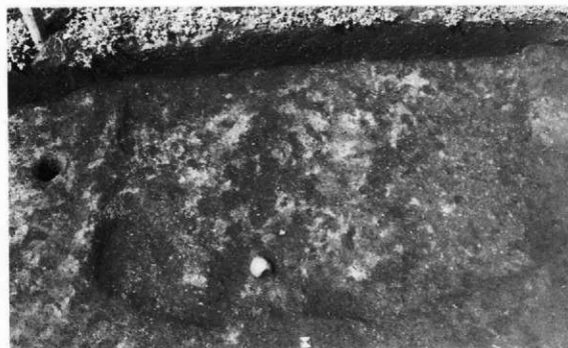
写真図版12 JI-2住居址



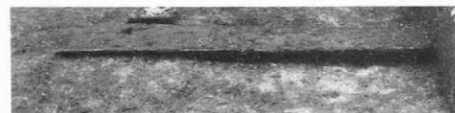
CI-1 住完掘(東より)



埋土断面



CII-1 住完掘(東より)



埋土断面

写真図版13 CI-1・CII-1住居址



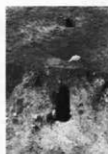
CII-4 住遺物出土状況
(南より)



埋土断面



DI-1 住完掘(南より)



カマド出土状況



埋土断面



カマド煙道部埋土断面

写真図版14 CII-4・DI-1住居址



完推(西より)



カマド出土状況

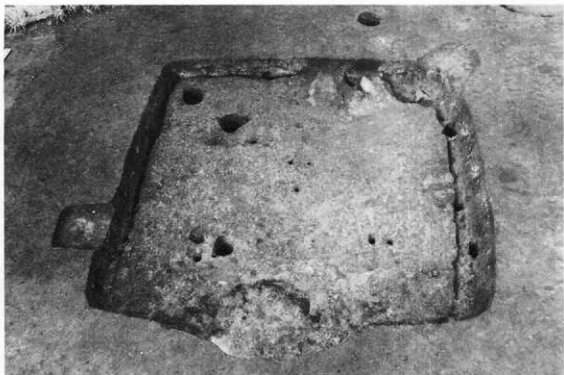


燃焼部



支脚出土状況

写真図版15 DII-2住居址



完照(西より)



カマド



紡錘車出土状況



鉄器出土状況

写真図版16 DII-3住居址



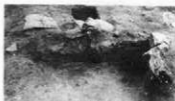
DII-4 住完掘(西より)



埋土断面



DII-5 住完掘(西より)



カマド埋土断面



カマド埋土断面



埋土断面



遺物出土状況

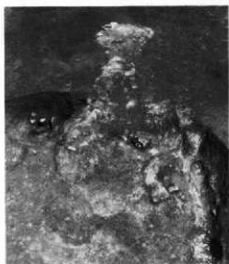
写真図版17 DII-4・5住居址



完掘(北西より)



壇土断面



カマド出土状況



完掘

写真図版18 E I - 1 住居址



炭化材・炭化穀類出土状況(南東より)



埋土断面



完掘(南東より)



炭化穀類出土状況



炭化物出土状況



カマド



カマド埋土断面

写真図版19 FⅡ-1 住居址



完掘(南西より)



埋土断面



カマド埋土断面

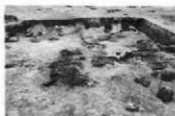


完掘

写真図版20 FII-2住居址



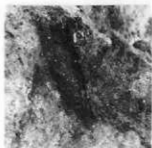
炭化材出土状況(東より)



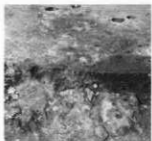
埋土断面



炭化材出土状況



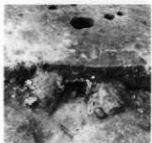
貯蔵穴埋土断面



カマド出土状況



完掘(東より)



カマド

写真図版21 HII-1住居址



HII-4 住遺物出土状況(西より)



III-1 住完掘(南東より)

写真図版22 HII-4・III-1 住居址



完備(南東より)



埋土断面



東カマド



北カマド

写真図版23 Ⅱ-2 住居址



Ⅱ-3 住穴掘(南西より)



カマド



埋土断面



Ⅱ-4 住穴掘(西より)



カマド出土状況



埋土断面



カマド

写真図版24 Ⅱ-3・4住居址



実撮(東より)



埋土断面



東カマド



西カマド



鑄先出土状況

写真図版25 Ⅱ-6 住居址



IⅢ-1・2 住完掘(西より)

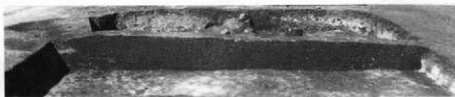


JⅡ-1 住完掘

写真図版26 IⅢ-1・2・JⅡ-1 住居址



実撮(南より)



埋土断面



カマド煙道断面



実撮

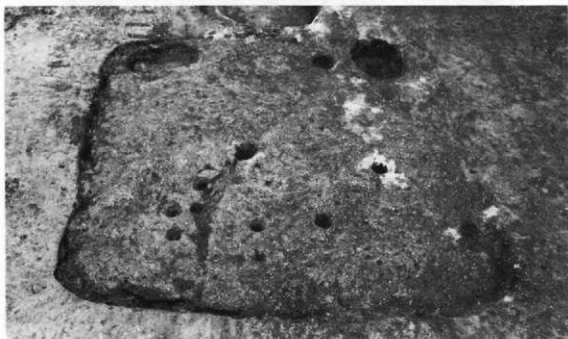
写真図版27 KⅡ-1 住居址



炭化材出土状況



埋土断面



実物(南より)

写真図版28 KII-2住居址



KII-3 住完掘(南より)



埋土断面



KII-5 住完掘(北より)



埋土断面



KII-4 住完掘(西より)



KII-5 住南カマド

写真図版29 KII-3・4・5住居址



実照(南より)



埋土断面



カマド出土状況

写真図版30 KII-6住居址



KⅢ-1 住完掘(南より)



埋土断面



KⅢ-2 住完掘(東より)



埋土断面



KⅢ-2 住カマド
出土状況



カマド燻道部埋土断面



カマド

写真図版31 KⅢ-1・2 住居址



遺物出土状況(北より)



埋土断面



南カマド出土状況



南カマド

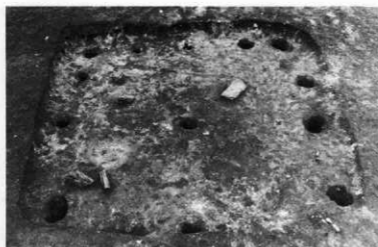


完掘(北より)



北カマド

写真図版32 KⅢ-3住居址



BⅡ-1 住完掘(東より)



BⅡ-3 住完掘(西より)

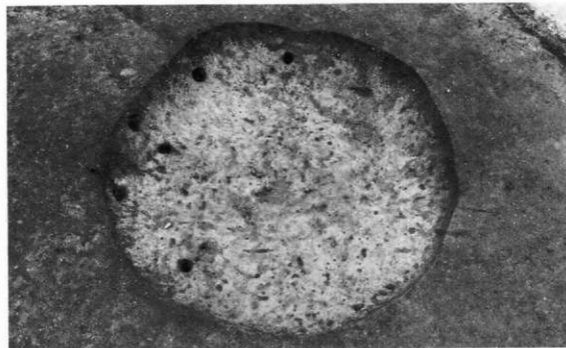


CⅡ-2 住完掘(東より)

写真図版33 BⅡ-1・3・CⅡ-2住居址(中世)



CII-21住居址状遺構(北より)



HI-21住居址状遺構(北より)

写真図版34 CII-21・HI-21住居址状遺構



完掘(南西より)



土間出土状況



B-1 柱穴埋土断面



B-2 柱穴埋土断面



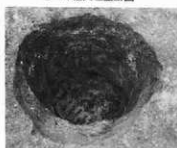
B-4 柱穴埋土断面



B-1 柱穴完掘



C-3 柱穴埋土断面



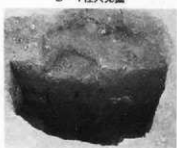
B-4 柱穴完掘



D-1 柱穴埋土断面

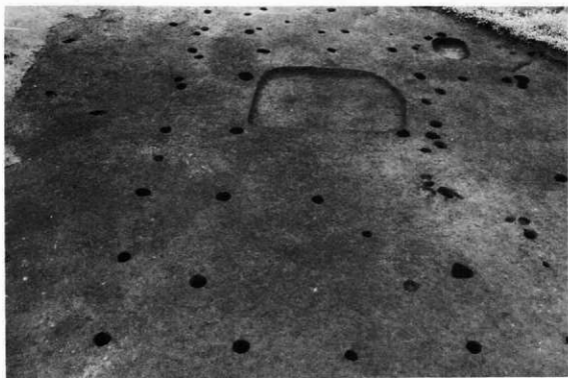


D-3 柱穴埋土断面



E-6 柱穴埋土断面

写真図版35 HII-2 掘立柱建物跡



EⅡ-1 掘立柱建物跡実掘(南より)



FⅠ-151溝(北より)



FⅠ-151溝(北より)

写真図版36 EⅡ-1 掘立柱建物跡・FⅠ-151溝



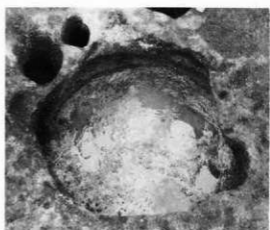
BII-52土坑



CI-51土坑



CII-51土坑



CII-52土坑



CII-51土坑埋土断面

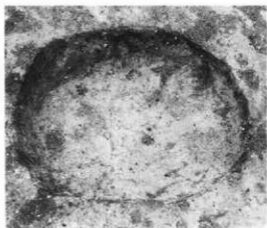


CII-52土坑埋土断面

写真図版37 土坑(1)



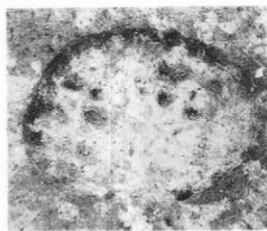
CII-54土坑



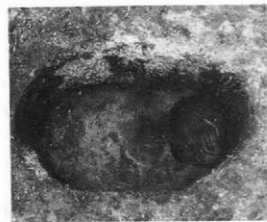
CII-57土坑



CII-55土坑



CII-58土坑



CII-56土坑



CII-59土坑

写真图版38 土坑(2)



CII-60土坑



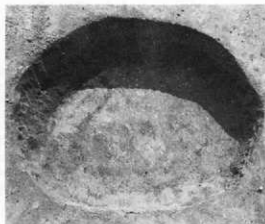
CII-64·65土坑



CII-61土坑



CII-67土坑

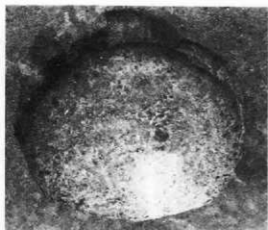


CII-63土坑

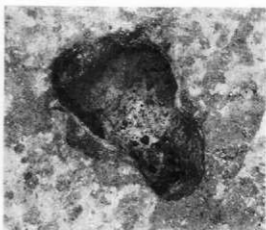


CII-68·69土坑

写真图版39 土坑(3)



CII-70土坑



CII-72土坑



CII-70土坑 埋土断面



CII-73土坑

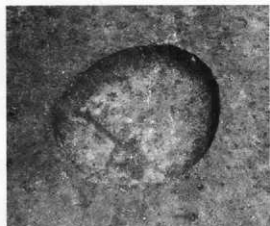


CII-71土坑

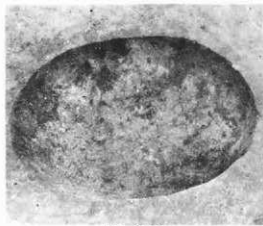


CII-74土坑

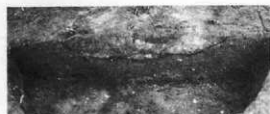
写真図版40 土坑(4)



D I-51土坑



D II-51土坑



D I-51土坑 埋土断面



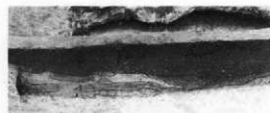
D II-51土坑 埋土断面



D I-52土坑



E I-51土坑



D I-52土坑 埋土断面



E I-51土坑 埋土断面

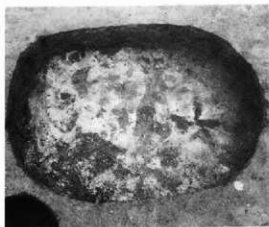
写真図版41 土坑(5)



E I-52土坑



E I-52土坑 埋土断面



E II-51土坑



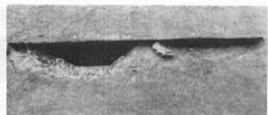
F II-52土坑



F II-51土坑



E II-52土坑



F II-51土坑 埋土断面

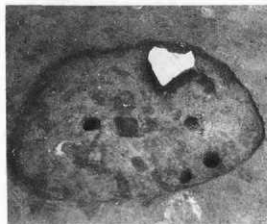
写真図版42 土坑(6)



F II-52土坑 埋土断面



F II-55土坑



F II-53土坑



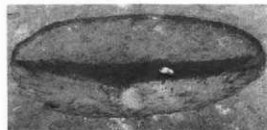
F II-55土坑 埋土断面



F II-53土坑 埋土断面



F II-56土坑 埋土断面



F II-54土坑 埋土断面



F II-57土坑

写真図版43 土坑(7)



H II-51土坑



I II-51土坑



H II-51土坑 埋土断面



I II-51土坑 埋土断面



H II-52土坑



I II-52土坑

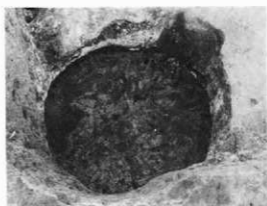


I II-52土坑 埋土断面

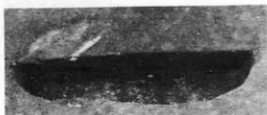
写真図版44 土坑(8)



Ⅱ-54土坑



Ⅱ-56土坑



Ⅱ-54土坑 埋土断面



Ⅱ-56土坑 埋土断面



Ⅱ-55土坑



Ⅱ-57土坑



Ⅱ-55土坑 埋土断面



Ⅱ-57土坑 埋土断面

写真図版45 土坑(9)



I II-58土坑 埋土断面



K II-51土坑 埋土断面



I III-51土坑



K II-52土坑 埋土断面



I III-51土坑 埋土断面



I III-52土坑 埋土断面



K III-53土坑

写真图版46 土坑(10)



K II-55土坑



K II-55土坑 埋土断面



K III-52土坑 埋土断面



K III-53土坑



K III-51土坑



K III-51土坑 埋土断面

写真図版47 土坑(11)



G I-101 陥し穴状遺構 (南より)

埋土断面



I II-101 陥し穴状遺構 (北東より)



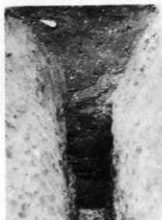
I II-102 陥し穴状遺構 (北東より)



K II-101 陥し穴状遺構 (東より)

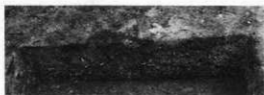


埋土断面

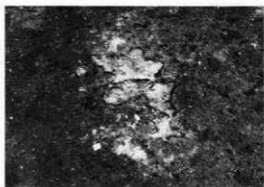


埋土断面

写真図版48 陥し穴状遺構



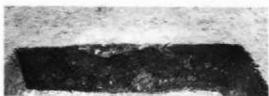
C II - 201 焼土断面



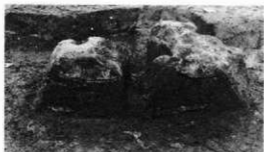
C II - 202 焼土



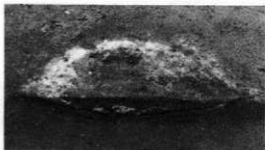
C II - 201 焼土



C II - 202 焼土断面



C II - 201 焼土断面



E I - 201 焼土断面

写真図版49 焼土遺構



3 原寸
 2・4・8・10-13 S=1/2
 9 S=1/3
 1 S=1/4

写真図版50 B II-2 住居址出土遺物



14



15



16



17

B II - 2 住

14-17 S=1/2

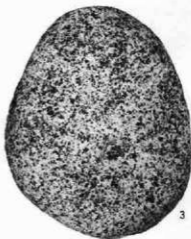
B II - 4 住



1



2



3

1-7 S=1/2



4



5

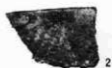
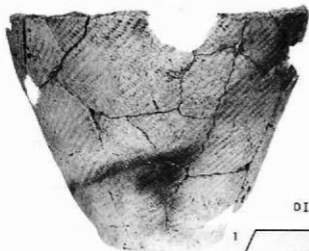


6



7

写真図版51 B II - 2・4住居址出土遺物



1 S=1/4
2 S=1/4

DI-2住

DI-3住



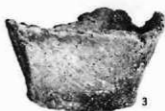
1 S=1/4
2・3・4 S=1/4



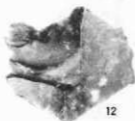
写真図版52 DI-2・3住居址出土遺物



5 原寸
 3・4 S=1/2
 1・2 S=1/4



写真図版53 DII-1住居址出土遺物



DII-1住

14

15

16

9・11~13 原寸
6~8・10・16 S=1/2
14・15 S=1/3

FI-1住



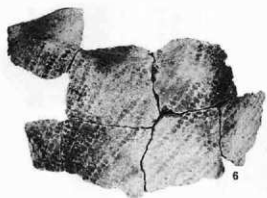
1

S=1/2

写真図版54 DII-1・FI-1住居址出土遺物

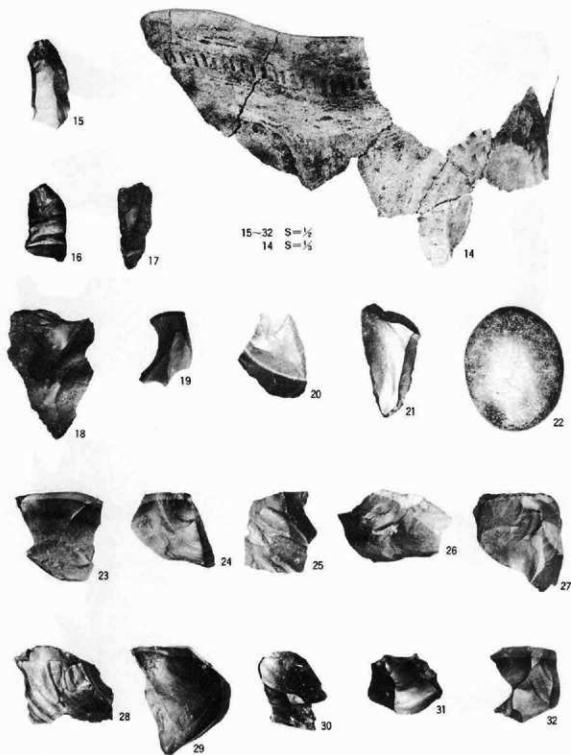


写真図版55 GI-1住居址出土遺物(1)

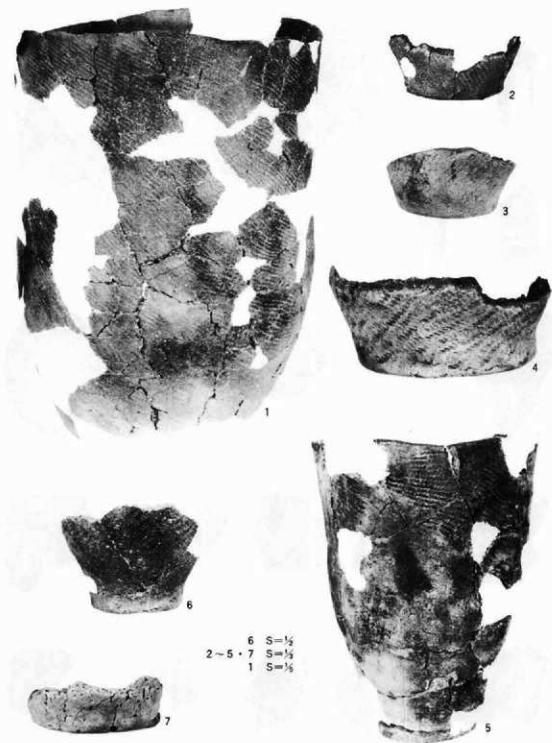


7・9・10・11・12 $S=\frac{1}{2}$
6・8・13 $S=\frac{1}{3}$

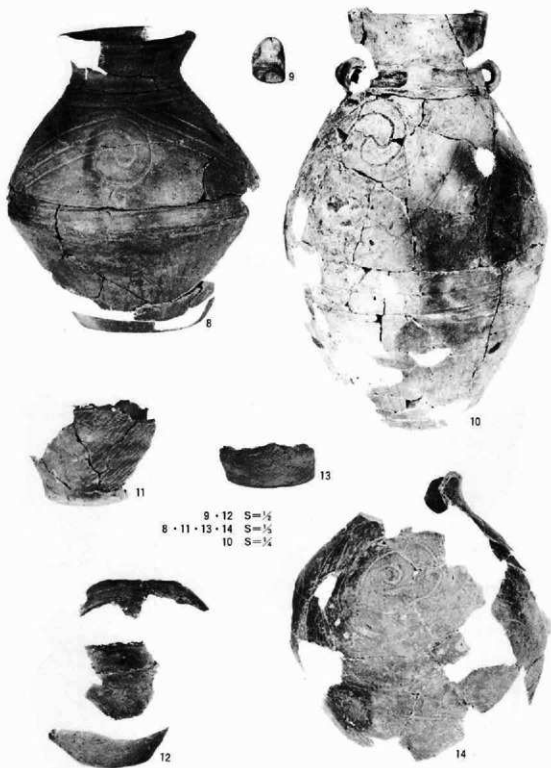
写真図版56 G I - 1 住居址出土遺物(2)



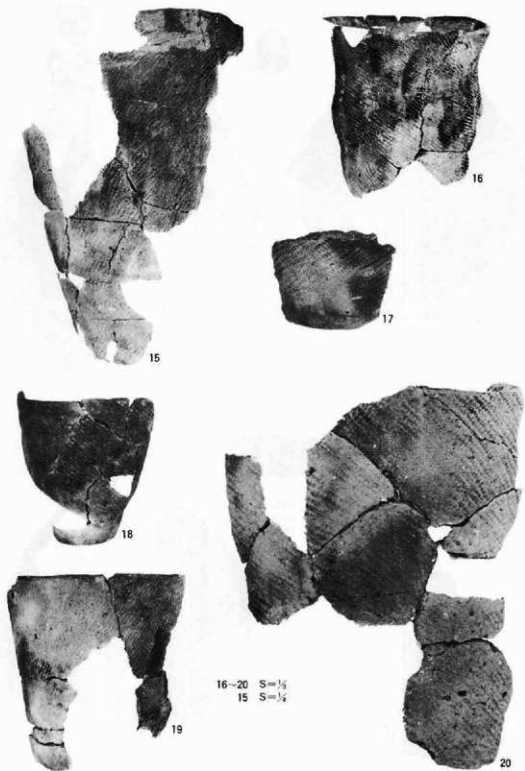
写真図版57 O I - 1 住居址出土遺物(3)



写真図版58 II-1 住居址出土遺物(1)



写真図版59 II-1住居址出土遺物(2)



写真図版60 II-1 住居址出土遺物(3)



21



26



27



28



29



22



23



24



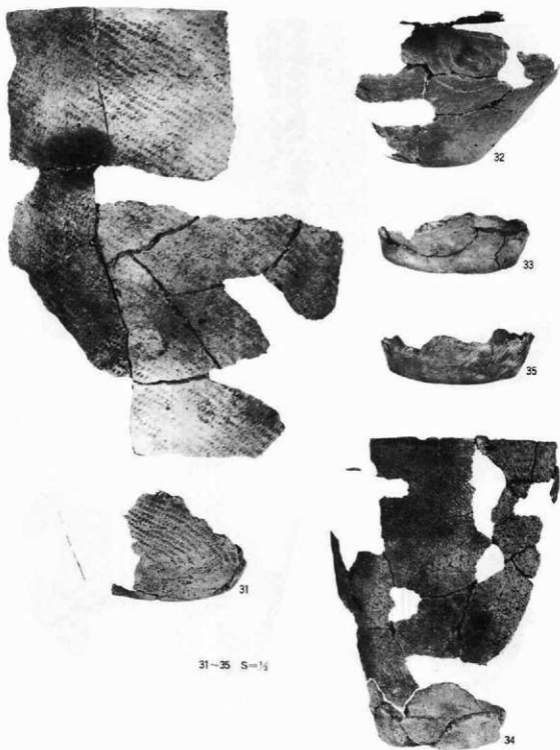
25

21 原寸
 23・27 S=1/2
 22・24-26・28-30 S=1/3



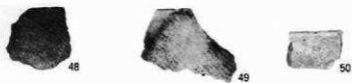
30

写真図版61 II-1 住居址出土遺物(4)



31~35 S=1/2

写真図版62 II-1住居址出土遺物(5)



36-55 S=1/5

写真図版63 II-1 住居址出土遺物(6)



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72

60 S=1/2
56-59・61-77 S=1/4



73



74



75



76

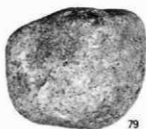


77

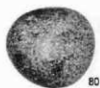
写真図版64 I I - 1 住居址出土遺物(7)



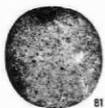
78



79



80



81



82



83

78-86 S=1/2



84

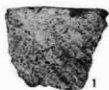


85



86

写真図版65 I-1 住居址出土遺物(8)



1



2



4



3



5



6

3~7 S=1/2
1・2 S=1/4



7

写真図版66 Ⅱ-5 住居址出土遺物



1



2



3



4



5



6



8



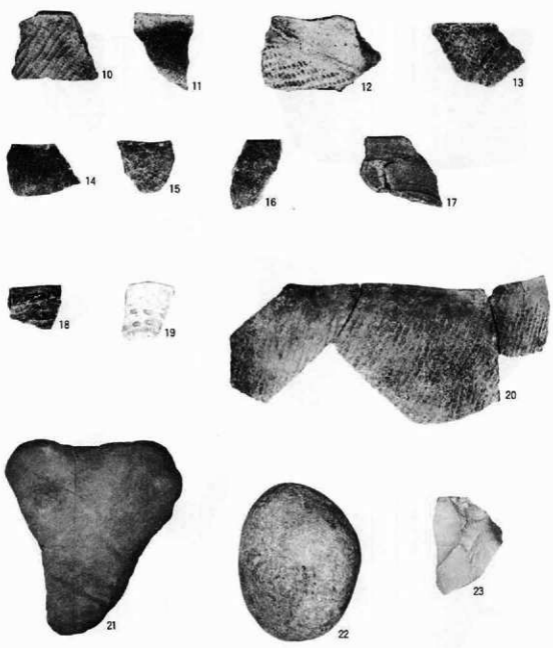
7



9

5・6 S=1/4
1~4・7~9 S=1/2

写真図版67 J I - 1 住居址出土遺物

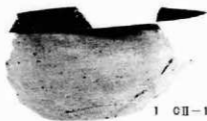


J I - 1 住

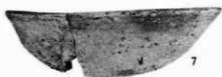
17 · 19 · 21 ~ 23 S = 1/2
 10 - 16 · 18 S = 1/2



写真図版68 J I - 1 · 2 住居址出土遺物



1 CII-1住



7



2

CI-1住



8



3



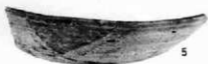
9

CII-4住



4

1・2・4-8・10-11 S=1/2
3・9 S=1/4



5



6

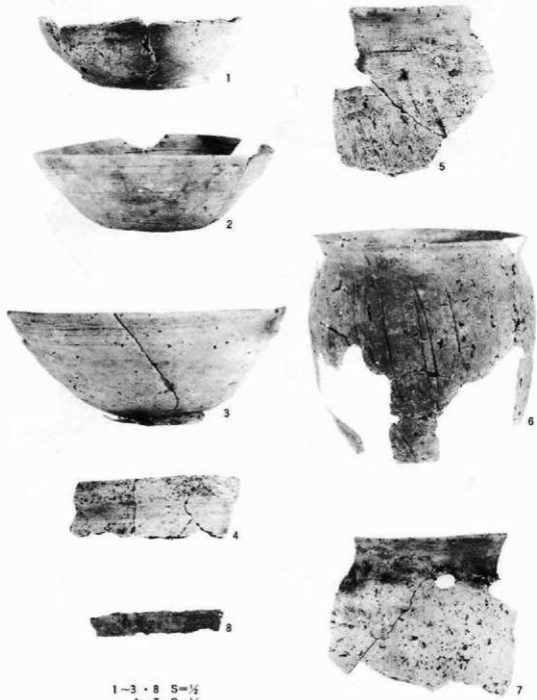


10



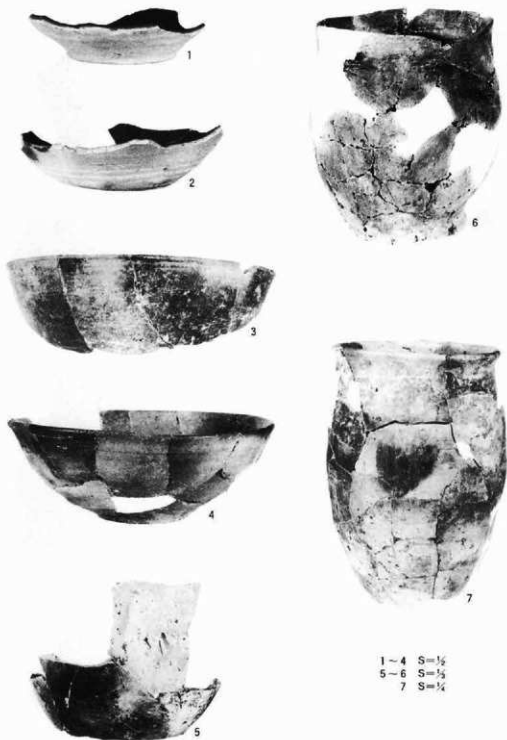
11

写真図版69 CI-1・CII-1・4住居址出土遺物



1-3・8 S=1/2
 4-7 S=1/3

写真図版70 CII-5住居址出土遺物



写真図版71 DI-1住居址出土遺物(1)



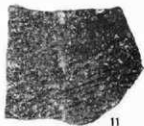
8



9



10



11



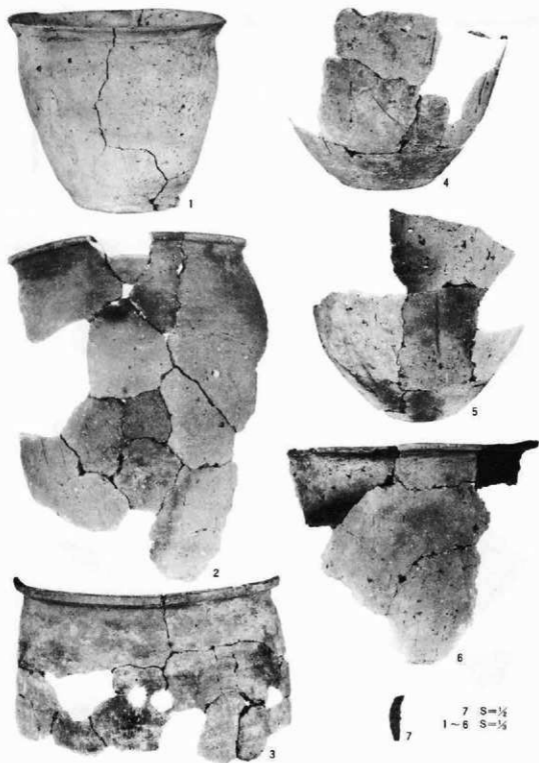
12

10-13 S=1/2
8-9 S=1/4



13

写真図版72 DI-1住居址出土遺物(2)



写真図版73 DII-2住居址出土遺物



1



2

DII-3 住



3



4



5

DII-5 住



10



6



11



12



7



8



9



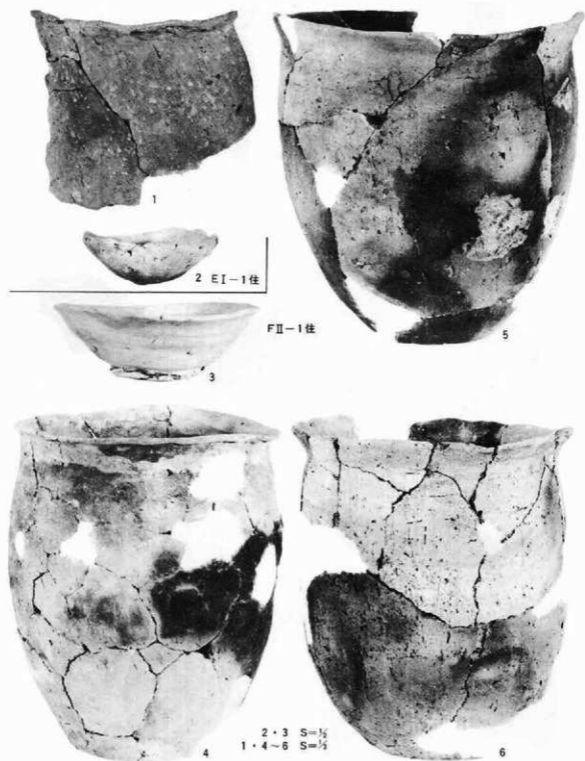
13

1-12 S=1/2
13 S=1/5

写真図版74 DII-3・5住居址出土遺物



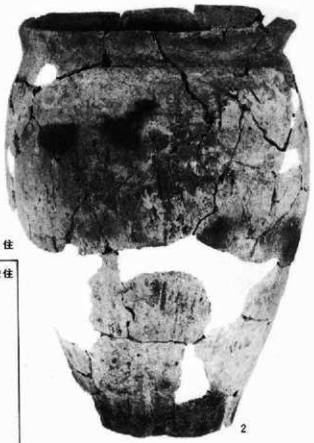
写真図版75 DII-5住居址出土遺物



写真図版76 EI-1・FII-1住居址出土遺物



1



2

FII-1住

FII-2住



6



8



7



3



4



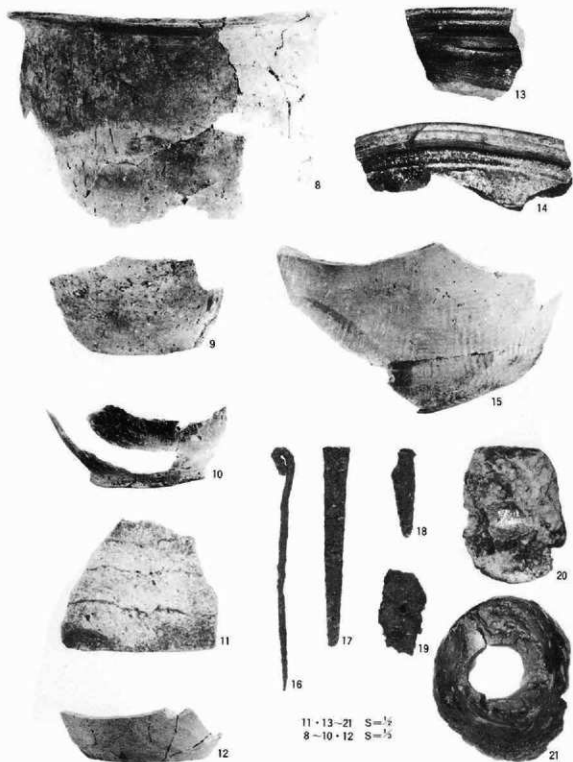
5

5・8 原寸
 3・4・6 S=1/2
 1・2・7 S=1/3

写真図版77 FII-1・2住居址出土遺物



写真図版78 HII-1住居址出土遺物(1)

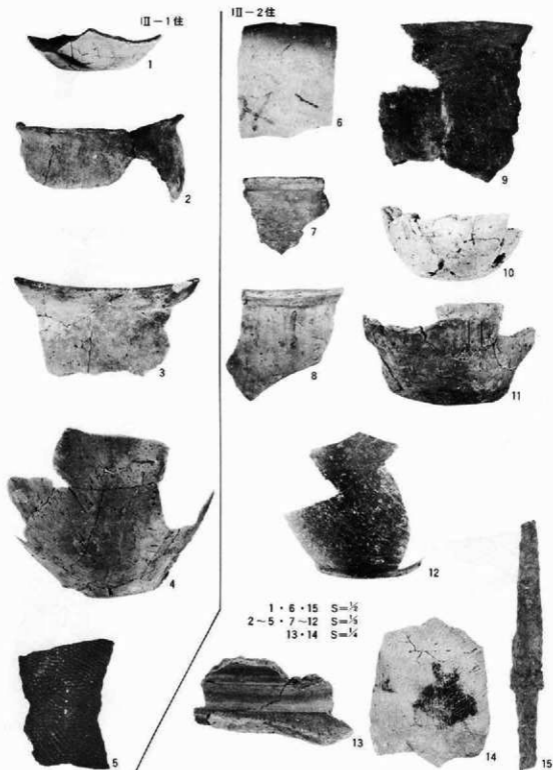


写真図版79 HII-1住居址出土遺物(2)



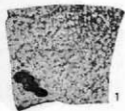
5 S=1/2
1~4 S=1/3

写真図版80 HII-4住居址出土遺物



写真図版81 II-1・2住居址出土遺物

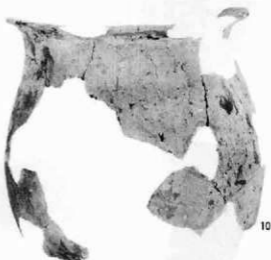
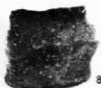
Ⅱ-3住



Ⅱ-4住



2-7 S=1/2
1・8-10 S=1/5



写真図版82 Ⅱ-3・4住居址出土遺物



1・2・5 S=1/2
3・4 S=1/3

写真図版83 Ⅱ-6 住居址出土遺物

KⅡ-1住



1



3



4

3~6・9 S=1/2
1・2・7・8 S=1/5



2



5

KⅡ-2住



6



7

KⅡ-4住

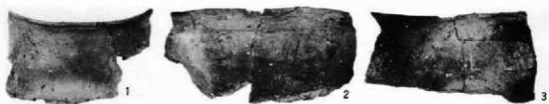


8



9

写真図版84 KⅡ-1・2・4住居址出土遺物

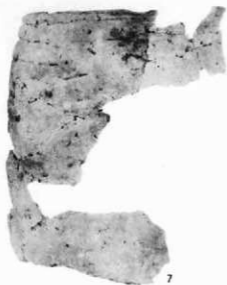


5 原寸
4・6 S=1/5
1~3・7~9 S=1/5

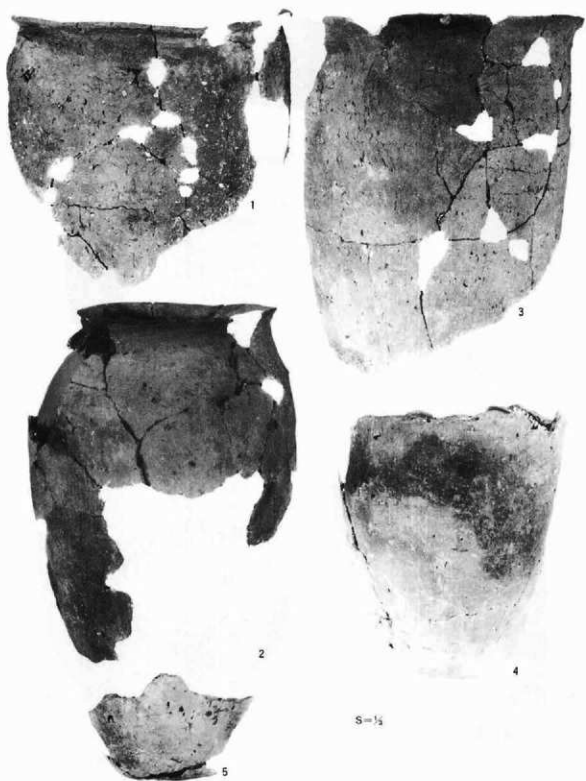


KⅡ-5住

KⅡ-3住



写真図版85 KⅡ-3・5住居址出土遺物



写真図版86 KⅡ-5住居址出土遺物



1



2

KⅢ-1住



3



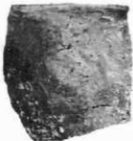
4

KⅡ-6住

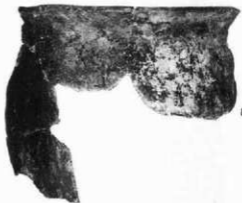
KⅢ-2住



5



6



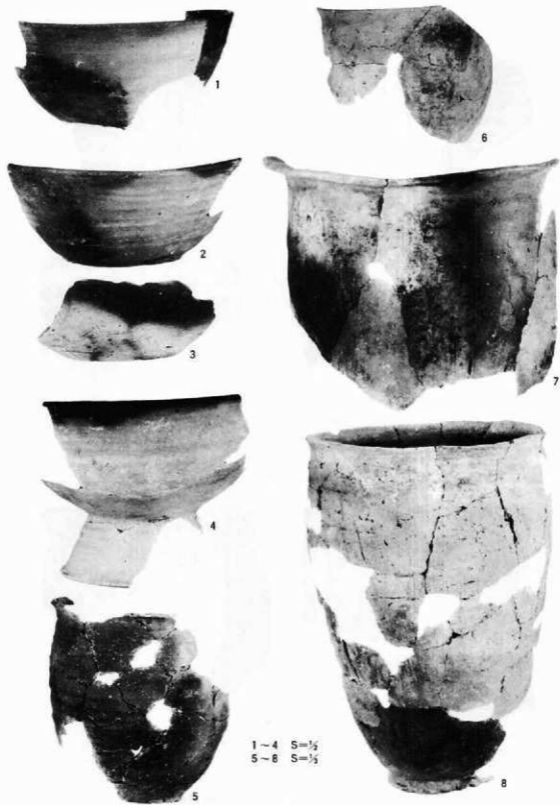
8



7

1 S=1/2
2-8 S=1/2

写真図版87 KⅡ-6・KⅢ-1・2住居址出土遺物



写真図版88 KⅢ-3住居址出土遺物(1)



9

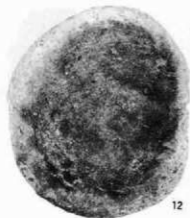


10



11

11・12 S=1/5
9・10 S=1/5
13 S=1/4

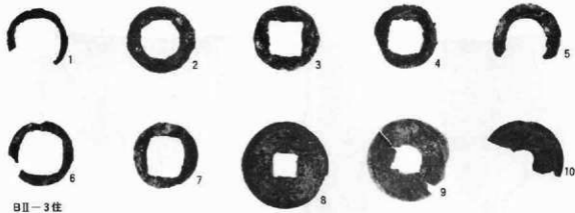


12



13

写真図版89 KⅢ-3住居址出土遺物(2)



BⅡ-3住



BⅡ-4住(縄文住)埋土

HⅡ-2住



1~29 ほぼ原寸

写真図版90 BⅡ-3・4住居址・HⅡ-2掘立柱建物跡出土遺物



HII-2住

1-5 原寸
6-26 S=1/2

CII-70土坑

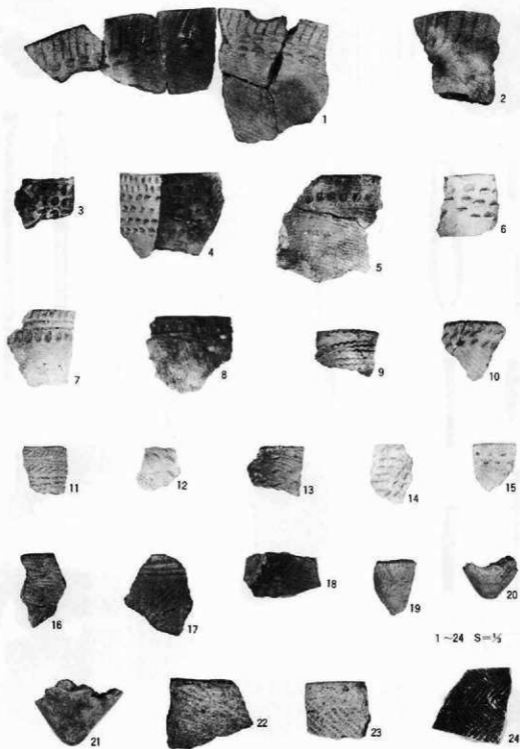
1 S=1/2 2・3 S=1/4



II-52土坑

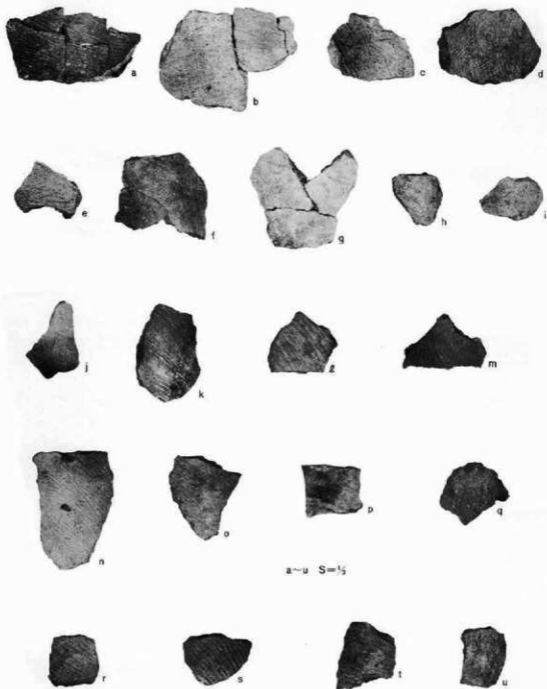


写真図版91 HII-2 獨立柱建物跡・CII-70・II-52土坑出土遺物

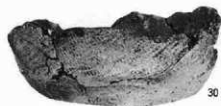
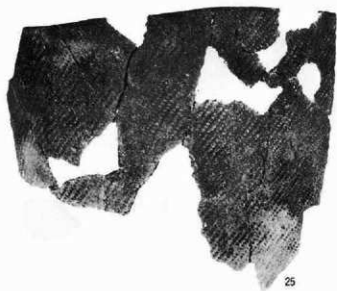


1~24 S=1/2

写真図版92 遺構外出土遺物(1)



写真図版93 遺構外出土遺物(2)



28・29・32-34 S=1/2
 26・27・30・31 S=1/5
 25 S=1/4



写真図版94 遺構外出土遺物(3)



35



36



37



38



39



40

36-52 S=1/5
35 S=1/4



41



42



43



44



45



46



47



48



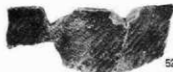
49



50

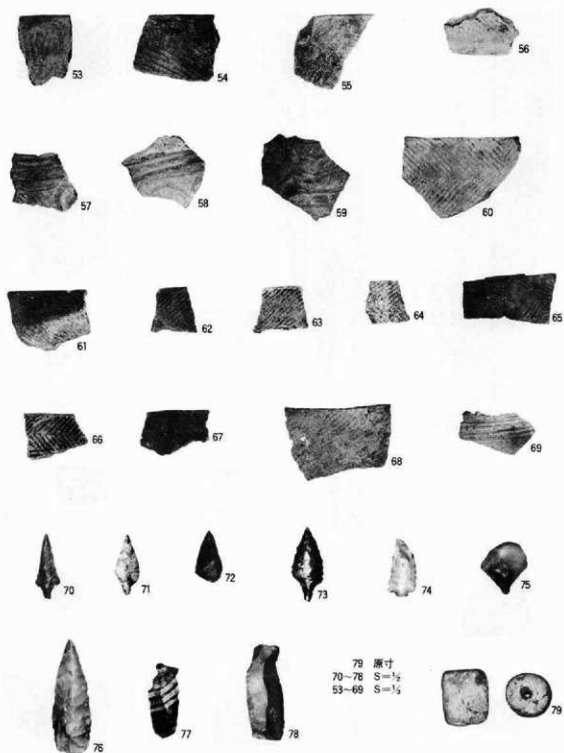


51



52

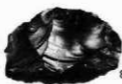
写真図版95 濠溝外出土遺物(4)



写真図版96 遺構外出土遺物(5)



80



81



82



83



84



85



86



87

80-87・90-92 S=1/2
88・89 S=1/3



88



89



89



91



92

写真図版97 遺構外出土遺物(6)



93



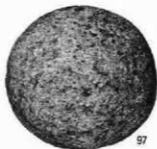
94



95



96



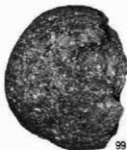
97



98



100



99

93~103 S=1/2



101

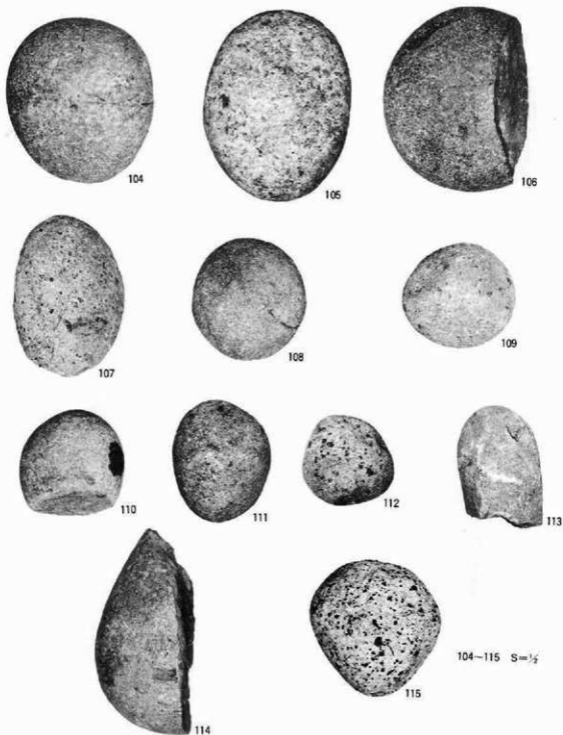


102



103

写真図版98 遺構外出土遺物(7)



写真図版99 遺構外出土遺物(8)



116



117



118



119



120



121

116~121 S=1/2

写真図版100 遺構外出土遺物(9)



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



132



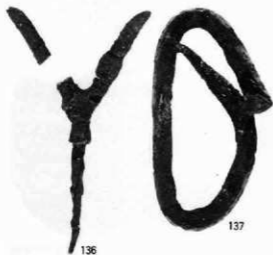
133



134



135



136



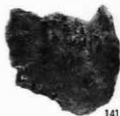
137



139



138



141



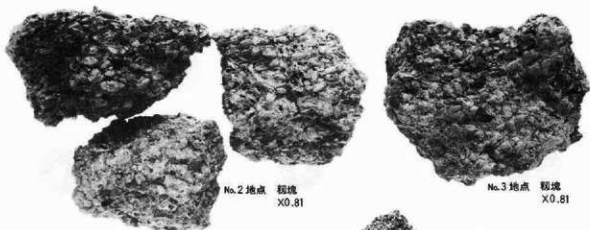
140



142

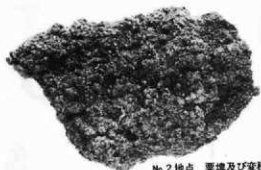
122~141 S=1/2
142 原寸

写真図版101 遺構外出土遺物(10)



No. 2 地点 藪塊
X0.81

No. 3 地点 藪塊
X0.81



No. 2 地点 藪塊及び変種
X0.81



No. 3 地点 藪塊
X0.81



No. 3 地点 不明種
X5.5



No. 3 地点 藪及び不明種 X3.5



X80



No. 3 地点 藪塊 X5.5

写真図版102 FⅡ-1 住居址出土炭化穀類(1)

No. 1 地点
X6



No. 2 地点



No. 3 地点



写真図版103 F II-1 住居址出土炭化穀類(2)

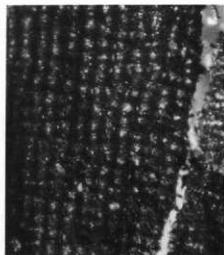
No. 3 地点
X 6



No. 4 地点



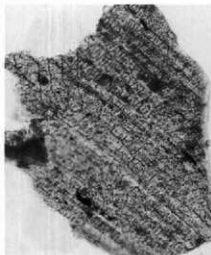
No. 5 地点



烧稻颖表面 20X15X3



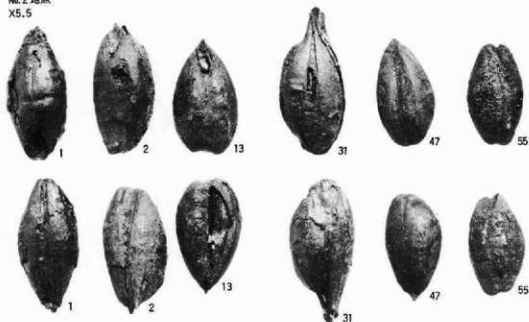
烧粟果颖表面 20X15X3



烧粟灰像 20X10X3

写真図版104 F II - 1 住居址出土炭化穀類(3)

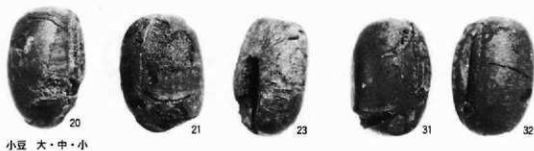
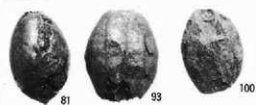
No. 2 地点
X5.5



No. 4 地点



No. 2 地点



小豆 大・中・小

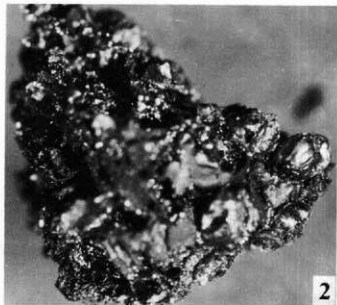


写真図版105 FII-1 住居址出土炭化穀類(4)



遊離している炭化粒 X13

1mm



塊状となっている炭化粒 X13

1mm

写真図版106 FⅡ-1 住居址出土炭化穀類実体顕微鏡写真



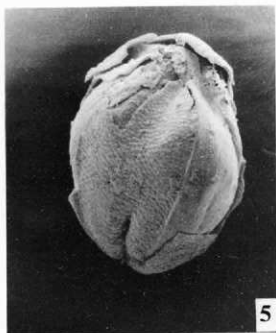
炭化粒全形 X40

50u



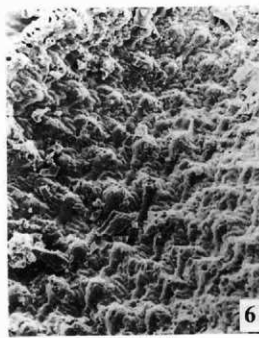
(3)の拡大写真

500u



炭化粒全形 X40

50u



(5)の拡大写真

500u

写真図版107 F II - 1 住居址出土炭化穀類走査型電子顕微鏡写真

岩手県埋文センター文化財調査報告書第70集

江刺家遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和59年1月25日

発行 昭和59年1月31日

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下坂岡字高屋敷

☎0196(38)9001~2

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山4丁目10番5号

☎0196(41)0585